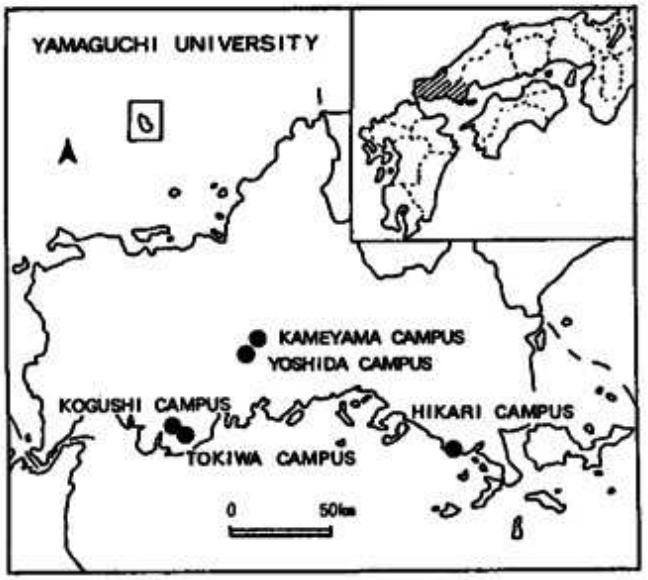
山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ

1985

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ



1985

山口大学埋蔵文化財資料館

発刊にあたって

このたび、本学が昭和59年度に大学構内で実施した発掘調査の記録を『山口大学構内遺跡調査研究年報　Ⅳ』として刊行するはこびとなりました。

今年度は県内各地に分散する各キャンパスのうち吉田地区および小串地区を中心に発掘調査を実施しました。その結果として、独自の文化をはぐくんできた地域の豊穣な歴史をほりおこす貴重な知見が得られました。

教育・研究をつうじ社会への貢献を使命とする本学において、埋蔵文化財の積極的な保護と活用をはかることは、考古学・歴史学のみならず、関連諸科学分野の発展に寄与するものと確信されます。

その意味からも施設・環境整備と共に進む埋蔵文化財の調査・研究は将来を展望した両者の協調によって円滑に進められることは言をまたないのであります。

本書が学術資料として広く一般に活用され、もって古代文化と歴史の解明の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査ならびに報告書の刊行にあたり、ご理解、ご協力を賜りました関係各位に対し、謝意を表明するとともに、あわせて今後とも学内・学外のご指導・ご協力をおねがいしたい。

昭和61年3月

山口大学

学長　粟屋和彦

序　　文

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳを刊行することが出来ました。関係部局の皆様方の御理解と御配慮のお陰と、深く感謝をいたしております。内容は昭和59年度の調査に関しての報告です。吉田地区については、調査地区一帯の奈良時代～室町時代にかけての歴史的変遷を跡づける論考をつけさせていただきました。遺物・遺構の考古学的な報告にとどまらず、歴史的な背景にできるだけ迫り、何故、遺跡を調査するかの問に、少しでも答え得るものを提出できればと考えております。卒直な御批判を下さい。

宇部の小串地区に関しては、昭和60年度の調査と合せて、おおまかな見通しを立てられる段階になってまいりました。常盤地区はまだデータが充分でなく、埋蔵文化財の分布状況を把握するには、いましばらく時を貸していただきたいと思います。

昭和61年の1月より、学内で埋蔵文化財資料館の予算等をめぐって真剣な討議が予算配分委員会側と、埋蔵文化財資料館側の合同委員会で行われてまいりました。周知の遺跡でありながら、埋蔵文化財をかかえた大学が自力で調査組織を整え、全学の予算から費用をさいて調査しなければならない。矛盾にみちていると考えるのは、何も文化財に理解がないからとばかりいえないではないかと問われた時に、それでもなおかつ遺跡調査の重要性を認めていただくためには、学問的なあるいは歴史的な重要性を訴えるほかすべはありません。報告書を単に無味乾燥な、人々とは無縁のものとしない努力も、資料館員にかせられた仕事と思っております。

それらの仕事をより充実したものにするためにも、学内外の皆様方の御理解と、御支援を賜わりたいと念願いたしております。

昭和61年3月

山口大学埋蔵文化財資料館

館長　近　藤　喬　一

例　　言

1. 本書は山口大学埋蔵文化財資料館が埋蔵文化財資料館運営委員会の指示を受けて、昭和59年度に山口大学構内で実施した発掘調査に関し、昭和60年度末までに整理作業が終了した調査報告書である。
2. 現地における調査・研究は人文学部考古学研究室の協力を得て資料館員森田孝一・河村吉行が担当した。また、出土遺物の整理は同館員磯部貴文・福島朝子が中心となり行なった。
3. 調査・研究における事務一般は事務局庶務課庶務係が統括し、実施面においては各関係部局の事務部があたった。
4. 遺構・遺物の実測・製図ならびに本文の執筆は森田・河村・福島が分担して行なった。
5. 現地における写真撮影は森田・河村が行ない、遺物の写真撮影は河村があたった。
6. 本書の編集は館員が協力して行なった。
7. 調査・研究においてはカラースライドを作成しており、出土遺物とあわせ埋蔵文化財資料館が保管している。広く活用されることを希望したい。
8. 調査組織は次のとおりである（昭和59・60年度）

調査主体	埋蔵文化財資料館	館　長	八木　充〔～昭和60年3月31日〕
		〃	黄　基雄〔昭和60年4月1日～5月9日〕
		〃	近藤　喬一〔昭和60年5月10日～〕
		館　員	河村　吉行
		〃	森田　孝一
		〃	磯部　貴文〔昭和59年4月1日～昭和60年3月30日〕
		〃	福島　朝子〔昭和60年4月1日～〕
事務局		事務局長	佐藤　士郎〔～昭和60年1月31日〕
		〃	五田　次雄〔昭和60年2月1日～11月30日〕
		〃	大谷　巖〔昭和60年12月1日～〕
	本部庶務部	部　長	内藤　信〔昭和59年4月1日～〕
	庶務課	課　長	田崎　智〔～昭和59年7月31日〕
		〃	金谷　英夫〔昭和59年8月1日～〕
		課長補佐	元永　道徳〔～昭和60年3月31日〕
		〃	大多和泰則〔昭和60年4月1日～〕
	庶務係	係　長	片山　正雄
			本田　正春、岩佐厚子、杉山美由紀

9. 調査・研究にあたって下記の方々の多大な御協力と援助を受けた（官職は昭和59年度）。

山口大学事務局庶務部　人事課長　南雲　修、同課長補佐　吉岡隆夫、同係長　西野雅博、同係　山根賀浩、河内和郎、給与係長　森田義富、同係　金子孝志、松本胤明

経理部　部長　森川辰男、主計課長　永井克知、経理課長　幸　文雄、用度係長　野沢章三、同係　宮本　秀、藪　達己

施設部　部長　大西丈二、企画課長　栗尾晋祐、建築課長　曾野國夫、同課長補佐　佐伯　敦、設備課長　田村寅雄、総務係長　梅村　馨、同係　中光博輝、第一工営係長　藤井　幸、同係　小川賀津夫、澤谷弘美、第二工営係長　稲垣實造、同係　河田徹也、第三工営係長　平田　治、電気係長　赤野高志、同係　小草健三、松田清司、機械係長　鈴木輝美、同係　鹿嶋正則、岡田吉彦

学生部　部長　山本和之、次長　石丸雄亮、学生課長　矢取勝海、同課長補佐　宇山隆造、学生係長　林　季生、同係　端野輝昭、山本直行、辛島克己

経済学部　事務長　新山健二、会計係長　田中義人

医学部　事務部長　近藤春美、同次長　繁竹良英
総務課長　掘江　正、同課長補佐　西澤喜昭、管理課長　兼田勝秋
同課長補佐　梅原儀助、石川俊輔、庶務係長　原　和雄、
人事係長　有吉　明、管理係長　森田　守、施設係長　三浦幸一、
設備係長　吉永峯生、環境係長　守田十三郎、同係　秋本尚武、

工学部　事務長　大庭静男、同補佐　大多和泰則、会計係長　片山美徳、同係　鎌田毅行、高崎明祈

教育学部　光附属小学校長　佐藤　吏、同副校長　村上文雄、同中学校長　中村　徹、同副校長　藤澤茂樹、同事務長　光永　等、同補佐　柳　　等、光附属学校係長　伊藤敏穂

人文学部考古学研究室

宇部市教育委員会、光市教育委員会

調査補助員（人文学部考古学研究室）

岡村昌彦、久野孝一、杉原和恵、杉本とも子、高下洋一、上野文子、小田信子

作業員

足立セツ子、有吉文恵、石津彰子、糸長　均、岡本静枝、岡本弘子、岡屋知子、北村カヨ子、獅子角由紀子、高木悦子、谷川美彩世、中村多恵子、西見利子、早川幸子、藤原啓子、峯重ツヤ子、宮家静代、村田治枝、山縣初子、宇部市シルバー人材センター

凡　　例

1. 吉田地区における調査地区および層位、遺構の位置は国土座標を基準として北から南へ1～24、西から東へA～Zの番号を付して50 m方眼に区画した構内地区割のA－24区南西隅を起点（構内座標$x=0$，$y=0$）とする構内座標値で表示する。なお、平面直角座標系第Ⅱ系における座標値（X，Y）と構内座標値（x，y）とは下記の計算式で変換される。

$$\begin{cases} x = X + 20{,}600 \\ y = Y + 64{,}750 \end{cases}$$

2. 各遺構は下記の記号で表記した。

土壙……ＳＫ，　溝……ＳＤ，　柱穴……ＰＨ

3. 本書に使用した方位は吉田地区では国土座標を基準とした真北、他地区においては磁北を示す。

4. 標高数値は吉田地区、小串地区では海抜標高を示す。

5. 土器の実測図は下記のように分類した。

断面黒ぬり……須恵器　断面白ぬり……弥生土器、土師器、瓦質土器

断面網目……陶磁器

本　文　目　次

第1章　昭和59年度山口大学構内遺跡調査の概要 ……（河村）…… 1

第2章　宇部（小串構内）医学部浄化槽新営に伴う発掘調査
…… （河村・福島）

1　調査の経過 …… 3
2　位置と環境 …… 4
3　層位 …… 9
4　小結 …… 10

第3章　宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う発掘調査 ……（河村）

1　調査の経過 …… 11
2　層位 …… 12
3　遺物 …… 13
4　小結 …… 14

第4章　宇部（小串構内）医学部基幹整備に伴う試掘調査…… （森田）

1　調査の経過 …… 15
2　層位 …… 16
3　遺物 …… 18
4　小結 …… 20

第5章　宇部（小串構内）医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営に伴う
試掘調査 …… （河村）

1　調査の経過 …… 21
2　層位 …… 21
3　小結 …… 22

第6章　吉田構内大学会館ケーブル布設に伴う発掘調査
…… （森田・福島）
1　調査の経過 …… 25
2　位置と環境 …… 26
3　層位 …… 30
4　遺構 …… 32
5　遺物 …… 34
6　小結 …… 36
第7章　吉田構内大学会館排水管布設に伴う発掘調査 …… （河村・福島）
1　調査の経過 …… 37
2　層位 …… 38
3　遺構 …… 42
4　遺物 …… 45
5　小結 …… 48
第8章　吉田構内学生部テニスコートフェンス改修に伴う試掘調査……（森田）
1　調査の経過 …… 49
2　層位 …… 50
3　小結 …… 52
第9章　昭和59年度山口大学構内の立会調査 …… （河村・森田）
第1節　吉田構内の立会調査
経済学部樹木移植に伴う立会調査 …… 53
第2節　常盤構内の立会調査
尾山宿舎排水管布設に伴う立会調査 …… 54
第3節　教育学部附属光小・中学校構内の立会調査
教育学部附属光小・中学校焼却場新営に伴う立会調査 …… 55
第4節　その他構内の立会調査
1　ボート部艇庫合宿研修所整備に伴う立会調査 …… 56

2　ヨット部艇庫合宿研修所整備に伴う立会調査 …… 57

付　篇

周防国吉敷郡吉田における古代・中世の様相－吉田遺跡をめぐる諸問題－ …… 59

吉田遺跡採集の円筒埴輪について …… 77

山口県見島ジーコンボ古墳群出土の人骨

－山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料－…… 83

埋蔵文化財資料館所蔵の新羅系陶質土器について …… 91

山口大学構内遺跡調査要項 …… 93

山口大学埋蔵文化財資料館規則…… 93

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則 …… 94

山口大学構内の主な調査 …… 96

Summary …… 99

図　版　目　次

＜宇部（小串構内）医学部浄化槽新営に伴う発掘調査＞

PL 1　(1)　A区全景（南西から）…… 3～10

(2)　A区南東隅杭列（北から）…… 9・10

PL 2　(1)　A区南壁土層断面（北から）…… 9・10

(2)　B区全景（南東から）…… 3～10

＜宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う発掘調査＞

PL 3　(1)　調査区全景（北東から）…… 11～14

(2)　出土遺物 …… 13・14

＜宇部（小串構内）医学部基幹整備に伴う試掘調査＞

PL 4　(1)　Aトレンチ全景（南西から）…… 15～20

(2)　Bトレンチ全景（南東から）…… 15～20

(3)　Bトレンチ北壁土層断面（南西から）…… 16・17

PL 5　(1)　Cトレンチ全景（南西から）…… 15～20

(2)　Cトレンチ植物遺体出土状況（北東から）…… 18・19

(3)　Dトレンチ全景（南西から）…… 15～20

PL 6 (1) 出土遺物 …… 18・19
(2) 動物遺体 …… 18・19
＜宇部(小串構内)医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営に伴う試掘調査＞
PL 7 (1) 調査前全景(南東から) …… 21
(2) Aトレンチ全景(南東から) …… 21・24
PL 8 (1) Aトレンチ西壁土層断面(東から) …… 21・23
(2) Bトレンチ全景(東から) …… 21・24
PL 9 (1) Cトレンチ全景(北から) …… 21・24
(2) Dトレンチ全景(北から) …… 21・24
(3) 調査風景 …… 21・24
(4) 調査風景 …… 21・24
＜吉田構内大学会館ケーブル布設に伴う発掘調査＞
PL10 (1) 調査前全景(西から) …… 25
(2) Aトレンチ全景(北から) …… 25～36
PL11 (1) Aトレンチ北半部遺構分布状況(南から) …… 32・33
(2) AトレンチSD4土層断面(西から) …… 30～33
(3) Aトレンチ北壁土層断面(南から) …… 30・31
PL12 (1) SD1・2(東から) …… 32・33
(2) SD3(西から) …… 32・33
(3) SD6(西から) …… 32・33
PL13 (1) Bトレンチ全景(北から) …… 35～36
(2) SK3(北から) …… 32・33
PL14 (1) Bトレンチ南半部柱穴群(西から) …… 32・33
(2) 出土遺物 …… 34・35
＜吉田構内大学会館排水管布設に伴う発掘調査＞
PL15 (1) A区遺構分布状況(西から) …… 37～38
(2) A区遺構分布状況(東から) …… 37～48
PL16 (1) A区SD1(西から) …… 41～45
(2) A区SK1、SD2ほか(南から) …… 41～45
PL17 (1) A区SK2ほか(南から) …… 41～45

(2) A区ＳＫ３、ＳＤ2･3（南から）…… 41～45
PL18 (1) A区ＳＫ５～８ほか（南から）…… 41～45
(2) A区柱穴群（南から）…… 41～45
PL19 (1) B区全景（北東から）…… 42～45
(2) B区北壁土層断面（南から）…… 42～45
(3) C区全景（東から）…… 37～48
PL20 出土遺物 …… 45～48

＜吉田構内学生部テニスコートフェンス改修に伴う試掘調査＞

PL21 (1) A－1（南から）…… 49～52
(2) A－2（東から）…… 49～52
(3) A－4（北から）…… 49～52
(4) A－5（北から）…… 49～52
(5) B－1（南から）…… 49～52
(6) B－2（南から）…… 49～52
PL22 (1) B－3（北から）…… 49～52
(2) B－4（西から）…… 49～52
(3) B－5（南から）…… 49～52
(4) C－2（南から）…… 49～52
(5) C－3（北から）…… 49～52
(6) C－4（西から）…… 49～52
PL23 (1) C－5（北から）…… 49～52
(2) D－1（南から）…… 49～52
(3) D－2（南から）…… 49～52
(4) D－3（北から）…… 49～52
(5) D－4（西から）…… 49～52
(6) D－5（北から）…… 49～52

〈付篇〉

PL24 山口県見島ジーコンボ古墳群出土の人骨 …… 83～90
PL25 埋蔵文化財資料館所蔵の新羅系陶質土器 …… 91・92

挿　図　目　次

＜宇部（小串構内）医学部浄化槽新営に伴う発掘調査＞

Fig. 1　調査区位置図 …… 3

Fig. 2　調査区設定図 …… 4

Fig. 3　小串地区周辺地形図および遺跡分布図 …… 5

Fig. 4　北迫遺跡第一貝塚出土土器 …… 8

Fig. 5　土層断面図 …… 9

＜宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う発掘調査＞

Fig. 6　調査区位置図 …… 11

Fig. 7　調査区設定図 …… 11

Fig. 8　土層断面図 …… 12

Fig. 9　出土遺物実測図 …… 13

＜宇部（小串構内）医学部基幹整備に伴う試掘調査＞

Fig.10　調査区設定図 …… 15

Fig.11　土層断面図 …… 17

Fig.12　出土遺物実測図 …… 18

＜宇部（小串構内）医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営に伴う試掘調査＞

Fig.13　調査区位置図 …… 21

Fig.14　調査区設定図 …… 22

Fig.15　土層断面図 …… 23

Fig.16　土層断面柱状図 …… 24

＜吉田構内大学会館ケーブル布設に伴う発掘調査＞

Fig.17　調査区位置図 …… 25

Fig.18　吉田地区周辺地形図および遺跡分布図 …… 27

Fig.19　東壁土層断面図 …… 30

Fig.20　西・北壁土層断面図 …… 31

Fig.21　遺構配置図 …… 33

Fig.22　出土遺物実測図 …… 34

＜吉田構内大学会館排水管布設に伴う発掘調査＞

Fig.23　調査区位置図……37
Fig.24　土層断面図……39・40
Fig.25　A区遺構配置図……41
Fig.26　B区遺構配置図……42
Fig.27　A区SD1・4、SK1～3実測図……43
Fig.28　出土遺物実測図……45

＜吉田構内学生部テニスコートフェンス改修に伴う試掘調査＞

Fig.29　調査区位置図……49
Fig.30　調査区設定図……50
Fig.31　土層断面図……51

＜昭和59年度山口大学構内の立会調査＞

Fig.32　調査区位置図……53
Fig.33　調査区位置図……54
Fig.34　調査区位置図……55
Fig.35　調査区位置図……56
Fig.36　調査区位置図……57

〈付篇〉

周防国吉敷郡吉田における古代・中世の様相－吉田遺跡をめぐる諸問題－

Fig.37　吉田遺跡位置図および山口盆地内遺跡分布図……60
Fig.38　石錘帯実測図……61
Fig.39　木簡実測図……64
Fig.40　全国木簡出土地……64
Fig.41　硯実測図……65
Fig.42　周防国内硯出土分布図……66
Fig.43　緑釉陶器実測図……67
Fig.44　周防国内緑釉陶器・瓦器出土分布図……67
Fig.45　畿内系瓦器実測図……67
Fig.46　周防国内輸入陶磁器出土分布図……68
Fig.47　輸入陶磁器実測図……68

Fig.48　吉田構内Ｌ－14区遺構配置図 …… 73
吉田遺跡採集の円筒埴輪について
Fig.49　円筒埴輪実測図 …… 78
Fig.50　円筒埴輪タガの形状比較図 …… 81
山口県見島ジーコンボ古墳群出土の人骨
Fig.51　遺跡の位置 …… 84
Fig.52　人骨の残存部分 …… 84
埋蔵文化財資料館所蔵の新羅系陶質土器について
Fig.53　埋蔵文化財資料館所蔵の新羅系陶質土器実測図 …… 91
Fig.54　光市長徳寺所蔵の新羅系陶質土器実測図 …… 92

Fig.55　吉田構内地区割および調査区位置図 …… 101・102
Fig.56　小串構内調査区位置図 …… 103・104

表　目　次

Tab. 1　昭和59年度山口大学構内遺跡調査一覧表 …… 2
＜宇部（小串構内）医学部基幹整備に伴う試掘調査＞
Tab. 2　生痕別貝類構成比表 …… 19
＜吉田構内大学会館ケーブル布設に伴う発掘調査＞
Tab. 3　出土遺物観察表 …… 35
＜吉田構内大学会館排水管布設に伴う発掘調査＞
Tab. 4　出土遺物観察表 …… 46
〈付篇〉
周防国吉敷郡吉田における古代・中世の様相 －吉田遺跡をめぐる諸問題－
Tab. 5　養老令衣服令の男子の帯・腰帯 …… 62
Tab. 6　佐藤氏論文の丸鞆分類表 …… 62
Tab. 7　職員令に定める国司の定員 …… 62
Tab. 8　吉敷郡内郷推定地 …… 71
Tab. 9　関連事柄年表 …… 76

吉田遺跡採集の円筒埴輪について

Tab. 10　円筒埴輪観察表 …… 79

山口県見島ジーコンボ古墳群出土の人骨

Tab. 11　人骨一覧 …… 83
Tab. 12　第155号墳出土人骨 …… 85
Tab. 13　上腕骨計測値 …… 86
Tab. 14　大腿骨主要計測値 …… 87
Tab. 15　上腕骨計測値 …… 88
Tab. 16　大腿骨計測値 …… 88
Tab. 17　脛骨計測値 …… 88
Tab. 18　歯の計測値 …… 88

山口大学構内遺跡調査要項

Tab. 19　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員 …… 95
Tab. 20　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員 …… 95

山口大学構内の主な調査

Tab. 21　山口大学構内の主な調査一覧表 …… 96～98

第1章　昭和59年度山口大学構内遺跡調査の概要

山口大学構内には縄文時代後・晩期から近世にかけての集落跡の所在する吉田地区をはじめとして県内各地に分散する附属施設を含めた各地区に周知の遺跡が埋存している。

山口大学埋蔵文化財資料館は学内共同利用施設として、これら各地区において現状変更を伴う諸工事に際し、埋蔵文化財保護の観点から調査・研究を行なっている。すなわち、埋蔵文化財調査を要する場合は、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、周辺における既往の調査結果や工事内容等を勘案しながら、埋蔵文化財に対する影響の度合に応じて立会、試掘および事前に区分した各調査方法に準拠して発掘調査を実施し、保護措置を講じている。

今年度は事前調査4件、試掘調査3件、立会調査5件の計12件の調査を実施した(Tab.1)。

Tab. 1　昭和59年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査地区	構内地区	構内地区副	調査面積 (m^2)	調査期間	挿図番号
事前調査	医学部浄化槽新営予定地	小串地区		44	5月1日～9日 8月1日～7日	Fig. 56－4
	医学部体育館新営予定地(既設建物撤去地域)	〃		65	5月1日～ 5月17日	〃 －5
	大学会館ケーブル布設予定地	吉田地区	N－12・14	160	7月5日～ 7月26日	Fig.55－58
	大学会館排水管布設予定地	〃	K・L－13	180	9月10日～ 10月8日	〃 －59
試掘調査	医学部基幹整備予定地	小串地区		28	5月22日～ 6月4日	Fig.56－6
	医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営予定地	〃		38	6月11日 6月28日	〃 －7
	学生部テニスコートフェンス改修予定地	吉田地区	B－18 C－16～18 D－16・17 E－15～18	25	10月1日～ 10月8日	Fig.55－57
立会調査	経済学部樹木移植地区	吉田地区	K－19・21		11月8日	〃 －56
	工学部尾山宿舎配管埋設工事地区	常盤地区			12月12日	Fig. 33
	教育学部附属光小・中学校焼却場新設地区	光地区			8月10日	Fig. 34
	ボート部艇庫合宿研修所整備地区		K－19・21		4月27日	Fig. 35
	ヨット部艇庫合宿研修所整備地区				4月27日	Fig. 36

吉田地区の調査

事前調査2件、試掘調査1件、立会調査1件の計4件の調査を実施した。

大学会館ケーブル布設に伴う事前調査では、調査区南半部において一部中世のものを含むが、主として弥生時代から古墳時代にかけての土壙、柱穴が検出された。土壙には従来吉田地区内では南門周辺においてのみ確認されている弥生時代前期のものがあり注目される。また、今回の調査区周辺では北から南へ張り出す低丘陵上に弥生時代後期および古墳時代前半期の竪穴住居跡が検出されており、弥生時代前期以降の集落の立地、形成過程、規模および構成を知る貴重な資料を提供した。出土遺物には弥生土器、歴史時代土師器、瓦質土器等がある。

大学会館排水管布設に伴う事前調査では弥生時代後期から室町時代にかけての土壙、溝、柱穴が多数検出されたが、遺跡の分布範囲は調査区東半部に限定される。また、中央部で南から北への地山の下降が観察され、西半部では弥生時代から中世にかけての時期幅をもつ遺物を包含する二次堆積層が認められることから、ケーブル布設に伴う調査結果とあわせ今回の調査区中央部以東を中心に弥生時代から室町時代にかけての集落が継続的に立地・形成されたことを示す資料が得られた。各遺構からは弥生土器、土師器、瓦質土器、輸入陶磁器をはじめとして鞴口、鉄鏃など注目すべき遺物も少なくない。

テニスコートフェンス改修に伴う試掘調査では昭和58年度にテニスコート南半部で実施した立会調査で確認された弥生時代から古墳時代にかけてのものと思われる遺物包含層が当該地域全面に分布していることが確かめられた。

小串地区の調査

事前調査2件、試掘調査2件の調査を実施した。

事前調査は昭和58年度の体育館新営に伴う試掘調査において、既設建物によって調査が不可能であった地域および体育館周辺の浄化槽新営に伴うものである。検出遺構には中世から近世にかけての用排水施設の堰ないしは補強用の木製杭がある。また、土師器、瓦質土器等鎌倉時代後半から室町時代にかけての遺物が出土し、体育館周辺地域における中世後半の遺物は、ほぼ限定された二次堆積層に包含されていることが指摘されるに至った。

基幹整備に伴う試掘調査では幼殻を含む数種の貝類が多量に出土し、当該地域周辺における古生物相、古環境を知る貴重な資料となった。また、臨床講義棟・病理解剖棟新営に伴う試掘調査では昭和58年度以降の調査結果から医学部キャンパス東端部から北半部縁辺にかけての土層の堆積状況を比較・検討する資料が得られ、旧地形の把握に重要な基礎資料を提供した。

（河　村）

第2章　宇部（小串構内）医学部浄化槽新営に伴う発掘調査

1　調査の経過

調査地区は医学部および附属病院棟とは北西－南東を走る市道を隔てた大学キャンパスの東端部に位置する。昭和58年度に旧石器時代後期のナイフ形石器、削器および古墳時代の須恵器、室町時代の土師器、瓦質土器が出土した体育館新営に伴う調査地域[1]に極めて近接しており、小串地区において当該地域一帯は施設整備等と併行して比較的早い段階から資料が蓄積されつつある地域のひとつである。

今年度に至って、体育館新営に伴い予定地内に存在する課外活動棟付随の既設の浄化槽が解体・撤去され同建物の南側に新設されることとなった。これをうけて、新営予定地約32㎡について昭和59年5月1日から9日まで発掘調査を実施した（A区）。また、新営体育館付随の浄化槽もあわせて新設されることになり、工事および調査日程の調整を経て同年8月1日から7日にかけて発掘調査を実施した。調査は人文学部考古学研究室の協力を得て新営予定地約12㎡について行なった（B区）。

その結果、両区とも湧水および安全面での観点から調査が制約されたが、A区では中世から近世の木製杭が多数検出されたほか、二次堆積層から瓦質土器、国産陶磁器が出土した。また、B区では近代から現代の溝1条を検出し、A区同様二次堆積層から土師器、瓦質土器が出土した。

なお、腐触土、構内造成時等の盛土を含む表土は機械を使用して除去し、以下は人力による分層発掘を行なった。

（河　村）

Fig. 1　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年）。

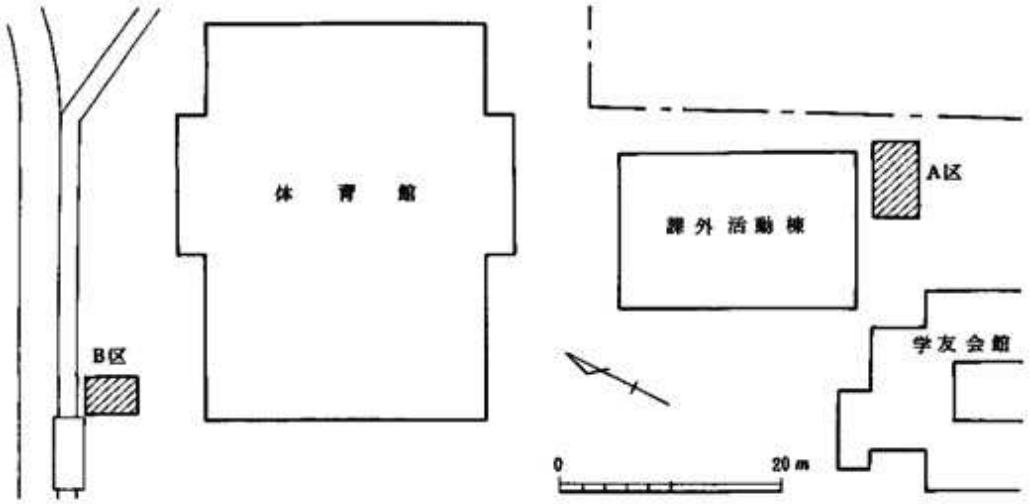


Fig. 2　調　査　区　設　定　図

2　位置と環境

医学部キャンパスは、宇部市大字小串1144に所在する。小串周辺地域には、遺跡が散在しており、以前から大学敷地内にも遺跡が存在するのではないかと推測されていたが、未確認の状態であった。昭和58年度にキャンパスの東端部に体育館が新営されることとなり[1)]試掘調査を実施した。その結果、顕著な遺構は検出されなかったものの、旧石器時代のナイフ形石器、削器、細石核、剥片、古墳時代の須恵器、室町時代の土師器、瓦質土器が出土し、遺跡として周知されるに至った。

宇部市は、山口県の南西部に位置し、大別すると中・北部の丘陵地帯、台地の発達する周防灘沿岸地域、厚東川河口付近から成る。

中・北部は、長門丘陵[2)]の一部で、標高 100 m 前後の小丘陵が連なる。発達した浸食平坦面から成り、老年山地の特色をよく表している。一方沿岸地域は、洪積世の中期から後期にかけて地盤が隆起し、海面が変動したため海成段丘が発達している。この付近は宇部台地と呼ばれ、背後の丘陵から流れる河川に浸食され、幅広い浸食谷や谷底平野がみられる。西部の厚東川河口付近は、ほとんどが元禄時代以降に人為的につくられた平野である。

宇部市域は、山口県内でも遺跡の多い地域の一つである。以下では宇部市域の歴史的変遷を遺跡[3)]によってみて行くことにする。

旧石器時代の遺跡は宇部台地に集中する[4)]。特に東部の沢波川、浜田川流域には、後期の遺跡である南方遺跡、長桝遺跡[5)]、本郷遺跡等が分布し、ナイフ形石器、台形石器、細石刃、

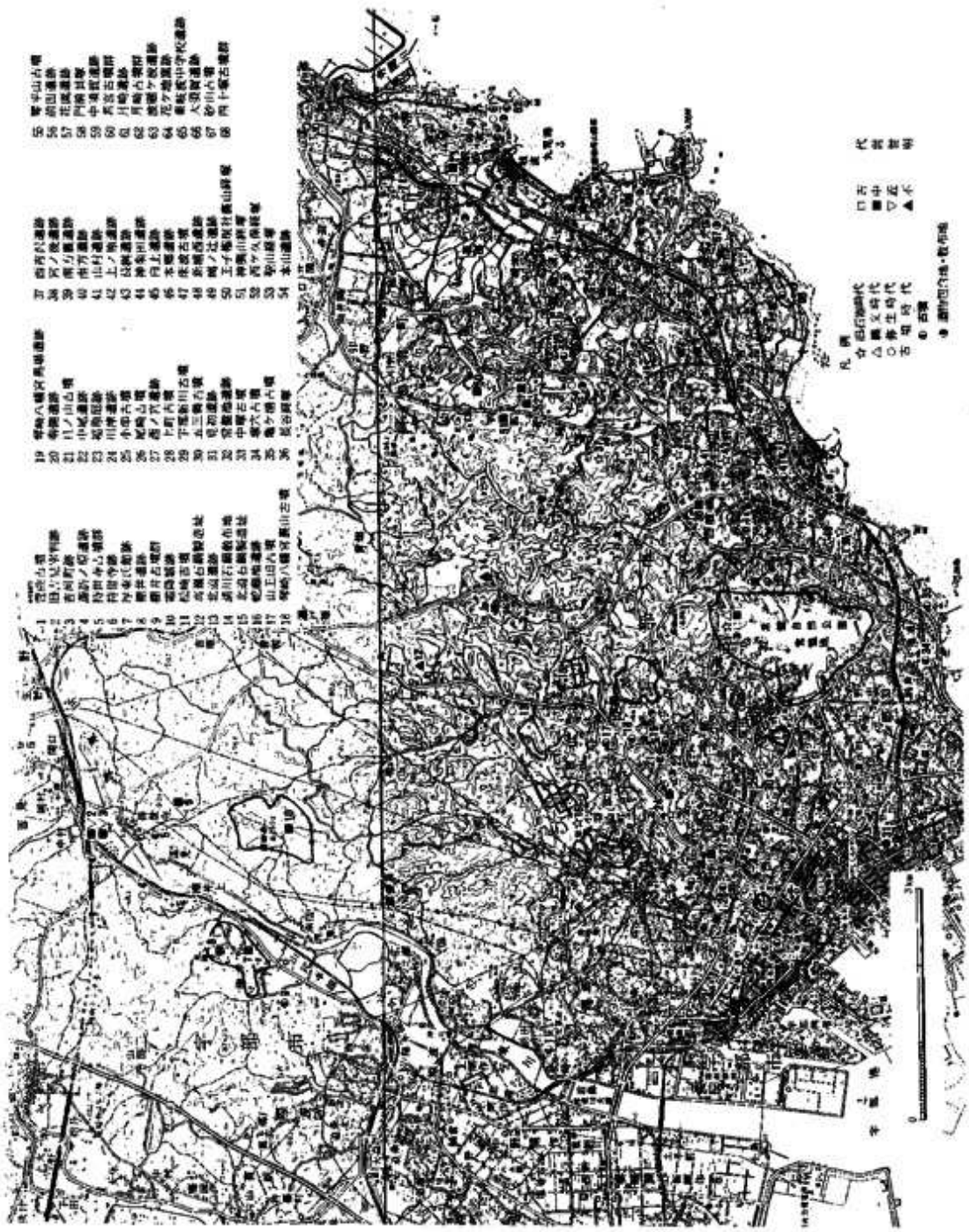


Fig. 3 小串地区周辺地形図および遺跡分布図

細石核などが表採されている。市の中央部では常盤池遺跡から石刃やナイフ形石器等多数の遺物が採集されている。一方、やや西部よりの真締川流域では蛇瀬池遺跡、川津遺跡からわずかに遺物が検出されているのみで、前述の医学部キャンパスにおける旧石器の出土は貴重である。

次に縄文時代の遺跡としては、月崎遺跡や花園遺跡、東岐波中学校遺跡等がある。なかでも月崎遺跡は前期の住居跡や集石遺構、前期から晩期にかけての土器片が多数検出されたことで知られている。遺跡はいずれも市域東端の東岐波海岸周辺の低い砂堆地一帯に立地する。その他では、中央部の常盤池遺跡から早期の押型文土器片や石鏃・石斧などが出土している程度で遺跡数は比較的少ない。

弥生時代の遺跡としては、真締川上流域の小丘陵上に位置する中期後半の北迫遺跡、中流域に位置する前期末の琴崎八幡宮馬場遺跡、中期後半の南側遺跡があげられる。特に北迫遺跡は、貝塚を伴う集落跡として著名である。なお、北迫遺跡と南側遺跡からは石庖丁が出土している。また、東部では中期から後期の月崎遺跡、後期後半から終末の中須賀遺跡等が沿岸の砂堆地に分布している。

古墳時代に入ると遺跡はその数を増し、立地場所も多彩になる。東部では、箱式石棺、壺棺が検出され、弥生時代の形態を残す埋葬遺跡として知られる前期の大須賀遺跡がある。また、波雁ケ浜北岸沿いには、後期の若宮古墳群や月崎古墳群、後期の製塩遺跡である波雁ケ浜遺跡が分布する。中部では、工学部キャンパスの南西に後期の五三舞古墳があり、真締川左岸の医学部キャンパス付近には地下式横穴墳といわれる後期の小串古墳、4基の箱式石棺、人骨、鉄刀、刀子が出土した尾崎古墳等が確認されている。西部の厚東川中流域には、後期の萱曲古墳や持世寺古墳群、下流域には、中期の松崎古墳[6]等が点在する。松崎古墳は組合式箱式石棺を内部主体とする円墳で、三面の仿製鏡や玉類、武具等、豊富な副葬品が出土している。

律令時代に至ると、宇部市域は長門国厚狭郡に編入され国司の治行下へ入ることとなる。しかし、律令制における農民の負担は大きく、調庸や雑役からのがれるために浮浪・逃亡が増加し、その結果、国家財政の窮乏と口分田の荒廃をまねくこととなった。また人口も増加したため政府は耕地を拡大し財政の立て直しを計った。その対策として、百万町歩開墾計画、三世一身の法、墾田永世私財法が次々と施行されたが、これによって土地公有の原則が否定され律令体制が崩壊しはじめた。厚狭郡では次第に在地豪族の勢力が強まり、厚東・厚狭・吉田の三つの私郡に分割された。その中で頭角を現したのが、物部氏の流れ

をくむと伝えられる厚東氏である。厚東氏は現在の厚東区棚井付近を本拠地とし、厚東郡司と称した七代武光の時、籍降城[7]を構築した。武光は、源平争乱の際の功労により鎌倉幕府の御家人となり、14代武実の時には長門国の守護に任ぜられその勢力を九州北部にまでのばした。武実は、後に足利氏によって長門国の安国寺とされた東隆寺や浄名寺を創建し仏教擁護を行なった。しかし、1359年(正平14年)、周防大内氏の長門進攻により厚東氏は滅亡し、その大内氏も1551年(天文20年)に滅び、長門国は毛利氏へと引き継がれて行った。

その後、1625年(寛永2年)に周防吉敷から福原元俊が転封されるまで、宇部は一寒村にすぎなかった。しかし1697年(元禄8年)から2カ年をかけ灌漑用水として常盤池が築造され水田開発が進められた。

宇部市域での石炭採掘は、元禄時代以前には始まっていたとされている。当初は、市域の北部を通る山陽道の宿場町で燃料として用いられていた。江戸時代後期になると、干拓事業が進み、瀬戸内海において製塩業が発展した。そのために必要な燃料として石炭が注目され始め、需要が急速にのび、宇部は昭和の初めまで石炭の町として栄えた。

現在の宇部市は地域活性化の一翼をになうテクノポリス計画の中核都市として、新しい街づくりが進められている。　　(福　島)

〔注〕

1) 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』(1985年)。
2) 山口地学会編「山口の地質をめぐって」(『日曜の地学12』、1980年)。
3) 以下、特に明記しない限り下記の資料に依る。
宇部市教育委員会『宇部の遺跡』(1968年)。
宇部市史編纂委員会『宇部市史　自然環境・民族方言篇』(1966年)。
宇部市史編纂委員会『宇部市史　通史篇』(1966年)。
三坂圭治『山口県の歴史』(山川出版社、1971年)。
伯野幸次「宇部市」(『山口県の地名』、日本歴史地名大系36、平凡社、1980年)。
山口県教育委員会『山口県遺跡地図』(1972年)。
4) 山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(1)—遺跡群の概要—」(『古代文化』、第35巻12号、1983年)。
山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(2)—長渕遺跡第1地点　その(1)—」(『古代文化』、第36巻7号、1984年)。
山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(3)—長渕遺跡第1地点　その(2)—」(『古代文化』、第37巻2号、1985年)。
山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(4)—長渕遺跡第2地点　神楽田遺跡・吉田遺跡・南方裏遺跡—」(『古代文化』、第37巻8号、1985年)。
5) 山口県旧石器文化研究会『長渕遺跡発掘調査概報』(1985年)。
6) 宇部市教育委員会『松崎古墳』(1981年)。
7) 浄名寺所蔵の家譜・恒石八幡宮旧蔵の系図および妙青寺本の系図による。

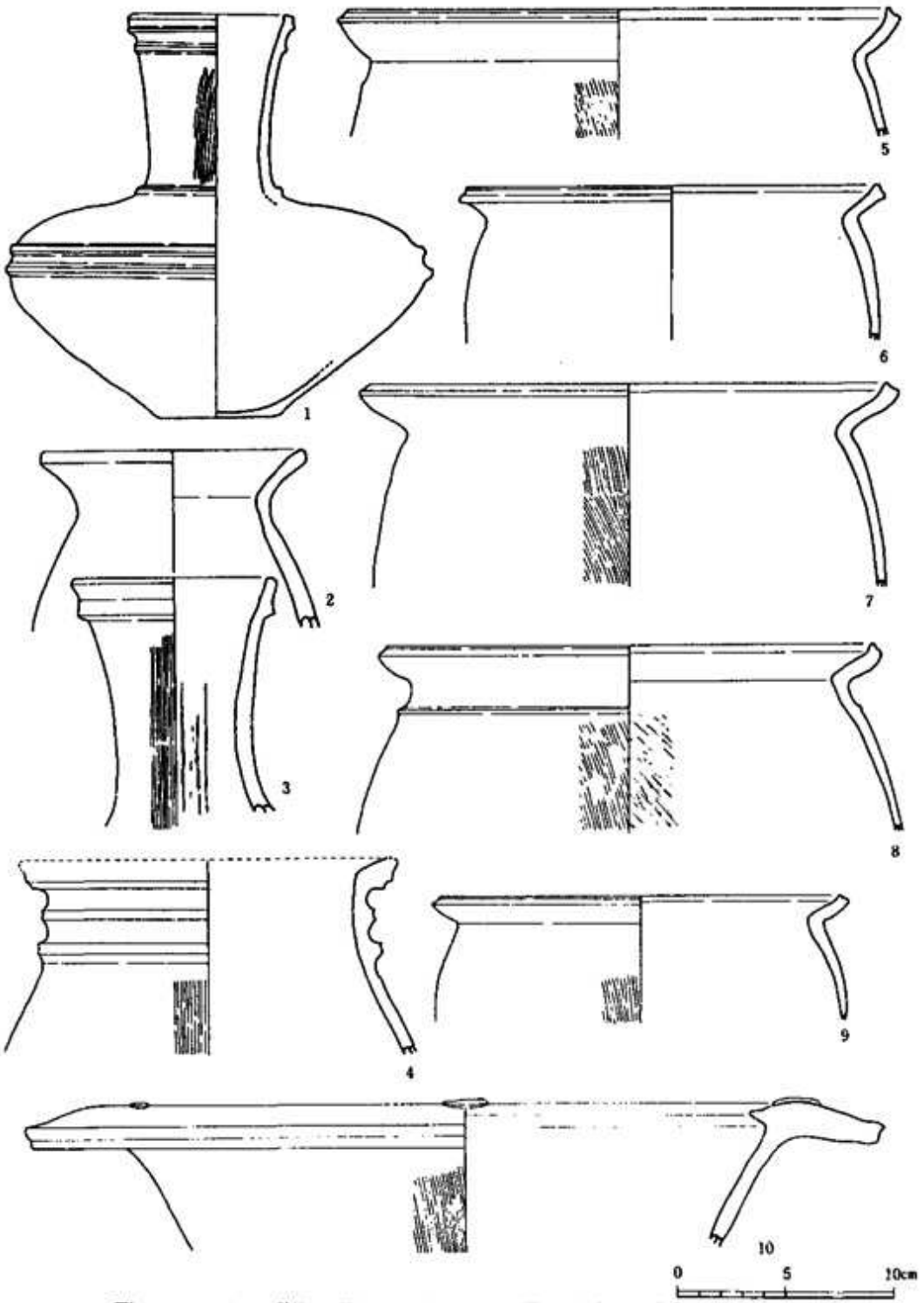


Fig. 4　北迫遺跡第一貝塚出土土器（1962年第1次発掘調査出土，
「北迫遺跡遺構確認調査報告」、宇部市教育委員会、1982　より転載）

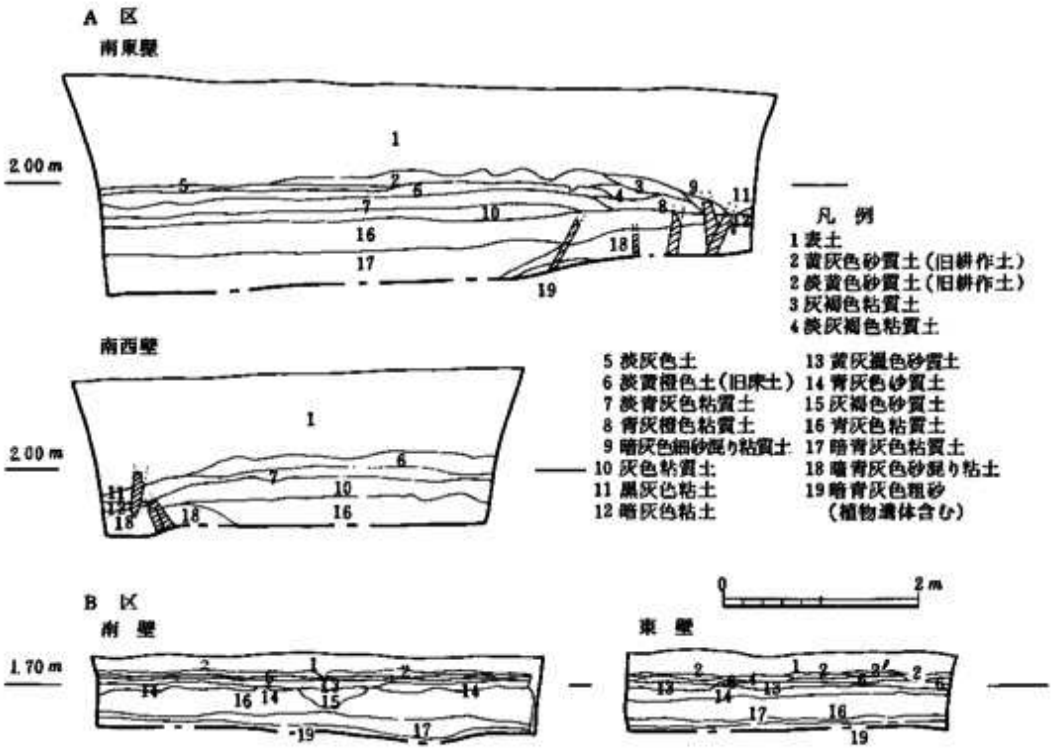


Fig. 5　土層断面図

3　層　位

A区　調査区内で観察した堆積層は16層に分層される。現地表面の起伏は少なく標高約3.00 mである。第1層は腐蝕土および構内造成時等の置土を含む厚さ約100～120 cmの表土。第2・3層は少なくとも二時期にわたる旧耕作土。第4・5層は客土。第6層は旧床土で第7層：淡青灰色粘質土層以下が非人為的な二次堆積層である。第7層上面の標高は、約1.85～2.00 m。遺物は約10～20 cmの厚さをもつ第10層：灰色粘質土層より瓦質土器、国産陶磁器が出土した。

なお、調査区南東隅では上部が削平および攪乱によって消失しているが、少なくとも第7層に打ち込まれた木製杭が検出された。この木製杭以東の堆積層は調査区周辺においてはこの部分にしか認められず、木製杭列によって区画された壕ないしは暗渠等の区画施設内の埋土と考えられ、中世から近世にかけてのものと推察される。

B区　調査区内において観察した堆積層は10層に分層される。現地表面の標高は約2.00 m

で厚さ約20cmの表土下部にA区同様旧耕作土、床土が認められる。第13層：黄灰褐色砂質土層以下が非人為的な堆積層で上面標高は約1.75mである。遺物は25～35cmの厚さをもつ第16層：青灰色粘質土層から土師器、瓦質土器が出土した。また、第16層を掘り込んで調査区中央部を東－西に貫流する近世以後のものと思われる幅約70cm、深さ約20～30cmの溝1条が検出された。

4　小　結

今回の調査は体育館新営計画立案過程において予想されていた体育館周辺地域2ケ所における浄化槽新営に伴う発掘調査であった。調査面積は2ケ所あわせて約44m²と小規模なものであったが、中世を主体とした土師器、瓦質土器、国産陶磁器等が二次堆積層から出土した。また、過去の調査地区のうち大学キャンパスの南側を北東から南西に流れる真締川に最も近接したA区南東隅では中世から近世にかけての木製杭数本が検出された。杭列の方向は不明瞭であるが、周辺地域においては今回はじめて検出されたもので、用排水施設の畦畔に伴う補強用ないしは堰状の遺構と考えられ、中世から近世にかけての土地利用を検討するうえで貴重な資料を提供するものである。　　（河　村）

第3章　宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う発掘調査

1　調査の経過

調査地区は医学部および附属病院棟とは北西－南東に走る市道を隔てた大学キャンパスの東端部に位置し、昭和58年度に試掘調査を行なった体育館新営予定地内に包括される。前回の調査では新営予定地約1,100㎡のうち、既設の課外活動棟のある東半部を回避して約260㎡について4ケ所のトレンチによる調査を実施した[1)]。その結果、顕著な遺構は検出されなかったが、旧石器時代後期のナイフ形石器、削器、古墳時代の須恵器および室町時代の土師器、瓦質土器等多様な遺物が出土し、周辺地域における今後の調査の必要性が喚起されるに至った。

しかるに、体育館新営工事の進捗と呼応して、今年度に入り新営予定地内にある課外活動棟が解体・撤去されることになり、未調査であった当該地域において発掘調査を実施した。調査は昭和58年度の試掘調査結果をふまえ、東西に5m×13mのトレンチを設定して撤去部分約215㎡のうち65㎡を対象とし、昭和59年5月1日から17日にかけて行なった。

なお、腐蝕土および構内造成時等の置土を含む表土は機械を使用して除去し、それ以下は人力による分層発掘を行なった。

Fig. 6　調査区位置図

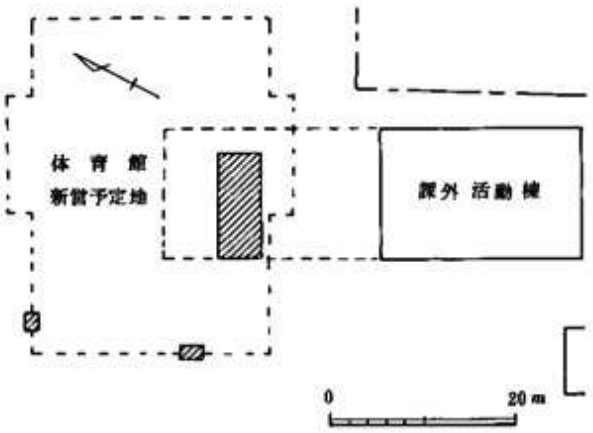
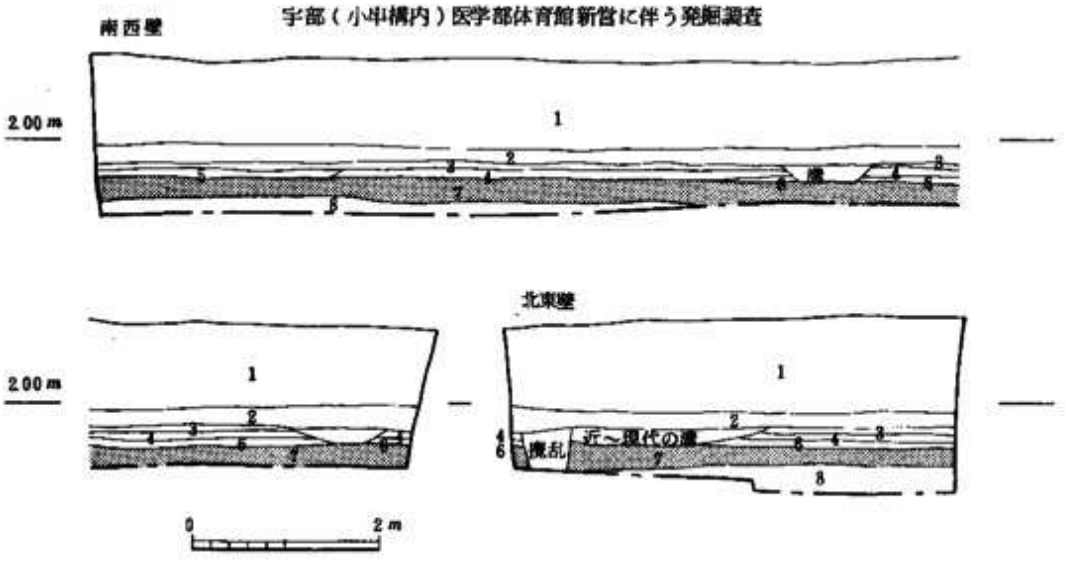


Fig. 7　調査区設定図



1 表土　3 淡黄色砂質土（旧床土）　5 灰色粘質土　7 青灰色粘土
2 黄灰色砂質土（旧耕作土）　4 灰橙色粘質土　6 青黄灰色粘質土　8 青灰色粗砂

Fig. 8　土層断面図

また、調査区周辺地域では調査時における湧水および安全上の観点から地山までの掘削は行なわれていない。したがって、本調査期間中に新営工事と併行して、新営体育館の西部と南部の基礎部分2ケ所を選定し、ハンド・オーガーによるボーリング調査を試みた。

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年）。

2　層　位

現地表は平坦に近く、標高は約2.80～2.90 mである。調査区内において観察した堆積層は8層に分層される。第1層は厚さ約90～105 cmの腐蝕土および構内造成時等の盛土を含む表土。第2層は旧耕作土。第3層は旧床土で下面標高は約1.70 mである。第4層：灰橙色粘質土以下が非人為的な二次堆積層で第4～6層は遺物を包含していない。第7層は約20 cm以上の厚さをもつ青灰色粘土層で土師器、瓦質土器が出土した。先にあげた昭和58年度の調査および第2章で述べた浄化槽新営に伴う発掘調査においても遺物を包含する同層の堆積が確認されている。第8層はトレンチ北半部を中心に部分的に堆積が認められる植物遺体を含む青灰色砂層である。なお、昭和58年度の調査で認められた南東－北西にかけて平行して走る近代から現代にかけての2条の溝の延長部分が検出された。

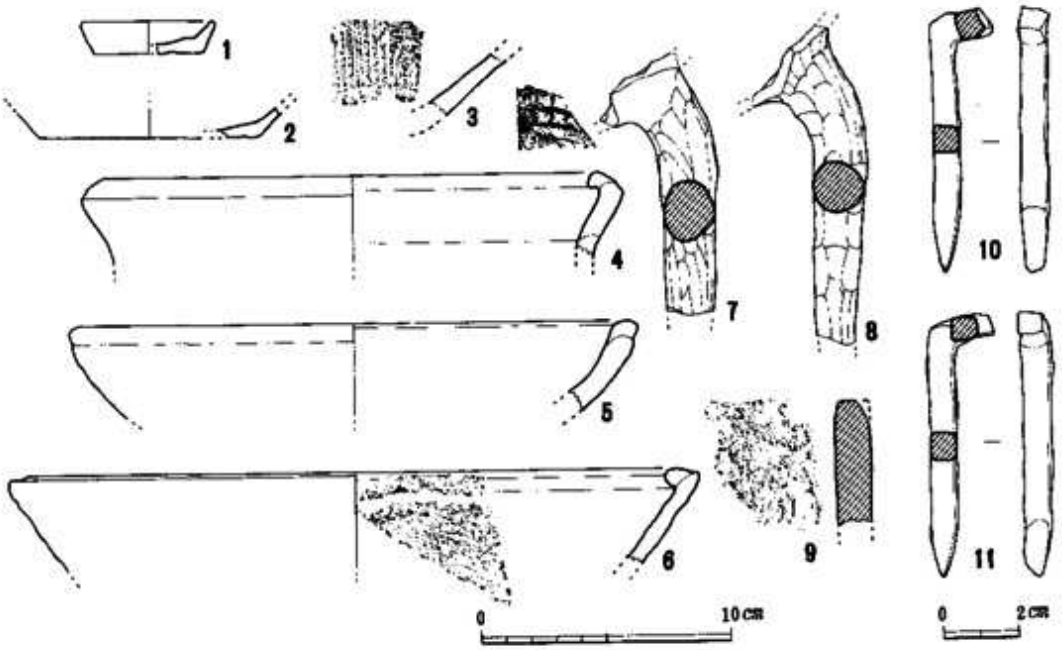


Fig. 9　出土遺物実測図（第2層9～11，第3層2・7，第7層1・3～6・8）

また、ハンド・オーガーによるボーリング調査では2地点ともに探査機械限界の現地表下約5.6 mにおいても地山は検出されず、第8層以下は精粗の差はあるものの青灰色砂層の堆積が観察されたにとどまった。

3　遺　物

土師器（Fig. 9，1・2）　1は小皿で底部周縁をわずかにつまみ上げる。底部内面ナデ、他は横ナデ仕上げ。復原口径5.1 cm、器高1.3 cm、底径4.4 cm。第7層出土。2は坏の底部で器壁は薄い。体部外面横ナデ、内面磨滅のため調整不明。第3層出土。1・2とも糸切り底。1は胎土不良、焼成良好。2は胎土、焼成とも良好。いずれも橙色を呈する。

瓦質土器（Fig. 9，3～8）　3・6は擂鉢。3は体部の下半部。6は口縁部内面が粘土帯貼付により内側に突出する。いずれも内面に少なくとも8条単位の櫛目描き上げが施され、調整は内外面とも横ナデ仕上げ。3は胎土、焼成とも普通で黒色を呈する。6は胎土、焼成ともやや不良で暗灰色を呈する。4は体部上半で外方へ開く鍋の口縁部で、端部は内側へ垂れ下がりぎみに屈曲する。内外面とも横ナデ仕上げ。胎土やや不良、焼成良好で灰色

を呈する。5は鉢で口縁端部は丸い。内外面とも横ナデ仕上げ。胎土、焼成良好で暗灰色をなす。7・8は鼎の脚部で裾部を欠損する。いずれも指圧による整形で、7は体部外面に格子目叩きを施す。7は胎土やや不良、焼成良好で黒色を呈する。8は胎土、焼成良好で赤黒色をなす。3～6・8は第7層出土、7は第3層出土。

瓦(Fig.9,9) 薄手の平瓦。凹面の布目は斜め方向で凸面はナデ調整。胎土には多くの砂粒を含む。焼成は軟質で暗灰色を呈する。第2層出土。

鉄製品(Fig.9,10・11) 頸部を直角に近く折り曲げた釘で、上面は上方からの敲打によりくぼむ。10・11とも全長70㎜、厚さは10が6.5㎜、11が8.0㎜。第2層出土。

4 小 結

医学部・医療技術短期大学部の所在する小串地区では、昭和58年度以降調査が進められている。とりわけ、今回調査を実施した体育館周辺では施設整備等と呼応して、大学キャンパス内でも先進的に資料が蓄積されつつある地域のひとつである。

今回の調査では遺構は検出されなかったが、周辺地域に普遍的に堆積する青灰色粘土層より鎌倉時代後半から室町時代にかけての土師器、瓦質土器等が出土した。昭和58年度調査の際出土した旧石器時代の遺物は大部分が後世の客土中からの出土であるが、土器類は今回の調査区内でいう第6・7層にあたる非人為的な二次堆積層を中心に包含されている。また、浄化槽新営に伴う調査においても遺物は旧床土下2～3層の無遺物層を介在した第10・15層からの出土である。したがって、キャンパス東端部の体育館周辺地域で遺物を包含するのは、ほぼ限定された二次堆積層であることが指摘できよう。

その搬入経路は現段階では一部未確認の遺跡も所在すると思われるが、川津遺跡および西ノ宮遺跡等の近隣諸遺跡から真締川に起因する搬入作用によってもたらされたものと想定される。しかし、昭和58年度調査に代表されるように、表土直下の旧耕作土および床土にも多様な遺物を包含することから、キャンパスに近接し体育館北方に所在する低丘陵周辺地域にこの時期の遺跡が存在する可能性は十分に考えられ、野球場および職員宿舎等の所在するキャンパス北東端部における今後の調査が重要な鍵を握っているものと思われる。

(河 村)

第4章　宇部（小串構内）医学部基幹整備に伴う試掘調査

1　調査の経過

当調査地区は小串構内の北西縁辺中央部に位置する。工事自体は特別高圧受変電にかかわる埋設管路工事で、医療技術短期大学部正門付近より学内外の境界周壁に沿って特別高圧受変電棟までの間、約 170 *m* の距離で、幅 0.85 *m*、深さ約 1.6 *m* の掘削を伴うものである。この地域はこれまで埋蔵文化財の調査が実施されておらず、全く土層等の状況が把握されていないこと、また市道を挟んで対峙する位置にある体育館周辺で旧石器、中世の遺物が出土していることなどから、関係当局と協議の結果、土層の堆積状況を把握し、埋蔵文化財の有無の確認を主目的とした試掘調査を工事着工前おいて事前に行なうこととした。

調査は昭和59年5月22日から同年6月4日まで、路線予定地内の4カ所に試掘壙を設定して実施した。試掘壙設定にあたっては路線内に既設の埋設物が多数あるため、これらに影響がない地点を選定した。なお、調査は工事基底面レベルまで行ない、最終的に調査総面積は約 28 *m²* に至った。

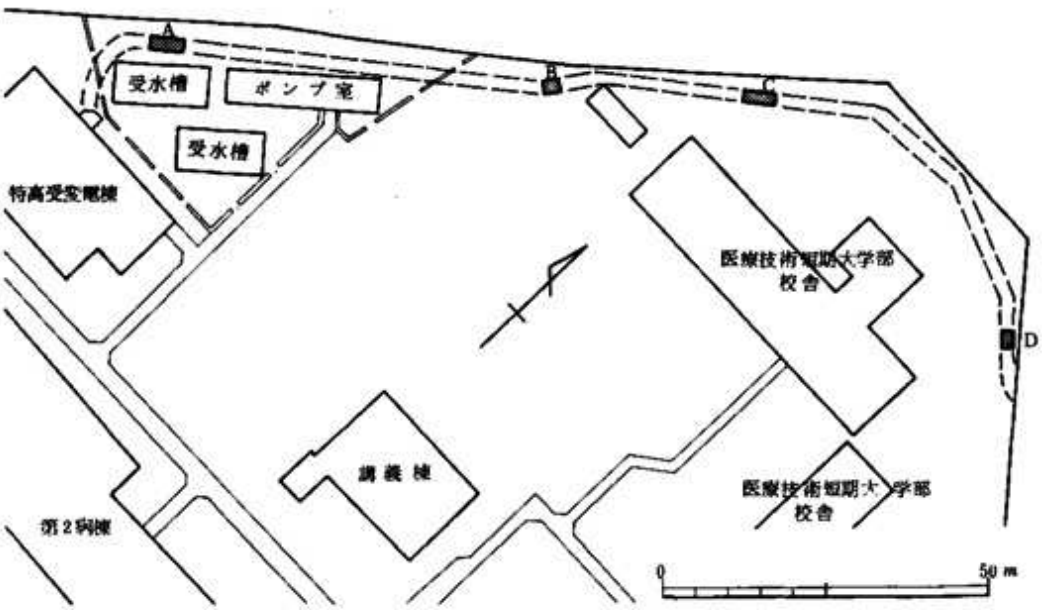


Fig. 10　調査区設定図

2　層　位

Aトレンチ

特高受変電棟の裏にある受水槽と境界周壁との間に設定した5 m×2 mのトレンチである。

地表面下上部は石炭殻を主とした近年の置土で、H＝1.4 m前後に第2層：茶灰色土の旧耕作土がある。その直下の第3層：黄橙色粘質土は第2層に伴う床土で、以下粘土質の層が続き、そしてH＝0.65 m前後で第8層：灰色粘土混り砂層上面となる。この第8層の堆積はボーリングステッキによる探査の結果、厚さ1 m以上あることを確認した。なお、この層以下は水を多量に含み湧水が激しいため掘削を断念したが、H＝0 mの地点で貝殻を認めた。

Bトレンチ

医療技術短期大学部校舎の西側に位置する1.5 m×1.5 mのトレンチである。

土層上部には整地土・置土が約1.4 mと厚く存在し、その直下には厚さ15 cmを測る第2層：茶灰色土の旧耕作土があり、以下、A・Cトレンチ同様に第3・4層が続く。なお、第4層上面で小石を詰めた暗渠を確認した。

Cトレンチ

校舎の北側に位置する5 m×2 mのトレンチである。

層位は、地表面から50～60 cm下までは近年の置土で、その直下H＝1.7～1.8 mに第2層の旧耕作土があり、以下Aトレンチと同様に第3～5層が堆積する。第5層直下には第7層：暗青灰色粘土層があり、Aトレンチの層序と異なる。しかしこの層はAトレンチの第6層：暗灰色粘質土層に対応すると推定され両者は若干の色調差とみられる。その下にAトレンチ同様水を多量に含む第8層がひろがり、H＝0.8 mより下から多くの貝殻の出土をみた。

Dトレンチ

当地点は医療技術短期大学部校舎の正門に最も近いところに位置し、トレンチは1.5 m×1.5 mの規模である。

土層の上位は整地土・置土で、以下に旧耕作土とみられる第9層：灰色粘質土層があり、またそれに伴う床土と考えられる第10層：淡青灰橙色土層が続く。A～Cトレンチの層序を比べると土層の色調は異なるが、5⇔9、3⇔10、4⇔11、5⇔12とがそれぞれ対応すると推定する。なお、第2、9層は旧耕作土と記したが、第4、11層もその可能性がある。

第12層：青灰色粘土混り砂層上面で幅30 cmの暗渠を検出した。暗渠は東－西方向にのび、内部には小竹や藁等が入れてあり、また肩部には木杭が所々に打たれている。

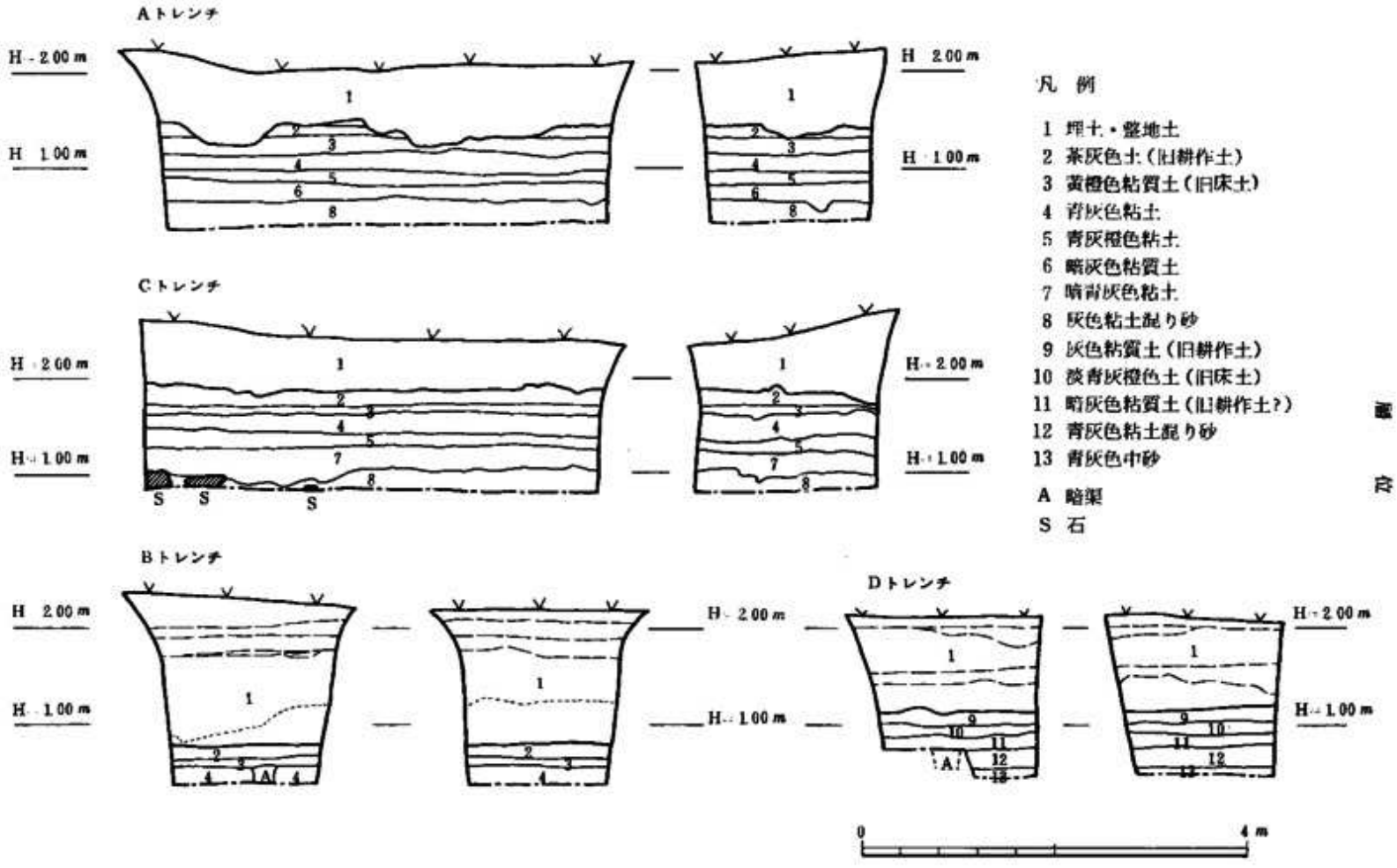

Aトレンチ
H 2.00m
H 1.00m
Cトレンチ
Bトレンチ
Dトレンチ
S
A
凡 例
1 埋土・整地土
2 茶灰色土（旧耕作土）
3 黄橙色粘質土（旧床土）
4 青灰色粘土
5 青灰橙色粘土
6 暗灰色粘質土
7 暗青灰色粘土
8 灰色粘土混り砂
9 灰色粘質土（旧耕作土）
10 淡青灰橙色土（旧床土）
11 暗灰色粘質土（旧耕作土?）
12 青灰色粘土混り砂
13 青灰色中砂
A 暗渠
S 石
0
4 m

Fig. 11 土層断面図

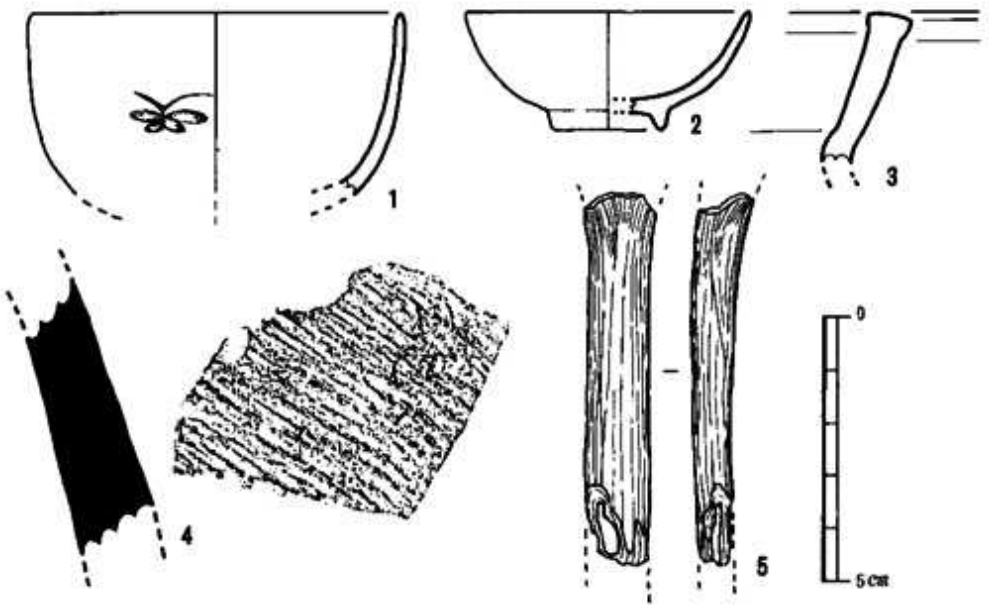


Fig. 12　出土遺物実測図

3　遺　物

出土遺物にはAトレンチ第2層(旧耕作土)－土師質土器1点、Bトレンチ内第2層(旧耕作土)－土師質土器1点、磁器1点、瓦1点、焼土、Cトレンチ内第7層－須恵質土器1点、磁器2点、焼土、骨片2点、第8層－貝殻多数、Dトレンチ内第9層(旧耕作土)－磁器5点、陶器3点、瓦1点、焼土、第11層－土師質土器2点、瓦質土器1点、磁器2点、陶器1点、焼土がある。これらは近世以降のものが大半を占めるが、Cトレンチ出土の須恵質土器、Dトレンチ出土の土師質土器、瓦質土器などは中世まで遡る蓋然性が高く、とくに須恵質土器は古代の可能性もある。またCトレンチで多数出土した貝類も当地の地理的変遷過程より少なくとも近世以前のものと考えられる。以下、実測し得たものおよび貝殻について記する。

磁器(Fig.12, 1・2)　1は湯呑みで、外面に青色の蝶の模様を施す。胎土は白色、釉調はやや淡青黄色を帯びた白色。2は猪口で、文様等はない。胎土、釉調とも白色。両者ともDトレンチ第9層出土。

土師質土器(Fig.12, 3)　口縁部である。わずかに内傾気味に立ち上がり、端部は肥厚し丸くおさまる。調整は内面ヨコナデ、外面上位ナデ、外面下位ヨコナデ。色調は内外面と

も淡灰白色。Dトレンチ第11層出土。なお小片で断定しかねるものの形状等により室町時代後半の羽釜である可能性を指摘しておく。

須恵質土器（Fig. 12, 4）　大形の壺ないしは甕の胴部片で、外面に平行叩き目痕、内面ナデ調整痕が残る。色調は内面明青灰色、外面青灰色。胎土は精良で、焼成は堅緻である。Cトレンチ第7層出土。

骨片（Fig. 12, 5）　現存長7.0 cm、最大幅1.6 cmを測る。種類等については今後専門の鑑定を待って期したい。

貝殻（PL 6－(2)）　Cトレンチ第8層出土。トレンチ内全域にわたり比較的濃密に散在していた。貝の種類および個体数は下記の表に示す通りである。種類は二枚貝が9種、巻

Tab. 2　生棲別貝類構成比表

貝種	名称	最少個体数	右殻数	左殻数	瀬戸内海での様相				分布深度
					垂直分布	生息地	産状	分布状況	
二枚貝	ハマグリ	201	201	182	T_3－N_1	砂地	普通	全域	主として淡水の流入する鹹度の低い砂泥地に棲み、全国の内湾に分布
	オキシジミ	28	22	28	T_3－N_1	泥地	多い	全域	浅海の泥底
	シオフキ	11	11	11	T_3－N_1	砂地	普通	全域	潮線下
	オオノガイ	12	8	12	T_3－N_1	泥地	多い	全域	潮線下
	アサリ	7	7	6	T_3－N_1	砂地、泥地、礫地	多い	全域	主として淡水の流入する浅海の鹹度低い砂泥地に棲息
	カガミガイ	4	4	3	T_3－N_1	砂地	普通	全域	潮線下～5 fms.
	ハイガイ	5	5	0	T_3－N_1	砂泥地	稀（絶滅?）	平生港大海湾	潮線下
	カリガネエガイ	1	1	0	T_2－T_3	岩礁地	少ない	全域	潮線下、主として内湾に棲息
	カキ	3			T_3－N_1	岩礁地砂礫地	多い	全域	潮線下
巻貝	イボウミニナ(?)	19			T_1－T_2	砂泥地	少ない	全域	
	ウミニナ(?)	4			T_1－T_2	砂泥地	多い	全域	
	ヘナタリ(?)	4			T_1－T_2	汽水性砂泥地	普通	全域	潮線
	ツメタガイ	4			T_3－N_1	砂泥地	普通	全域	
	ゴマフダマ	1			T_3－N_1	砂泥地	普通	全域	5～10 fms.
	テングニシ	1			N_1－N_2	砂泥地	普通	全域	15～30 fms.
	アカニシ	1			N_1－N_2	砂泥地	普通	全域	10～20 fms.

※〈T＝潮間帯〉T_0＝潮上帯、T_1＝高潮垂帯、T_2＝中潮垂帯、T_3＝低潮垂帯。
〈N＝浅海帯〉N_1＝上浅海帯20～30 mまで、N_2＝中浅海帯50～60 mまで、
N_3＝亜浅海帯 100 ～ 120 mまで、N_4＝下浅海帯 200 ～ 250 mまで。

※垂直分布、生息地、産状、分布状況は「瀬戸内海の生物相Ⅰ（軟体動物）」（広島大学理学部付属向島臨海実験所、1983年）、分布深度は「原色日本貝類図鑑」（吉良哲明、保育社、1983年）から引用した。

貝が7種で、個体数ではハマグリが全体の約3分の2を占め圧倒的に多い。垂直分布は低潮垂帯から上浅海帯(20～30mまで)のものが多く、巻貝では高・中潮垂帯や中浅海帯に及ぶものもある。生息地は砂泥地がほとんどである。なお、出土ハマグリを山口大学工業短期大学部池谷元伺教授にESR年代測定して頂いたが、結果はマンガンの不純物が強すぎて測定不可能であったことを付記しておく。

4 小 結

今回の調査では顕著な遺構は検出されなかったが、土器類、貝類などが出土した。土器類は出土状況から昭和58年度に調査した体育館建設地域の出土遺物と同様、周辺地域からの流れ込みによるものと考えられる。ただし、貝類に関しては出土層やその数量および幼殻が含まれていることなどを勘案すると、二次的な堆積ではなく、この地がその棲息地であり、過去においてこの地が一時的にせよ海岸であった蓋然性が高いと思われる。また貝類の棲息時期は共伴土器がなかったため詳細な時期決定をし難いが、この地は少なくとも近世の段階で開作が行なわれていたと推定されることから、近世以降には下らないと察する。そのため今回の出土貝類はこの地の古環境を知る上では貴重な資料で、またその中には今日、瀬戸内海では稀産であるハイガイや、宇部周辺の海岸ではほとんど見られない大形のハマグリなどが含まれており、生物学的にも非常に興味深い点がある。以上のことよりこの地点は医学部構内の中でも、歴史、地理、生物などの各分野に関する貴重な資料が包蔵されており、今後の調査が期待される。 (森 田)

〔付記〕
貝の年代測定に関して池谷元伺先生(山口大学工業短期大学部教授)、また貝類分類作業で杉原和恵氏(山口大学人文学部考古学研究室学生)の御協力を頂いた。記して感謝いたします。

付 記

昭和59年11月1日、医学部構内、医療短期大学部正門の南に位置するガスガバナー庫付近において、都市ガス管布設工事に伴って宇部市教育委員会が埋蔵文化財の調査を実施しており、その結果を記する。

工事掘削範囲内に1.8×0.8mのトレンチを設定し発掘調査を行なった結果、地表面下約1.1～1.4mの間に青灰色粘土層があり、それ以下青灰色砂層が続くことを確認した。ただし地表面下約1.3m前後からの湧水が激しいため、青灰色砂層の厚さおよび以下については不明。遺構の検出、遺物の出土はなかった。

第5章　宇部（小串構内）医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営に伴う試掘調査

1　調査の経過

調査地区は大学キャンパスの中央部北端、エネルギーセンターおよび動物舎の南側の地域にあたり、第4章で述べた基幹整備に伴う試掘調査の際設定したAトレンチの南約130～150 mに位置する。小串地区では昭和58年度以降、施設整備等に伴い埋蔵文化財保護の観点から、宇部市教育委員会の指導を得て鋭意調査が進められているが、当該地域周辺では地下の観察資料が欠如しており、基礎資料の蓄積が望まれていた。

この地域に臨床講義棟・病理解剖棟が新営されることになり、昭和59年6月11日から28日にかけて遺構・遺物の有無、土層の堆積状況および旧地形の把握を主眼として試掘調査を実施した。新営建物は現在では機能していない旧電気棟および管理棟の解体・撤去後の跡地に計画・立案された。これをうけて、調査は上記の支障建物および地下埋設物等を回避し、新営建物予定面積約760 m²のうち約38 m²について東からAトレンチ（2 m×10 m）、Bトレンチ（2 m×5 m）、C・Dトレンチ（各2 m×2 m）の4ケ所について行なった。その結果、顕著な遺構、遺物は認められなかったが、当該地域における土層の堆積状態を観察することによってキャンパス内各所と地下の状況が比較・検討できる基礎資料が得られるに至った。

なお、腐蝕土および構内造成時等の盛土は機械を使用して除去し、それ以下は人力による分層発掘を行なった。

2　層　位

現地表面の標高はおおむね約3.60～3.80 mで、わずかに低くなっているCトレンチ付近以外の調査区周辺の起伏は少なくほぼ平坦に近い。

調査区において観察した堆積層は16層に区分される。現地表面直下の第1層は腐蝕土および構内造成時等の盛土

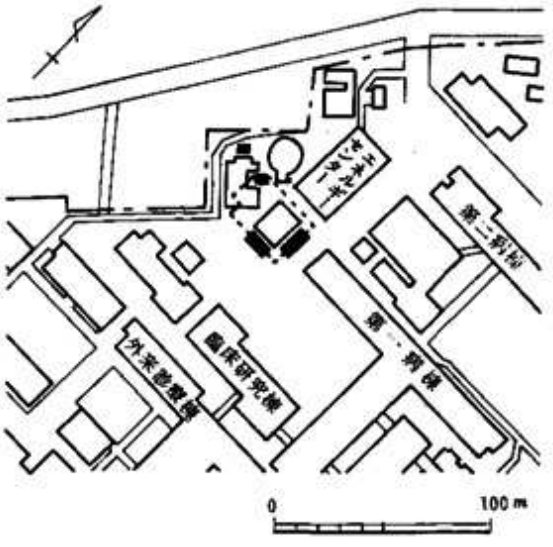


Fig. 13　調査区位置図

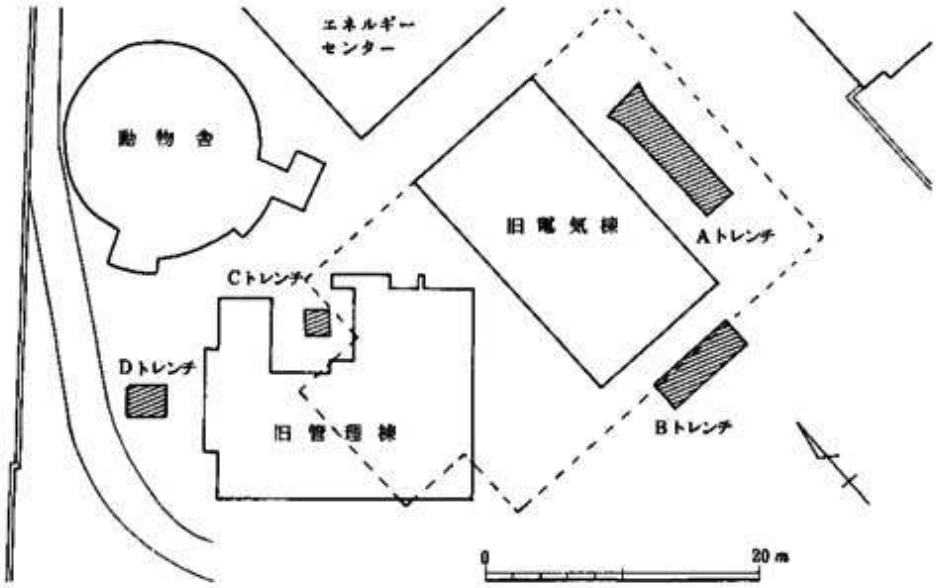


Fig. 14　調査区設定図

を含む表土で約160～170cmの厚さをもつ。第2層は旧耕作土ないしは旧地表と考えられる黒灰色土層で、Cトレンチを除いた各トレンチで部分的に堆積する。第1層ないしは第2層の下面標高はA・D各トレンチで約2.10m、Bトレンチで約1.90m、Cトレンチで約1.70mである。それ以下の堆積層が非人為的な二次堆積層であるが、そのほとんどがシルト質のグライ土壌であった。第14～16層は自然木、木葉等の植物遺体を含む堆積層でAトレンチ北半部およびC・Dトレンチでは第1層ないしは第2層直下に認められる。Bトレンチでは西半部を中心に無遺物層の堆積する落ち込みが観察された。

なお、これらの堆積層下位は調査時における湧水および安全面の観点から把握していないが、Aトレンチ北端部で実施した深掘りでは少なくとも現地表下約2.50m、すなわち、標高約1.30mまで第16層の堆積が認められ地山は検出されない。

3　小　結

小串地区では上述したように昭和58年度以降、今回の調査地区をはじめとして体育館周辺地域（第1地区）および基幹整備路線地域（第2地区）において試掘・事前調査が進められている。第二病棟、野球場、職員宿舎周辺地域の詳細は今後の調査を待たねばならないが、本稿では以上三地域での調査の成果をもとに、キャンパス東端部から北半部縁辺にかけての地下状況の概要を整理しておくことにする。

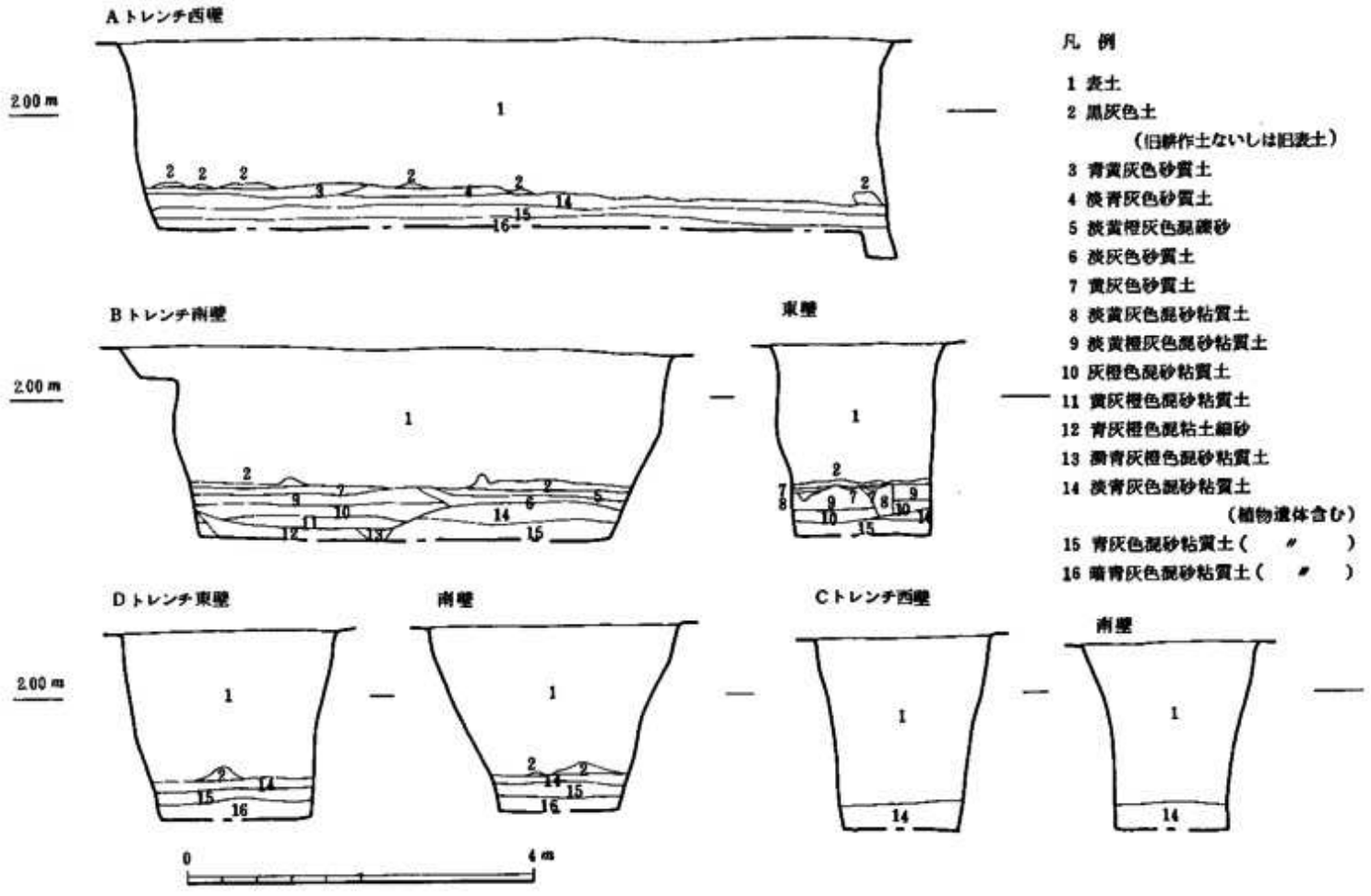

Aトレンチ西壁
2.00 m
Bトレンチ南壁
東壁
2.00 m
Dトレンチ東壁
南壁
Cトレンチ西壁
南壁
2.00 m
0
4 m
凡 例
1 表土
2 黒灰色土
(旧耕作土ないしは旧表土)
3 青黄灰色砂質土
4 淡青灰色砂質土
5 淡黄橙灰色混礫砂
6 淡灰色砂質土
7 黄灰色砂質土
8 淡黄灰色混砂粘質土
9 淡黄橙灰色混砂粘質土
10 灰橙色混砂粘質土
11 黄灰橙色混砂粘質土
12 青灰橙色混粘土細砂
13 淡青灰橙色混砂粘質土
14 淡青灰色混砂粘質土
(植物遺体含む)
15 青灰色混砂粘質土(〃)
16 暗青灰色混砂粘質土(〃)

Fig. 15 土層断面図

三地域における土層断面柱状図はFig.16のとおりである。現地表は今回の調査地域が最も高所に位置し、第1地区および第2地区との比高差がそれぞれ約2.0～2.3 m、1.4～1.6 mである。しかし、旧耕作土ないしは床土下面、すなわち非人為的な二次堆積層上面は第1地区から第2地区Cトレンチおよび第2地区Aトレンチから今回の調査地区にかけてそれぞれ次第に標高を増すのに対し、その間に位置する第2地区Bトレンチでは谷あいに立地しているためか標高約0.55 mと急激に低くなっている。

また、遺物を包含する堆積層は第1地区および第2地区C・Dトレンチで観察される。第1地区では青黄灰色粘土層からの出土もみられるが、基本的には各地区ともそれより下位の青灰色粘土層中に見出され、中世から近世の遺物を包含する。また、各地区の遺物包含層より下位には植物遺体ないしは二枚貝、巻貝等の貝類を含む自然堆積層が存在し、この動植物遺体を含む堆積層以下に遺物が包含されている可能性は少ないものと考えられる。

以上のような土層堆積状況の観察は、未調査地域における今後の調査資料の蓄積によって補完され、キャンパス北半部縁辺のみならず、キャンパス内全体の遺跡分布、旧地形の把握等に重要な基礎資料を提供するものである。（河　村）

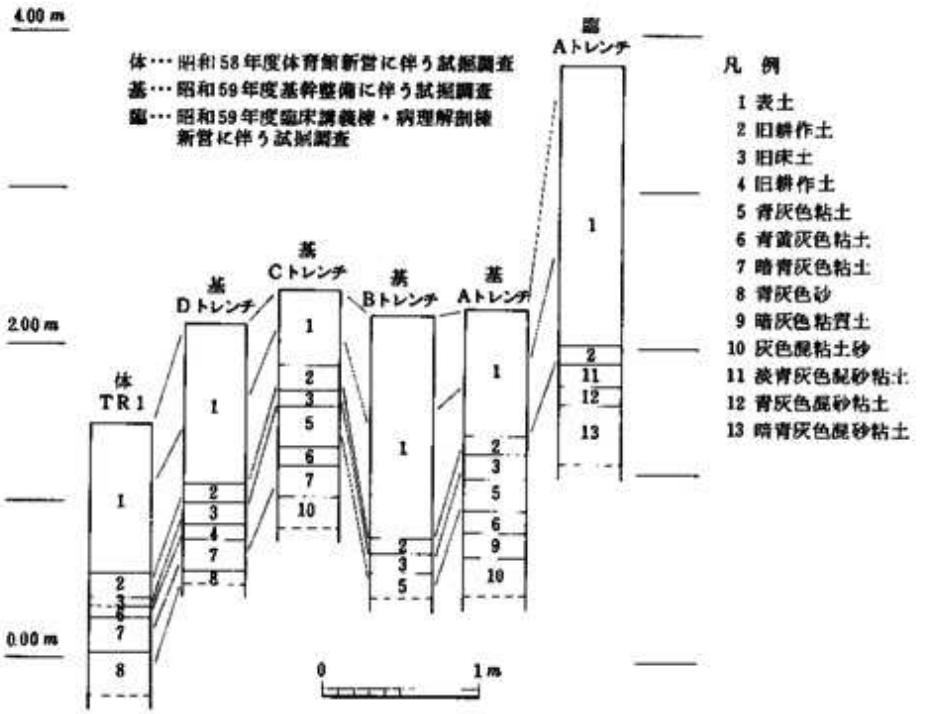


Fig. 16　土層断面柱状図

第6章　吉田構内大学会館ケーブル布設に伴う発掘調査

1　調査の経過

当調査は吉田構内地区割N－12・14の地点で、大学会館新営に付随する電気・ガス管等の共同溝設置工事に伴うものである。まず工事自体は大学会館の北と南の二カ所（Fig.17参照）で、A区では、電気と給水、ガス、消火配管の二つの共同溝を布設するもので、両者は平行して約70mにおよぶ。幅は両者合わせると4mで、掘削深度はいずれも2mを要する。ただし、大学会館寄り約2mは昭和58年度の本来工事に伴う事前調査の余掘部分の範囲で、また南側の現道路部分は周辺の既往調査により地山が大きく削平され、遺構が遺存しないことが明らかなことから調査の対象から除外した。B区は電気の配管溝布設で、長さ30.3m、幅60cm、深さ一部1.5mを要するものであったが、この地点は本体工事に伴う調査の結果から、今回の最大掘削深度内では遺構面まで達しないことが明確なことから事前の調査は実施せず、工事の掘削の際に立会調査を行なった。

なお、今回の調査対象となった地点は、大学会館新営に伴う試掘調査（昭和57年度）、第二学生食堂新営に伴う発掘調査（昭和46年度）などのデータより、仮に後世の削平が少なければ古代から中世に至る遺構が濃密に検出される蓋然性が高いことから、運営委員会および関係部局と協議の結果、事前の調査を行なうこととした。

以上のことにより、当調査はA区の北側約40m、幅4m、面積160㎡を対象とし、昭和59年7月5日から26日まで、人文学部考古学研究室の協力のもと実施した。（森　田）

Fig. 17　調査区位置図

2　位置と環境

吉田遺跡は、山口県山口市大字吉田に所在する山口大学構内とその周辺に拡がる縄文時代から近世まで長期にわたる遺跡の総称である。本遺跡は、山口盆地の中央部を南西に貫流する椹野川の左岸に形成された沖積低地及び低い洪積台地上に展開する。遺跡の北には姫山とニンジョウガ岳が小起伏山地を形づくり、東には今山が、南には高倉山がひかえる。

以下、吉田遺跡をとりまく地域[1]の歴史的変遷をみていく。

さて、この地域にはいつ頃から人々が生活を営み始めたのであろうか。現時点では旧石器時代に遡る遺構・遺物は確認されていないが、大学構内から縄文時代早、前期のものとみられる石鏃[2]が発見されておりこの地域では最も古い遺物に相当する。遺構としては同遺跡において縄文時代後～晩期の土壙[3]が検出されている。

弥生時代から古墳時代に至ると、遺跡数は急増する。まず集落遺跡としては吉田遺跡が知られている。遺跡の大部分を占める大学構内からは竪穴住居跡、溝など多数の遺構が検出されており、山口県下でも有数の大規模な集落が形成されていたと推定される[4]。

一方、埋葬遺跡としては乗ノ尾遺跡[5]、日吉古墳群[6]、吉田大裕古墳[7]などがある。乗ノ尾遺跡は大学の南に位置する丘陵上に立地する。弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての箱式石棺が5基検出されている。日吉古墳群は大学北側に近接する山腹にあり7基の横穴墓が確認されている。出土品としては耳飾、鉄剣、土師器の坏、須恵器の坏、高坏、平瓶、提瓶、短頸壷があり、この他に人骨の一部が検出された。また日吉古墳群のある丘陵の南へ続く通称もり山の南斜面にも横穴墓[8]があり、大正15年頃発掘を行なった際須恵器の平皿の破片が出土している。なお、もり山の頂上にも円墳があると伝えられる。さらに大学構内の南にあたる農学部家畜病院付近に箱式石棺が埋存するという報告[9]があり、勾玉や円筒埴輪などが採集されている。この石棺はそのまま埋め戻されており、今後詳しい調査が必要である。吉田大裕古墳は大学東側の洪積台地の斜面上に造営された7世紀後半頃の横穴式石室を有する古墳で、須恵器片が出土している。この他、吉田大裕古墳の西に位置する平清水八幡宮の参道脇にも古墳[10]があり主体部の石材らしきものが散在している。昭和初年に須恵器の提瓶と平皿の破片が発見されている。この古墳には「村の者が貧窮し困った時ここを掘ったら一度は助かる」という伝説と「朝日さし夕陽かがやくこの下に黄金千杯漆千杯」という歌謡が伝えられており興味深い。大学の南にあたる大塚付近[11]にも古墳らしきものが現存する。墳丘上には主体部に使用されたとみられる石材が残っており、過去において須恵器が採集されている。さらに神郷や東馬木付近[12]でも現存はしていないが組合式石

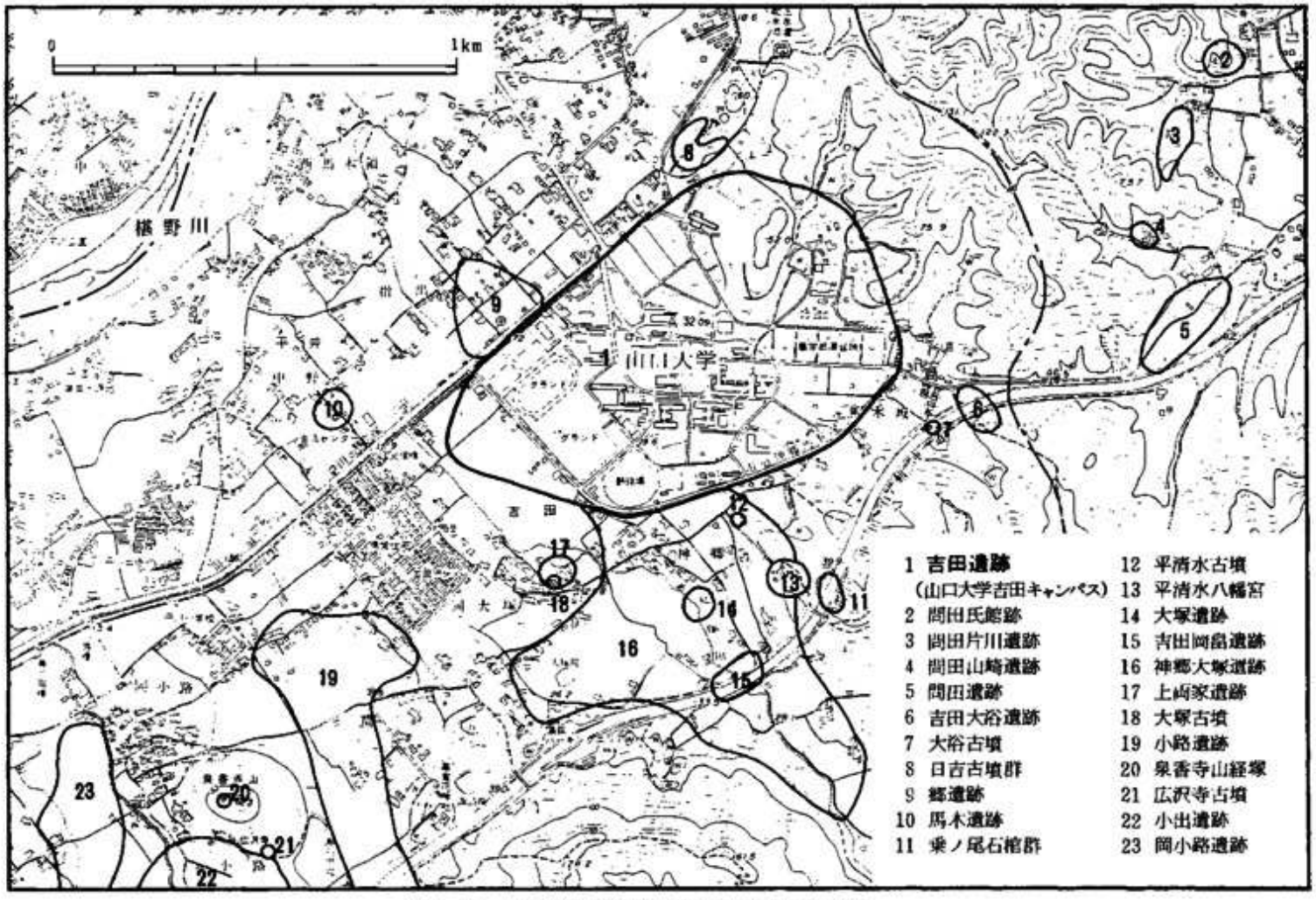


Fig. 18　吉田地区周辺地形図および遺跡分布図

棺とそれに伴う人骨及び鉄器が検出されており古墳があったと推定される。馬木にも古墳が存在したと伝えられ、滑石製の馬や土器等[13]が出土している。

以上のことを概観すると、埋葬遺跡はいずれもやや小高い場所に吉田遺跡を取りまくように点在しておりこれらは吉田の地に居住していた人々の奥津城と考えられる。

奈良、平安時代の遺跡はあまり確認されていないが、大学構内の北部からこの時代の遺物が多数出土し、その中には石帯、木簡、墨書土器、硯[14]など上層階級者や律令制における地方行政組織の存在を示唆するような遺物も含まれている。また、付近には「八ノ坪」という坪名が残っており条里制が施行されていたことが推測されている。当時全国各地に郡郷里制がひかれているが、吉田を包括する平川地域は吉敷郡に属す。吉敷郡には10郷[15]があり、そのうち平川地域は『大日本地名辞書』では仲村郷に、『防長地名淵鑑』では浮囚郷に含まれていたとされており、確定された見解はない。

中世の遺跡としては、集落遺跡として知られる吉田岡畠遺跡[16]や吉田大浴遺跡、吉田遺跡等がある。特に大学構内の一角では、周辺の遺跡に比べ、輸入陶磁器類が多量に出土[17]しており富裕層の存在が推測されている。また当時の寺院としては、平清水八幡宮[18]が名高い。創建は809年（大同4年）と伝えられるが定かではない。1201年（建仁元年）の『安部光包惣貫首職補任状』に平清水八幡宮の朱印が押されており鎌倉時代には存在していたとみられる。現在の本殿は室町時代前期頃の建立とされ、山口県下でも最古の部類に入る。

鎌倉幕府は、土地の管理や治安の維持等を目的として全国に地頭を配置している。当時、吉田周辺地域は恒富保[19]に含まれており、この恒富保及び近隣の仁保庄（にほのしょう）の地頭職として関東から補任されたのが平子重経[20]である。父重経から恒富保の地頭職を受け継いだ重継は、恒富氏と称した。13世紀に至ると、恒富氏は本家の恒富氏と分家の吉田氏とに分かれ、恒富、吉田の地で栄えたという。しかし、現在のところ両氏の存在を示す館跡等は明らかにされておらず、吉田遺跡をはじめとして調査が進められている。

近世以降、吉田周辺地域は一農村化の傾向をたどり近年まで続いたが、昭和41年の山口大学統合移転を契機に住宅団地などの建設があいつぎ、その様相は変貌しつつある。今後、開発の進行に伴い遺跡の発見も相次ぐと予想される。なお、吉田遺跡は、その大部分が約72万㎡もの広大な敷地を有する山口大学構内に埋存するため、広範囲にわたる学術調査も可能であり今後の調査が大いに期待される。（福　島）

〔注〕

1) 山口盆地全体の位置と環境については、山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅰ、Ⅲ（1976、1985年）を参照されたい。
2) 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』（1985年）。
3) 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』（1976年）。
4) 注3）に同じ。
5) 山口県教育委員会『内川古墳・柴ノ尾遺跡』（1973年）。
6) (a) 山口市平川公民館『平川郷土の歩み』（1961年）。
(b) 石川卓美『平川文化散歩』（山口市平川公民館、創立25周年記念出版、1972年）。
遺物は現在、県立博物館に所蔵されている。
(c) 山口県教育財団『山口県内出土考古資料所蔵目録』（1979年）。
7) 山口県教育委員会『吉田岡畠・吉田大裕・下長野遺跡』（1973年）。
8) 注6）(b)および小川五郎「考古雑記」（『防長文化史雑考』小川五郎先生遺文選集、1970年）。
9) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』（1976年）、および本年報付篇2を参照されたい。
10) 注6）(a)、(b)および内田伸『山口ところどころ』（1973年）。
11) 注6）(b)に同じ。
12) 注6）(a)に同じ。
13) 弘津史文『防長原始時代資料』（山高郷土研究会、1925年）。
14) 注2）に同じ。
15) 『倭名類聚抄』によると吉敷郡内には、八田、宇努、仲河、益必、広伴、神前、多宝、八千、賀宝、浮囚の10郷があったとされている。
16) 注7）に同じ。
17) 注2）に同じ。
18) (a) 山口市史編纂委員会『山口市史－各説篇－』（1971年）。
(b) 山口県神社庁『山口県神社誌』（1972年）。
(c) 山口市教育委員会『山口の文化財』（1983年）。
19) 平清水八幡宮の1308年（徳治3年）の神主職譲状及び興寺高蔵寺の1414年（応永21年）の鐘銘による。
20) 1197年（建久8年）の『三浦文書』に記述がみえる。

3 層 位

トレンチ内における土層状況は西壁をみると、$x=525.5$ を境に北側と南側で大きく異なる。南側は表土から地山面まで約20㎝程度と浅く、その間は置土で旧耕作土や遺物包含層は遺存しないものの、地山面に弥生～古墳時代を主とした遺構が遺存する。北側は近代以降において大きく地山が削平されている部分で、古代の遺構は既に消失している。地山までの深さはＳＤ４の北と南で約60㎝の高低差がある。ＳＤ４より北では最も厚いところでは約140㎝の置土があり、地表は北へ向かって下る。H＝24.00ｍ下に厚さ12㎝前後の暗灰色土の旧耕作土が存在し、$x=535.5$ 以北では、旧耕作土と地山面の間に黄灰褐色土の床土があり、さらに複数の堆積層が続く。地山面はゆるやかに北へ傾斜する。$x=535.5$ 以南ＳＤ４までの間は、旧耕作土直下に弥生時代の遺物包含層であった暗茶褐色粘質土が後世の人為的な置土としてひろがり、その下は平坦な地山面である。またＳＤ４より南の層序は、50～60㎝の置土下標高24.50ｍ前後に旧耕作土があり、その直下は床土はなく平坦に削平された地山面である。

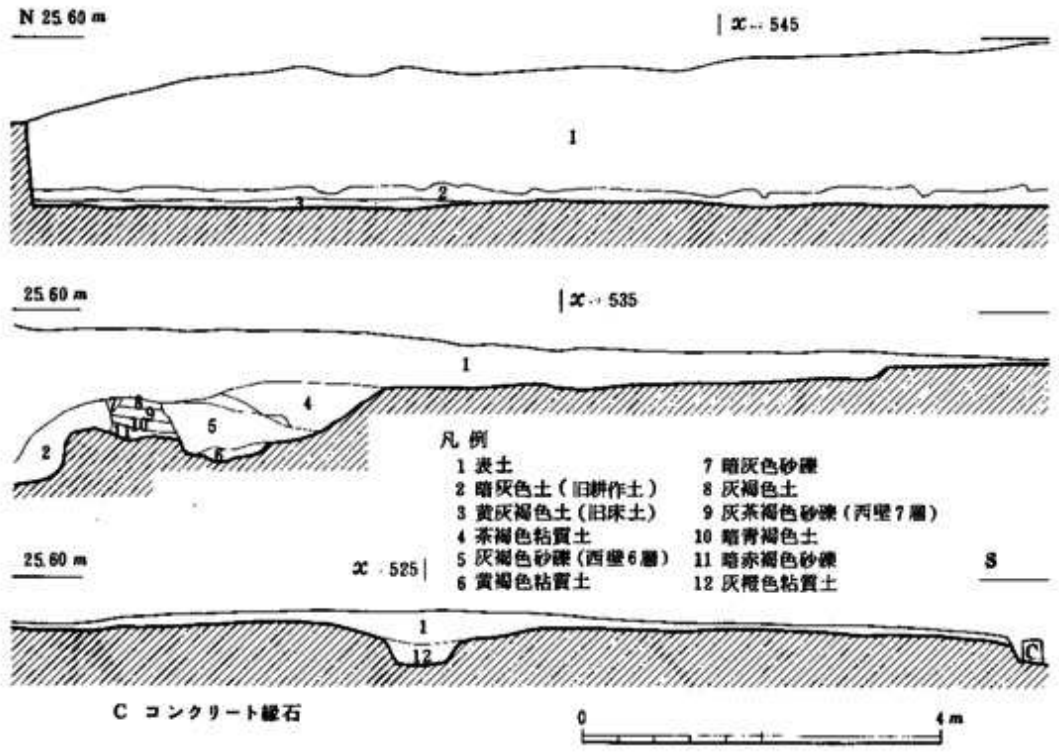


Fig. 19 東壁土層断面図

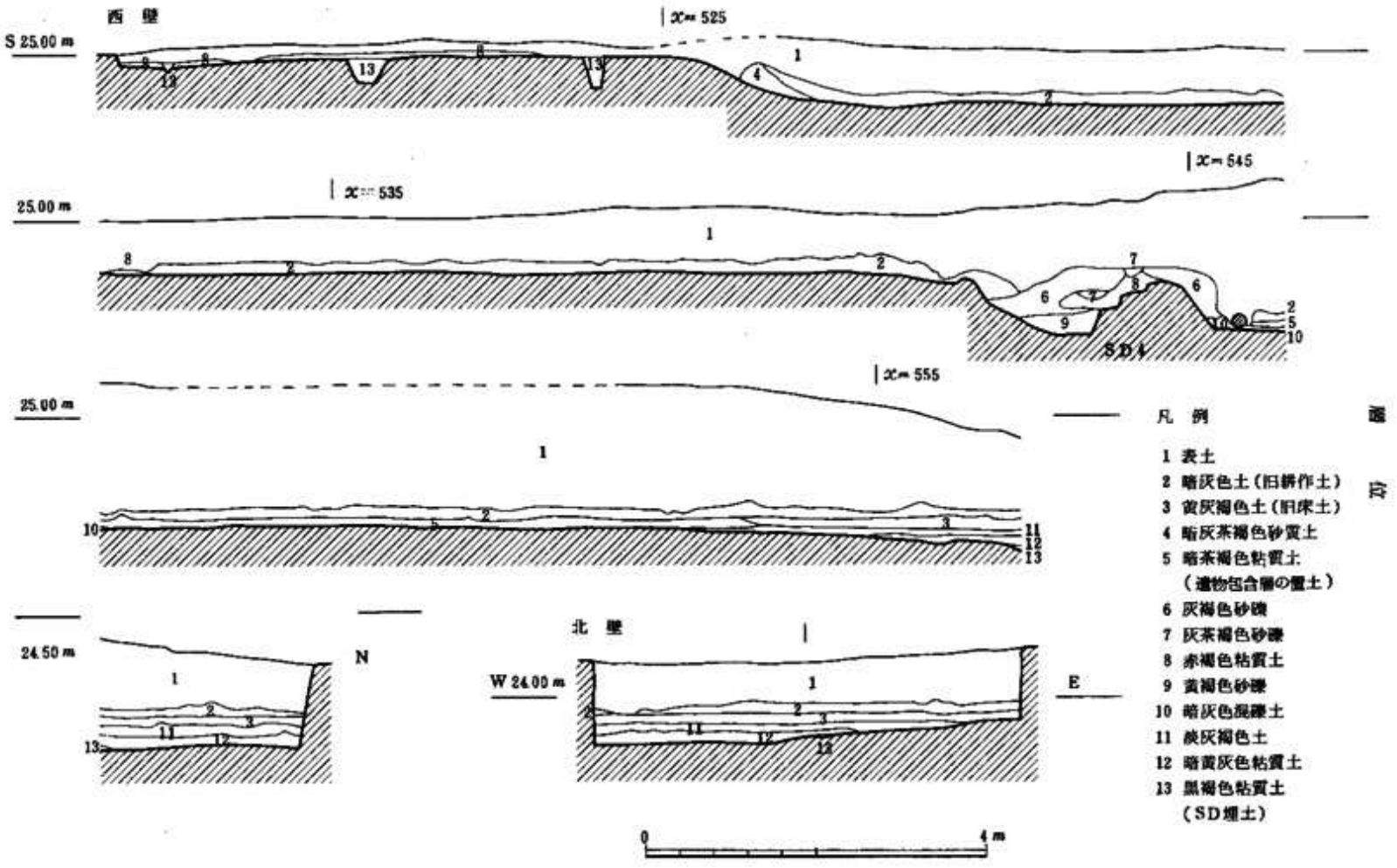


Fig. 20 西・北壁土層断面図

4　遺　構

SD1～3

調査範囲の北端で検出した北東－南西方向に併走する3本の溝で、いずれも幅約30㎝前後、深さ10㎝未満の小規模のものである。時期は伴出土器がないため決めかねるが、一応近世以降の耕作地開墾に伴う排水施設の一部である蓋然性が高いと考える。

SD4

幅約2.2 m、深さ約60㎝の溝で、東北東－西南西方向に走向する。溝内は段を呈し、底面の数箇所に細い木杭が打ち込まれていることを確認する。埋土の土質や堆積状況を勘案すると、比較的短期間に埋没した溝と考える。時期は溝内より多量の近代以降の土器類等が入っており、大学設置直前まで存在した可能性がある。なお、出土遺物の中には土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦など中世、古代のものが若干混入する。

SD5

幅約1 m、深さ約30㎝を測る。南東から北西へ走向するが西側は後世の削平によりカットされる。埋土は粘質土、粘土である。時期は定かでないが、埋土の色調等から、古墳時代までは遡らないと推察する。

SK1

SD4の北側に隣接する土壙で、長さ約1.8 m、幅1 m、深さ約40㎝を測る。内部の4箇所には木杭が打たれている。時期は不詳ながら、埋土の状況等によりSD4と大きな時期差はないと思われる。

SK2

トレンチ内のほぼ中央に位置する幅約80㎝、深さ約14㎝の土壙で、一部後世のカットをうける。時期は出土遺物皆無のため不明。

SK3

長さ91㎝、幅77㎝、深さ20㎝を測り、平面形状は長円形を呈する。内部には土器、小型の石が集積していた。時期は出土土器から弥生時代前期とみられる。

Pit群

調査区南地域の後世比較的削平度が少なかった部分に遺存する柱穴群で、約30前後検出した。大きさは径約20㎝前後が最も多く、深さでは40㎝以上のものもある。時期は出土遺物および埋土の色調等より大半は弥生時代から古墳時代の範疇に属し、一部中世のものが含まれると考える。　（森　田）

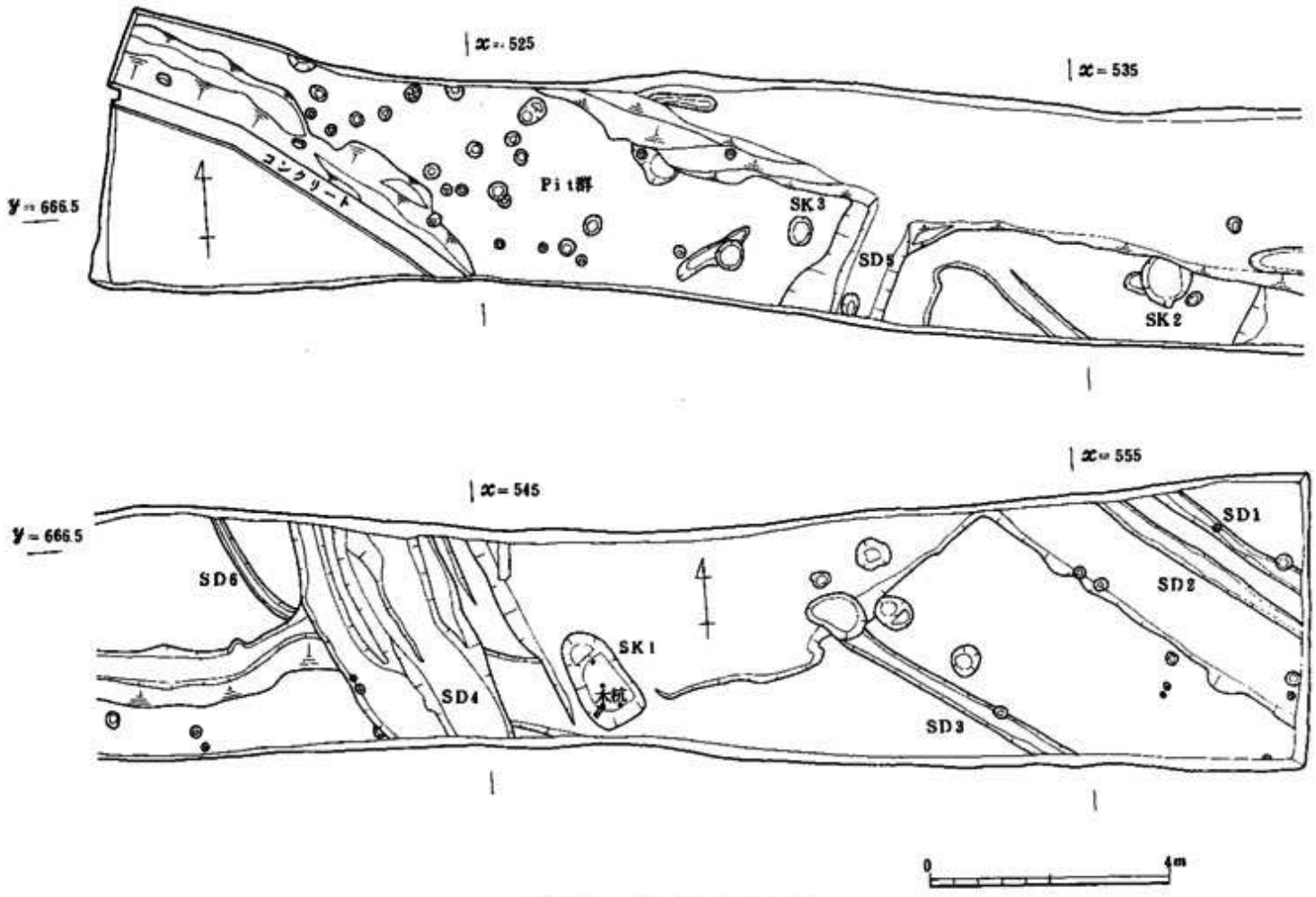

x=525
x=535
y=666.5
コンクリート
Pit群
SK3
SD5
SK2
x=555
x=545
y=666.5
SD1
SD6
SD2
SK1
木杭
SD4
SD3
0
4m

Fig. 21 遺構配置図

5 遺 物

ＳＫ１、ＳＤ４、遺物包含層等より整理用コンテナ約二箱分の遺物が出土した。その大半はＳＤ４からの出土である。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器などの土器類と瓦がほとんどを占め完形品は皆無である。以下では図示可能な比較的残りのよいものについて述べる。

ＳＫ１（Fig. 22，1～4）

1～4は弥生土器。1・2・4は壺の底部で、すべてやや上げ底を呈す。1・2は円盤貼り付けを行なう。1の内面にわずかに篦ミガキが認められる以外はいずれも器表面がかなり磨滅しており調整不明。3は甕の底部。上げ底を呈し胴部は斜外方へ直線的に立ち上がる。

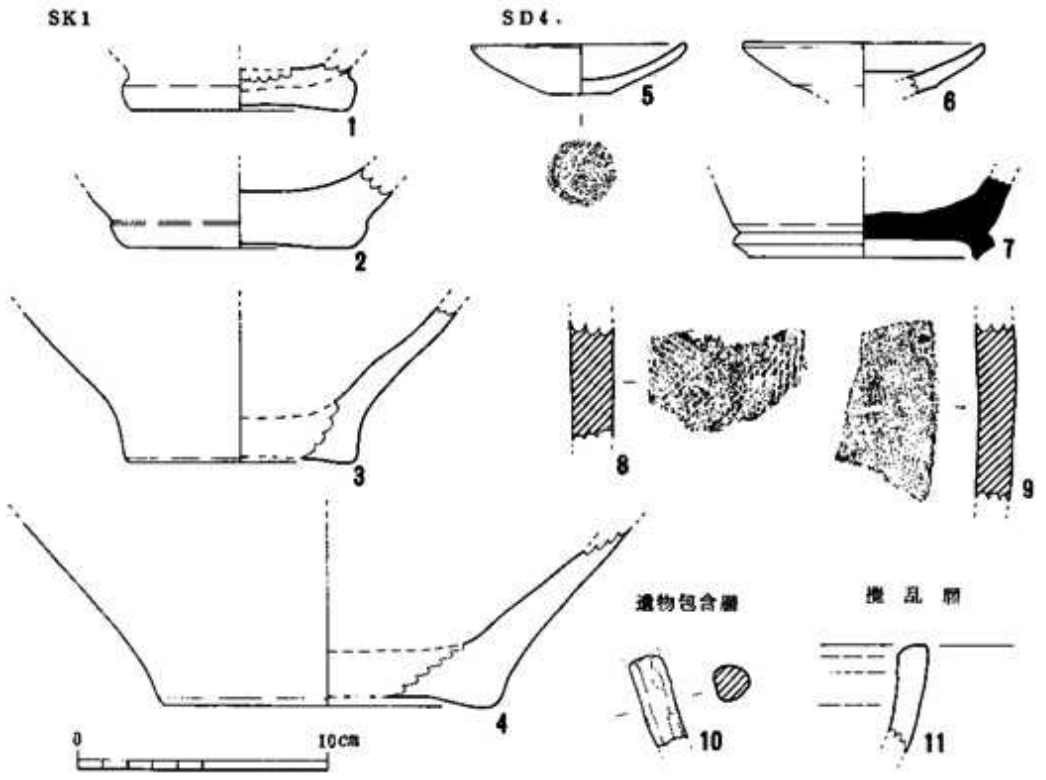


Fig. 22 出土遺物実測図

遺　物

ＳＤ４（Fig. 22，5～9）

5は土師器の小皿。体部は内彎しながらゆるやかに立ち上がる。糸切り底で内外面とも横ナデ調整。6は輸入陶磁器の小皿。色調は灰白色の素地に半透明な灰白色の釉を施す。体部の内面中位に一条の沈線を有する。7は須恵器壺の底部。「八」の字形に張る高台を貼付し、端部は斜上方へ肥厚する。体部下位は外上方へ直線的に立ち上がる。外底はナデ、他は回転横ナデ調整。8・9は平瓦片。8の外面はナデ調整で、内面には布目痕が残る。9は内面がナデ、外面は11本を一単位とする櫛状工具による調整である。

遺物包含層出土土器（Fig. 22，10）

10は土師質の鼎脚部である。縦方向の箆削り後、指頭による成形を施す。

攪乱層出土土器（Fig. 22，11）

11は瓦質土器。鉢の口縁部で、体部はやや内彎気味に立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。上端面には一条の沈線が巡る。内面は回転横ナデ、外面はナデによる調整。

出土遺物を時期的にみてみると、弥生土器は弥生時代前期～中期初め頃、須恵器は奈良時代初めのものと思われる。その他はすべて中世以降のもので、土師器が鎌倉時代、瓦質土器が室町時代頃と考えられる。また8の瓦は近世まで下る可能性もある。　（福　島）

Tab. 3　出土遺物観察表

①口径（復原値）　②底径（復原値）　③器高（現存高）　④最大厚

番号	器種	法量（cm）	色調	胎土	焼成	備考
ＳＫ１						
1	甕（弥生土器）	②(8.8)③(2.0)	内面—にぶい黄橙色(10YR)　外面—にぶい黄褐色(10YR)	やや粗い　0.1～0.3cm程度の砂粒を含む	やや軟	約1／2欠失
2	甕（弥生土器）	②(8.8)③(3.2)	内面—褐灰色(10 YR)　外面—橙色(7.5YR)	粗い　0.1～0.4cm程度の砂粒を多量含む	やや軟	約1／2欠失
3	甕（弥生土器）	②(8.8)③(6.2)	内面—浅黄色(2.5Y)　外面—灰白色(2.5Y)	やや粗い　0.1～0.2cm程度の砂粒を含む	やや軟	約3／4欠失
4	甕（弥生土器）	②(12.8)③(7.8)	内面—黄橙色(10 YR)　外面—浅黄橙色(10YR)	やや粗い　0.2～0.4cm程度の砂粒を含む	やや軟	約2／3欠失
ＳＤ４						
5	小皿（土師器）	①(8.9)②2.4③2.0	内面—成黄橙色(10YR)　外面—浅黄橙色—部明褐色(7.5YR)	精良	良好	側面を約1／3欠失、糸切り底
6	小皿（輸入陶磁器）	①(9.6)②(2.0)	素地—灰白色(10Y)　釉—半透明な灰白色(10Y)	精良	良好	約3／4欠失
7	壺（須恵器）	②(9.0)③(3.2)	灰白色(7.5Y)	精良　微砂を若干含む	良好	約2／3欠失
8	瓦	④1.7	内面—青黒色(5BG)　外面—灰色(10Y)	精良	良好	外面—櫛状工具による調整
9	瓦	④1.6	内面—黒褐色(10YR)　外面—灰白色(5Y)—部明黄褐色(10YR)	精良　微砂を若干含む	良好	内面に布目痕
遺物包含層						
10	鼎（土師質）	③(3.6)	黄褐色(10 YR)	精良	良好	脚部のみ残存
攪乱層						
11	鉢（瓦質土器）	③(4.3)	内面—褐灰色(5YR)　外面—灰色(5Y)	やや粗い	良好	

（色調は農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』1976による）

6　小　結

今回の調査範囲内では、とくに北半部において近世以降のある時期に耕作地拡大のためと思われる地山を大きく削平した部分があり、そのため中世以前に遡る遺構、遺物の検出は周辺地域の既往調査地に比べて比較的少なかった。中世以前に遡る遺構は主にトレンチ内中央東部分から南西端にかけての地山面の削平度合が少ないその上面で検出された。ただし地表面から遺構面まで最も浅い所では10cmたらずで、遺構上面には遺物包含層が覆わないことから察し、これらの検出遺構も後世多少なりとも上部が削平をうけている。検出した遺構の内、古代以前のものは小規模な土壙、柱穴などで、時期は主に弥生時代から古墳時代である。なお、その遺構の性格等は今回の調査範囲だけでは明確にし得ないが、この地はもり山から派生する舌状低丘陵部分の南向きの緩傾斜面上にあり、昭和46年度において当調査地点の南東に近接する第2学生食堂敷地内では古墳時代前半期の竪穴住居跡6棟[1)]が検出され、また北東方向の地点でも昭和57年度において大学会館新営に伴う試掘調査の際竪穴住居跡1棟[2)]を確認していることなどから勘案して、今回検出された遺構は当時の集落に関係する蓋然性が強いと察する。なお、検出遺構の中で、ＳＫ３は吉田遺跡の中では稀少な弥生時代前期に属するもので、これまで前期の遺構は現在の大学南門付近[3)]においてのみ確認されていたことから、集落の形成過程やその拡がり、構成等を知る上で注目される。

（森　田）

〔注〕

1) a　山口大学文化会考古学部『山口大学構内吉田遺跡第Ⅰ地区Ｅ区発掘調査概報』（孔版、1971年）。
　b　山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』（1976年）。

2)　山口大学埋蔵文化財資料館「大学会館新営に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1985年)。

3)　注1)のbに同じ。

第7章　吉田構内大学会館排水管布設に伴う発掘調査

1　調査の経過

調査地区は構内地区割でいうK・L－13区にあたる。周辺地域一帯では吉田遺跡調査団および埋蔵文化財資料館による数次にわたる発掘調査の結果、弥生時代前期から中・近世にかけての多数の遺構が検出され、あわせて多量の遺物が出土している。本部管理棟2号館新営に伴い発掘調査を実施したL－14区[1]では、弥生時代中・後期の土壙および環濠をもつ室町時代の建物跡に加え、弥生時代前期から古墳時代にかけての遺物包含層が検出されている。また、大学会館新営に伴うM・N－12区の調査[2]では、県内では類例をみない古墳時代前期に遡るものをはじめとして平安時代後期にいたる井戸6基が検出されている。また、遺物包含層からは多量の弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入陶磁器、石器のほか下駄等の木製品が出土した。さらに、注目すべき資料として、黒色土器、瓦器、緑釉陶器等の土器、石錘帯、木簡が伴出しており、キャンパス内に展開する遺跡群の位置づけと絡み、生産・流通および搬入経路をめぐって防長における古代～中世史の解明に寄与する貴重な資料を提供した。

今後検討を要するであろう上記の資料が出土し、かつ、キャンパス内においても極めて遺構・遺物の分布密度の高い当該地域に大学会館新営に伴う付随工事として排水管埋設が計画された。これをうけて、学内関係諸機関、諸部局と協議の結果、管路幅を縮少し最少限の掘

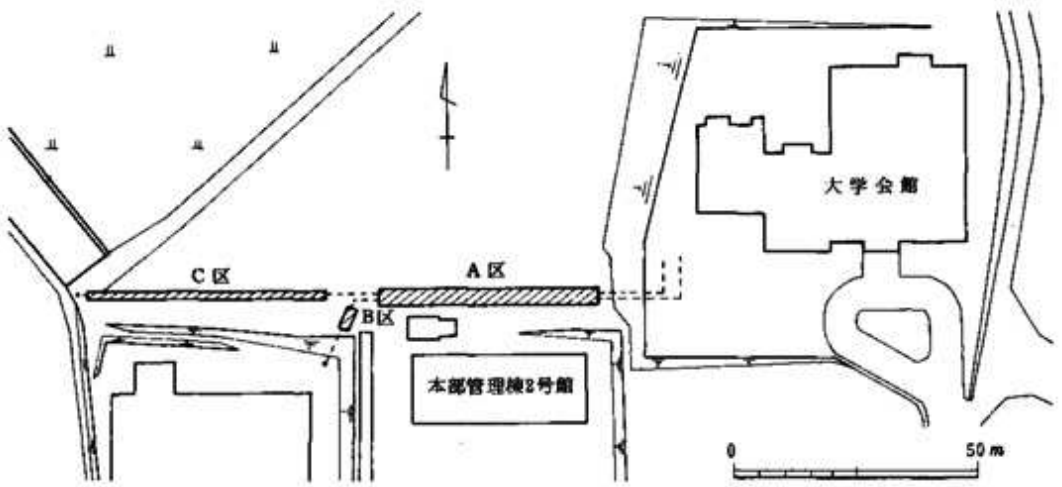


Fig. 23　調査区位置図

削工事幅にとどめることで合意が得られ、現状変更を伴う約 180 ㎡について発掘調査を実施した。調査は人文学部考古学研究室の協力を得て、昭和59年９月10日から10月８日にかけて行なった。

配管工事管路は大学会館以東、現駐車場に至る総延長距離約 112 m であるが、調査は電話ケーブルの埋設されている管路中央部を回避し、便宜上東から幅 2.5 m、長さ 45 m の地区（Ａ区）、幅 1.5 m、長さ 40 m の地区（Ｃ区）および管路中央部より分岐する幅 2.5 m、長さ４ m（Ｂ区）の三地区に区分して実施した。

なお、腐蝕土および構内造成時等の置土を含む表土、旧耕作土等は機械を使用して除去し、それ以下は人力による分層発掘を行なった。

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「昭和54・55年度調査の概要」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年)。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年)。

2　層　位

Ａ区　現地表面の標高は東端部で約 22.00 m、西端部で約 21.50 m で、わずかではあるが東から西へ下降している。第１層は腐蝕土および構内造成時等の置土を含む表土で、$y = 570$ 付近以東は約65～90 ㎝の厚さをもつにすぎないが、以西は約 130 ～ 140 ㎝の堆積を示す。第２ａ・ｂ層は旧耕作土。第２ａ層は $y = 570$ 付近では堆積が認められず、$y = 570$ 以東と以西の下面は標高差にして約80 ㎝東部が高所に位置する。また、第４・５層の２層におよぶ客土が認められることから、調査区内には高低差をもつ少なくとも二枚の耕作面が存在していたものと推察される。床土は存在しない。$y = 577$ 以東は旧耕作土直下が黄橙色粘質土の地山である。しかし、以西は旧耕作土が部分的に残存し、一部の柱穴等の検出面となる遺物包含層を介して地山へ達する。

地山面の標高は東半部が約 20.90 ～ 21.10 m であるが、中央部 $y = 568 \sim 575$ 間で東から西へ標高差にして約１ m 下降し、西半部では約 19.90 ～ 20.00 m である。

Ｂ区　現地表面の標高は約 21.40 m である。Ａ区同様上位から表土、旧耕作土の順に堆積する。それ以下は黄橙褐色粘質土の地山に至るまで少なくとも３層に分層される厚さ50～65 ㎝の古墳時代から中世にかけての遺物包含層が認められる。

地山面の標高はおおむね 19.35 m であるが、北西隅において地山が南から北へゆるやかに下降を始めており、周辺地域に存在する低丘陵の一支丘縁辺部にあたるものと推察される。

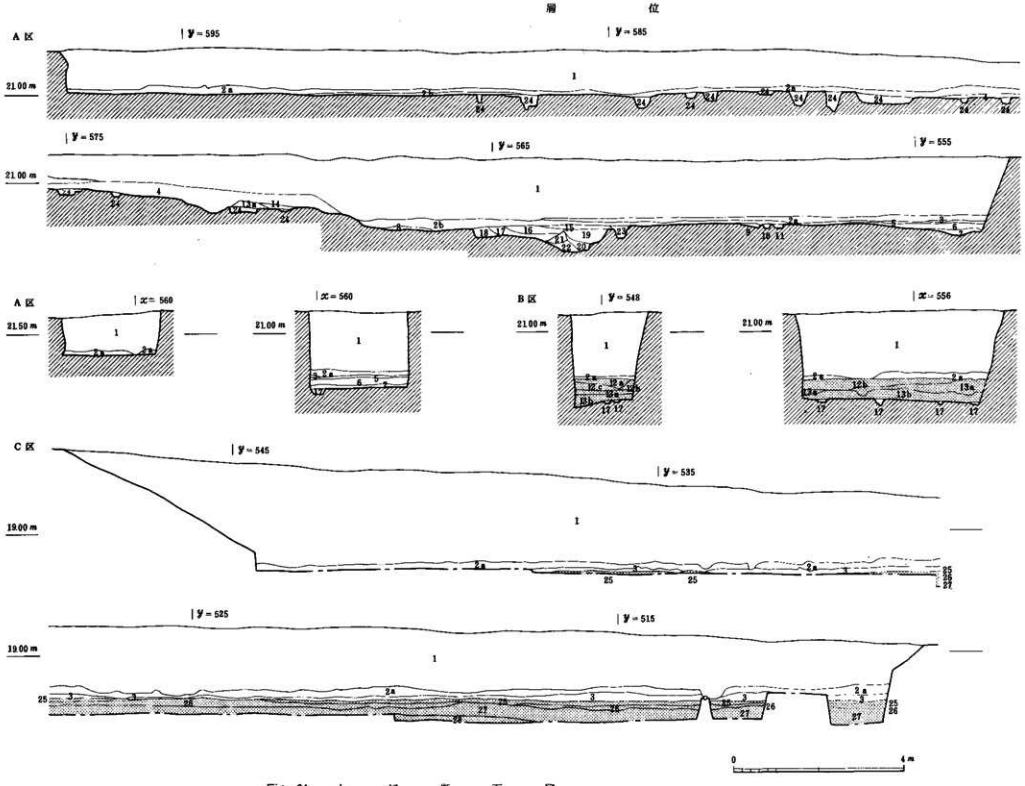

層位
A区
B区
C区
凡例
1 表土
2a 暗灰褐色土（旧耕作土）
2b 暗灰色土（〃）
3 黄灰褐色土（旧床土）
4 赤茶褐色土
5 暗黄褐色粘質土
6 茶褐色粘質土
7 暗茶褐色粘質土
8 褐橙色粘質土
9 乳灰褐色粘質土
10 淡茶褐色粘質土
11 黄茶褐色粘質土
12a 帯黄赤褐色粘質土（遺物包含層）
12b 赤褐色粘質土（〃）
12c 帯黒赤褐色粘質土（〃）
13a 黒褐色粘質土（〃）
13b 淡黒褐色粘質土（〃）
14 黒茶色粘質土
15 褐褐色粘質土
16 褐黄褐色粘質土
17 褐色粘質土
18 暗赤褐色粘質土
19 乳黄褐色粘質土
20 暗黄灰色粘質土
21 黄茶褐色粘質土
22 褐茶褐色粘質土
23 灰白褐色粘質土
24 暗赤褐色粘質土
25 灰茶褐色土（遺物包含層）
26 黄灰褐色砂質土（〃）
27 暗黄灰褐色砂質土（〃）
28 灰茶褐色粘質土（〃）
0
4m

Fig. 24 土 層 断 面 図

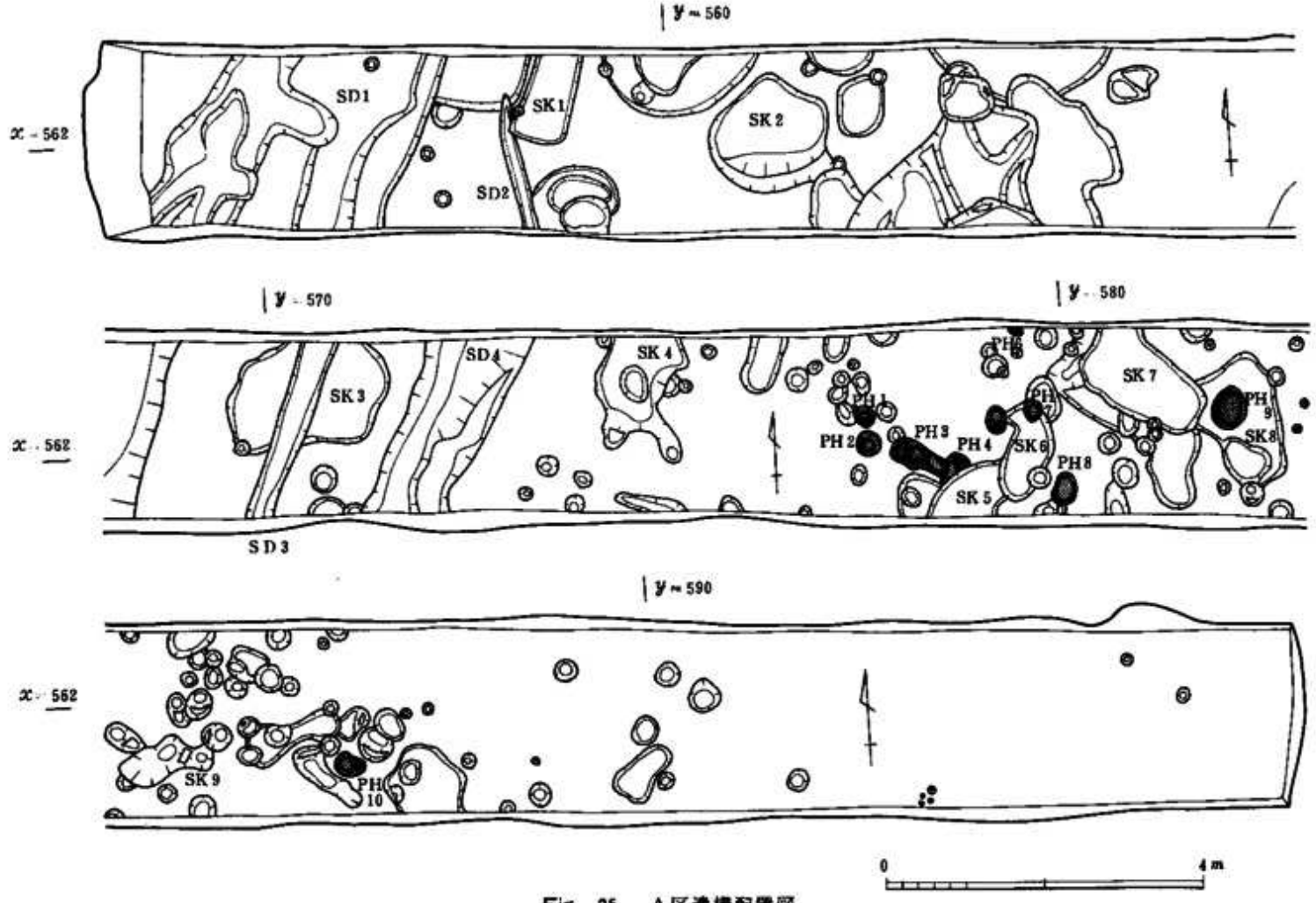


Fig. 25　A区遺構配置図

C区　現地表面は東端部で標高約21.00 m、西端部で約19.15 mで、平均5/100の下降率をもち、東から西へ下降している。このみかけ上の標高差は第2層：旧耕作土の下面標高が東半部で約18.30 m、西半部で約18.20 mと比較的起伏の少ない堆積状況を示すことから旧地形とは無関係の第1層：表土の堆積厚の差異によるものである。第3層は旧床土、第25層：灰茶褐色土層以下は西半部で認められるように少なくとも4層に分層される遺物包含層が堆積するが、各堆積層はいずれも二次堆積層で弥生時代から中世にかけての時期幅をもつ遺物を包含する。

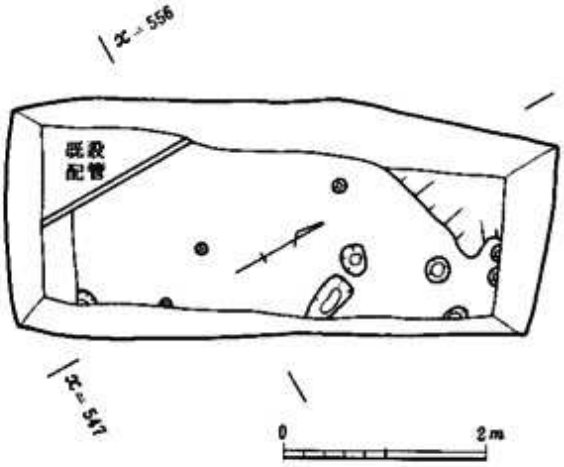


Fig. 26　B区遺構配置図

なお、調査は安全面を考慮し、西半部において第28層：灰茶褐色粘質土層を一部検出するにとどめ、地山は確認していない。

3　遺　構

A区で土壙約30基、溝4条、柱穴多数、B区で柱穴若干が検出された。本稿ではA区での検出遺構を中心に述べることにする。

1　柱穴

$y = 574$ 付近から $y = 587$ 付近にかけて密集して検出された。しかし、調査面積が狭少なためか遺構としてまとまった柱穴群の把握はできなかった。出土遺物には弥生土器、土師器、瓦質土器、国産陶磁器があり、一部弥生時代後期に遡るものもあるが、大半は鎌倉時代後半から室町時代のものである。

2　土壙

平面形態が長方形に近いもの（SK1・7）、円形に近いもの（SK2）、および不整形なもの（SK3・6）の三種がある。以下、代表的なものについて述べることにする。

SK1（Fig. 27）

調査区東端部 $x = 563$、$y = 558.5$ 付近で検出された土壙で、SD2を切っている。北半部は調査区外にあたるため未検出であるが、平面形態は長方形に近いものと考えられる。

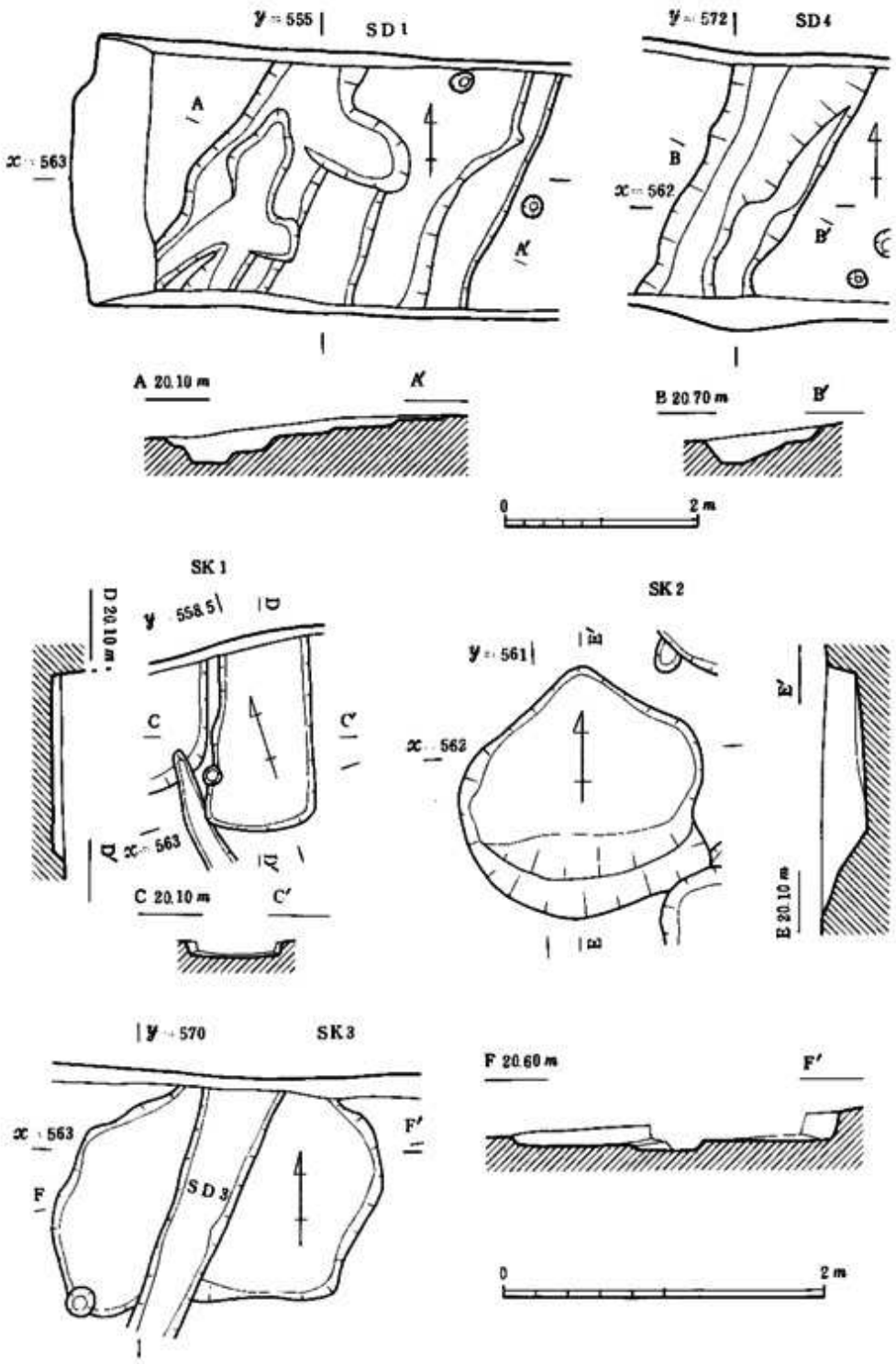


Fig. 27　A区SD1・4、SK1～3実測図

長軸112 cm以上、短軸60cm、検出面からの深さは5.0～6.5 cmで、床面は北から南へわずかに下降している。床面より若干上位で歴史時代の土師器甕等が出土したが図示しうるものはない。

SK 2（Fig. 27）

$x = 563$、$y = 561$付近で検出された土壙で、他の土壙によって南東隅を切られている。平面形態は五角形に近い円形で、径約145 cm、検出面からの深さは最深部の中央部で25cmである。出土遺物には鞴口がある。

SK 3（Fig. 27）

$x = 563$、$y = 570$付近で検出された平面形態が不整形の土壙で、SD 3によって中央部を切られている。長軸202 cm、短軸130 cm以上の規模をもつ。床面は西から東へ下降しており、検出面からの深さは最浅部で6 cm、最深部で19cmである。出土遺物には弥生土器の甕があり、弥生時代後期の所産である。

3　溝

SD 1（Fig. 27）

調査区西隅で検出された溝で北東－南西に流路をもつ。幅3.65 m以上、検出面からの深さは30～33 cmで、中央部のみ38 cmの深さをもつ。溝の断面形は扁平な階段状を呈する。溝内の堆積土は2層みられ、上位から暗茶褐色粘質土、黒茶褐色粘質土の順に堆積する。出土遺物には土師器の高坏があり、溝の下限は古墳時代前期である。

SD 2

他の3条の溝と異なり南－北に走るが、北への延長部分は検出されなかった。SK 1に切られており、中央部$x = 562.5$付近で幅20cm、検出面からの深さ9 cmである。溝内に充填した暗灰褐色砂質土から土師器、須恵器が出土したが、図示できるものはない。

SD 3

$y = 570$付近で検出された北東－南西に流路をもつ溝で、SK 3を切っている。北に向かうにつれてわずかに幅を増し、南端部で30cm、北端部で40 cmである。検出面からの深さはわずかに4 cmである。溝内に堆積する暗赤褐色粘質土からの出土遺物は皆無であった。

SD 4（Fig. 27）

SD 3に近接して検出された北東－南西に流路をもつ溝で、南東部で柱穴を切っている。中央部$x = 562$付近で幅100 cm、検出面からの深さ24cmの規模をもつ。溝の断面形は「U」字形。溝内に充填した暗茶褐色粘質土から土師器、瓦質土器、石製品が出土した。

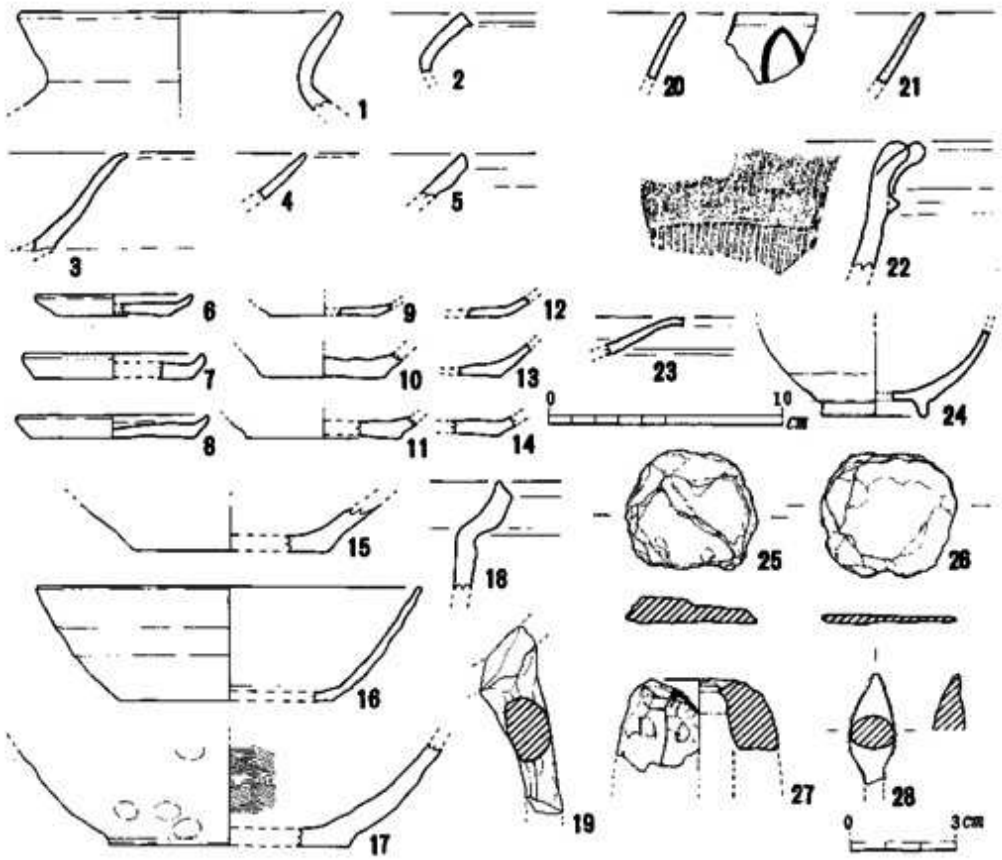


Fig. 28　出土遺物実測図

なお、本溝は昭和56年度に実施した本部管理棟２号館新営に伴うＬ－14区の発掘調査[1]の際検出された室町時代の建物跡をめぐる環濠の北への延長部分と考えられる。（河　村）

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「昭和54・55年度調査の概要」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）。

4　遺　物

土壙、溝、ピットより出土した。出土遺物には弥生土器、土師器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、土製品、鉄製品等があるが、そのほとんどが破片であり量的にも多くはない。以下では、図示可能なものについて器種別に述べる。

弥生土器（Fig. 28，1・2）

１、２は甕の口縁部で体部より「く」の字状に外反する。２は口縁端部に面をもつ。１

Tab. 4　出土遺物観察表

①口径（復原値）　②底径（復原値）　③器高（現在高）　④最大厚

番号	器種	法量（cm）	色調	胎土	焼成	備考
弥生土器						
1	甕	①(13.4)③(4.2)	にぶい黄橙色(10YR)	やや粗い　0.1～0.4cm程度の砂粒を多量含む	やや軟	SK3　約5/6欠失
2	甕	③(2.6)	内面—灰白色(7.5YR)　外面—にぶい褐色(7.5YR)	良　0.1cm程度の砂粒を微量含む	良好	PH10
土師器						
3	高　坏	③(3.9)	浅黄橙色(7.5YR)	精良	良好	SD1
4	坏	③(2.0)	内面—明黄褐色(10YR)　外面—橙色(7.5YR)	良　微砂を若干含む	良好	PH5
5	甕	③(1.8)	にぶい黄橙色(10YR)	良　0.1cm程度の砂粒を少量含む	良好	SK6
6	甕	①(6.6)②(4.8)③0.9	橙色(5YR)	良　0.1～0.3cm程度の砂粒を少量含む	良好	PH6　約3/4欠失
7	甕	①(7.6)②(6.7)③1.1	浅黄橙色(10YR)	良　微砂を若干含む	良好	PH7　約4/5欠失
8	甕	①(8.0)②(6.8)③1.0	にぶい黄橙色(10YR)	良　0.1～0.2cm程度の砂粒を微量含む	良好	PH4　約3/4欠失
9	甕	②(4.5)③(0.6)	内面—橙色(10YR)　外面—橙色(5YR)	良　0.1cm程度の砂粒を微量含む	良好	PH2　約2/3欠失
10	甕	②(5.2)③(1.2)	内面—橙色(7.5YR)　外面—橙色(5YR)	良　微砂及び金雲母を若干含む	良好	SK5
11	甕	②(6.4)③(0.9)	橙色(7.5YR)	良　0.1cm程度の砂粒を微量含む	良好	PH2　約4/5欠失
12	甕	③(0.9)	浅黄色(2.5Y)	良　微砂を若干含む	良好	PH8
13	甕	③(1.5)	橙色(5YR)	精良	良好	SK9
14	甕	③(0.9)	橙色(7.5YR)	精良　微砂を若干含む	良好	攪乱層
15	坏	②(8.0)③(2.1)	内面—にぶい黄橙色(10YR)　外面—橙色(7.5YR)	良　微砂及び金雲母を含む	良好	PH4　約4/5欠失
16	坏	①(16.2)②(8.8)③4.8	灰白色(10YR)、外面一部褐灰色(10YR)	良　0.1～0.2cm程度の砂粒を微量含む	良好	PH3　約5/6欠失
瓦質土器						
17	壺	②(10.0)③(4.5)	明褐灰色(7.5YR)、外面一部褐灰色(10YR)	良　0.2cm程度の砂粒を少量含む	良好	RH3　約4/7欠失
18	土　鍋	③(4.6)	灰白色(10YR)	良　0.1～0.3cm程度の砂粒を少量含む	良好	SD4　外面に煤付着
19	土鍋(脚)		にぶい黄橙色(10YR)、一部灰色(5Y)	良　0.2cm程度の砂粒を含む	良好	攪乱層
輸入陶磁器						
20	碗	③(3.1)	素地—灰白色(5Y)　釉—オリーブ黄色(5Y)	精良	良好	SK4
21	碗	③(2.9)	素地—灰黄色(2.5Y)　釉—オリーブ灰色(10Y)	精良	良好	PH1
国産陶磁器						
22	擂　鉢	③(5.5)	素地—橙色(7.5YR)　釉—褐灰色(5YR)	精良	良好	PH1
23	皿	③(2.1)	素地—浅黄色(2.5Y)　釉—透明	精良	良好	PH9
24	碗	③(4.4)③(3.7)	素地—にぶい黄橙色(10YR)　釉—乳白色	精良	良好	PH1　約3/4欠失
その他						
25	用途不明石製品	④1.1	灰色(N)　光沢あり			SD4　結晶片岩製
26	用途不明石製品	④0.4	灰色(N)　光沢あり			SD4　結晶片岩製
27	鞴　口		内面—橙色(5YR)　外面—灰白色(5Y)	精良		SK2　先端部に銅鉾？付着
28	鉄　滓	③(3.1)④0.9				SK8　錆化が著しい

（色調は農林省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」1976による）

は口縁部外面は横ナデ、頸部以下は縦方向の刷毛目による調整である。1の内面および2は磨滅しており調整は不明。

土師器（Fig.28，3～16）

3は高坏の坏部。口縁部は外上方へ直線的に立ち上がり端部はわずかに外反する。風化が著しいが外面に横方向の篦磨きの跡が観察される。4は坏の口縁部で端部は丸みを帯びる。5は甕の口縁部。4、5は外面が横ナデ調整、内面は器面荒れのため不明。6～14はやや上げ底を呈する小皿である。底部の切り離し方法は、不明の6、10を除きすべて糸切り。7～11、13、14は内外面とも横ナデ調整。他は器面磨滅のため不明。15、16は坏。16はかなり薄手で、体部は内彎ぎみに斜上方へ立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は外面上半部が横ナデ、下半部には指頭圧痕がわずかに残る。内面は磨滅のため不明。

瓦質土器（Fig.28，17～19）

17は壺の底部で、体部はやや内彎しながら斜上方へ立ち上がる。内面は横方向の刷毛目調整。外面はナデ仕上げであるがナデきれておらず、成形時の指頭圧痕および下位に縦方向の刷毛目が残る。外底に板状圧痕が認められる。18、19は鍋。18は口縁部から体部にかけての破片である。口縁部は中位で屈曲し、端部をわずかにつまみ上げる。口縁部内外面は横ナデ、体部外面は縦刷毛目による調整。19は脚で、篦削り後指頭による成形を行なう。

輸入陶磁器（Fig.28，20・21）

いずれも青磁塊の口縁部。20は外面に片彫りの蓮弁文様を有する。横田賢次郎・森田勉氏分類[1]の龍泉窯系青磁のⅠ－5・a類に該当する。21は体部が内彎ぎみに立ち上がり口縁部はやや外反する。

国産陶磁器（Fig.28，22～24）

22は片口の擂鉢で、口縁部直下に一条の断面三角形の突帯が巡る。体部はやや内彎しながら立ち上がり、口縁部は肥厚しながら短く外反する。端部は丸くおさめる。外面は横ナデ、内面上半部は縦方向の刷毛目の後横ナデ調整。内面下半部は櫛状工具による縦方向の筋目を施す。23は皿の口縁部片で、口縁端部を上方へつまみ上げる。外面には断面三角形の低い二条の突帯を貼り付け、体部内面には一条の沈線が巡る。内外面に透明の釉を施す。24は塊で、「八」の字状に開く高台をもち体部は内彎しながら立ち上がる。

その他の遺物（Fig.28，25～28）

25、26は円板状の石製品である。25は最大径5.6㎝、重量42.4ｇ、26は最大径6.0㎝、重量14.9ｇ。いずれも結晶片岩製。27は土製の鞴口片[2]。火口部分の破片で、高熱を受け表面に亀裂

を生じている。28は両丸造と思われる鉄鏃の刃部。

これらの時期について概述すると、まず弥生土器は弥生時代中頃のものであろう。次に土師器は、3の高坏が古墳時代、その他はすべて中世以降のものである。坏、埦、甕は平安時代終末～鎌倉時代頃、小皿は鎌倉時代後半頃に比定される。9、12の薄手の小皿は室町時代に下る可能性もある。また瓦質土器は室町時代頃、輸入陶磁器は平安時代終末～鎌倉時代初頭頃のものであろう。国産陶磁器は近世以降のものとみられる。

以上のように出土遺物には弥生時代から近世まで各時代のものがありかなり時期幅がある。（福　島）

〔注〕

1) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心として一」（『九州歴史資料館研究論集』4、九州歴史資料館、1978年）。

2) 昭和60年度の吉田構内保存地区における調査で古墳時代後期のものとみられる鞴口片が出土している。山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡保存地区現地説明会資料』（1985年）。

5　小　結

今回は大学会館新営の付随工事として現状変更を伴う約180㎡について事前に調査を実施したものである。A区においては弥生時代後期から室町時代の土壙、溝、柱穴が多数検出されたが、後世の削平により遺構としてのまとまりが把握できるものは少ない。しかし、共伴関係および時期は不明であるが、SK2から鞴口、SK8からは鉄鏃が出土した。鞴口は昭和60年度吉田構内保存地区（I－20区）で古墳時代後期のものが旧河川跡から出土している。本学では2例目を数えるが、今回の調査区北東域は昭和58年度に、石鈴帯、緑釉陶器、木簡等注目すべき遺物が出土した大学会館新営に伴う調査地域にあたり、中世吉田氏の社会的、経済的、政治的背景をさぐるうえでの貴重な資料となった。また、昭和54年度本部管理棟2号館新営に伴う調査で検出された室町時代の屋敷跡をめぐる環濠西辺の延長部分が検出されたことも特筆される。B区では若干の柱穴を検出したが、C区では弥生時代から中世にかけての遺物を包含する自然堆積層が認められた。したがって、B区北東端での地山の落ち込みから、当該地域周辺では$y = 550$付近以西は谷あいの低湿地に立地していることが判明し、キャンパス内における遺跡立地の具体的なあり方の一端を理解することができるとともに、弥生時代前期から室町時代にかけての集落範囲、規模、時期的な変遷を知りうる具体的な資料が得られた。（河　村）

第8章 吉田構内学生部テニスコートフェンス改修に伴う試掘調査

1 調査の経過

今回調査の対象となったテニスコートは吉田構内の北西隅に位置する。調査はテニスコートを囲繞するフェンスの改修工事に伴うもので、本年度はコート四面のうち、九田川（くでんがわ）に接するところの二面に付随する両サイドのフェンス改修である。埋蔵文化財の調査は約1mの掘削を必要とするフェンス新規支柱基礎部分が対象となるもので、事前調査方法を選定した経緯は、昭和58年度（昭和59年3月）に同テニスコートの陸上競技場側二面において今回と同様の工事に伴い立会調査を実施した[1)]結果、当該地域に弥生時代から古墳時代にかけての遺物包含層が確認されているためである。今回はその遺物包含層の拡がりをさらに十分把握し、この地区における埋蔵文化財に関するデータの収集を主目的とした。

調査は、新規支柱基礎部分36カ所のうち、土層の堆積状況を限定範囲の中で最大限に把握するため適宜な地点20カ所を選定し、昭和59年10月1日の工事着工と同時に入り、同年10月8日までの間、人文学部考古学研究室の協力のもと実施した。調査総面積は約25㎡である。

なお便宜上、試掘壙は最も北東側をAラインとし、南西側につれてB・C・Dと称し、また九田川から陸上競技場に向かってそれぞれ1・2……5とした。(Fig.30参照)

〔注〕

1) 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』(1985年)。

Fig. 29 調査区位置図

2　層　位

Aライン

地表面はH（標高）＝ 18.20 m 前後を測る。まず試掘壙 1 ～ 3 では、上位に1.2～1.3 m の表土・置土があり、今回の調査範囲中で最も厚く堆積している。その直下H＝17.00 m には旧耕作土の暗灰色土上面があり、厚さは約20 cm程度である。その下にはそれに伴う床土と察する淡灰黄色土が続くものの、その厚さには部分的に差異がある。さらに旧床土以下には遺物包含層の灰褐色土が拡がる。また試掘壙 4 ・ 5 では上位においては 1 ～ 3 と同様第1～4層の層序を呈するものの、旧耕作土上面がH＝17.20 m を測り、 1 ～ 3 地点に比べて旧耕作面、床土面および第 4 層上面はレベルが高い。なお5 では第 4 層以下に遺物包含層と考える黄灰褐色砂質土層が認められる。

Bライン

地表面の標高はAラインとかわらず、また層序も第1～4層が存在し、さらに北西と南東の併列において3と4との間で各旧堆積層に段差が認められるなど、Aラインと同様の堆積状況を示すが、北東－南西の併列における連関性では旧耕作土以下のレベルは、Aラインよりも約20cm高い。なお、1・4・5地点で第4層直下に遺物包含層である灰黒褐色粘質土が拡がることが認められる。

Cライン

当ラインはBラインと約 10 mしか離れていないため、北東－南西間の層序および各層のレベルはBラインの状況と大きな差異はない。ただし、 3 ・ 4 地点で旧床土である淡灰黄色土が存在しない部分が認められた。また、4 ・ 5 地点では第 4 層下に遺物包含層の黒褐

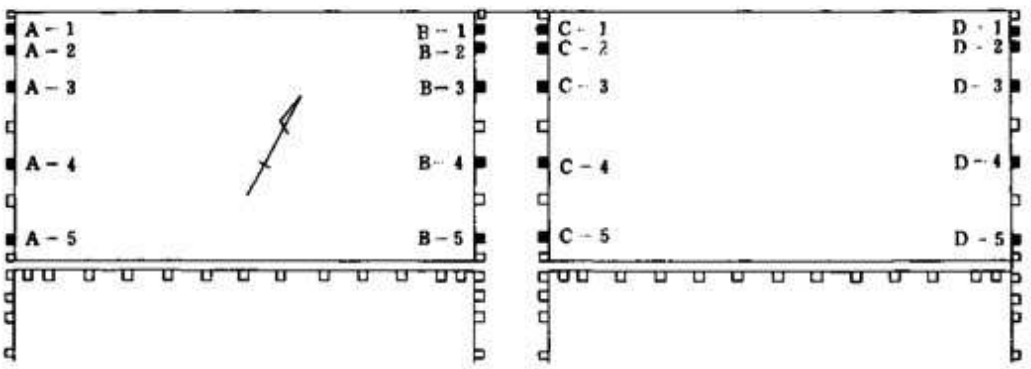


Fig. 30　調 査 区 設 定 図

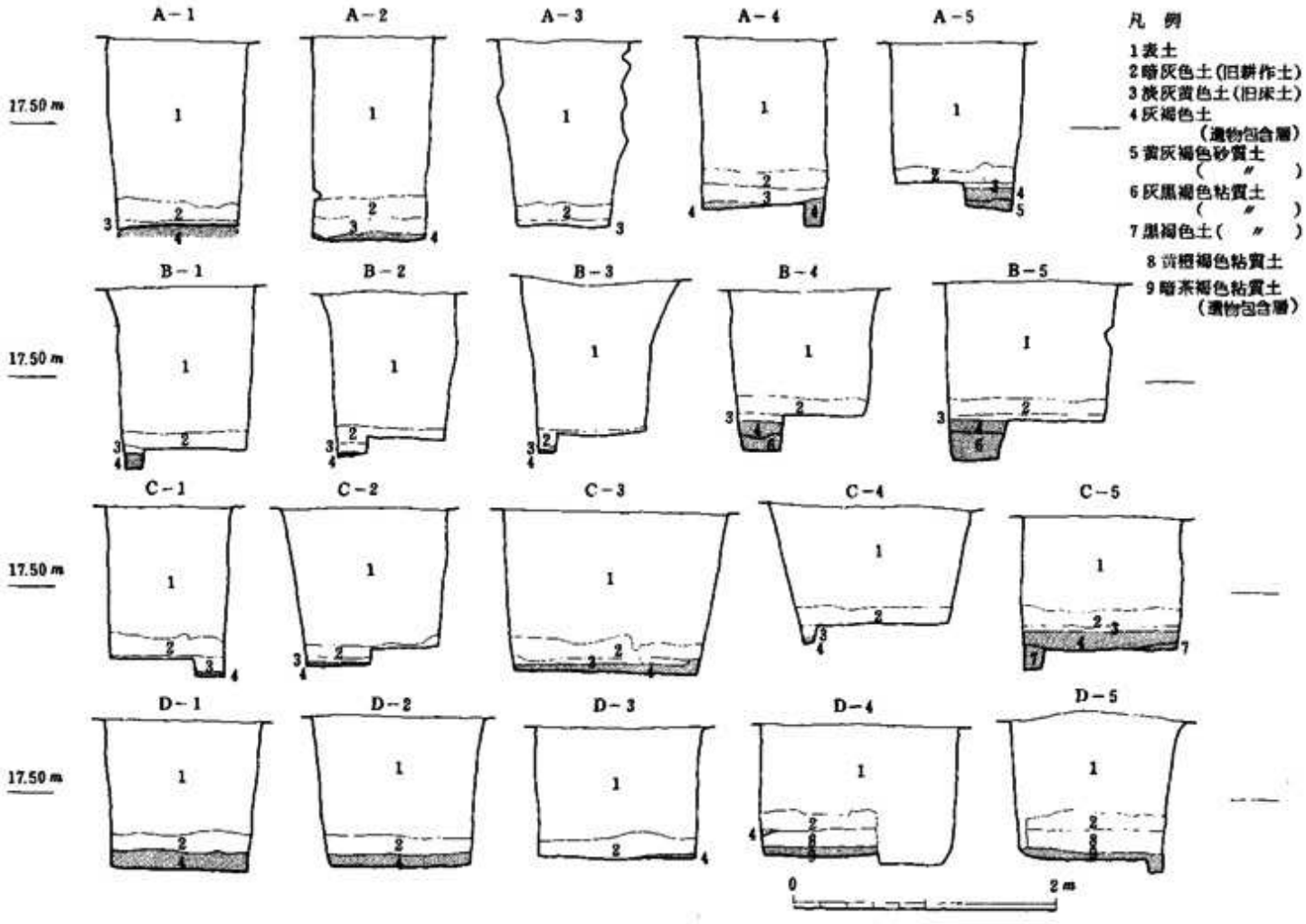

A－1
A－2
A－3
A－4
A－5
B－1
B－2
B－3
B－4
B－5
C－1
C－2
C－3
C－4
C－5
D－1
D－2
D－3
D－4
D－5
17.50 m
凡 例
1表土
2暗灰色土(旧耕作土)
3淡灰黄色土(旧床土)
4灰褐色土
(遺物包含層)
5黄灰褐色砂質土
(〃)
6灰黒褐色粘質土
(〃)
7黒褐色土(〃)
8黄褐褐色粘質土
9暗茶褐色粘質土
(遺物包含層)
0
2 m

Fig. 31 土 層 断 面 図

色土が堆積する。本層はB－4・5地点で確認されている第6層：灰黒褐色粘質土に対応するものであろう。

Dライン

最も西寄りのラインで、地表面レベルはH＝約18.10 mを測る。1～3地点では、上位に0.8～0.9 mの置土があり、その直下にH＝17.20 mで旧耕作土の暗灰色土上面が検出される。以下、床土は認められず直ぐに灰褐色土の遺物包含層が堆積する。4・5地点はかなり深くまで掘削されている攪乱壙が一部にあるものの、置土直下に1～3地点と同様暗灰色土の旧耕作土が認められる。しかし、その直下は黄橙褐色粘質土（現時点では遺物包含の有無は不詳）、暗茶褐色粘質土（遺物包含層）が続き様相を異にする。

なお、遺物については少量かつ細片のため割愛した。

3　小　結

本調査地点において、遺物包含層が存在する蓋然性の高いことは、昭和58年度に実施した南側のテニスコート周辺のフェンス改修に伴う立会調査である程度予想されていたが、今回の調査で全面域に拡がっていることが確認された。

今回調査したテニスコート二面に限って土層状況を観察すると、グラウンド造成時においては旧地表面以下を削平せずに約60～120 cmの盛土をして整形している。そのため旧耕作土は各地点で遺存し、その旧耕作土はA～Dの各ライン3地点と4地点との間に約25cm前後の段差を有し、北側が低くなっている。また、旧耕作土下面はDラインからAラインで約20cmの高低差があり、AラインとBライン、CラインとDラインとの間で段差が生じている。このことから両二面のテニスコートの範囲内では、少なくとも四枚の旧耕作土面が存在したと推定される。それ以下に存在する遺物包含層については、調査面積が狭少のため遺構の有無および各層の詳細な時期を明確にし得ないものの、弥生土器等の細片を検出しており、またこれまで構内で確認されている遺物包含層の土質や色調も勘案すれば、時期は弥生時代から古墳時代にかけてのものとする蓋然性が大きい。

なお、テニスコート北端には自然河川か人口河川かは明確でないものの、幅約5 mの九田川が流れているが、今回の地点ではその氾濫を示す土層状況は全く認められず、比較的安定した小河川であったことが窺われる。さらに今回の結果は、九田川と平走する県道陶湯田線を挟んで対峙する地に須恵器の散布地として周知の「郷遺跡」[1]があるが、本来、吉田遺跡と平面的に連続する可能性がうかんできた。（森　田）

〔注〕

1）山口市教育委員会『山口市文化財地図』（昭和56年1月調整、1981年）。

第9章　昭和59年度山口大学構内の立会調査

第1節　吉田構内の立会調査

経済学部樹木移植に伴う立会調査

調査地区　　経済学部構内　K－19・20区

調査期間　　昭和59年11月8日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約8㎡

調査結果　　立会調査は植樹の行なわれる経済学部A棟西側3地点、大講義棟西側1地点で実施した。なお、第2地点は昭和60年度樹木移植予定地であるが、今年度一括して立会調査を実施することによって、調査および工事の円滑化をはかるとともに、周辺地域における今後の現状変更を伴う工事に対する資料の集積の一助とした。

調査は工事基底面である現地表下60～70㎝まで土層の堆積状況、遺構、遺物の有無を観察した。その結果、各地点とも宵触土および構内造成時等の置土（攪乱土）の堆積がみられ、遺物包含層、遺構等は認められなかった。

しかし、第4地点攪乱土中に昭和55年度に実施した大講義棟新営に伴う事前調査の際、旧耕作土下で確認された自然堆積層である青灰色砂礫土がブロック状に堆積、混入している状況が観察された。したがって、当該地域周辺では、大学統合移転に伴う造成工事等により旧耕作土下部までおよぶ削平が行われたものと理解することができる。削平の南北および東への範囲は未だ不明であるが、西側では柱穴、旧河川跡の検出された教育学部技術科・美術科実験実習棟付近までは及んでいないものと考えられる。　（河　村）

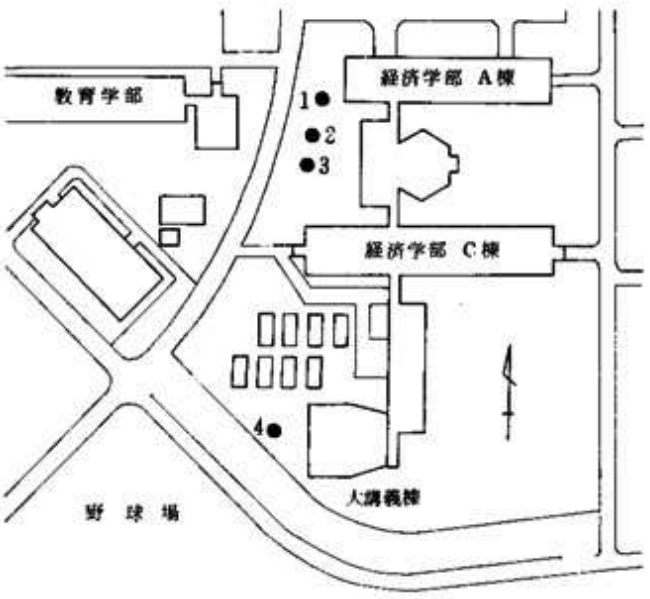


Fig. 32　調査区位置図

第2節　常盤構内の立会調査

尾山宿舎排水管布設に伴う立会調査

調査地区　常盤地区

調査期間　昭和59年12月12日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約20㎡

調査結果　尾山宿舎は工学部キャンパス正門から南西約300mに位置する工学部職員合同宿舎である。調査は三棟の宿舎棟のうち東端の一棟に付随する排水管等埋設工事に伴い実施した。

その結果、管路西半部では今回の工事基底面である現地表下約80cmまで現有宿舎新営の際の削平により攪乱土の堆積がみられた。また、管路東半部では現地表から厚さ約30cmの攪乱土直下に黄褐色粘質土の地山が検出されたが、遺構、遺物は確認されなかった。

しかし、調査終了後、尾山宿舎とは擁壁を隔てて階段状に約2m高所に位置する北側の畑地において中世のものと思われる土師器片若干を表面採集した。この畑地は耕作土下に厚さ約10～20cmの薄い遺物包含層を介在して現耕作土下約50cmで黄褐色粘質土の地山となっている。また、同宿舎は隣接する南側の民有地に比べ約2.5m高所に位置することから、当該地域周辺は後世の削平により階段状に削平され、各々平坦面を形成しているものと推察される。

したがって、尾山宿舎敷地内においては、とりわけ北端部地域を中心として地山が大規模に削平されているものと思われるが、南部地域においては周辺での遺物の散布状況を勘案して、十分な調査が必要であろうと思われる。　（河　村）

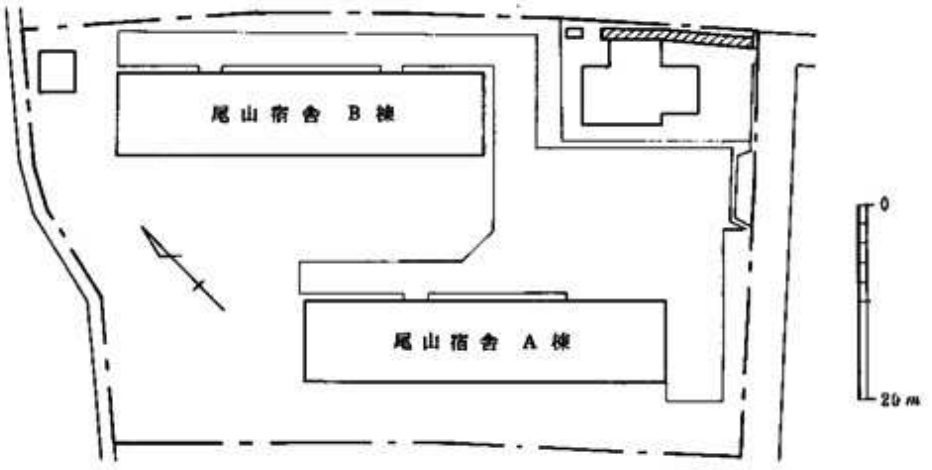


Fig. 33　調査区位置図

第3節　教育学部附属光小・中学校構内の立会調査

教育学部附属光小・中学校焼却場新営に伴う立会調査

調査地区　山口県光市室積

調査期間　昭和59年8月10日

調査方法　工事施工前の試掘立会調査

調査結果　この構内は「御手洗(みたらい)遺跡」が周知される地であり、昭和58年度にも工事に伴い試掘調査を実施している。今回の工事は焼却炉を設置するための基礎工事で、小学校グラウンドの北側、海岸近くに位置する。掘削の深さは地表面下約30cm程度であった。人力による掘削の結果、その深度内は近年による置土の範囲で、埋蔵文化財に関しては直接的には全く支障はなかった。（森　田）

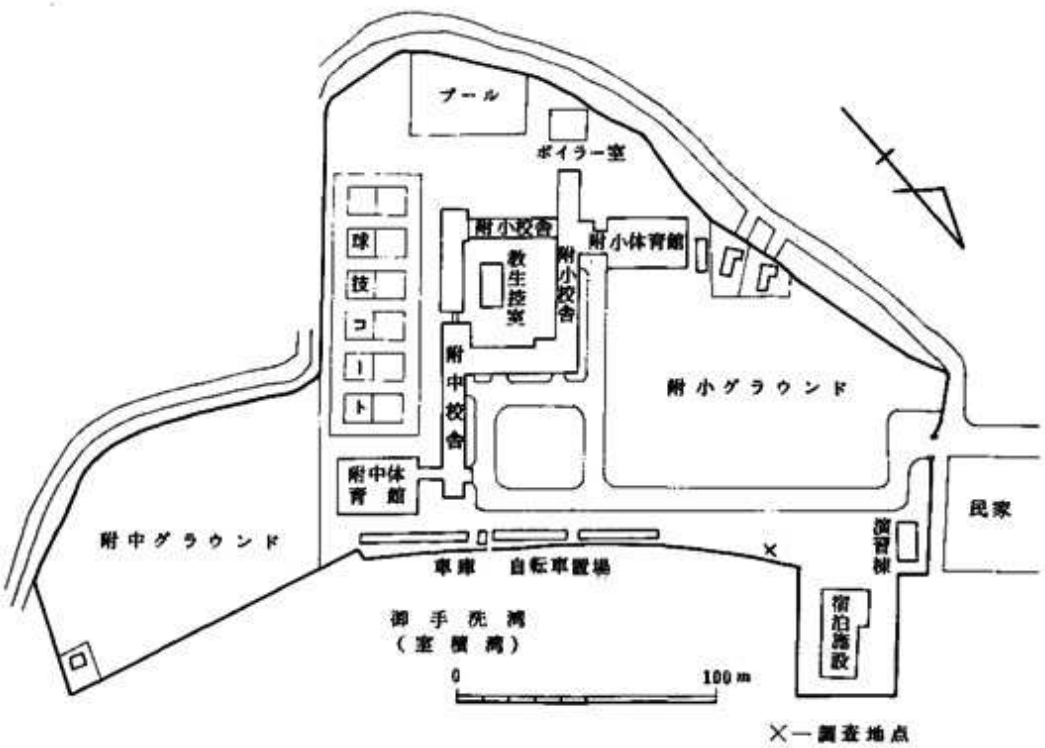


Fig. 34　調査区位置図

第4節　その他構内の立会調査

1　ボート部艇庫合宿研修所整備に伴う立会調査

調査地区　　宇部市大字小野字土井

調査期間　　昭和59年4月27日

調査方法　　工事施工前における試掘立会調査

調査面積　　約0.5㎡

調査に至る経過　　合宿所は小野湖の中央部東岸に位置する丘陵上にある。この地は今日まで埋蔵文化財の調査が全く行なわれておらず、その有無が明らかでないことから、またこの周辺で時期不詳ながら有孔石製品[1]が採集されている事実も勘案し、今回初めて工事に際し調査した。

調査結果　　本工事は生活排水浄化槽設置であり、調査はその工事範囲内の二カ所において、人力による小規模な試掘を行ない土層の観察をした。その結果、表土以下は直ぐに地山であり、当地域では仮に過去において遺物包含層、遺構が埋存していたとしても、既往整備時に削平され消失している蓋然性が高い。　　（森　田）

〔注〕
1）当資料は、現在山口大学埋蔵文化財資料館に収蔵されている。石錐の可能性がある。

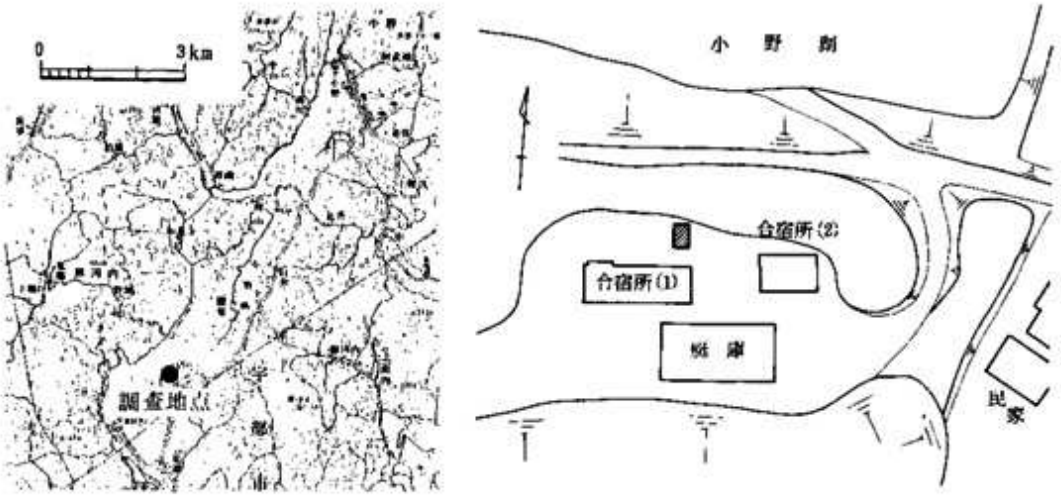


Fig. 35　調査区位置図

2　ヨット部艇庫合宿研修所整備に伴う立会調査

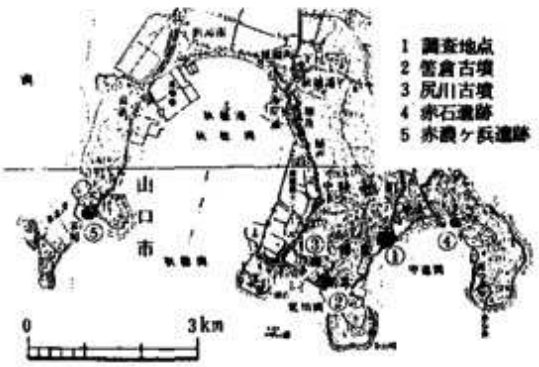
調査地区　吉敷郡秋穂町東字中道

調査期間　昭和59年4月27日

調査方法　工事施工前の視察調査

調査結果　山口大学の各附属施設は県内各地に分散しており、今回調査を実施した吉敷郡秋穂町所在のヨット部艇庫もそのひとつである。当該地区は中道湾の最奥部に位置し、西方約250 mの低丘陵上にある中道古墳をはじめとして、標高約 150 m の小山塊から派生する周辺の丘陵上には笈倉古墳、尻川古墳等が確認されている。また、東方には須恵器、土師器の遺物包含地である赤石遺跡が知られており、当該地域周辺には古墳時代を中心とした諸遺跡が分布している。さらに、古墳時代の製塩遺跡として著名な美濃ケ浜遺跡が秋穂湾を隔てた対岸に所在する。

工事はヨット部艇庫合宿研修所周囲のフェンス設置およびヨット搬入出の際利用されるスロープ改修に伴うものであるが、北から中道湾にのびる丘陵が合宿研修所新営の際、擂鉢状に削平され、旧地形は殆んど残存していない状況であった。したがって、今回の調査は主として、削平された崖面での土層堆積状況の断面観察および周辺地域における遺物の散布状況を観察した。その結果、厚さ約10～15 cmの腐触土直下に花崗岩媒乱土である地山が検出された。また、南端の海浜部では磨滅した須恵器、土師器が採集され、遺構ないしは遺物包含層の存在を予想させた。（河　村）



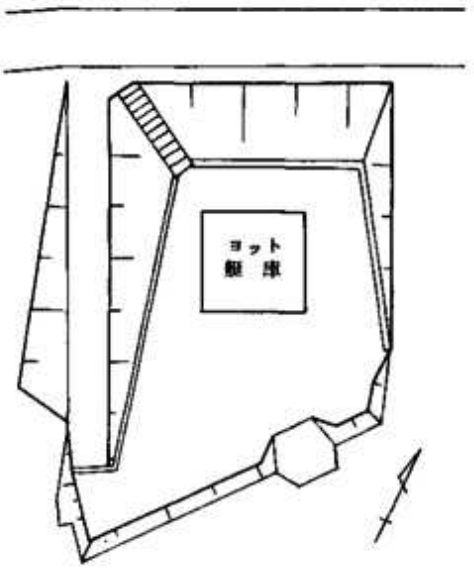


Fig. 36　調査区位置図

付　　篇

- 周防国吉敷郡吉田における古代・中世の様相
  ― 吉田遺跡をめぐる諸問題 ―
- 吉田遺跡採集の円筒埴輪について
- 山口県見島ジーコンボ古墳群出土の人骨
  ― 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料 ―
- ―資料紹介―
  埋蔵文化財資料館所蔵の新羅系陶質土器について

山口大学構内遺跡調査要項
山口大学埋蔵文化財資料館規則
山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則
山口大学構内の主な調査

周防国吉敷郡吉田における古代・中世の様相

― 吉田遺跡をめぐる諸問題 ―

森　田　孝　一

1　はじめに

山口大学吉田キャンパス内には、吉田遺跡が周知される。本遺跡は山口県のほぼ中央に位置する山口盆地の東縁部、大字吉田の地にあり、盆地を貫流する椹野川の左岸に広がる沖積低地および洪積台地上に立地する。遺跡面積は約70万㎡以上に達すると推定されており、その主要部分を包括している山口大学では昭和42年以降、統合移転を契機として諸工事等に際しては随時埋蔵文化財の調査を実施している。今日までの調査の結果、縄文時代から室町時代に至るまでの長期にわたる複合遺跡であることが漸次明らかになってきており、とくに弥生時代中期から古墳時代中期にかけては遺構・遺物の検出が顕著であり、当時山口盆地内では中核的な存在の集落があったとの推測がされている。[1)]

今回小稿で問題とするのは、吉田遺跡の様相の中でもその実態が比較的不明瞭な奈良時代から室町時代にかけてであり、その着目の端緒は、昭和58年度に於いて吉田構内の北東地区に設定された大学会館の新営工事に伴う発掘調査[2)]を実施した結果、古代・中世の遺物が多量に出土し、その中に一般在地集落では普遍的に保有し得ないものや官衙推定の物的証拠の一つにもなっているものが含まれていたことによる。小稿ではそれらの考古資料を検討し、とくに当時吉田の地に設定されていた施設の性格、機構に視点を置き素描を試むものである。但し、今日までの検出遺構の点からすれば実証不足は免れず、あくまでも推論にしか過ぎないと懸念しつつも、敢えてここに問題を提起し、吉田遺跡の歴史的価値を再認識する契機となればと思い論ずるものである。

2　調査の概要

本稿で検討する遺物が出土した地点は、姫山から南西方向へ派生する丘陵基部地域で、大学本部の北東側に隣接する。調査前は緩傾斜面を呈し、農学部の牧草地が存在した所であるが、発掘調査の結果、少なくとも中世までは谷頭地形を形成していた地と判明した。遺構は稀薄で、古墳時代および中世の井戸・土壙などを若干検出したに留まったが、遺物は旧地形を覆う堆積層から各時代のものが、多量に出土した。これらの遺物は旧地形の検

1 吉田遺跡（山口大学吉田キャンパス）	10 木戸神社古墳群	21 下東遺跡	32 問田遺跡
2 竹の花遺跡	11 権現山古墳	22 木崎遺跡	33 新開古墳
3 江良遺跡	12 荻峠遺跡	23 太田遺跡	34 日吉神社古墳群
4 松柄遺跡	13 朝倉遺跡	24 朝田墳墓群	35 乗ノ尾石棺群
5 亀山遺跡	14 朝倉河内古墳群	25 天神山古墳群	36 神郷大塚遺跡
6 白石遺跡（山口大学附属山口小学校）	15 勝田鵜木町遺跡	26 古熊遺跡	37 吉田岡畠遺跡
7 鳩ノ峰・白石古墳群	16 赤妻古墳	27 橋村・御堀石棺群	38 大塚古墳
8 茶臼山古墳群	17 土師宮古墳群	28 御堀遺跡	39 郷遺跡
9 糸米古墳群	18 伊賀堤遺跡	29 入野遺跡	40 馬木遺跡
	19 大判石棺	30 氷上古墳	41 中島古墳
	20 泉山古墳群	31 問田片川遺跡	42 小路遺跡

Fig. 37 吉田遺跡位置図および山口盆地内遺跡分布図

討により周辺の丘陵上、緩傾斜面上から流失したものと察せられ、その推定地域は既住の調査等において原始から中世に至る遺構が濃密に存在していることが推察されている。

3. 主な遺物の検討

古代から中世にかけての出土遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器などの土器類が主であるが、他に石製品、木製品もある。以下、その中で遺跡の性格を考える上で興味深い遺物について検討する。

(一) 石銙帯

銙帯とは律令時代の官人が用いた腰帯のことで、令により官位、職階などで装着内容が規定されており、その出土は官人との関係を示す蓋然性の高い資料である。

本例は石製で、形態上丸鞆である。法量は縦長2.75㎝、横幅4.2㎝を測る。中央下方に長方形の透かし穴を有し、また上から金属の鋲で革帯に銙を留めるため、裏面まで貫通する小孔をその周囲3カ所にもつもので、佐藤興治氏分類[3]の石銙a、亀田博氏[4]のC型式に属する。このタイプのものはこれまで奈良県平城宮跡、宮城県多賀城跡、京都府西野山古墓、山口県見島ジーコンボ古墳の他、正倉院伝世品の5例に限られる稀少なものである。本例は石質より『日本後紀』にみる「雑石腰帯」に相当し、延暦15年(796年)以降に銅銙帯の代用品とされたのがこの雑石の腰帯であろう。また757年施行の養老令衣服令によると腰帯には金銀装と烏油装があり、前者は金銀を鍍金したもので、後者は黒漆を塗ったと推定され、銅銙の多くは烏油腰帯の銙とみられている。石銙の中に黒漆を塗ったものや色調が黒色系の石材を用いたものがあり、銅銙から石銙に移行した期間でもこの二種が援用されていたとすれば、本例は黒色を呈しており、烏油腰帯を意識したものであろう。そして衣服令ではTab. 5に示す通り、烏油腰帯の場合、文官では六位以下から初位、武官では尉・兵帥・主帥の朝服および無位の制服に用いられたもので、従って本例の保有者はこの官位の範疇に相当する官人であることが推定される。

さらに探究すれば、佐藤氏は銅銙帯(烏油腰帯)を平城宮跡出土のものを中心に検討され、まず形状を3種類に分類し、また法量から6段階に細分し、その

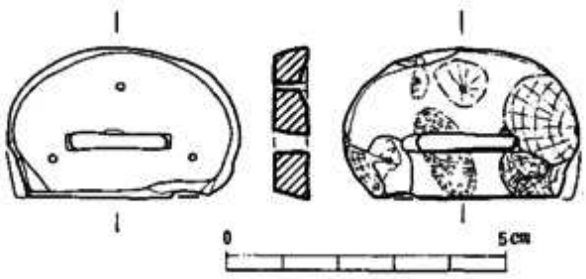


Fig. 38 石銙帯実測図

Tab. 5 養老令衣服令の男子の帯・腰帯
（亀田氏論文、文献注4より）

制服	朝服	礼服	位階・官職	
※無位の人の朝服で烏油腰帯を着す	金銀装帯	銙帯	親王（一品） 諸王（一位）	王・親王
			諸臣一位	文官
			二位	
			三位	
			四位	
			五位	
	烏油腰帯		六位	
			七位	
			八位	
			初位	
			無位	
	金銀装帯	金銀装帯	衛府督	武官
			衛府佐	
			兵衛督	
	烏油腰帯		尉	
			志	
			兵帥	
			主帥	
	白布帯		衛士	

Tab. 6
佐藤氏論文の丸鞆分類表

	丸鞆	
	縦	横
A－Ⅰ	2.9	4.2
A－Ⅱ	2.5	3.7
A－Ⅲ	2.3	3.2
A－Ⅳ	1.9	2.7
A－Ⅴ	1.6	2.6
A－Ⅵ	1.4	2.2

Tab. 7
職員令に定める国司の定員

	大国	上国	中国	下国
守	1	1	1	1
介	1	1	－	－
掾	2	1	1	－
目	2	1	1	1
史生	3	3	3	3

段階ごとに六位から無位までの官位を対応させている[5]。この見解が当を得ているとし、また銅銙帯の規定が石銙帯においても継承されていたとすれば、本例は法量から言えばA－Ⅰに最も近い数値であり、官人の位階に対照すると文官では六位に比定しうる。さらにこのタイプの使用年代は、銅材を銭の新鋳に用いるため銅銙帯を廃止して石銙帯に代える延暦15年（796年）から、再び雑石腰帯を禁じ銅銙帯にもどす大同2年（807年）の間としている。

それではこの期間に六位に相当する官人が吉田の地にいたかという疑問に対して少し考えてみたい。文献史料では具体的な人名等はみあたらないが、この在地にあって位階をもつ官人層と言えばまず郡司がうかぶ。後述するように当地は郡の等級が中郡に相当する郡の所轄であることから、大領・小領・主帳が各1名いたことになる。令では大領に外従八位上、小領に外従八位下の位階が定められている[6]ものの、場合によっては財物貢献などによりそれ以上の位階を授与される例がある。しかし『古代の日本』に記載の郡司一覧表[7]をみると、最高郡司である大領でも六位～八位が大半で、それ以上は稀なことから、本銙帯の保有者と規定する位階六位に相当する人物は郡司では大領クラスと推定される。次に国司の場合を考えると、周防国は当初、国の等級が中国であったものの延暦12年（793年）から喜祥2年（846年）までに上国に昇格する。養老令官位令によれば中国の守の位階は正六位下であるものの、周防国では和銅3年（710年）以降従五位上で任ぜられる守が多く令との間に若干の差異がある。『続日本紀』『日本後紀』によると本例タイプの石銙帯の推定使用期間である延暦10年から大同2年の間の守は、いずれも従五位下であり、また

この期間の介、掾、目の位階は明らかでないものの、年代はやや遡るが天平７年（735年）正倉院文書に守従五位下、掾正六位下、目従七位下と記してある[8]ことから勘案し、本銙帯の保有者は国司では介ないし掾クラスであろう。なお国司は、地方にあっては国府に居住し国衙で政務を執るもので、国内巡行に際して吉田の地に来た可能性はあるものの、その時の遺失物とするにはあまりにも偶然性が高い。そのため本銙帯の保有者は、国司より郡司の方が蓋然性は大きいと考える。また令の規定以外ということも考慮すべきであるが、これ以上の保有者の比定は難しい。さらに職員令における国司の人数は、中国の場合、守、目が各１名で上国になっても介が１名加わる程度であり、員外のもの[9]を勘案してもまた前述の郡司においても人数的にかなり限定されよう。

しかし、近年増加した全国各地の銙帯と官位との関係を検討した亀田氏によると[10]、少なくとも銅銙帯から石銙帯に移行する時期には官位に基づいた大きな差はなく、法量によって厳密な官位を表わしてないとの見解を打ち出している。実際に『日本後紀』や『日本霊異記』によると平安京では銙帯が売られていたようで、筆者も亀田氏の見解に同意するものであるが、ただし今日までの周防国内における銙帯の出土地をみると、防府市の周防国府跡[11]、玉祖遺跡[12]の２カ所だけである。国府跡からは銅銙帯の表金具１点が出土しており、阿部氏分類の巡方ａに属し、官位比定八位に相当するものである。玉祖遺跡では銅銙帯の表金具の巡方と丸鞆が１点ずつある。巡方は類例の少ない長方形を呈するもので、阿部氏分類巡方ｃ、官位比定無位にあたる。また丸鞆は法量から八位に比定されるものである。既出地の性格を考えると、前者は国衙の所在地であり、国司の四等官クラスをはじめ官人の常駐は明らかな所である。一方、後者は防府市大崎字居合に所在し、佐波川右岸近くに位置する平安時代から室町時代にかけての集落遺跡である。今日遺跡の性格等は明らかにされていないが、式内社である玉祖神社（周防一ノ宮）が近隣することから、銙の保有者を神官のものと推定するむきもある[13]。しかし、大崎の地は『日本紀略』の寛平元年六月六日条に「停周防国大前駅家」の記述があることから、寛平元年（889年）以前に山陽道における佐波川の渡し場的役割をもった水駅と察する駅が設置されていたと推定される地[14]であり、また本遺跡周辺で他に明確な遺跡が発見されていないことも勘案し、玉祖遺跡がこれに関連し、律令機構の一端を担ったところとの推測も全く無視はできないと考える。

以上のことにより、周防国内の銙帯の出土地、また全国的に見る本例タイプの既出地が官衙或いは官人との関係が示唆しえる遺跡に限られていること、さらに銙自体の性格も勘案し、吉田例の場合、細かい官位比定が難しいとしてもこの地に官人がいた蓋然性は高く、

たとえ令の規定外であっても、直接間接的な律令国家との深い係わり合いを示唆するものであろう。

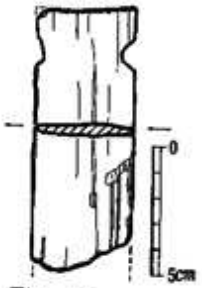


Fig. 39 木簡実測図

（二） 木 簡

1点出土。本例は半損品であるが一端に左右からの切り込みをもつもので、形態は奈良国立文化財研究所の分類の039型式に属する。[15] 日本の木簡には文書様木簡、付札、習字・落書、その他があるが、本例は各地の既出例の検討より付札として用いられた形状にあたる。付札には記載の墨書内容によって貢進物付札と単に物品名、数量を記しただけの2種があり、前者の場合、書式で地方行政機構のいかなる段階（国衙・郡衙・郷家など）で執筆されたかが推定できることもあるが、本例は残念ながら墨書は認められず、このことを明らかにし得ない。なお、平城京跡の貢進物付札をみると租税の種目では調が最も多く、白米・

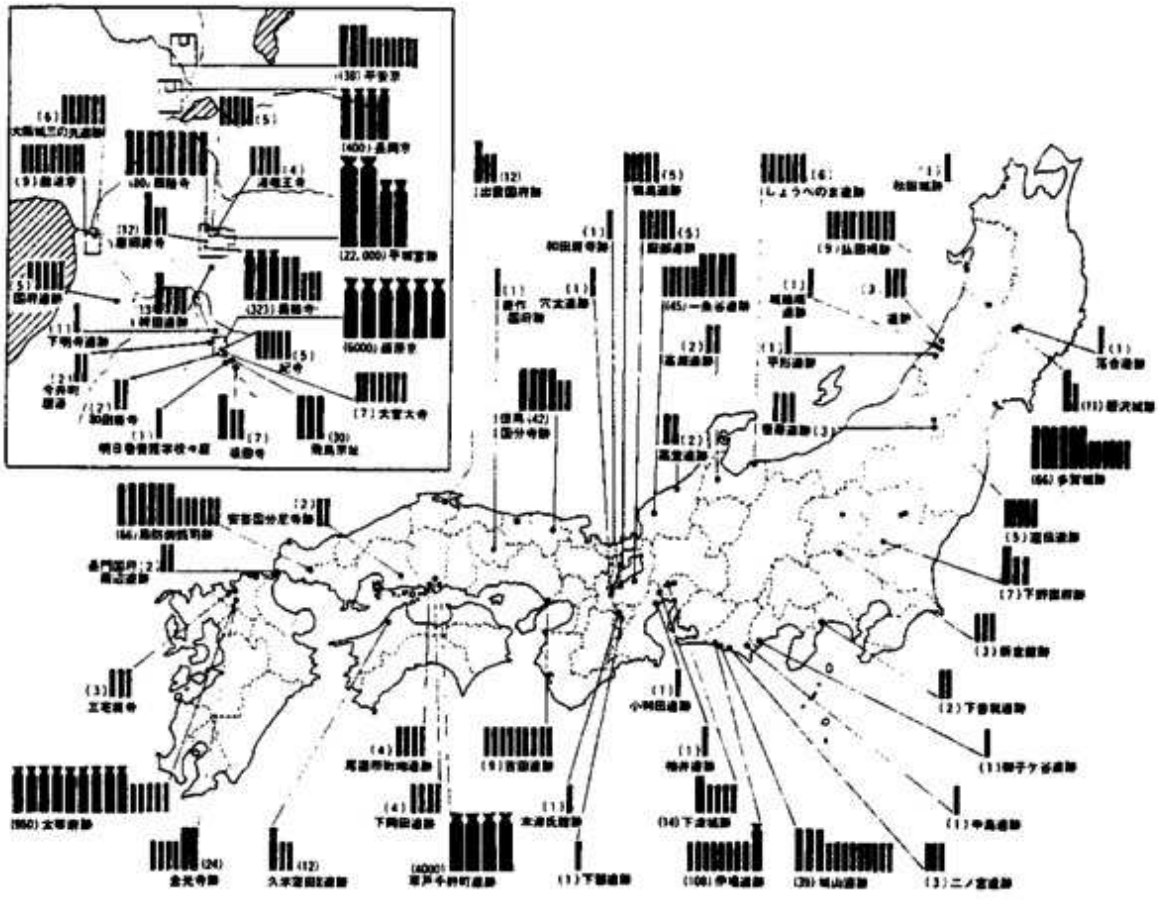


Fig. 40 全国木簡出土地（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『大和の考古学』より）

贄がそれに次いでいるが、今泉隆雄氏によると[16]、まず調の付札はなお検討すべきことは多いと前置きしながらも、藤原・平城両宮跡出土の若狭の調付札の検討により、また郷名を省略したものがあることから、一般に郡段階或いはそれ以上で作成された蓋然性が高いと考えており、白米付札は郷を異にして同筆の木簡があり、かつ国衙様書風の例がみられることから郡衙段階で書かれたと察している。また贄の付札もものによっては国衙段階で作成されたものもあるが、多くは郡衙段階で作成したと推定され、個人が貢進する形は存在しないとされる。そして租税の徴収は、国衙、郡衙、郷家のそれぞれを通じて行政的に処理されるが、中でも郡衙機構が実質的に徴税の中心的な役割を負ったとしている。また、八木充氏[17]も京進する調庸物は郡単位で取りまとめるのが通例で、出土する貢納物札の木簡は一般的に郡家（郡衙）で整えたと考えている。

周防国内の木簡既出地は、周防国府跡[18]、周防鋳銭司跡[19]の2カ所のみである[20]。前者は国府津と推定される地点からの出土で、とくに津という物資集散に係わる場所であり興味深く、また後者は山口市鋳銭司に所在する古代貨幣銭造官司の遺跡であることから、国内の既出地はいずれも官衙であり、木簡の出土は当然であると言える。また全国的にみてもFig. 40で示す通り、宮、官衙、寺院からの出土率が高い[21]。

（三）　硯

1点出土。本例は須恵器製の円面硯で、楢崎彰一氏[22]による分類では透脚硯無堤式に属する。硯の出土はこの地に識字可能な者の存在を裏づけるもので、当時の識字率は明らかでないが識字層として貴族、中央・地方官人、僧尼など文字を必要とした主に上層階級の人々が考えられる[23]。全国各地の出土地をみると一般在地集落より宮、官衙、城柵、寺院の出土率が非常に高いことはこの事を肯定するものである。なお、下級官人層では須恵器の坏や蓋などを転用したいわゆる転用硯が多いと考えることから[24]、吉田にはある程度の上層階級者の存在が推定される。

周防国内の硯の既出遺跡は、周防国府跡[25]、山口市木崎遺跡[26]、周東町原畑遺跡[27]の3カ所である[28]。国府跡では機構上当然ながらこれまで多種多量に出土し、多くの官人層の存在を示唆している。木崎遺跡は吉田遺跡と椹野川を挟んで対峙する位置にある集落遺跡で、円面硯が一点出土している。遺跡の性格については今日明らかにされていないが、古代末期頃の掘立柱建物10棟など顕著な遺構が検出されており、また後述するが周防国内で

Fig. 41　硯実測図

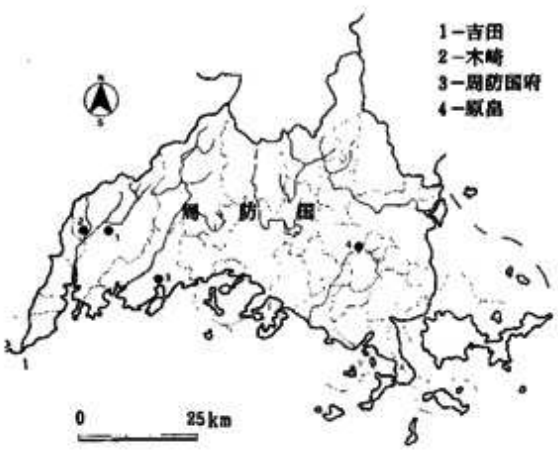


Fig. 42　周防国内硯出土分布図

は希有な緑釉陶器も出土していることから、単に一般在地の農村集落とは考え難い。原畠遺跡は玖珂盆地の縁辺部に位置し、奈良～平安時代の土壙墓群が検出されている。出土状況からみて周辺地からの流れ込みのものと考える円面硯一点が出土しているが、この地は玖珂郡の郡衙が置かれた所で、また多数の皇室部民の存在も文献より推定できる[29]ことも加え、硯の出土は周辺に官衙ないし官人の居住地の存在を示唆するものと思われる。

なお、吉田遺跡出土の硯の時期は、横田賢次郎氏の型式編年[30]によると、このタイプは8世紀末から9世紀初頭に比定されるもので、佐藤氏による石帯の使用推定年代とほぼ同時期であり、使用者の性格を考える上で興味深い。

（四）　墨書土器

昭和58年調査地点では12世紀以降の陶磁器類に墨書を記したものが数点あったものの、古代に遡るものはなかった。しかし、昭和60年度における近接地の調査[31]で、文字は明確に判読できないものの、8世紀に比定しうる須恵器（坏身）の墨書土器が出土しており、硯と合わせて当地での識字層の存在を示唆するものである。

なお、周防国内での墨書土器の既出遺跡は、周防国府跡[32]のみである。

（五）　緑釉陶器

昭和58年度調査では5点出土しており、胎土が須恵質と土師質の両者がある。器種は埦と皿の二種である。

まず、緑釉陶器とは銅を呈色剤とする鉛釉を器表に施した低火度焼成の土器で、日本では奈良時代に起源をもち、平安時代に最も量産され全国各地に供給されたが、その末期には終焉を迎える。当時は「瓷」「瓷器」という文字があてられ、とくに平安時代の文献には「青瓷」或いは「青子」と記されている場合が多い。多彩釉を含めた当初の段階ではその使用形態や出土遺跡の性格からみて主として官衙、社寺、祭祀遺跡における仏器祭祀用具の中枢を占める。平安時代の様相について、とくに畿内では出土量の増大傾向から祭事外の用途も察せられるに至っているが[33]、しかし楢崎彰一氏[34]は平安時代末期、量産され各地の

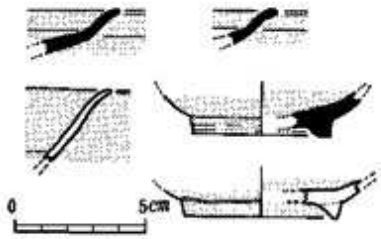


Fig. 43　緑釉陶器実測図

Fig. 44　周防国内緑釉陶器・瓦器出土分布図

集落から大量に出土するようになった段階においても、土師器や須恵器と同様な日常の食器類であったとするにはなお検討を要する問題と言わねばならないとしている。

周防国内における今日までの緑釉陶器の出土地は、周防国府跡[35]、周防鋳銭司跡[36]、木崎遺跡[37]の3遺跡のみである[38]。前2遺跡は官衙で、木崎遺跡も前述した通り上級階級者の存在が推定される遺跡であり、また各遺跡ともその出土量は土器類全体に占める割合が非常に少ない。したがって周防国内では、日常雑器として一般集落にまで供給され用いられたとするにはあまりにも少なく、前段階からの祭祀用具、仏器（具）としての性格が強いと思われる。

なお、『延喜式』民部下に年料雑器として記載されている「長門国瓷器」に関して、寺島孝一氏[39]は周防国府の近傍でも国庁直轄の窯があり、国庁の需要を満たすやきものを生産していた可能性が考えられるとしているが、吉田遺跡出土のもので胎土や釉のかけ具合など周防国府跡出土のものに近似するものがあり、また周防国内では他に緑釉陶窯の発見例がないことからも勘案し、国府から吉田に供給された可能性も考えられよう[40]。

（六）　畿内系瓦器

3点出土しており、いずれも埦である。形状、調整手法等により畿内の和泉型に酷似し、今のところ直接関接的にせよ畿内からの搬入品と考えるのが妥当である。

なお、瓦器とは酸化炎焼成後、還元燻焼した低火度の素焼き土器で、畿内では11世紀中頃から生産が開始され、14世紀末ないし15世紀前半に終焉する。現在、瓦器の生産地は畿内と北部九州の二地域に限られるとされており、畿内では一般集落においても日常雑器に占める割合は高く、その主体

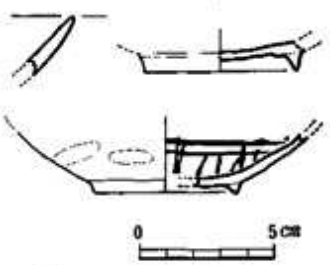


Fig. 45
畿内系瓦器実測図

を占めるまでに至っており、かなり商品化していたことが窺われる。[41] また北部九州では畿内からの搬入品があるものの、在地で生産されたものも多く出土しており、宇佐地方にあっては郡単位程度の範囲で自給的に生産されていたとの推測もされている。[42] しかし、瀬戸内地域では現時点在地生産は認められておらず、畿内産とくに和泉型と楠葉型の搬入品が出土する。[43]

出土遺跡数は近年増加しているが、全体の遺跡数からすれば数少ない。安芸国内では小規模集落まで分布しているが、備後国内では当時物資の集散的性格を示す遺跡に多い傾向があるとされる。[44]

周防国内の場合、瓦器の既出地は周防国府跡のみで、その数量も吉田遺跡と同様日常雑器として使用されたと考えるにはあまりにも少ない量である。[45] なお、吉田遺跡出土の瓦器の時期は概ね12・13世紀と比定される。

（七）　輸入陶磁器

中国から輸入された陶磁器類は昭和58年以前の調査でも出土しているものの、今回の調査では破片総数百点以上にもおよぶ。これらは白磁と青磁（龍泉窯・同安窯）で、若干後出のものも含むが、横田賢次郎・森田勉氏編年[46]のⅡ期1小期に属するものが大半を占め、時期は12世紀中葉から13世紀前半に比定されているものである。

Fig. 46　周防国内輸入陶磁器出土分布図

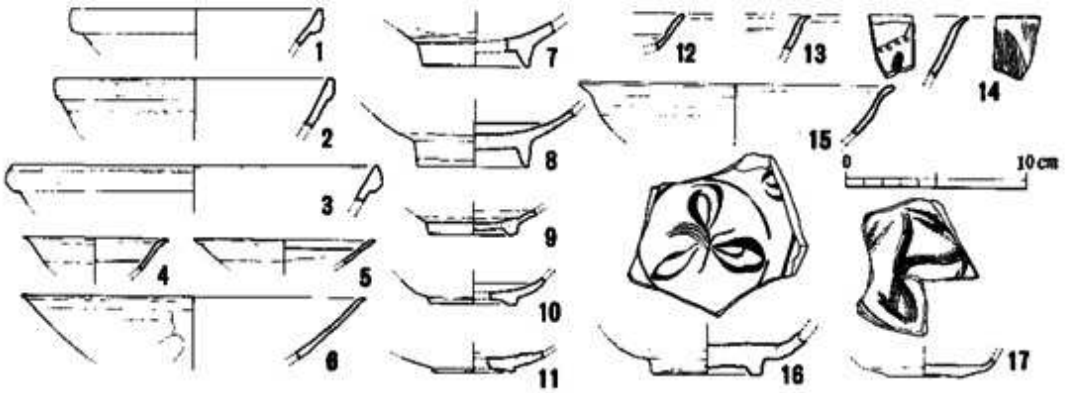


Fig. 47　輸入陶磁器実測図（1～11白磁、12～17青磁）

これら輸入陶磁器類は日宋貿易の一端を窺い知り得るもので、周防国内での宋代の輸入陶磁器出土状況をみると、既出遺跡は昭和60年までに23遺跡[47]で、遺跡の数、内容からいえば小規模な在地集落までかなり広く供給されていたことが看取される。しかし、各遺跡の出土量には多寡があり、比較的多く出土する遺跡は古代に官衙が設置されていた国府跡、鋳銭司跡およびその周辺の数遺跡に限られ、大半の遺跡は少量である。したがって、吉田遺跡の場合、在地の一般集落よりも卓越した出土量を示している。

4. 遺跡の性格

前節で出土遺物について検討したが要約すると、奈良時代から少なくとも平安時代初め頃までは、石帯、硯、墨書土器から官人を含めた上層階級者の存在を示しており、また詳細な時期を限定できないが木簡の出土により当地が物資の集散地であり、地方行政機構組織の範疇に組み込まれていたことが推察できる。平安時代の緑釉陶器、12・13世紀の畿内系瓦器も周防国内では希有な遺物であり、単に一農村における日常雑器とは考え難く、また前者は周防国府近傍でその生産が行なわれていた可能性もあり、後者についても既出地が国府跡のみであることから、吉田遺跡と国衙との関係が看取される。さらに輸入陶磁器類では同時期の一般在地集落と比べて量的に卓越しており、中世初めにおいては富裕層の存在を裏づけるものであろう。

では、古代・中世に吉田の地にいかなる性格・機能をもつ集落・施設等が実存していたかを以下、可能性のあるものを提起し検討する。

まず、古代においては官人の存在を示唆できることから、地方の官衙ないしそれに準ずる性質をもつ機構の所在地として考えてみよう。初めに郡衙[48]の可能性について述べると、周防国の改新当時の郡の数と名称は明らかではないが、平安時代の『和名類聚抄』国郡部に大島（於保之保）・玖珂（久賀）・熊毛（久万計）・都濃・佐波（佐婆）・吉敷（与之岐）の六郡が載っており、山口盆地はその内の吉敷郡に統轄される。養老令によると郡は里（郷）の数により大（20～16里）、上（15～12里）、中（11～8里）、下（7～4里）、小（3～2里）の五等に分けられるが[49]、吉敷郡は10里と記されていることから中郡に相当する。吉敷郡の所在地については今日定説はなく、『地名淵鑑』では山口市朝倉付近を推定しており、この説は「クラ」という地名から察したと思われ、最も有力視されている。また中世吉木本郡の称から山口市吉敷付近とする説もあるが両地域とも考古学的には決め手を欠く。

山中敏史氏は『日本古代の都城と国家』の中で郡衙遺跡と判断する指標をいくつか掲げ

ているが[50]、吉田遺跡に関しては遺構に関する点は現時点不明であるものの「低台地上や丘陵基部に立地すること」「木簡・墨書土器や硯など遺物のうえで特徴があること」など立地と遺物に関する点では条件に適応している。また、場所選定条件としては後述する庄所設置条件とも同様に小河川や道との関係を重視し、交通の要所であることが指摘されるが、この点では吉田の地は山口盆地を貫流し、山口湾、瀬戸内海に通じる椹野川の水運を利用し得る地にある。陸路に関しても時期は下るが平井の地に一里塚があったとされ[51]、少なくとも近世の段階では椹野川左岸に官道があったと推定される。中世以前でも大内氏が山口へ移住する以前はその拠点が大内の地に置かれていたことから察[52]し、古くは吉田を通る椹野川左岸ー道祖ケ峠ー大内盆地のルートがあったのではないかと憶測する。

さらに、山中氏によると郡衙周辺には公の寺としての性格を有する寺院が営まれている例が多いとの指摘があるが[53]、吉敷郡内では伝承は別として創建が平安時代前半までに遡る寺院の存在は考古学的には立証されておらず、この点に関しては言及することはできない[54]。また藤岡謙二郎氏は郡衙の近くに郡司一族の氏神および国家祭祀に関わる性格を有すると考える神社が存在する例も多くあり、その関係を取り上げている[55]。しかし吉敷郡内における式内社は宮野の地に鎮座した古来三ノ宮と称した仁壁神社一座のみで、その地は吉田の地はもとより、これまで郡衙の推定地になっている朝倉や吉敷とも距離的に隔たりがある。推定郷域も宮野は『大日本地名辞書』で「宇努郷」、『防長地名淵鑑』では「神前郷」とされている。また逆に宮野の地では奈良～平安時代の顕著な遺跡は知られておらず、その郷域においても郡衙の有無は明らかではない[56]。

なお、官衙と断定することは他の遺跡でもなかなか難しいようで、これまで国衙・郡衙とほぼ認定されている遺跡でも山中氏の条件をすべて満たしていないものも多くある。それらの指標はあくまでもおおよその手懸りであって、判定を下す決定的なものは今のところない。とくに、今回のような主に遺物からの官衙立証についてみると、木簡はこれまで役所の遺跡や寺院に特有な遺物とみられ、硯も上級階層のものとし、その出土は役所の遺跡とする一つの傍証資料になるものの、最近では一般集落でも少量ながら出土する例がみられてきており、そのため残念ながらこれらをもってだけでは十分条件とはできない。ただし、山中氏も言われるようにこの種の役所、役人に関する遺物の種類、出土量が多くなるほど、その確率は高くなるといえよう。また、郡衙関係では役所の他に、郡司の館なども考えなければならないと思われる。

次に、地方行政機構の最末端である郷家の所在地と推定すると、『倭名類聚抄』によれ

郷名	大日本地名辞書	防長地名溯鑑	備考
八田	山口市大内町矢田小鯖	同上	
宇努	旧山口町 山口市宮野地区	旧山口町（朝倉・湯田を除く）	
仲河	山口市大歳（平川）カ	山口市大内町氷上・御堀・問田	
益必	不詳	山口市秋穂二島 吉敷郡秋穂町	
夜介比止		宇部市東岐波区 西岐波区カ	
広伴	吉敷郡小郡町カ	山口市宮野地区	
神前	宇部市東岐波区 西岐波区カ		
加無佐岐			
多宝	吉敷郡小郡町大海	防府市大道 吉敷郡秋穂町大海	刊本は最後尾
八千	防府市大道	山口市陶・鋳銭司	高本は駅名
賀宝	山口市嘉川 吉敷郡阿知須町	山口市嘉川	高本はなし
浮囚（浮）カ	山口市仁保カ	山口市平川大歳	

Tab. 8 吉敷郡内郷推定地
（『山口市史』1982より）

ば、吉敷郡内には八田・宇努・仲河・益必・広伴・神前・多宝・八千・賀宝・浮囚の十郷があり、他に郡名と同じ吉敷郷があったとする説もある。[57] この内、当地を包括する平川地域は『大日本地名辞書』によると疑問を残しながら仲河を当て、『防長地名溯鑑』では東大寺領椹野庄と語音が類似するところから浮囚郷と推定しているものの現時点では確定した見解はない。仮に吉田遺跡に郷に関連した施設等があったとすると、京進物資の集散地すなわち木簡の作成が郡以下の郷段階で行なわれたとする説[58]もあり、これを肯定するものである。また銙帯の着用者条件においては郷長クラスの者としても位階の基準を下げなければならず、令の規制力に疑問が生じる。なお、吉田の地の一部には「郷」の名を残す字名がみられ、文献史料から少なくとも15世紀初め頃には吉田郷の地名は存在するが、律令制の郷（里）制から踏襲されたかは全く明らかではない。

また、この他に官衙ではないが、椹野川沿岸地域に置かれたと言われる東大寺領椹野庄の存在も無視できないものである。椹野庄は、仁平3年（1153年）『東大寺諸庄園文書目録』（平安遺文）に「周防国椹野庄一巻卅六枚天平勝宝六年産業勘定、一巻卅三枚天平宝字四年産業勘定、一巻十一枚同年雑文書、一巻四枚同五年官符坪付」とあることから、東大寺の官省符庄として成立したものと考えられ、その成立時期は、『東大寺要録』には天平年間（729～748年）としている。ただし竹内理三氏は天平勝宝4年（753年）と比定しており、両者若干の時期差があるが、いずれにしろ8世紀中頃までに成立したもので、いわゆる初期庄園である。[59] その面積は天暦4年（950年）の『東大寺封戸庄園并寺用帳』（東南院文書）には91町6段19歩、長徳4年（998年）の『東大寺領諸国庄家田地目録』（東南院文書）には91町6段69歩と記されており、およそ91町余におよ

ぶ。その庄域は『防長地名淵鑑』によると高井、勝井、岩富、高畠、福原、小原などの椹野川沿岸地域から、その河口にあたる小郡地域が推定されている[60]。

初期庄園とくに東大寺領の場合、その成立期における開墾・経営は、国家の厚い保護のもとに国司・郡司および豪族の積極的協力を得て実施されている。岸俊男氏は、越前国における東大寺領の初期庄園経営を検討しているが、その結果、東大寺領は寺領であるが造東大寺司という律令制官僚機構による官的経営であったとしており[61]、もし仮に当地に東大寺領庄園の庄所（庄家）が設けられていたとすれば、その開発運営が律令的機構下で行なわれ国司の管理権が及んでいると推定されることから、銙帯を持ち得た官人が居住していたとしても不思議ではない。また庄所である以上、物資集散機能をもつため木簡の作成、硯の保有も必然的であり、現に各地の庄園遺跡からも出土している。さらに、文治2年（1186年）に東大寺は、平氏によって焼かれた大仏の殿舎の再建のため周防国を造営料国にあてているが、今日まで国府跡でしか出土していない畿内系瓦器が当地にも搬入されていたことや当時の周防国は[62]「源平争乱の余り田畠は荒廃し土民はなきが如き有様であった」とされているにもかかわらず、輸入陶磁器の保有量は他の一般在地集落よりも卓越しており、そこには何らかの要因があったと思われ、その1つとして東大寺の管理下を想定できる。なお、吉田遺跡のすぐ南には吉田の地の氏神である平清水八幡宮が存在している。この社は大同4月（809年）に宇佐から勧請されたといわれるが確証はない。しかし、古社であることは鎌倉時代の文書にこの平清水の社名印を押したものがあり明らかである。椹野庄の中心部と推定されている現在の小郡町内に鎮座する神社は例えば中領八幡宮や中郷八幡宮など宇佐八幡宮より勧請したとするものが多く[63]、また椹野庄の領主である東大寺も宇佐八幡宮を勧請して鎮守としていることなどから、椹野庄と平清水八幡宮さらに吉田遺跡との連関性が考えられ、今後の検討課題の1つでもある。

さらに、鎌倉時代以降では平清水八幡宮の徳治3年（1308年）の神主職譲状に「恒富保平清水八幡宮並吉田村田諸社神主職事云々」とあり、また廃寺高蔵寺の応永21年（1414年）の鐘銘には「周防国吉敷郡恒富保吉田郷高蔵寺」（注進案）とあり、吉田は中世に恒富保の一部であったらしいと推定されている[64]ことから、その関係も看過できない。恒富保の成立年代は明確ではないが、三浦文書に建久8年（1197年）、平（子）重経が鎌倉幕府から恒富保の地頭職に任ぜられた記述があることから、少なくとも鎌倉幕府成立直後には存在していたことが窺われる。その中心地は吉田村の南にあたる今山の西南麓、高倉山の北西部の平地、近世恒富村と称した地であると推定されている[65]。保は平安時代以降、国衙

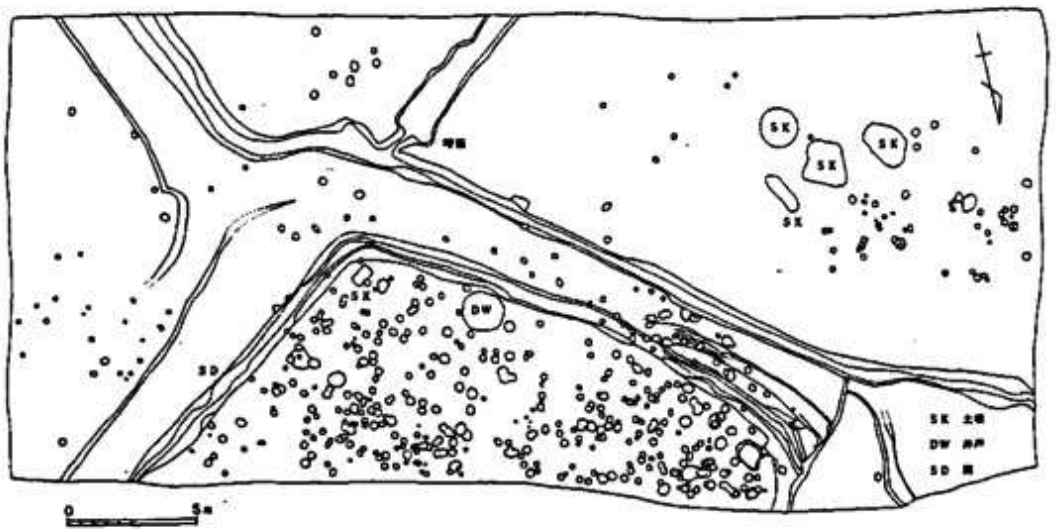


Fig. 48　吉田構内L－14区遺構配置図

領の地域的行政単位でとくに11世紀頃より急速に発展したものであるが、文治2年以降周防国は東大寺の知行国にあてられ、東大寺が国衙領に対する支配権をもっていることから、恒富保と東大寺との関係も考えなければならず、また椹野庄との関連性も注意されよう。さらに13世紀に至って恒富氏は本家の恒富氏と、分家の吉田氏の両家に分かれ、永く恒富・吉田の地を伝領して家門が栄えるが、その館跡の設置地も今だ明らかではない[66]。今回の調査地の南西側に延びる緩傾斜面上では昭和54年に室町時代の環溝をもつ屋敷跡（Fig.48）が検出されているが[67]、このような屋敷構えは周防国内では数少なく、比較的富裕な特定の階層農民の屋敷とする説も[68]あることから、当遺構が恒富保、吉田氏に関係する上層階級者の宅地跡の一部とも考えられよう。

5. おわりに

今回の調査では古代から中世にかけての遺物が多量に出土した。その中で特殊な性格を具備するもの、或いは周防国内で特異的な出土状況を示すものがあることから、その保有の背景には吉田の地における当時の社会、経済的な要因が反映しているものとし、当調査区周辺に設営されていたと予想される施設機関等を若干考えてみた。未だ傍証資料不足で断定はできないものの、在地における一農村すなわちいわゆる自然村というよりも、官人を頂点とした重層構造の集団の存在が考えられ、直接間接的にせよ国家機能と関連する施

設である行政村或いはそれに係わる上級階層者ないし富豪層の館が設けられていたとする蓋然性は高いと思われる。そこには官衙、庄所などいくつかの可能性が察せられ、具体的には吉敷郡衙、吉敷郡内の一郷家ないしはそれに携わる郡領、郷長クラスの居宅、また東大寺領椹野庄の庄所、さらに中世以降では恒富保、吉田氏に関係する施設などが想定される。

最後に、本稿では問題提起に終始したが、今後の調査如何では諸施設の構造を示す遺構の検出、文字資料の発見など物的資料の集積によって、さらにより具体的に解明できると考えられる。今回は現段階の資料で当時の吉田の様相を推定することは早計と承知の上であるが、今後の調査研究を進める上で参考になればと思い、敢えて述べたものである。さらに検討すべき問題は多いと考え、今後も様々の視点からその解明に努力したい所存でありますので、先学諸賢の御教示、御叱正を賜われば幸いに存じます。

〔注〕

1) 河村吉行『山口大学構内遺跡調査研究年報』昭和56年度（山口大学埋蔵文化財資料館、1982年）。
2) 河村吉行・森田孝一他『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』（山口大学埋蔵文化財資料館、1985年）。
3) 佐藤興治「金属器」（『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』、奈良国立文化財研究所、1975年）。
4) 亀田　博「鈴帯と石帯－出土鈴・石鈴の研究ノート」（『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢』、1983年）。
5) 前掲注3）に同じ。
6) 山中敏史・佐藤興治『古代の役所』（古代日本を発掘する5、1985年）。
7) 栄原宏他「九世紀以前郡司一覧表」（『古代の日本』9、研究資料、1971年）。
8) 山口県文書館『山口県史料』古代編（1973年）。
9) 米田雄介『郡司の研究』（1976年）。
10) 前掲注4）に同じ。
11) 防府市教育委員会「周防国府跡昭和50年度発掘調査概報」（『防府市文化財調査年報Ⅱ』、1981年）。
12) 山口県教育委員会『玉祖遺跡・西小路遺跡』（1983年）。
13) 前掲注12）に同じ。
14) 田村哲夫「防府市」（『山口県の地名』、日本歴史地名大系36、1980年）。
森田孝一「奥正権寺古墳－まとめ－」（『奥正権寺遺跡』、山口県教育委員会、1984年）。
15) 狩野　久『木簡』（日本の美術9、1979年）。
16) 今泉隆雄「貢進物付札の諸問題」（『研究論集Ⅳ』、奈良国立文化財研究所、1978年）。
17) 八木　充「文献からみた秋根遺跡」（『秋根遺跡』、下関市教育委員会、1977年）。
18) 防府市教育委員会「周防国府跡昭和53年度発掘調査概報」（『防府市文化財調査年報Ⅰ』、1979年）。
19) 山口市教育委員会『周防鋳銭司跡』（1978年）。
20) 曽我正人「県内の関連遺構・遺物出土地名表－木簡－」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年）。
21) 前掲注15）に同じ。
22) 楢崎彰一「日本古代の陶硯－とくに分類について－」（『考古学論考』、小林行雄博士古稀記念論文集、1982年）。
23) 石井則孝「日本古代文房具史の一面－陶硯について－」（『古代探叢』、滝口宏先生古稀記念考古学論集、1980年）。
24) 玉口時雄「転用硯考－墨書土器研究への一考察－」（『古代探叢』、滝口宏先生古稀記念考古学論集、1980年）。

25) 防府市教育委員会『周防の国衙』(1967年)、『防府市文化財調査年報Ⅰ』(1967年)、その他。
26) 山口県教育委員会『朝田墳墓群Ⅰ、木崎遺跡』(1976年)。
27) 山口県教育委員会『白田・原畠・新畑遺跡』(1973年)。
28) 高下洋一「県内の関連遺構・遺物出土地名表一覧一」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年)。
29) 井上辰雄・早川万年「皇室部民」(『日本歴史地図』原始・古代編〈下〉、1982年)。
30) 本例は横田氏分類の1－C－b・ハに相当しよう。
横田賢次郎「福岡県内出土の硯について一分類と編年に関する一試案一」(『九州歴史資料館研究論集9』、九州歴史資料館、1983年)。
31) 山口大学埋蔵文化財資料館が昭和60年度に実施した「大学会館前庭部の環境整備に伴う試掘調査」である。
32) 森田孝一「第28次調査(GF地区)」(『防府市文化財調査年報Ⅱ一周防国府跡・周防国分寺昭和56年度発掘調査概報』、防府市教育委員会、1984年)。
33) 田中　琢「三彩・緑釉」(『世界陶磁全集』2　日本古代、1979年)。
34) 楢崎彰一「平安時代の施釉陶一青瓷と白瓷一」(『世界陶磁全集』2　日本古代、1979年)。
35) 前掲注25)に同じ。
36) 前掲注19)に同じ。
37) 前掲注26)に同じ。
38) 杉原和恵「県内の関連遺構・遺物出土地名表一緑釉陶器・瓦器一」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年)。
39) 寺島孝一「いわゆる「長門国産器」をめぐる二、三の私見」(『古代学叢論』、角田文衛博士古稀記念、1983年)。
40) 施釉陶器に関連して、今回の調査ではないが、山口大学構内の近接地で灰釉陶器の出土もある。
41) 橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』(高槻市教育委員会、1980年)。
42) 小倉正五「宇佐地方の瓦器碗について」(『古文化談叢』第17集、九州古文化研究会、1984年)。
43) 橋本久和「瓦器椀の地域色と分布(二)一瀬戸内海を中心として一」(『摂河泉文化資料』第26・27号、1981年)。
44) 川越俊一「中・四国地方の瓦器一特に広島県下出土例を中心として一」(『芸備』第11集、1982年)。
45) 吉瀬勝康「周防国府跡出土の瓦器」(『古文化談叢』第14集、九州古文化研究会、1984年)。
46) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4、1977年)。
47) 吉田　寛「県内の関連遺構・遺物出土地名表一輸入陶磁器一」(山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年)。
48) 郡の役所は「郡衙」の他「郡家」「郡府」「郡治」などいくつかの用語があり統一されていない。本稿では一応「郡衙」を用いるが、八木充氏は『秋根遺跡』(下関市教育委員会、1979年)の中でこの用語について、郡衙が官衙の建造物というよりも行政機関そのものを対象とした用語と理解すべきとし、「郡家」と称するのが妥当と指摘されている。
49) 福山敏男「地方の官衙」(『日本の考古学』Ⅳ　歴史時代(下)、1967年)。
50) 山中敏史「遺跡からみた郡衙の構造」(『日本古代の都城と国家』、1984年)。
51) 山口市歴史民俗資料館　内田伸氏の御教示による。
52) 大内氏が大内村から山口に移住したのは正平15年(1360年)頃と推定されている。
53) 山中敏史「評・郡衙の成立とその意義」(『文化財論叢』、1983年)。
54) 吉田の南に聳える今山のふもとには、詳細不明であるが創建が文武天皇の頃と伝承される多聞寺があったとされ、今後検討を要するかもしれない。
55) 藤岡謙二郎「『延喜式』式内社と古代の郡・郷分布との関係について」『橿原考古学研究所論集』第7、1984年)。
56) 郡衙の一推定地である吉敷の地には、式内社ではないが周防国四ノ宮とされる赤田神社がある。しかしその神社周辺でも遺跡は稀薄である。
57) 河村乾二郎「原始・古代」(『山口市史』、1982年)。

58) 佐藤　信「米の輸貢制にみる律令財政の特質」(『文化財論集』、1983年)。
59) 前掲注57)に同じ。
60) 河村義二郎「古代の小郡」(『小郡町史』、1979年)。
なお、元福元年(1233年)の関東下知状に「小郡ならびに賀河荘は当所一所なり」とあることから、中世以後は暮川あたりまで庄園が拡大したと推定されている。
61) 岸　俊男「越前国東大寺領庄園の経営」(『日本古代政治史研究』、1966年)。
62) 三坂圭治「周防国府の歴史－中世以降の変遷－」(『周防の国府』、防府市教育委員会、1967年)。
63) 山口県神社庁編『山口県神社誌』(1972年)。
64) 内田伸・石川卓美「山口市」(『山口県の地名』、日本歴史地名大系、1980年)。
65) 前掲注64)に同じ。
66) 石川卓美『平川文化財散歩』(1972年)。石川氏は吉田氏の館の設置地について殿山と称する山を地名よりその関係を推測している。
67) 前掲注1)に同じ。
68) 山口県教育委員会『上辻・大歳・今宿西』(1984年)。

(付記)
なお、この拙稿を作成するにあたって山口大学の近藤義一先生をはじめ、八木充先生、木村忠夫先生、中村友博先生、河村吉行氏、山口市歴史民俗資料館の内田伸氏および多くの方々より御指導、御教示を頂いた。記して謝意の意を表します。

Tab. 9 関連事柄年表

年代　(西暦)	事柄
天平勝宝六年(754)	東大寺領周防椹野庄垂業勘定成る(守屋孝蔵氏所蔵文書)
天平宝字五年(761)	東大寺領周防椹野庄官符坪付成る(守屋孝蔵氏所蔵文書)
天　安三年(858)	周防国正六位上仁壁神に従五位下を授ける(文徳実録)
貞　観九年(867)	周防国従五位下仁壁神に従四位下を授ける(三代実録)
元　慶二年(878)	周防国正六位上赤田神に従五位下を授ける(三代実録)
天　歴四年(950)	東大寺封戸庄園中に椹野庄田九一町余あり(東南院文書)
文　治二年(1187)	周防国、東大寺造営料国となる(玉葉)
建　久八年(1197)	平子重経、仁保庄恒富保の地頭職に補せらる(三浦文書)
正　治二年(1200)	後乗房承源、周防阿弥陀寺用料田畠を定む、吉木本郡小木里平田里湯田等の名見ゆ(阿弥陀寺文書)
承　元四年(1210)	幕府、平子重経の仁保庄地頭職を安堵する(三浦文書)
承　久三年(1221)	東大寺領宮野庄・椹野庄に武士の狼籍することを禁ず(東大寺要録)
貞　応元年(1222)	一時弘法師を椹野庄地頭職に補す(東大寺文書)
天　福元年(1233)	幕府、東大寺領椹野庄の地頭職を停む(東大寺要録)
文　永七年(1270)	幕府、平子重親を仁保庄五ヶ郷の地頭公文となす(三浦文書)
観　応元年(1350)	大風高潮、東大寺領椹野庄の年貢免除、翌三月の間において軍勢乱入し兵糧米を強取する(東大寺文書)
延　文五年(1360)	大内弘世、大内村より山口に移ると伝う(山口古図注記)

吉田遺跡採集の円筒埴輪について

吉　田　　寛*

はじめに

1967年、小野忠熙氏を団長とする山口大学構内吉田遺跡調査団によって、現在の家畜病院から女子寮に至る間の丘陵の一部が調査された。この地区は調査団による地区割の第Ⅰ地区（現在の地区割のP～S－18～21地区）と呼称されている部分にあたり、調査開始当初から円筒埴輪を出土する地区として注意が促されていた[1]。しかし、埴輪資料の図面等が公表されたことはなく、その具体的様相は今日に至るまで不明確なままであった。

ところで筆者は山口大学考古学部に所属していた折、同部所有の倉庫で吉田Ⅰ地区より表採されたという円筒埴輪片を見い出した。この資料は1979年11月3日に採集されたという記録が存在するものの、筆者が実見した当時（1982年）は、まだ一部が未水洗の状態であった。これらの埴輪片が考古学部に所蔵されるようになったいきさつは明らかでないが、同部は例年11月初旬前後に、山口盆地内の遺跡パトロールを行っており、これらの資料もその際の活動時に採集されたものと推定される。

吉田Ⅰ地区出土の円筒埴輪の様相が不明確な現在、考古学部が所蔵している資料の意義は非常に大きく、今回紙上を借りて、資料紹介と若干の考察を行いたい。

吉田Ⅰ地区採集の円筒埴輪

吉田Ⅰ地区より採集された円筒埴輪は小破片であり、全体の形や直径等を復原できるものはない。しかし一部には、比較的保存状態の良好なものが存在する。これらの資料はタガの形状や調整の方法、及び胎土や色調より大きく二類に分類できる。

Ⅰ類（Fig.49，1～9）　タガの断面が台形で、高さが0.8cm程度と突出度が比較的強いもの。色調は黄橙色を呈するものが多く、後述するⅡ類と比較するとやや明るい色調となる。胎土は精選されているが、若干の微細砂粒を含む。焼成は良好で、土師質である。黒斑は認められない。調整は外面にやや粗いタテ刷毛、内面に丁寧なナデを行うものが大多数である。外面のタテ刷毛は、タガ貼付以前の一次調整の際に施されたもので、タガ貼付に伴うヨコナデによって切られている。タガ貼付後の二次調整は行われていない。内面には一部にタテ刷毛が残存する資料（8・9）があり、ナデ調整が行われる以前に、部分的にタテ刷毛が施されていた可能性もある。保存状態が良好である1は、タガ上面両端にほぼ2

* Yutaka YOSHIDA　山口大学人文学部考古学研究室

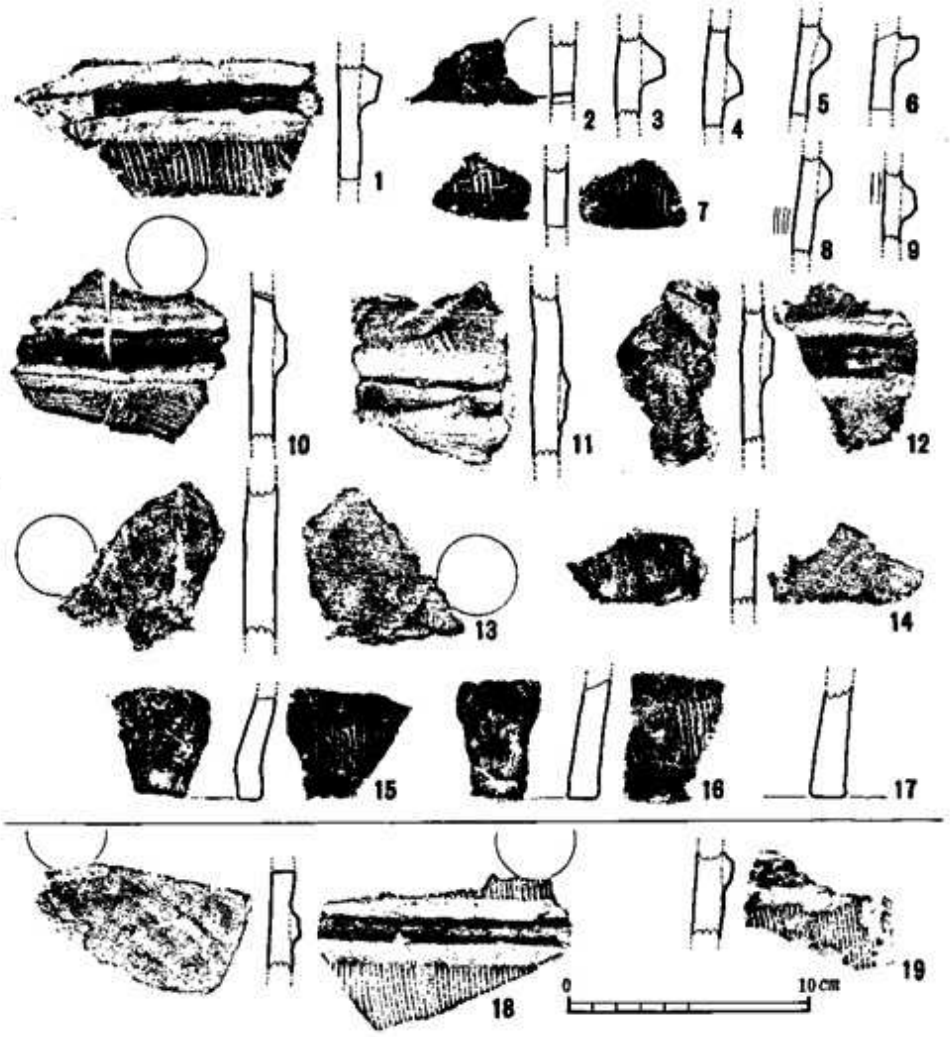


Fig. 49　円筒埴輪実測図（1～17 吉田第Ⅱ地区、18・19 大門古墳、山口大学考古学部蔵）

cm間隔で小さな凹みが認められ、また内面のタガに対応する部分にも指オサエ痕らしきわずかな凹みが存在する。これらはタガ貼付の際に残った痕跡と思われる。なお円形スカシ孔の一部が残存する小破片（2）も存在する。

Ⅰ類（Fig.49，10～14）　タガの高さが0.4 cm程度と扁平なもの。色調は橙色でⅠ類のものより赤味が強い。保存状態は良好で、胎土は精選されており若干の微細砂粒を含む。焼成は良好で土師質である。黒斑は認められない。調整は外面に比較的細かい刷毛、内面にナデを施すことを基本とする。ただし外面の刷毛はランダムであり、破片ごとに施し方が異なる。即ち10のタガ上位では、ヨコ刷毛の後タテ刷毛が施され、下位ではタテ刷毛の後ヨコ

Tab. 10　円筒埴輪観察表

No.	分類部位	色調	胎土	焼成	調整の特徴	備考
吉田遺跡第Ⅰ地区						
1	Ⅰ類	内・外・断ー橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ーやや粗いタテ刷毛、タガ付近はヨコナデ 内ーナデ	タガ上面両端と内面にオサエ痕。破片下位は粘土つぎ目で破損
2	Ⅰ類	内・外・断ー黄橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ータテ刷毛 内ーナデ	円形スカシ孔の一部が残存。破片下位は粘土つぎ目で破損
3	Ⅰ類	内・外・断ー黄橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	内・外面の風化が著しく、調整は不明	*・4.2×*・6.0㎝程度の破片
4	Ⅰ類	内・外・断ー黄橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	内・外面の風化が著しく、調整は不明 外ータガ付近はヨコナデか	*・4.0×*・7.0㎝程度の破片
5	Ⅰ類	内・外・断ー黄橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	内・外面の風化が著しく、調整は不明	*・4.0×*・3.5㎝程度の破片
6	Ⅰ類	内・外・断ー黄橙色	精良　微細砂粒を含む	やや良好	内・外面の風化が著しく、調整は不明	*・3.2×*・6.2㎝程度の破片、破片上位下位と6粘土つぎ目で破損
7	Ⅰ類	外ー浅黄橙色 内・断ー橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ータテ刷毛 内ータテ刷毛後、一部ナデ	円形スカシ孔の一部が残存、破片下位は粘土つぎ目で破損
8	Ⅰ類	内・外・断ー橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	内・外面の風化が著しい 内面にわずかにタテ刷毛が残る	*・3.0×*・6.0㎝程度の破片
9	Ⅰ類	内・外・断ー橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	内・外面の風化が著しい。 内面にわずかにタテ刷毛が残る	*・4.5×*・4.0㎝程度の破片
10	Ⅱ類	内・外ー橙色 断ーにぶい橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ーヨコ刷毛+タテ刷毛(上位) タテ刷毛+ヨコ刷毛+斜め刷毛(下位) 内ーナデ、指紋が一部残る	円形スカシ孔の一部が残存
11	Ⅱ類	内・外ー橙色 断ーにぶい赤褐色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ーヨコ刷毛+タテ刷毛+ヨコ刷毛(上位) ヨコ刷毛(下位) 内ーナデ	
12	Ⅱ類	内・外ー橙色 断ーにぶい赤褐色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ータテ刷毛+斜め刷毛(上位) タテ刷毛+ヨコ刷毛(下位) 内ー指削り状の斜めナデ	
13	Ⅱ類	内・外ー橙色 断ーにぶい橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ーB種ヨコ刷毛、タテ刷毛 内ー指削り状の斜めナデ	円形スカシ孔の一部が残存
14	Ⅱ類	内・外ー橙色 断ーにぶい橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ーB種ヨコ刷毛 内ー指削り状の斜めナデ	
15	底部	内・外・断ー浅黄橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ータテ刷毛 内ーナデ	
16	底部	内ー橙色 外ー浅黄橙色 断ーにぶい橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ータテ刷毛 内ーナデ	
17	底部	内ー黄橙色 外・断ー浅黄橙色	精良　微細砂粒を含む	やや良好	内・外面の風化が著しく、調整は不明	
大門古墳						
18	—	内・外・断ーにぶい橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ータテ刷毛、タガ付近はヨコナデ 内ー斜めナデ	円形スカシ孔の一部が残存
19	—	内・外・断ー橙色	精良　微細砂粒を含む	良好	外ータテ刷毛、タガ付近はヨコナデ 内ーナデ	

刷毛が施され、さらにその上から斜め方向の刷毛が重ねられている。11のタガ上位ではヨコ刷毛をタテ刷毛が切り、その後さらにヨコ刷毛が施される。下位ではヨコ刷毛のみが認められる。12のタガ上位ではタテ刷毛後斜め刷毛、下位ではタテ刷毛後ヨコ刷毛が行われる。13ではヨコ刷毛とわずかにタテ刷毛が認められるが、両者の前後関係は明確ではない。14はヨコ刷毛のみが認められる破片である。なお13、14に施されたヨコ刷毛は連続的なヨコ刷毛で、いわゆるB種ヨコ刷毛[2]と呼ばれているものに相当する。これにより外面の刷毛調整は数回にわたって施されたものと思われるが、これらはすべてタガ貼付以前の一次調整の際に行われたもので、タガ貼付後の二次調整の際に行われたと思われる明確なものは存在しない。内面調整では、丁寧なナデを施すもの（10）や指削り[3]と呼ばれる斜め方向のナデが施されるもの（12～14）がある。また10では小さな指紋の一部が認められる部分がある。なお円形スカシ孔の一部が残存する破片（10・13）があり、内面のスカシ孔周辺では指オサエが認められる。

Ⅱ類として分類したこれらの5個の破片は、色調や胎土が酷似しており、同一個体であった可能性もある。

底部（Fig.49，15～17）　底部付近の内面に、指オサエやナデを施すもの（15・16）と何ら調整を行わないもの（17）が存在する。15・16の外面にはタテ刷毛が認められる。17は内外面とも風化が著しく、調整は不明である。なお15・16は粘土つぎ目で破損しており、底部付近の粘土帯積み上げが、約4～5cm程度の単位で行われていることを示している。色調は浅黄橙色で、胎土の状況等もⅠ類の方により近い印象を受ける。

以上、山口大学考古学部所蔵の吉田Ⅱ地区採集の円筒埴輪片を紹介した。資料数が少ないことにやや不安を覚えるものの、上記のⅠ類とⅡ類の間には色調や胎土、調整手法、タガの形状等に明確な違いがあり、時期差ないしは工人差を反映するものとして注目される。Ⅰ類・Ⅱ類とも明確な二次調整を欠くことやタガの形状から、川西編年Ⅴ期[4]（6世紀代）の特徴を示すものであろうと考えられる。

ま　と　め

現在、山口県内で埴輪を出土する遺跡は15箇所[5]を数えるが、そのうち川西Ⅴ期併行期に位置づけられるものは徳山市耳取古墳・防府市塔ノ尾古墳・豊浦町大門古墳、そして山口市吉田Ⅱ地区の4箇所にすぎない。そのうち塔ノ尾古墳[6]の埴輪については、実体が不明である。

まとめ

耳取古墳[7]では円筒埴輪と朝顔形埴輪が検出されている。実測図が公表されているのは、須恵質の胎土を持つ円筒埴輪で、完形に復原できるもの1本のみである。この円筒埴輪は突出度の強い断面三角形状のタガを持つもので、調査者は6世紀初頭に比定されている。ただ内部主体の調査が行われていないことや墳丘も後世の改変が著しいことなどから、現状でこの埴輪の詳細な編年的位置を判断することは難しいように思う。

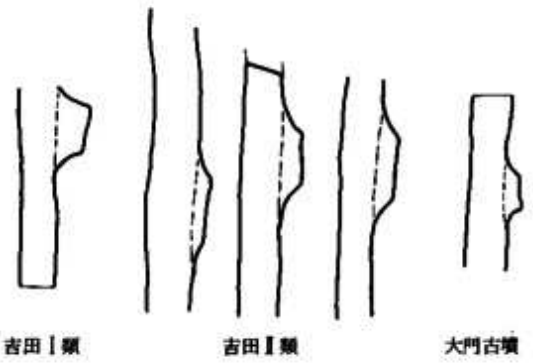


Fig. 50　円筒埴輪タガの形状比較図(S=1/2)

大門古墳では完形の円筒埴輪が採集され、現在豊浦町教育委員会に保管されているが[8]、その実測図は公表されていない。なお山口大学考古学部にも、大門古墳採集の円筒埴輪片が保管されている(Fig. 49, 18・19)。大門古墳もいまだ本格的な発掘調査が行われておらず、詳細な時期比定のできない現状にあるが、後円部に天井部から盗掘を受けた横穴式石室が存在している。富士埜勇氏は、大門古墳の横穴式石室を山口市馬塚古墳[9]や宇部市砂山古墳[10]と対比され、6世紀中葉を下らない時期に比定されている[11]。大門古墳出土の埴輪は外面にタテ刷毛、内面に斜めナデを施すもので、円形のスカシ孔を持つ。タガは断面台形を呈し、突出度の弱いものである。以上の状況から、山口県内に於いて川西Ⅴ期に比定される埴輪の詳しい年代を推定する条件が最も整っているものが、大門古墳であるといえよう。

試みに、これらの円筒埴輪のタガの形態を比較してみたものがFig. 50である。吉田Ⅱ地区採集の円筒埴輪はⅠ類、Ⅱ類とも、タガの突出度や幅は、大門古墳のそれよりまさっていることがわかる。周知の通り、円筒埴輪のタガは時代が下るほど小形化されてゆく傾向にあることが指摘されている。吉田Ⅱ地区と大門古墳はそれぞれ周防・長門と別々の地域に存在しており、直接の対比は慎重を要する。ただ上記の埴輪の特徴を重視する限り、消極的にではあるが、吉田Ⅱ地区採集の埴輪は、Ⅰ類・Ⅱ類とも、少なくとも大門古墳のそれの年代を下らない時期に比定できる可能性がある。よってここでは吉田Ⅱ地区採集の埴輪資料を、一応6世紀前半を前後する時期に考えておきたい。

次に山口県内で埴輪を出土する古墳は、前方後円墳あるいは大形円墳に集中し、その地域の首長墓と推定されるものに多い。川西Ⅴ期の埴輪を出土する塔ノ尾古墳・耳取古墳・

大門古墳もその例外ではない。翻って吉田遺跡の存在する山口盆地周辺のことを考えてみよう。上記の埴輪の推定年代が正しいとすれば、この時期の山口盆地内には朝田墳墓群を除いて埋葬遺跡の発見例が非常に少ない。朝田墳墓群[12]も小規模な墳丘を有するものや横穴墓が主体であり、いずれもこの地域の首長墓と判断されるものではない。よって現状では、山口盆地周辺において6世紀前半代の首長墓クラスの古墳の発見を欠いていることになる。吉田Ⅰ地区における埴輪を出土する地点の調査は十分でなく、遺跡の性格は不明であるが、昭和40年代頃まで古墳の内部主体の一部と思われる石材の露出があったといわれることから[13]、埋葬跡（＝古墳）である可能性は非常に高い。この想定が正しいとすれば、墳丘の形状や副葬品等が全く不明であるとは言え、吉田Ⅰ地区に将来確認されるであろう古墳は、埴輪の出土により、当地域におけるこの時期の首長墓クラスの古墳であった可能性が指摘されるのである。

また前項で指摘したように、吉田Ⅰ地区では明確に特徴を異にする二種類の埴輪が採集されており、これらの埴輪に関する解釈や樹立状況の復原等も今後の課題となるであろう。

以上、吉田Ⅰ地区採集の埴輪についての紹介と若干の考察を行ってきた。吉田Ⅰ地区の埴輪採集地点の周辺では、現在でも表面に多数の土器片が散布している。今後の詳細な発掘調査を期待したい。

最後になりましたが、埴輪資料の実見、実測に便宜をはかって頂いた山口大学考古学部の皆さんに深甚の謝意を表する次第です。

〔注〕

1) 小野忠熙「山口大学構内吉田遺跡の性格」（『学園だより』第6号、1970年）。
2) 川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年）。
3) 吉田恵二「埴輪生産の復元－技法と工人－」（『考古学研究』第19巻第3号、1973年）。
4) 注2）に同じ。
5) 前田耕次・岩崎仁志・谷口哲一『大塚古墳』（山口県教育委員会、1984年）。P.29の一覧表に、山陽町鴨庄東遺跡出土例を加えたものである。なお鴨庄東遺跡については桑原邦彦「古墳時代」（『山陽町史』、1984年）参照。
6) 桑原邦彦「塔ノ尾古墳と佐波郡の後期古墳の展開」（『山口考古』第13号、1980年）。
7) 村岡和雄・梅本春次『耳取古墳』（山口県教育委員会、1973年）。
8) 豊浦町役場『豊浦町史』（1979年）。
9) 小野忠熙ほか『馬塚古墳』（1971年）。
10) 藤田　等「砂山古墳」（『宇部の遺跡』、1968年）。
11) 富士谷勇「山口県の古墳」（『古文化談叢』第7集、九州古文化研究会、1980年）。
12) 山口県教育委員会『朝田墳墓群』Ⅰ～Ⅵ（1976～79・82・83年）。
13) 注1）に同じ。

山口県見島ジーコンボ古墳群出土の人骨

— 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料 —

松　下　孝　幸*

はじめに

山口県萩市見島には「ジーコンボ」と称される古墳群が、海岸沿いに存在する。この古墳群は大正12、15年および昭和36、37年に調査が行なわれている。今回報告する資料は昭和36、37年に小野忠熙によって発掘調査が行なわれた第123号墳と第155号墳から検出された人骨で、これは山口大学埋蔵文化財資料館に保管されていたものである。当時の記録ではこれ以外の墳墓からも人骨が出土しているが、今回はこの二墳墓から出土した人骨のみに限って報告を行なっておきたい。なお、昭和57年（1982年）にも山口県教育委員会が第16、72、133号墳の調査を行なったが、この際にも5体分の人骨が発掘されており、この人骨についてはすでに報告した（松下、他、1983）。

ジーコンボ古墳群は、考古学的所見から7世紀後半から10世紀初頭に築造されたものと推定されており、この時代の人骨は全国的にも出土量が少なく、人類学的にはきわめて貴重な資料となるものである。山口県ではこの時期の人骨としては防府市の国府跡から出土した人骨などが知られている。

資　　料

今回報告する資料は第123号墳と第155号墳から出土した人骨である。出土人骨の体数、性別、年令はTab.11に示すとおりである。

Tab. 11　人骨一覧

遺構番号	体数	性別	年令	備　　考
第123号墳	1	不明	不明	骨片（四肢骨）、少量
第155号墳	3(?)	−	−	大腿骨が2体分、Tab.12参照

* Takayuki MATSUSHITA　長崎大学医学部解剖学第二教室
（Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University）

山口県見島ジーコンボ古墳群出土の人骨

Fig. 51　遺跡の位置

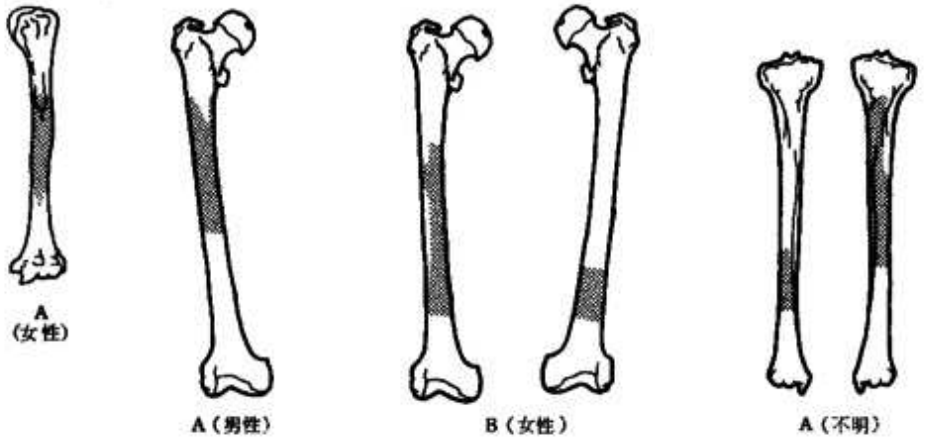


Fig. 52　人骨の残存部分（アミカケ部分）

骨種を同定できたものについては、残存部分をFig.52に示した。これらの人骨の所属時代は考古学的所見から8世紀中葉をさかのぼらない時期のものと推定されている。

計測方法は、Martin－Saller(1957)によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測した。また、歯の計測は藤田(1949)の方法で計測した。

今回、比較に用いたのは、本遺跡から1982年に出土した人骨(松下、他、1983)、防府市の国府跡から出土した平安時代人骨(松下、他、1984)、それに弥生時代人骨の例として大友弥生人(松下、1981)、古墳時代(後期)人骨の例として、山口市の朝田墳墓群の横穴墓出土の朝田古墳人(松下、1982、 松下、他、1983)を用いた。

所見および考察

第155号墳出土人骨のうち骨の種類を同定できたものは、残存部分をFig.52に示し、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

第123号墳出土人骨(性別・年令不明)

四肢長骨の一部と考えられる骨片が少量存在していたにすぎない。重量にしてわずか5gである。

第155号墳出土人骨

上腕骨、大腿骨、脛骨、歯が残存しており、頭蓋は破片も残存していない。『見島総合学術調査報告』(1964年)によれば、歯が39個も残存していたことになっているが、今回確認し得た歯はわずか5個であり、このことから、今回調査できた人骨は、当時出土したもののうちの一部である可能性がある。今回確認できたものはTab.12のとおりである。

Tab. 12　第155号墳出土人骨

残存部分	性別	備考
歯(遊離歯)	－	5個
上腕骨A	女性	左側
大腿骨A	男性	右側
大腿骨B	女性	両側
脛　骨A	不明	両側

1. 歯

遊離歯を5個確認した。報告書によれば39個あったことになっており、しかもその中に

は乳歯があったことになっているが、この5個の中には乳歯は存在しない。

歯種を同定できたものを歯式で示すと、次のとおりである。

／ ／ ／ P_2 ／ ／ I_2 ／	／ I_2 ／ ／ ／ ／ ／ ／
／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	／ ／ C ／ ／ ／ ／ ／

〔／：不明〕

なお、この他に下顎右側の大臼歯の歯冠が1個存在するが、咬耗は著しく弱く、その様態から萌出直後と考えられる。39個の中には乳歯が存在したということであるから、この大臼歯はM_1かM_2の可能性が強い。乳歯があったのなら、この第155号墳からは3体分の遺骨（歯）が出土したことになる。

咬耗度は下顎右側の大臼歯がBrocaの1度で、ごく弱く、その他は2度である。

2. 上腕骨A

左側の骨体が残存していた。径はやや小さく三角筋粗面の発達も良くない。

計測値は中央最大径が20㎜（左）、中央横径は15㎜（左）で、骨体断面示数は75.00（左）となり、骨体の扁平性は強くない。中央周は59㎜（左）で、骨体最小周は計測できない。

骨体の径が小さいことから、女性上腕骨と推定した。

次いで、本上腕骨を国府平安人、朝田古墳人、大友弥生人と比較してみると(Tab. 13)、骨体の太さ（中央周）は国府平安人と同じ値で、この値は大友弥生人と朝田古墳人との中間値を示し、大友弥生人より小さく、朝田古墳人よりも大きい。骨体断面示数は大友弥生人より大きく、朝田古墳人に近く骨体の扁平性はあまり強くない。

Tab. 13　上腕骨計測値（女性、㎜）

		ジーコンボ A 左	国府 平安人 (松下、他) 左		朝田 古墳人 (松下、他) 左		大友 弥生人 (松下) 右	
		M	n	M	n	M	n	M
5.	中央最大径	20	1	19	2	19.50	25	21.68
6.	中央最小径	15	1	17	2	15.00	25	15.48
7.	骨体最小周	−	1	55	2	53.00	20	57.65
7(a).	中央周	59	1	59	2	57.50	23	61.96
6／5	骨体断面示数	75.00	1	89.47	2	76.84	25	71.53

3. 大腿骨A

右側の骨体が残存していた。粗線の発達は良好で、骨体両側面の後方への発達も良いが、骨体上部は扁平ではない。

計測値は、骨体中央矢状径が28㎜(右)、骨体中央横径が25㎜(右)で、骨体中央断面示数は112.00(右)と大きく、粗線や骨体両面の後方への発達はきわめて良好である。また、上骨体断面示数は85.71(右)となり、骨体上部には扁平性は認められない。

骨体はそれほど太くはないが、骨体の形態などから男性大腿骨と推定した。

次いで、上腕骨の場合と同じように他の資料と比較してみると(Tab.14)、骨体の太さ(骨体中央周)はジーコンボ平安人と等しく、この値は朝田古墳人、大友弥生人よりは小さい。骨体中央断面示数は著しく大きく、ジーコンボ平安人、朝田古墳人よりも大きく、大友弥生人と大差ない。すなわち骨体の形態は大友弥生人的である。また、骨体断面示数はいずれの資料よりも大きく、骨体上部の扁平性はほとんど認められない。

本大腿骨を1982年の例と比較してみると、骨体の大きさは変わらないが、本例が柱状化、非扁平化の傾向を示すのに反し、前回の大腿骨は非柱状化、扁平化の傾向を示し、両者の形態は全く対照的である。

すなわち、本大腿骨の骨体は男性としては細い方であるが、柱状形成の傾向が強く、骨体上部の扁平性は認められない大腿骨である。

Tab. 14　大腿骨主要計測値(男性、㎜)

		ジーコンボ A 右	ジーコンボ 平安人 (松下、他) 左		朝田 古墳人 (松下、他) 左		大友 弥生人 (松下) 右	
		M	n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	28	1	26	6	27.17	41	28.85
7.	骨体中央横径	25	1	27	6	26.67	41	26.07
8.	骨体中央周	83	1	83	6	85.17	41	87.22
9.	骨体上横径	28	2	31.00	6	30.17	42	30.62
10.	骨体上矢状径	24	2	23.50	6	24.50	42	24.83
6/7	骨体中央断面示数	112.00	1	96.30	6	102.03	41	111.72
10/9	上骨体断面示数	85.71	2	75.81	6	81.29	42	81.34

4. 大腿骨B

両側の骨体が残存していたが、計測はできない。粗線の発達は悪い。骨体の径はそれほど小さくはないが、形態的特徴を考慮し、ここでは一応女性大腿骨としておきたい。

5. 腓骨A

両側の骨体が残存していた。径はやや小さいが、骨体はわずかに扁平傾向を示している。

計測値は、中央最大径が28㎜（右）、30㎜（左）、中央横径は20㎜（右）で、中央断面示数は71.43（右）である。骨体周は計測できない。最小周は70㎜（右）である。

骨体の径は男性とするには小さく、女性とするにはやや大きい。骨体の形態は男性的であるが、ここでは一応性別不明としておきたい。

Tab. 15 上腕骨計測値（mm）

		第155号墳 A 女性 左
5.	中央最大径	20
6.	中央最小径	15
7.	骨体最小周	—
7(a)	中央周	59
6／5	骨体断面示数	75.00

Tab. 16 大腿骨計測値（mm）

		第155号墳 A 男性 右
6.	骨体中央矢状径	28
7.	骨体中央横径	25
8.	骨体中央周	83
9.	骨体上横径	28
10.	骨体上矢状径	24
6／7	骨体中央断面示数	112.00
10／9	上骨体断面示数	85.71

Tab. 17 腓骨計測値（mm）

		第155号墳 A 性別不明 右	左
8.	中央最大径	28	30
8a	栄養孔位最大径	—	—
9.	中央横径	20	—
9a	栄養孔位横径	—	—
10.	骨体周	—	—
10a	栄養孔位周	—	—
10b	最小周	70	—
9／8	中央断面示数	71.43	—
9a／8a	栄養孔位断面示数	—	—

Tab. 18 歯の計測値（mm）

	第155号墳 男性	
	近遠心径	頬（唇）舌径
上顎右側 I_2	6.89	6.06
P_2	7.74	9.85
下顎右側M	11.20	11.20
左側C	7.00	7.69

（MはM₁かM₂と考えられる）

総　　括

山口県萩市見島にあるジーコンボ古墳群の昭和36、37年に行なわれた発掘調査で出土した人骨の一部を研究する機会に恵まれたので、人類学的観察および計測を行なった。その結果は次のように要約することができる。

1. 今回調査できた人骨は第123号墳と第155号墳から検出された人骨であるが、これは当時出土した人骨のすべてではないようである。
2. 第123号墳出土人骨は1体分で、第155号墳出土人骨には2体分の大腿骨があり、また萌出直後の大臼歯があることから、幼小児を含めた3体分の可能性がある。
3. 第123号墳出土人骨は四肢骨の骨片のみでその特徴は全く不明である。第155号墳出土人骨のうち今回確認できたのは上腕骨、大腿骨、脛骨、歯である。
4. 出土人骨の所属時代はいずれも8世紀中葉をさかのぼらない時期のものと推定されている。
5. 女性上腕骨は、骨体の径がやや小さく、骨体の扁平性は弱いものであった。
6. 男性大腿骨は、骨体は男性としては細い方であるが、柱状形成の傾向が強く、骨体上部の扁平性は認められない大腿骨であった。
7. 今回、観察や計測が可能で、他の資料との比較検討ができたものは、女性上腕骨と男性大腿骨だけであった。この時期の人骨は全国的にも数少ないので、日本人の形質変化を弥生時代、古代、中世と連続的に考察することができないのが現状である。当然山口県においても条件は同じであるが、弥生時代には、本県の西部地域に高顔、高身長を特徴とする人々が認められるだけに、弥生時代以降の形質変化にも注目している。

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた山口大学埋蔵文化財資料館の河村吉行先生、森田孝一先生に感謝致します。》

参 考 文 献

1. 藤田恒太郎、1949、歯の計測規準について。人類学雑誌、61：27－32。
2. Martin－Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologire. Bd.1. Gustav Fisher Verlag, Stuttugart：429－597.
3. 松下孝幸、1981：大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1）：223－253。
4. 松下孝幸、1982：山口県朝田墳墓群第Ⅰ地区出土の人骨。朝田墳墓群Ⅴ（山口県埋蔵文化財調査報告第64集）：179－206。
5. 松下孝幸、他、1983：山口県山口市朝田墳墓群第Ⅰ地区出土の人骨－総括篇－。朝朝田墳墓群Ⅵ（山口県埋蔵文化財調査報告第69集）：219－242。
6. 松下孝幸、他、1983：山口県防府市玉祖遺跡出土の平安・中世人骨。玉祖遺跡・西小路遺跡（山口県埋蔵文化財調査報告第70集）：147－148。
7. 松下孝幸、他、1983：山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨。見島ジーコンボ古墳群（山口県埋蔵文化財調査報告第73集）：32－36。
8. 松下孝幸、他、1984：防府市周防国府跡出土の平安時代人骨。防府市文化財調査年報Ⅶ：535－544。
9. 山口県教育委員会、1964：見島総合学術調査報告。
10. 山口県教育委員会、1983：見島ジーコンボ古墳群（山口県埋蔵文化財調査報告第73集）。

－資料紹介－

山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の新羅系陶質土器について

福　島　朝　子

はじめに

ここに紹介する陶質土器は、小野忠熙氏（元山口大学教育学部教授）が光市大字室積に所在する山口大学教育学部光分校に勤務されていた昭和25年から30年頃、地元の方から寄贈を受けたものである。現在、山口大学埋蔵文化財資料館で保管されている。

本資料は、いわゆる新羅系陶質土器と呼ばれるもので、出土地は不詳であるが全国的にみても出土例が少ないためあえて紹介する次第である。

この土器は、頸部より上を欠失するがその形状からみて台付細口長頸壺と考えられる。頸部付根部分には削り出しによる段を有し、径4.2㎝と細く胴は張る。胴部最大径14.2㎝、底部径9.1㎝、現存高9.2㎝を測る。肩部は上に一条、下に二条の沈線によって三段に区画される。上・下段には上方の開いた円文と刺突文を組み合わせたスタンプ文がめぐる。中段には内側を右上がりの平行線で埋めた鋸歯文を施す。底部は丸味をおび、やや外方にふんばる高台を貼付する。回転横ナデによる成形で、外面の胴部下半には横方向の篦ミガキを施している。体部外面は青灰色を呈し、上半部にはオリーブ褐色の自然釉がかかる。底部外面は暗青灰色、内面は青灰色である。内面にかなり焼きぶくれが認められるが焼成は堅緻で胎土は精良。

この長頸壺の類品は、福岡県の王城山Ｃ－11号古墳付近[1]、京都府の大覚寺3号墳[2]、奈良県の石神遺跡[3]、千葉県の野々間古墳[4]から出土している。小田富士雄氏は、王城山Ｃ－11号古墳、大覚寺3号墳、野々間古墳出土の土器の時期をそれぞれ7世紀前半、7世紀初頭、7世紀後半以前と比定されている[5]。当資料館所蔵の土器は、文様や器形が大覚寺3号墳出土のものと似ており、日本で出土したものであるなら7世紀初頭頃のものであろう。

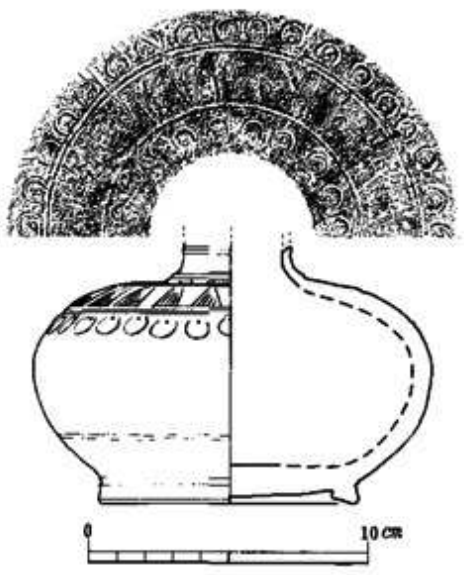


Fig. 53
埋蔵文化財資料館所蔵の新羅系陶質土器実測図

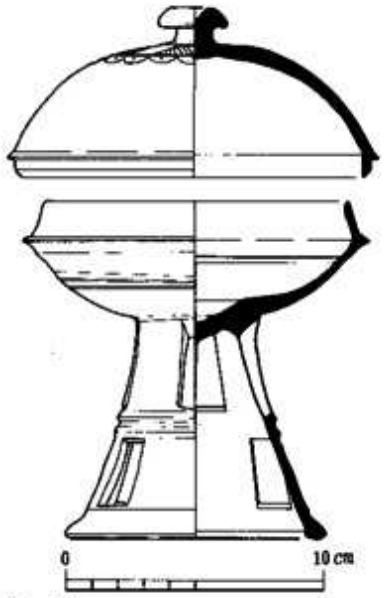


Fig. 54
光市長徳寺所蔵の新羅系陶質土器実測図

山口県内では、新羅系陶質土器とされる土器は豊浦郡豊浦町涌田に所在する心光寺一号墳[6]から坏蓋3と坏身1が出土しており、そのうちの1組は有蓋高台付坏である。この古墳は6世紀後半の築造とされ、その他に鉄鏃、鉄刀子、耳環、鉄刀、鉄鎚、轡、棒状鉄器片が副葬されていた。

なお、左図の有蓋高坏は光市立野西庄にある長徳寺が所蔵されているもので、現在は消滅したが寺の付近にあった古墳から出土したという。蓋の口縁の一部を欠失するがほぼ完形である。蓋は全体的に丸味を帯びる。口縁部は段をなして屈曲し端部は尖る。つまみは直立し、端部を反転させ丸く終り中央部はくぼむ。つまみの周囲には二本の沈線をめぐらしその間には内側を平行線で埋めた鋸歯文を、下段には半円の連続文様と刺突文を施す。文様は篦状工具によって施文されたと考えられる。坏部は浅めで、蓋受けは短く水平に突出し口縁部は内傾する。脚部の透かしは篦切りで、上下二段に交互に4個ずつ配置している。脚部中央には二条の突帯がめぐる。全体の成形は回転横ナデで蓋の外面中央は回転篦ミガキ、坏部の底部内外面には回転篦削りの跡が残る。色調は暗灰色を呈す。類例は慶州・味鄒王陵地区[7]や昌寧校洞[8]31号墳等にみられるが、これらとは文様の施文方法などがやや異なり新羅系陶質土器とは断定しがたいが今後貴重な資料になり得ると思われる。

〔注〕

1) 福岡県教育委員会「福岡県大野城市乙金所在古墳群の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ』、1977年)。
2) 安藤信策「大覚寺古墳群発掘調査概報」(『京都府埋蔵文化財発掘調査概報』、1976年)。
3) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報15』(1985年)。
4) 石井則孝「千葉県富津市出土の新羅系土器」(『史館』第8号、1977年)。
5) 小田富士雄「対馬・北部九州発見の新羅系陶質土器」(『古文化談叢』第5集、九州古文化研究会、1978年)。
6) 山口県文化財愛護協会『山口県文化財第10号』(1980年)。豊浦町史編纂委員会『豊浦町史』(1979年)。
7) 注5)に同じ。
8) 定森秀夫「韓国慶尚南道昌寧地域出土陶質土器の検討－陶質土器に関する一私見－」(『古代文化』第33巻第4号、1981年)。定森氏の分類にあてはめるとⅠa類に属すると思われる。

なお、本資料紹介にあたって小野忠凞氏、長徳寺住職弘中泰彦氏、山本一朗氏、河村吉行氏、森田孝一氏に御配慮いただき記して謝意を表します。

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則

（設置）

第１条　山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

（資料館の業務）

第２条　資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行なう。

一　山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示及び調査研究

二　山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行

三　その他埋蔵文化財に関する必要な業務

（運営委員会）

第３条　資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

２　委員会に関する規則は、別に定める。

（館長）

第４条　資料館に館長を置く。館長は委員会の議を経て学長が委嘱する。

２　館長の任期は２年とし、再任を妨げない。

３　館長は、資料館の業務を掌理する。

（調査員）

第５条　資料館に調査員若干名を置く。

２　調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

３　調査員は、資料館の業務を処理する。

（特別調査員）

第６条　埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行なうため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

２　特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

（雑則）

第７条　この規則に定めるもののほか、資料館に必要な事項は別に定める。

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

（趣旨）

第１条　この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館規則（以下「資料館規則」という。）第３条第２項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　委員会は、次の事項を審議する。

一　山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと。

二　資料館の管理運営に関すること。

三　資料館の整備充実に関すること。

四　資料館の運営に要する経費に関すること。

五　その他必要な事項

（組織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　資料館規則第４条第１項の館長

二　各学部及び教養部の教官各１名

三　事務局長

２　前項第２号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

（任期）

第４条　前条第１項第２号の委員の任期は２年とし、再任を妨げない。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

２　委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

（幹事）

第６条　委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

（委員以外の出席）

第７条　委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

（事務）

第８条　委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

（雑則）

第９条　この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

Tab. 19　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員

（昭和59年度）

部局名	氏名	官職	任期	備考
医学部	黄基雄	教授	58. 4. 1～60. 3. 31	委員長
人文学部	八木充	教授	58. 4. 1～60. 3. 31	館長
人文学部	近藤喬一	教授	59. 4. 2～61. 4. 1	
教育学部	川村博忠	助教授	58. 4. 1～60. 3. 31	
経済学部	及川順	教授	58. 4. 1～60. 3. 31	
理学部	久田兒守	助手	58. 4. 1～60. 3. 31	
工学部	木村允	教授	58. 4. 1～60. 3. 31	
農学部	木脇祐順	教授	58. 4. 1～60. 3. 31	
教養部	木村忠夫	教授	58. 4. 1～60. 3. 31	
事務局	佐藤士郎	事務局長	～60. 1. 31	
事務局	五田次雄	事務局長	60. 2. 1～60. 11. 30	

（昭和60年度）

部局名	氏名	官職	任期	備考
医学部	黄基雄	教授	60. 4. 1～62. 3. 31	委員長
人文学部	近藤喬一	教授	59. 4. 2～62. 4. 1	館長
人文学部	中村友博	助教授	60. 5. 29～62. 5. 28	
教育学部	三浦肇	教授	60. 4. 1～62. 3. 31	
経済学部	及川順	教授	60. 4. 1～62. 3. 31	
理学部	岩田允夫	教授	60. 4. 1～62. 3. 31	
工学部	島敏史	教授	60. 4. 1～62. 3. 31	
農学部	西野武蔵	教授	60. 4. 1～62. 3. 31	
教養部	木村忠夫	教授	60. 4. 1～62. 3. 31	
事務局	五田次雄	事務局長	60. 2. 1～60. 11. 30	
事務局	大谷巖	事務局長	60. 12. 1～	

Tab. 20　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員

学部等	氏名	官職	専攻科目等	備考
人文学部	中村友博	助教授	日本考古学	59年度
教育学部	三浦肇	教授	地理学	59年度
理学部	冨阪武士	教授	鉱物学	59・60年度
理学部	松本徰夫	教授	岩石学	59・60年度
農学部	勝本謙	助教授	植物分類学	59・60年度
工業短期大学部	池谷元伺	教授	年代測定	59・60年度

山口大学構内の主な調査

- 旧調査区名は吉田遺跡調査団使用のもの
- 41年から57年までの調査は全て吉田地区
- 地点は吉田構内Fig.55、小串構内Fig.56を参照

Tab. 21　山口大学構内の主な調査一覧表

調査年度	旧調査地区名又は調査名	学内地区割	地点	担当者	調査区分	面積(㎡)	遺構	遺物	備考
昭和41年	第Ⅰ地区A・B区	L・M−15区	1	小野忠熙	事前	30？	弥生竪穴住居・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	吉田第1次発掘調査
	第Ⅱ地区家畜病院新営	S・T−19区 S−20区	2	小野忠熙	事前	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	吉田第2次発掘調査
	第Ⅲ地区	P・Q−19・20区	3	小野忠熙	試掘			弥生土器、土師器	吉田第3次発掘調査
	第Ⅳ地区牛舎新営	S−10区	4	小野忠熙	事前	300	弥生溝・土壙、古墳竪穴住居、中世住居跡・溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	吉田第4次発掘調査
	第Ⅴ地区	S・T−10〜13区	5	小野忠熙	試掘				吉田第5次発掘調査
昭和42年	第Ⅱ地区杭列区	E−20区	6	小野忠熙	事前	1,100	杭列	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢板状木杭	吉田第6次発掘調査
	第Ⅱ地区南区	G・H−22・23区	7	小野忠熙	事前		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	吉田第7次発掘調査
	第Ⅱ地区北区	I・J−20・21区	8	小野忠熙	事前	1,400	竪穴住居、溝、土壙、柱穴		吉田第8次発掘調査
	第Ⅱ地区東南区	H−23区 I・J・K−24区	9	小野忠熙	事前		弥生竪穴住居	弥生土器	吉田第9次発掘調査
	第Ⅱ地区野球場	I−22・23区 J−21・22・23区 K−22・23区	10	小野忠熙	試掘		中世柱穴	瓦質土器	吉田第10次発掘調査
	第Ⅳ地区学生食堂	I・J−19・20区 J−20区	11		事前		弥生溝、古墳土壙	弥生土器、土師器	吉田第11次発掘調査
	第Ⅴ地区	I・J・K・L・M −18・19・20区	12	山口大学吉田遺跡調査団	試掘		河川跡、柱穴、土壙	弥生土器、土師器	吉田第12次発掘調査
	第Ⅰ地区C区大学本部新営	K・L−14区	13	〃	事前	600	竪穴住居、溝、土壙	土師器、須恵器、瓦質土器	吉田第13次発掘調査
昭和44年	第Ⅳ地区教育学部			〃	試掘		河川跡	弥生土器、土師器、須恵器	吉田第14次発掘調査
昭和46年	第Ⅰ地区D区第1地点	L−13区	14	〃	試掘		溝	弥生土器、木炭層	吉田第15次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第2地点	〃	15	〃	〃			弥生土器、土師器、瓦質土器	吉田第16次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第3地点	M−13区	16	〃	〃		竪穴住居、土壙、柱穴	土師器	吉田第17次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第4地点	M・N−13区	17	〃	〃		弥生竪穴住居、溝、土壙	弥生土器、土師器、石器、瓦質土器	吉田第18次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第5地点	L−13区	18	〃	〃		弥生溝	弥生土器	吉田第19次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第6地点	M−13区	19	〃	〃		古墳竪穴住居、弥生溝	弥生土器、土師器石器	吉田第20次発掘調査
	第Ⅰ地区D区第7地点	〃	20	〃	〃		溝	弥生土器	吉田第21次発掘調査
	第Ⅰ地区E区第2学生食堂新営	N・O−15区	21	〃	事前	900	弥生〜古墳竪穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄製品	吉田第22次発掘調査
昭和50年	第Ⅰ地区			〃	試掘			弥生土器	吉田第23次発掘調査
昭和51年	第Ⅱ地区			〃	〃		竪穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	吉田第24次発掘調査

調査年度	旧調査地区名又は調査名	学内地区割	地点	担当者	調査区分	面積(㎡)	遺構	遺物	備考
昭和53年	人文学部校舎新営	M・N－21区	22	近藤義一	試掘	180			吉田第25次発掘調査
	教育学部附属養護学校新営	A・B・C・D－20・21・23・24区	23	山口大学埋蔵文化財資料館 山口市教育委員会	〃		竪穴、土壙	縄文土器 弥生土器	吉田第26次発掘調査
昭和54年	理学部校舎新営	O－19区	24	山口大学埋蔵文化財資料館	〃	250			吉田第27次発掘調査
	農学部動物舎新営	P－18区	25	〃	〃	380			吉田第28次発掘調査
	本部管理棟新営	L－14区	26	〃	事前	740	竪穴、土壙、柱穴、中世井戸、土壙墓、住居跡	弥生土器、土師器、石製品	吉田第29次発掘調査
昭和55年	経済学部校舎新営	K・L－21区	27	〃	〃				吉田第30次発掘調査
	農学部農業機関実験施設新営	Q－15区	28	〃	〃	50	竪穴、土壙		吉田第31次発掘調査
	本部	F－20・21区 G－19区 H－20区	29	〃	立会				工事続行 吉田第1次立会調査
	農学部	P・Q－17・18区	30	〃	〃				吉田第2次立会調査
昭和56年	教育学部校舎新営	H－19区	31	〃	事前	400	弥生竪穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	吉田第32次発掘調査
	教育学部音楽棟新営	H－16区	32	〃	〃	100	溝		吉田第33次発掘調査
	教育学部実技科・技術科実験実習棟新営	J－19・20区	33	〃	〃	130	旧河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	吉田第34次発掘調査
	正門橋脚新営	H－11区	34	〃	立会				工事続行 吉田第3次立会調査
	時計塔塀設	H－14区	35	〃	〃				工事続行 吉田第4次立会調査
	本部構内擁壁	K－14区	36	〃	〃				工事続行 吉田第5次立会調査
	教養部構内擁壁	I－17区	37	〃	〃				工法等変更6次立会
	構内循環道路舗装	吉田構内	38	〃	〃				工事続行 7次立会
	農学部中庭整備	O－17区	39	〃	〃				工事続行 8次立会
	暖房施設改修	O－16区	40	〃	〃				工法等変更9次立会
	学生部文化会車庫新営	L－8区	41	〃	〃				工法等変更10次立会
	学生部馬場整備	M・N－8・9区	42	〃	〃				工事続行 11次立会
昭和57年	附属図書館増築	M－16区	43	〃	事前	600	弥生～古墳溝、土壙、柱穴、杭列	弥生土器、土師器、須恵器、石器	吉田第35次発掘調査
	大学会館新営	M－14・15区	44	〃	試掘	130	弥生竪穴住居、溝	弥生土器	吉田第36次発掘調査
	教育学部附属養護学校プール新営	M－22区	45	〃	立会				吉田第12次立会調査
	放射性同位元素総合実験室排水槽新営	O－18区	46	〃	〃				吉田第13次立会調査
	教養部自転車置場昇降口新営	K・L－17区	47	〃	〃				吉田第14次立会調査
	教養部中庭環境整備	J・K－16区	48	〃	〃				吉田第15次立会調査
昭和58年	大学会館新営	M・N－12区	49	〃	事前	2000	古墳井戸、土壙、柱穴、中世井戸、掘立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦質土器、瓦器、緑釉陶器	吉田第37次発掘調査
	ラグビー場防球ネット新営	G・H－19区	50	〃	〃	120	弥生溝、弥生～古墳竪穴住居、土壙	弥生土器、土師器 石製品	竪穴住居は工法変更により現地保存 吉田第38次発掘調査
	教育学部附属光小学校自転車置場新営			〃	試掘		近世～近代石垣	陶磁器、瓦質土器、瓦	御手洗第1次発掘調査
	工学部校舎新営			〃	〃	70		須恵器	遺構、遺物包含層なし 常盤第1次発掘調査

調査年度	旧調査地区名又は調査名	学内地区割	地点	担当者	調査区分	面積(㎡)	遺構	遺物	備考
昭和58年	工学部図書館増築			山口大学埋蔵文化財資料館	試掘	70			遺構、遺物包含層なし 常盤第2次発掘調査
	医学部体育館新営		①	〃	〃	260		土師器、瓦質土器、石器	小串第1次発掘調査
	理学部大学院校舎新営	M・N−20区 O−20・21区	51	〃	立会	410			工事統行 吉田第16次立会調査
	正門・南門二輪車置場および正門花壇新営	I−12・13区 J−13区 H−23区	52	〃	〃	180			工事統行 吉田第17次立会調査
	学生部アーチェリー場的台・電柱設置	M−8区	53	〃	〃	30			工事統行 吉田第18次立会調査
	学生部既舎整備	L−9区	54	〃	〃	2			工事統行 吉田第19次立会調査
	学生部野球場散水栓取設	J・K−21区	55	〃	〃				工事統行 吉田第20次立会調査
	教養部環境整備	I−16・17区 J−17区 K・L−17・18区	56	〃	〃	80			工事統行 吉田第21次立会調査
	学生部テニスコート改修	C−17・18区 D−16・17区 E−16区	57	〃	〃	12			工事統行 吉田第22次立会調査
	医学部図書館増築		②	〃	〃				小串第1次立会調査
	医学部体育館新営		③	〃	〃				工事統行 小串第2次立会調査
昭和59年	医学部浄化槽新営		④	〃	事前		近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	記録保存 小串第2次発掘調査
	医学部体育館新営		⑤	〃	〃	65		土師器、瓦質土器、磁器	小串第3次発掘調査
	大学会館ケーブル布設	N−12・14区	58	〃	〃	160	弥生土壙、柱穴	弥生土器	吉田第37次発掘調査
	大学会館排水館布設	K・L−13区	59	〃	〃	180	弥生〜中世遺物包含層古墳土壙、古代〜中世土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	記録保存 吉田第38次発掘調査
	医学部基幹整備（特高受変電設備）		⑥	〃	試掘	28		動物遺体（貝殻）	小串第4次発掘調査
	医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営		⑦	〃	〃	38			小串第5次発掘調査
	学生部テニスコートフェンス改修	C−17・18・19区 D−15・16・17区 E−16区	60	〃	〃	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	工事規模内埋蔵文化財支障なし 吉田第39次発掘調査
	経済学部樹木移植	K−19・20・21区	61	〃	立会	8			工事規模内埋蔵文化財支障なし 吉田第23次立会調査
	工学部尾山宿舎排水管布設				〃	20			常盤第1次立会調査
	教育学部附属光小・中学校焼却場新営			〃	〃				光市室積 柳手元第1次立会調査
	学生部ボート艇庫合宿研修所整備			〃	〃	0.5			宇部市小野湖
	学生部ヨット艇庫合宿研修所整備			〃	〃				吉敷郡秋穂町

※ 昭和41年以降、吉田構内においては工事に際し、随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団の調査分については調査名をすべて把握しているわけではなく、注意されたい。

Summary

This report accounts the results of archaeological researches in twelve excavated areas located on campus in 1984. And it carries papers, examinations in connection with the phase in Ancient and Medieval times at Yoshida Site, Cylindrical Haniwas from Yoshida №2 Site, human remains from Mishima · Jikonbo mounded tombs and an earthenware of Shiragi style owed by Yamaguchi University Archaeological Research as Appendix.

Yamaguchi University Archaeological Research was established as part of the cross-faculties public facilities of the University in 1978. We refer to a plan from the conference of the Management Committee first and gain approval. We then carried out the research in relation to the construction work on campus.

The current year we carried out researches as follow:

1. Excavations on the Yoshida campus

(1) Excavation in relation to the laying down a cable around the University Hall

We found many holes and pit holes mainly dating from the *Yayoi* to the *Kofun* period. Particularly the discovery of holes in the early *Yayoi* raised us many interesting points which in adjacent areas could provide the location, the process of changes, the size, and the component of the buried village.

(2) Excavation in relation to the laying drain pipes under ground at the University Hall

Many holes, ditches, and pit holes are uncovered in the east of the excavated area, dating from the lafe *Yayoi* to the *Muromachi* period. But,we could not find the plane digged the artifacts from features in the west of it. And then the plane in the center sloped down from south to north. For, it became clear that the village since *Yayoi* period continuously remained in the east out of the center of the excavated area.

(3) Soundings in relation to the repair of the fence around the tennis court

It was confirmed that the distribution of the layers containted some relics, dating from the *Yayoi* to the *Kofun* period, remained around the northwest on the Yoshida campus.

(4) Examination under conrstruction in relation to the transplant of some trees at the area on the Faculty of Economics

The newly archaeological objects did not occur within seventy centimeter below the ground.

2. Excavations on the Kogushi campus

(1) Excavation in relation to the construction of the new gymnagium and new tank for sewage disposal around here

We discovered some wooden stakes driven along the bank of an irrigation canal dating from the Medieval age to the Modern, and some relics contained Haji ware from the late *Kamakura* period to the *Muromachi* period.

By synthetically judging from the result of the post excavation, it is pointed out that these relics in the late Medieval around this area occur from the limited strata around the gymnasium.

(2) Soundings in relation to the fundamental adjustment

The discovery of many shellfish supports us to understand the old animate nature and environment on the Kogushi campus.

(3) Soundings in relation to the construction of new buildings for the crinical lecture and the pathologic anatomy

It became clear the stratigraphic sequence and contents from east to north of corner on the Kogushi campus.

3. Examination under construction performed on Yamaguchi University campus.

We examined mainly the stratigraphic sequence and contents at the Elementary and Junior High School, on the Hikari campus, the Faculty of Engineering on the Tokiwa campus, the boat-house in Lake Ono, Ube city and the yacht-house in Aio, Yoshiki county. So, we could not find obvious archaeological objects.

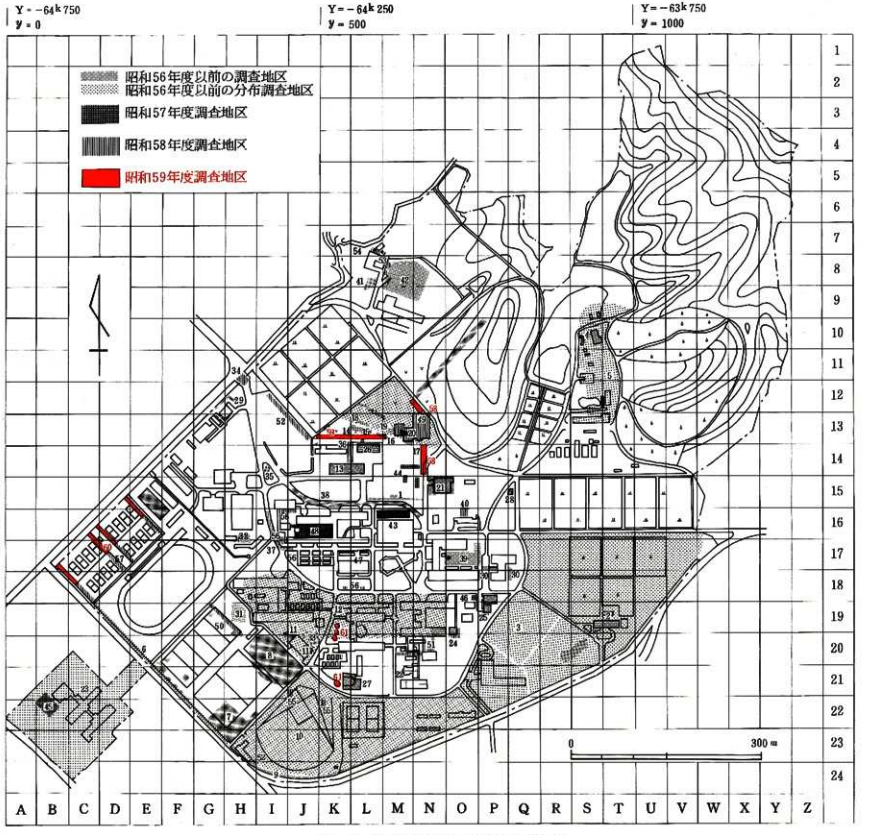
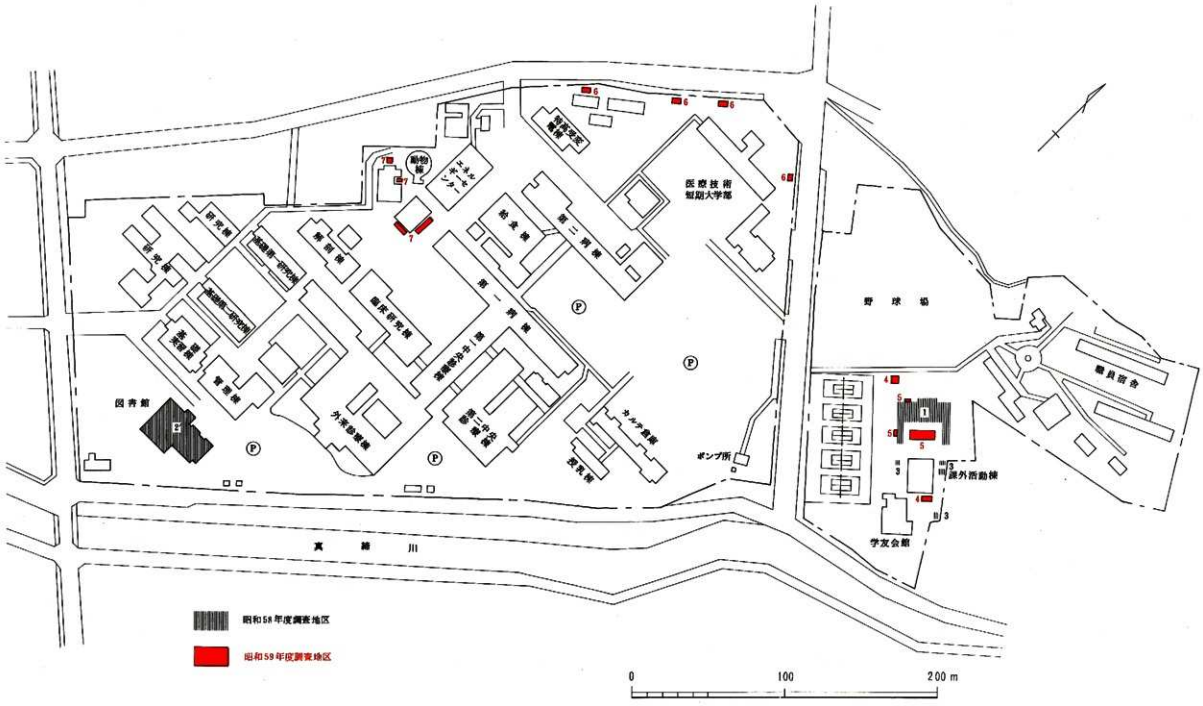
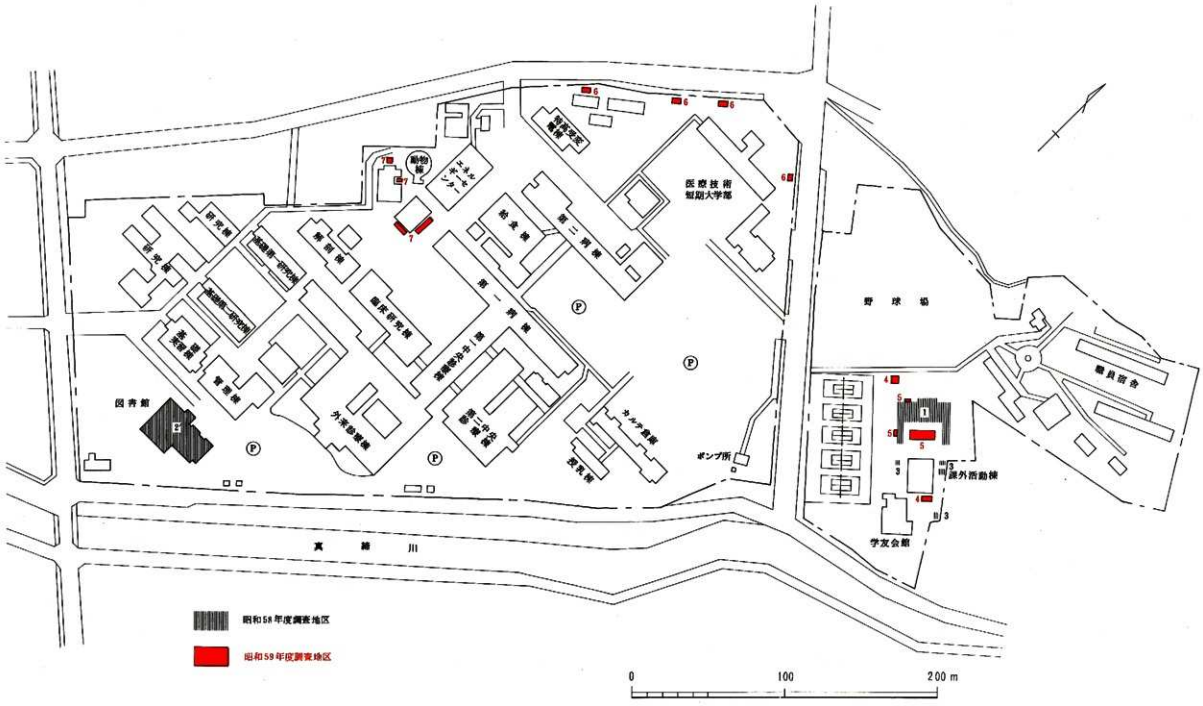


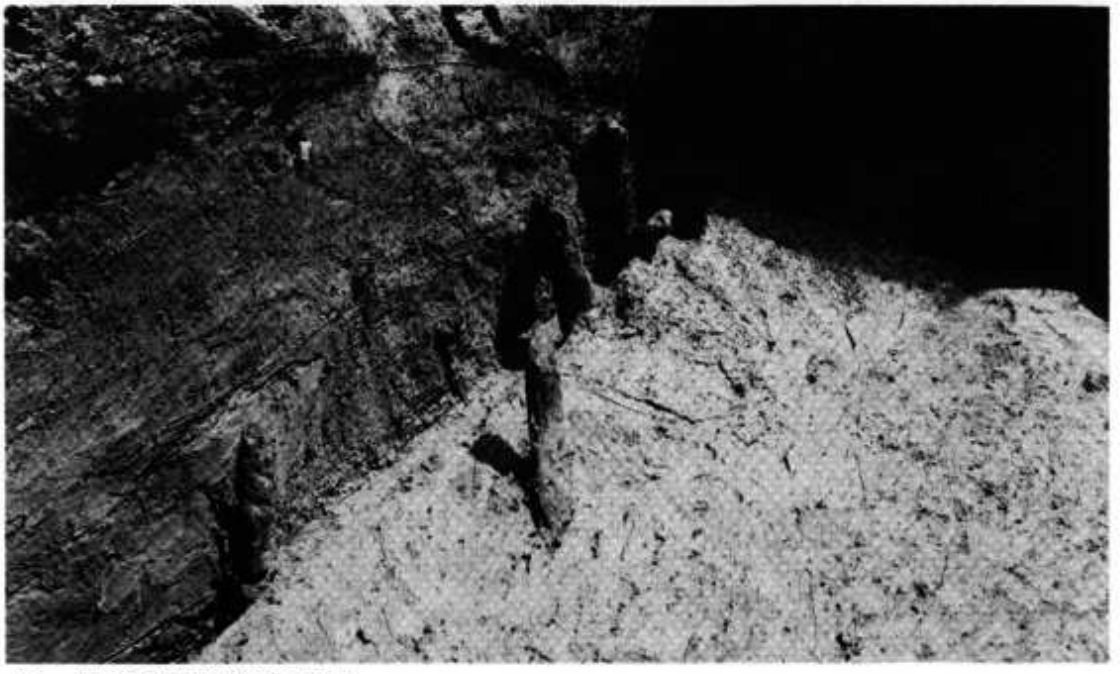
Fig. 55 吉田構内地区側および調査区位置図


図書館
外来診療棟
第一講義棟
第二講義棟
第一病棟
第二病棟
第三病棟
第四病棟
第五病棟
第六病棟
第一研究棟
第二研究棟
第三研究棟
第四研究棟
第五研究棟
第六研究棟
第七研究棟
第八研究棟
第九研究棟
第十研究棟
第十一研究棟
第十二研究棟
第十三研究棟
第十四研究棟
第十五研究棟
第十六研究棟
第十七研究棟
第十八研究棟
第十九研究棟
第二十研究棟
第二十一研究棟
第二十二研究棟
第二十三研究棟
第二十四研究棟
第二十五研究棟
第二十六研究棟
第二十七研究棟
第二十八研究棟
第二十九研究棟
第三十研究棟
第三十一研究棟
第三十二研究棟
第三十三研究棟
第三十四研究棟
第三十五研究棟
第三十六研究棟
第三十七研究棟
第三十八研究棟
第三十九研究棟
第四十研究棟
第四十一研究棟
第四十二研究棟
第四十三研究棟
第四十四研究棟
第四十五研究棟
第四十六研究棟
第四十七研究棟
第四十八研究棟
第四十九研究棟
第五十研究棟
第五十一研究棟
第五十二研究棟
第五十三研究棟
第五十四研究棟
第五十五研究棟
第五十六研究棟
第五十七研究棟
第五十八研究棟
第五十九研究棟
第六十研究棟
第六十一研究棟
第六十二研究棟
第六十三研究棟
第六十四研究棟
第六十五研究棟
第六十六研究棟
第六十七研究棟
第六十八研究棟
第六十九研究棟
第七十研究棟
第七十一研究棟
第七十二研究棟
第七十三研究棟
第七十四研究棟
第七十五研究棟
第七十六研究棟
第七十七研究棟
第七十八研究棟
第七十九研究棟
第八十研究棟
第八十一研究棟
第八十二研究棟
第八十三研究棟
第八十四研究棟
第八十五研究棟
第八十六研究棟
第八十七研究棟
第八十八研究棟
第八十九研究棟
第九十研究棟
第九十一研究棟
第九十二研究棟
第九十三研究棟
第九十四研究棟
第九十五研究棟
第九十六研究棟
第九十七研究棟
第九十八研究棟
第九十九研究棟
第百研究棟
第百一研究棟
第百二研究棟
第百三研究棟
第百四研究棟
第百五研究棟
第百六研究棟
第百七研究棟
第百八研究棟
第百九研究棟
第百十研究棟
第百十一研究棟
第百十二研究棟
第百十三研究棟
第百十四研究棟
第百十五研究棟
第百十六研究棟
第百十七研究棟
第百十八研究棟
第百十九研究棟
第百二十研究棟
第百二十一研究棟
第百二十二研究棟
第百二十三研究棟
第百二十四研究棟
第百二十五研究棟
第百二十六研究棟
第百二十七研究棟
第百二十八研究棟
第百二十九研究棟
第百三十研究棟
第百三十一研究棟
第百三十二研究棟
第百三十三研究棟
第百三十四研究棟
第百三十五研究棟
第百三十六研究棟
第百三十七研究棟
第百三十八研究棟
第百三十九研究棟
第百四十研究棟
第百四十一研究棟
第百四十二研究棟
第百四十三研究棟
第百四十四研究棟
第百四十五研究棟
第百四十六研究棟
第百四十七研究棟
第百四十八研究棟
第百四十九研究棟
第百五十研究棟
第百五十一研究棟
第百五十二研究棟
第百五十三研究棟
第百五十四研究棟
第百五十五研究棟
第百五十六研究棟
第百五十七研究棟
第百五十八研究棟
第百五十九研究棟
第百六十研究棟
第百六十一研究棟
第百六十二研究棟
第百六十三研究棟
第百六十四研究棟
第百六十五研究棟
第百六十六研究棟
第百六十七研究棟
第百六十八研究棟
第百六十九研究棟
第百七十研究棟
第百七十一研究棟
第百七十二研究棟
第百七十三研究棟
第百七十四研究棟
第百七十五研究棟
第百七十六研究棟
第百七十七研究棟
第百七十八研究棟
第百七十九研究棟
第百八十研究棟
第百八十一研究棟
第百八十二研究棟
第百八十三研究棟
第百八十四研究棟
第百八十五研究棟
第百八十六研究棟
第百八十七研究棟
第百八十八研究棟
第百八十九研究棟
第百九十研究棟
第百九十一研究棟
第百九十二研究棟
第百九十三研究棟
第百九十四研究棟
第百九十五研究棟
第百九十六研究棟
第百九十七研究棟
第百九十八研究棟
第百九十九研究棟
第二百研究棟
第二百一研究棟
第二百二研究棟
第二百三研究棟
第二百四研究棟
第二百五研究棟
第二百六研究棟
第二百七研究棟
第二百八研究棟
第二百九研究棟
第二百十研究棟
第二百十一研究棟
第二百十二研究棟
第二百十三研究棟
第二百十四研究棟
第二百十五研究棟
第二百十六研究棟
第二百十七研究棟
第二百十八研究棟
第二百十九研究棟
第二百二十研究棟
第二百二十一研究棟
第二百二十二研究棟
第二百二十三研究棟
第二百二十四研究棟
第二百二十五研究棟
第二百二十六研究棟
第二百二十七研究棟
第二百二十八研究棟
第二百二十九研究棟
第二百三十研究棟
第二百三十一研究棟
第二百三十二研究棟
第二百三十三研究棟
第二百三十四研究棟
第二百三十五研究棟
第二百三十六研究棟
第二百三十七研究棟
第二百三十八研究棟
第二百三十九研究棟
第二百四十研究棟
第二百四十一研究棟
第二百四十二研究棟
第二百四十三研究棟
第二百四十四研究棟
第二百四十五研究棟
第二百四十六研究棟
第二百四十七研究棟
第二百四十八研究棟
第二百四十九研究棟
第二百五十研究棟
第二百五十一研究棟
第二百五十二研究棟
第二百五十三研究棟
第二百五十四研究棟
第二百五十五研究棟
第二百五十六研究棟
第二百五十七研究棟
第二百五十八研究棟
第二百五十九研究棟
第二百六十研究棟
第二百六十一研究棟
第二百六十二研究棟
第二百六十三研究棟
第二百六十四研究棟
第二百六十五研究棟
第二百六十六研究棟
第二百六十七研究棟
第二百六十八研究棟
第二百六十九研究棟
第二百七十研究棟
第二百七十一研究棟
第二百七十二研究棟
第二百七十三研究棟
第二百七十四研究棟
第二百七十五研究棟
第二百七十六研究棟
第二百七十七研究棟
第二百七十八研究棟
第二百七十九研究棟
第二百八十研究棟
第二百八十一研究棟
第二百八十二研究棟
第二百八十三研究棟
第二百八十四研究棟
第二百八十五研究棟
第二百八十六研究棟
第二百八十七研究棟
第二百八十八研究棟
第二百八十九研究棟
第二百九十研究棟
第二百九十一研究棟
第二百九十二研究棟
第二百九十三研究棟
第二百九十四研究棟
第二百九十五研究棟
第二百九十六研究棟
第二百九十七研究棟
第二百九十八研究棟
第二百九十九研究棟
第三百研究棟
第三百一研究棟
第三百二研究棟
第三百三研究棟
第三百四研究棟
第三百五研究棟
第三百六研究棟
第三百七研究棟
第三百八研究棟
第三百九研究棟
第三百十研究棟
第三百十一研究棟
第三百十二研究棟
第三百十三研究棟
第三百十四研究棟
第三百十五研究棟
第三百十六研究棟
第三百十七研究棟
第三百十八研究棟
第三百十九研究棟
第三百二十研究棟
第三百二十一研究棟
第三百二十二研究棟
第三百二十三研究棟
第三百二十四研究棟
第三百二十五研究棟
第三百二十六研究棟
第三百二十七研究棟
第三百二十八研究棟
第三百二十九研究棟
第三百三十研究棟
第三百三十一研究棟
第三百三十二研究棟
第三百三十三研究棟
第三百三十四研究棟
第三百三十五研究棟
第三百三十六研究棟
第三百三十七研究棟
第三百三十八研究棟
第三百三十九研究棟
第三百四十研究棟
第三百四十一研究棟
第三百四十二研究棟
第三百四十三研究棟
第三百四十四研究棟
第三百四十五研究棟
第三百四十六研究棟
第三百四十七研究棟
第三百四十八研究棟
第三百四十九研究棟
第三百五十研究棟
第三百五十一研究棟
第三百五十二研究棟
第三百五十三研究棟
第三百五十四研究棟
第三百五十五研究棟
第三百五十六研究棟
第三百五十七研究棟
第三百五十八研究棟
第三百五十九研究棟
第三百六十研究棟
第三百六十一研究棟
第三百六十二研究棟
第三百六十三研究棟
第三百六十四研究棟
第三百六十五研究棟
第三百六十六研究棟
第三百六十七研究棟
第三百六十八研究棟
第三百六十九研究棟
第三百七十研究棟
第三百七十一研究棟
第三百七十二研究棟
第三百七十三研究棟
第三百七十四研究棟
第三百七十五研究棟
第三百七十六研究棟
第三百七十七研究棟
第三百七十八研究棟
第三百七十九研究棟
第三百八十研究棟
第三百八十一研究棟
第三百八十二研究棟
第三百八十三研究棟
第三百八十四研究棟
第三百八十五研究棟
第三百八十六研究棟
第三百八十七研究棟
第三百八十八研究棟
第三百八十九研究棟
第三百九十研究棟
第三百九十一研究棟
第三百九十二研究棟
第三百九十三研究棟
第三百九十四研究棟
第三百九十五研究棟
第三百九十六研究棟
第三百九十七研究棟
第三百九十八研究棟
第三百九十九研究棟
第四百研究棟
第四百一研究棟
第四百二研究棟
第四百三研究棟
第四百四研究棟
第四百五研究棟
第四百六研究棟
第四百七研究棟
第四百八研究棟
第四百九研究棟
第四百十研究棟
第四百十一研究棟
第四百十二研究棟
第四百十三研究棟
第四百十四研究棟
第四百十五研究棟
第四百十六研究棟
第四百十七研究棟
第四百十八研究棟
第四百十九研究棟
第四百二十研究棟
第四百二十一研究棟
第四百二十二研究棟
第四百二十三研究棟
第四百二十四研究棟
第四百二十五研究棟
第四百二十六研究棟
第四百二十七研究棟
第四百二十八研究棟
第四百二十九研究棟
第四百三十研究棟
第四百三十一研究棟
第四百三十二研究棟
第四百三十三研究棟
第四百三十四研究棟
第四百三十五研究棟
第四百三十六研究棟
第四百三十七研究棟
第四百三十八研究棟
第四百三十九研究棟
第四百四十研究棟
第四百四十一研究棟
第四百四十二研究棟
第四百四十三研究棟
第四百四十四研究棟
第四百四十五研究棟
第四百四十六研究棟
第四百四十七研究棟
第四百四十八研究棟
第四百四十九研究棟
第四百五十研究棟
第四百五十一研究棟
第四百五十二研究棟
第四百五十三研究棟
第四百五十四研究棟
第四百五十五研究棟
第四百五十六研究棟
第四百五十七研究棟
第四百五十八研究棟
第四百五十九研究棟
第四百六十研究棟
第四百六十一研究棟
第四百六十二研究棟
第四百六十三研究棟
第四百六十四研究棟
第四百六十五研究棟
第四百六十六研究棟
第四百六十七研究棟
第四百六十八研究棟
第四百六十九研究棟
第四百七十研究棟
第四百七十一研究棟
第四百七十二研究棟
第四百七十三研究棟
第四百七十四研究棟
第四百七十五研究棟
第四百七十六研究棟
第四百七十七研究棟
第四百七十八研究棟
第四百七十九研究棟
第四百八十研究棟
第四百八十一研究棟
第四百八十二研究棟
第四百八十三研究棟
第四百八十四研究棟
第四百八十五研究棟
第四百八十六研究棟
第四百八十七研究棟
第四百八十八研究棟
第四百八十九研究棟
第四百九十研究棟
第四百九十一研究棟
第四百九十二研究棟
第四百九十三研究棟
第四百九十四研究棟
第四百九十五研究棟
第四百九十六研究棟
第四百九十七研究棟
第四百九十八研究棟
第四百九十九研究棟
第五百研究棟
第五百一研究棟
第五百二研究棟
第五百三研究棟
第五百四研究棟
第五百五研究棟
第五百六研究棟
第五百七研究棟
第五百八研究棟
第五百九研究棟
第五百十研究棟
第五百十一研究棟
第五百十二研究棟
第五百十三研究棟
第五百十四研究棟
第五百十五研究棟
第五百十六研究棟
第五百十七研究棟
第五百十八研究棟
第五百十九研究棟
第五百二十研究棟
第五百二十一研究棟
第五百二十二研究棟
第五百二十三研究棟
第五百二十四研究棟
第五百二十五研究棟
第五百二十六研究棟
第五百二十七研究棟
第五百二十八研究棟
第五百二十九研究棟
第五百三十研究棟
第五百三十一研究棟
第五百三十二研究棟
第五百三十三研究棟
第五百三十四研究棟
第五百三十五研究棟
第五百三十六研究棟
第五百三十七研究棟
第五百三十八研究棟
第五百三十九研究棟
第五百四十研究棟
第五百四十一研究棟
第五百四十二研究棟
第五百四十三研究棟
第五百四十四研究棟
第五百四十五研究棟
第五百四十六研究棟
第五百四十七研究棟
第五百四十八研究棟
第五百四十九研究棟
第五百五十研究棟
第五百五十一研究棟
第五百五十二研究棟
第五百五十三研究棟
第五百五十四研究棟
第五百五十五研究棟
第五百五十六研究棟
第五百五十七研究棟
第五百五十八研究棟
第五百五十九研究棟
第五百六十研究棟
第五百六十一研究棟
第五百六十二研究棟
第五百六十三研究棟
第五百六十四研究棟
第五百六十五研究棟
第五百六十六研究棟
第五百六十七研究棟
第五百六十八研究棟
第五百六十九研究棟
第五百七十研究棟
第五百七十一研究棟
第五百七十二研究棟
第五百七十三研究棟
第五百七十四研究棟
第五百七十五研究棟
第五百七十六研究棟
第五百七十七研究棟
第五百七十八研究棟
第五百七十九研究棟
第五百八十研究棟
第五百八十一研究棟
第五百八十二研究棟
第五百八十三研究棟
第五百八十四研究棟
第五百八十五研究棟
第五百八十六研究棟
第五百八十七研究棟
第五百八十八研究棟
第五百八十九研究棟
第五百九十研究棟
第五百九十一研究棟
第五百九十二研究棟
第五百九十三研究棟
第五百九十四研究棟
第五百九十五研究棟
第五百九十六研究棟
第五百九十七研究棟
第五百九十八研究棟
第五百九十九研究棟
第六百研究棟
第六百一研究棟
第六百二研究棟
第六百三研究棟
第六百四研究棟
第六百五研究棟
第六百六研究棟
第六百七研究棟
第六百八研究棟
第六百九研究棟
第六百十研究棟
第六百十一研究棟
第六百十二研究棟
第六百十三研究棟
第六百十四研究棟
第六百十五研究棟
第六百十六研究棟
第六百十七研究棟
第六百十八研究棟
第六百十九研究棟
第六百二十研究棟
第六百二十一研究棟
第六百二十二研究棟
第六百二十三研究棟
第六百二十四研究棟
第六百二十五研究棟
第六百二十六研究棟
第六百二十七研究棟
第六百二十八研究棟
第六百二十九研究棟
第六百三十研究棟
第六百三十一研究棟
第六百三十二研究棟
第六百三十三研究棟
第六百三十四研究棟
第六百三十五研究棟
第六百三十六研究棟
第六百三十七研究棟
第六百三十八研究棟
第六百三十九研究棟
第六百四十研究棟
第六百四十一研究棟
第六百四十二研究棟
第六百四十三研究棟
第六百四十四研究棟
第六百四十五研究棟
第六百四十六研究棟
第六百四十七研究棟
第六百四十八研究棟
第六百四十九研究棟
第六百五十研究棟
第六百五十一研究棟
第六百五十二研究棟
第六百五十三研究棟
第六百五十四研究棟
第六百五十五研究棟
第六百五十六研究棟
第六百五十七研究棟
第六百五十八研究棟
第六百五十九研究棟
第六百六十研究棟
第六百六十一研究棟
第六百六十二研究棟
第六百六十三研究棟
第六百六十四研究棟
第六百六十五研究棟
第六百六十六研究棟
第六百六十七研究棟
第六百六十八研究棟
第六百六十九研究棟
第六百七十研究棟
第六百七十一研究棟
第六百七十二研究棟
第六百七十三研究棟
第六百七十四研究棟
第六百七十五研究棟
第六百七十六研究棟
第六百七十七研究棟
第六百七十八研究棟
第六百七十九研究棟
第六百八十研究棟
第六百八十一研究棟
第六百八十二研究棟
第六百八十三研究棟
第六百八十四研究棟
第六百八十五研究棟
第六百八十六研究棟
第六百八十七研究棟
第六百八十八研究棟
第六百八十九研究棟
第六百九十研究棟
第六百九十一研究棟
第六百九十二研究棟
第六百九十三研究棟
第六百九十四研究棟
第六百九十五研究棟
第六百九十六研究棟
第六百九十七研究棟
第六百九十八研究棟
第六百九十九研究棟
第七百研究棟
第七百一研究棟
第七百二研究棟
第七百三研究棟
第七百四研究棟
第七百五研究棟
第七百六研究棟
第七百七研究棟
第七百八研究棟
第七百九研究棟
第七百十研究棟
第七百十一研究棟
第七百十二研究棟
第七百十三研究棟
第七百十四研究棟
第七百十五研究棟
第七百十六研究棟
第七百十七研究棟
第七百十八研究棟
第七百十九研究棟
第七百二十研究棟
第七百二十一研究棟
第七百二十二研究棟
第七百二十三研究棟
第七百二十四研究棟
第七百二十五研究棟
第七百二十六研究棟
第七百二十七研究棟
第七百二十八研究棟
第七百二十九研究棟
第七百三十研究棟
第七百三十一研究棟
第七百三十二研究棟
第七百三十三研究棟
第七百三十四研究棟
第七百三十五研究棟
第七百三十六研究棟
第七百三十七研究棟
第七百三十八研究棟
第七百三十九研究棟
第七百四十研究棟
第七百四十一研究棟
第七百四十二研究棟
第七百四十三研究棟
第七百四十四研究棟
第七百四十五研究棟
第七百四十六研究棟
第七百四十七研究棟
第七百四十八研究棟
第七百四十九研究棟
第七百五十研究棟
第七百五十一研究棟
第七百五十二研究棟
第七百五十三研究棟
第七百五十四研究棟
第七百五十五研究棟
第七百五十六研究棟
第七百五十七研究棟
第七百五十八研究棟
第七百五十九研究棟
第七百六十研究棟
第七百六十一研究棟
第七百六十二研究棟
第七百六十三研究棟
第七百六十四研究棟
第七百六十五研究棟
第七百六十六研究棟
第七百六十七研究棟
第七百六十八研究棟
第七百六十九研究棟
第七百七十研究棟
第七百七十一研究棟
第七百七十二研究棟
第七百七十三研究棟
第七百七十四研究棟
第七百七十五研究棟
第七百七十六研究棟
第七百七十七研究棟
第七百七十八研究棟
第七百七十九研究棟
第七百八十研究棟
第七百八十一研究棟
第七百八十二研究棟
第七百八十三研究棟
第七百八十四研究棟
第七百八十五研究棟
第七百八十六研究棟
第七百八十七研究棟
第七百八十八研究棟
第七百八十九研究棟
第七百九十研究棟
第七百九十一研究棟
第七百九十二研究棟
第七百九十三研究棟
第七百九十四研究棟
第七百九十五研究棟
第七百九十六研究棟
第七百九十七研究棟
第七百九十八研究棟
第七百九十九研究棟
第八百研究棟
第八百一研究棟
第八百二研究棟
第八百三研究棟
第八百四研究棟
第八百五研究棟
第八百六研究棟
第八百七研究棟
第八百八研究棟
第八百九研究棟
第八百十研究棟
第八百十一研究棟
第八百十二研究棟
第八百十三研究棟
第八百十四研究棟
第八百十五研究棟
第八百十六研究棟
第八百十七研究棟
第八百十八研究棟
第八百十九研究棟
第八百二十研究棟
第八百二十一研究棟
第八百二十二研究棟
第八百二十三研究棟
第八百二十四研究棟
第八百二十五研究棟
第八百二十六研究棟
第八百二十七研究棟
第八百二十八研究棟
第八百二十九研究棟
第八百三十研究棟
第八百三十一研究棟
第八百三十二研究棟
第八百三十三研究棟
第八百三十四研究棟
第八百三十五研究棟
第八百三十六研究棟
第八百三十七研究棟
第八百三十八研究棟
第八百三十九研究棟
第八百四十研究棟
第八百四十一研究棟
第八百四十二研究棟
第八百四十三研究棟
第八百四十四研究棟
第八百四十五研究棟
第八百四十六研究棟
第八百四十七研究棟
第八百四十八研究棟
第八百四十九研究棟
第八百五十研究棟
第八百五十一研究棟
第八百五十二研究棟
第八百五十三研究棟
第八百五十四研究棟
第八百五十五研究棟
第八百五十六研究棟
第八百五十七研究棟
第八百五十八研究棟
第八百五十九研究棟
第八百六十研究棟
第八百六十一研究棟
第八百六十二研究棟
第八百六十三研究棟
第八百六十四研究棟
第八百六十五研究棟
第八百六十六研究棟
第八百六十七研究棟
第八百六十八研究棟
第八百六十九研究棟
第八百七十研究棟
第八百七十一研究棟
第八百七十二研究棟
第八百七十三研究棟
第八百七十四研究棟
第八百七十五研究棟
第八百七十六研究棟
第八百七十七研究棟
第八百七十八研究棟
第八百七十九研究棟
第八百八十研究棟
第八百八十一研究棟
第八百八十二研究棟
第八百八十三研究棟
第八百八十四研究棟
第八百八十五研究棟
第八百八十六研究棟
第八百八十七研究棟
第八百八十八研究棟
第八百八十九研究棟
第八百九十研究棟
第八百九十一研究棟
第八百九十二研究棟
第八百九十三研究棟
第八百九十四研究棟
第八百九十五研究棟
第八百九十六研究棟
第八百九十七研究棟
第八百九十八研究棟
第八百九十九研究棟
第九百研究棟
第九百一研究棟
第九百二研究棟
第九百三研究棟
第九百四研究棟
第九百五研究棟
第九百六研究棟
第九百七研究棟
第九百八研究棟
第九百九研究棟
第九百十研究棟
第九百十一研究棟
第九百十二研究棟
第九百十三研究棟
第九百十四研究棟
第九百十五研究棟
第九百十六研究棟
第九百十七研究棟
第九百十八研究棟
第九百十九研究棟
第九百二十研究棟
第九百二十一研究棟
第九百二十二研究棟
第九百二十三研究棟
第九百二十四研究棟
第九百二十五研究棟
第九百二十六研究棟
第九百二十七研究棟
第九百二十八研究棟
第九百二十九研究棟
第九百三十研究棟
第九百三十一研究棟
第九百三十二研究棟
第九百三十三研究棟
第九百三十四研究棟
第九百三十五研究棟
第九百三十六研究棟
第九百三十七研究棟
第九百三十八研究棟
第九百三十九研究棟
第九百四十研究棟
第九百四十一研究棟
第九百四十二研究棟
第九百四十三研究棟
第九百四十四研究棟
第九百四十五研究棟
第九百四十六研究棟
第九百四十七研究棟
第九百四十八研究棟
第九百四十九研究棟
第九百五十研究棟
第九百五十一研究棟
第九百五十二研究棟
第九百五十三研究棟
第九百五十四研究棟
第九百五十五研究棟
第九百五十六研究棟
第九百五十七研究棟
第九百五十八研究棟
第九百五十九研究棟
第九百六十研究棟
第九百六十一研究棟
第九百六十二研究棟
第九百六十三研究棟
第九百六十四研究棟
第九百六十五研究棟
第九百六十六研究棟
第九百六十七研究棟
第九百六十八研究棟
第九百六十九研究棟
第九百七十研究棟
第九百七十一研究棟
第九百七十二研究棟
第九百七十三研究棟
第九百七十四研究棟
第九百七十五研究棟
第九百七十六研究棟
第九百七十七研究棟
第九百七十八研究棟
第九百七十九研究棟
第九百八十研究棟
第九百八十一研究棟
第九百八十二研究棟
第九百八十三研究棟
第九百八十四研究棟
第九百八十五研究棟
第九百八十六研究棟
第九百八十七研究棟
第九百八十八研究棟
第九百八十九研究棟
第九百九十研究棟
第九百九十一研究棟
第九百九十二研究棟
第九百九十三研究棟
第九百九十四研究棟
第九百九十五研究棟
第九百九十六研究棟
第九百九十七研究棟
第九百九十八研究棟
第九百九十九研究棟
第千研究棟
第千一研究棟
第千二研究棟
第千三研究棟
第千四研究棟
第千五研究棟
第千六研究棟
第千七研究棟
第千八研究棟
第千九研究棟
第千十研究棟
第千十一研究棟
第千十二研究棟
第千十三研究棟
第千十四研究棟
第千十五研究棟
第千十六研究棟
第千十七研究棟
第千十八研究棟
第千十九研究棟
第千二十研究棟
第千二十一研究棟
第千二十二研究棟
第千二十三研究棟
第千二十四研究棟
第千二十五研究棟
第千二十六研究棟
第千二十七研究棟
第千二十八研究棟
第千二十九研究棟
第千三十研究棟
第千三十一研究棟
第千三十二研究棟
第千三十三研究棟
第千三十四研究棟
第千三十五研究棟
第千三十六研究棟
第千三十七研究棟
第千三十八研究棟
第千三十九研究棟
第千四十研究棟
第千四十一研究棟
第千四十二研究棟
第千四十三研究棟
第千四十四研究棟
第千四十五研究棟
第千四十六研究棟
第千四十七研究棟
第千四十八研究棟
第千四十九研究棟
第千五十研究棟
第千五十一研究棟
第千五十二研究棟
第千五十三研究棟
第千五十四研究棟
第千五十五研究棟
第千五十六研究棟
第千五十七研究棟
第千五十八研究棟
第千五十九研究棟
第千六十研究棟
第千六十一研究棟
第千六十二研究棟
第千六十三研究棟
第千六十四研究棟
第千六十五研究棟
第千六十六研究棟
第千六十七研究棟
第千六十八研究棟
第千六十九研究棟
第千七十研究棟
第千七十一研究棟
第千七十二研究棟
第千七十三研究棟
第千七十四研究棟
第千七十五研究棟
第千七十六研究棟
第千七十七研究棟
第千七十八研究棟
第千七十九研究棟
第千八十研究棟
第千八十一研究棟
第千八十二研究棟
第千八十三研究棟
第千八十四研究棟
第千八十五研究棟
第千八十六研究棟
第千八十七研究棟
第千八十八研究棟
第千八十九研究棟
第千九十研究棟
第千九十一研究棟
第千九十二研究棟
第千九十三研究棟
第千九十四研究棟
第千九十五研究棟
第千九十六研究棟
第千九十七研究棟
第千九十八研究棟
第千九十九研究棟
第千百研究棟
第千百一研究棟
第千百二研究棟
第千百三研究棟
第千百四研究棟
第千百五研究棟
第千百六研究棟
第千百七研究棟
第千百八研究棟
第千百九研究棟
第千百十研究棟
第千百十一研究棟
第千百十二研究棟
第千百十三研究棟
第千百十四研究棟
第千百十五研究棟
第千百十六研究棟
第千百十七研究棟
第千百十八研究棟
第千百十九研究棟
第千百二十研究棟
第千百二十一研究棟
第千百二十二研究棟
第千百二十三研究棟
第千百二十四研究棟
第千百二十五研究棟
第千百二十六研究棟
第千百二十七研究棟
第千百二十八研究棟
第千百二十九研究棟
第千百三十研究棟
第千百三十一研究棟
第千百三十二研究棟
第千百三十三研究棟
第千百三十四研究棟
第千百三十五研究棟
第千百三十六研究棟
第千百三十七研究棟
第千百三十八研究棟
第千百三十九研究棟
第千百四十研究棟
第千百四十一研究棟
第千百四十二研究棟
第千百四十三研究棟
第千百四十四研究棟
第千百四十五研究棟
第千百四十六研究棟
第千百四十七研究棟
第千百四十八研究棟
第千百四十九研究棟
第千百五十研究棟
第千百五十一研究棟
第千百五十二研究棟
第千百五十三研究棟
第千百五十四研究棟
第千百五十五研究棟
第千百五十六研究棟
第千百五十七研究棟
第千百五十八研究棟
第千百五十九研究棟
第千百六十研究棟
第千百六十一研究棟
第千百六十二研究棟
第千百六十三研究棟
第千百六十四研究棟
第千百六十五研究棟
第千百六十六研究棟
第千百六十七研究棟
第千百六十八研究棟
第千百六十九研究棟
第千百七十研究棟
第千百七十一研究棟
第千百七十二研究棟
第千百七十三研究棟
第千百七十四研究棟
第千百七十五研究棟
第千百七十六研究棟
第千百七十七研究棟
第千百七十八研究棟
第千百七十九研究棟
第千百八十研究棟
第千百八十一研究棟
第千百八十二研究棟
第千百八十三研究棟
第千百八十四研究棟
第千百八十五研究棟
第千百八十六研究棟
第千百八十七研究棟
第千百八十八研究棟
第千百八十九研究棟
第千百九十研究棟
第千百九十一研究棟
第千百九十二研究棟
第千百九十三研究棟
第千百九十四研究棟
第千百九十五研究棟
第千百九十六研究棟
第千百九十七研究棟
第千百九十八研究棟
第千百九十九研究棟
第千二百研究棟
第千二百一研究棟
第千二百二研究棟
第千二百三研究棟
第千二百四研究棟
第千二百五研究棟
第千二百六研究棟
第千二百七研究棟
第千二百八研究棟
第千二百九研究棟
第千二百十研究棟
第千二百十一研究棟
第千二百十二研究棟
第千二百十三研究棟
第千二百十四研究棟
第千二百十五研究棟
第千二百十六研究棟
第千二百十七研究棟
第千二百十八研究棟
第千二百十九研究棟
第千二百二十研究棟
第千二百二十一研究棟
第千二百二十二研究棟
第千二百二十三研究棟
第千二百二十四研究棟
第千二百二十五研究棟
第千二百二十六研究棟
第千二百二十七研究棟
第千二百二十八研究棟
第千二百二十九研究棟
第千二百三十研究棟
第千二百三十一研究棟
第千二百三十二研究棟
第千二百三十三研究棟
第千二百三十四研究棟
第千二百三十五研究棟
第千二百三十六研究棟
第千二百三十七研究棟
第千二百三十八研究棟
第千二百三十九研究棟
第千二百四十研究棟
第千二百四十一研究棟
第千二百四十二研究棟
第千二百四十三研究棟
第千二百四十四研究棟
第千二百四十五研究棟
第千二百四十六研究棟
第千二百四十七研究棟
第千二百四十八研究棟
第千二百四十九研究棟
第千二百五十研究棟
第千二百五十一研究棟
第千二百五十二研究棟
第千二百五十三研究棟
第千二百五十四研究棟
第千二百五十五研究棟
第千二百五十六研究棟
第千二百五十七研究棟
第千二百五十八研究棟
第千二百五十九研究棟
第千二百六十研究棟
第千二百六十一研究棟
第千二百六十二研究棟
第千二百六十三研究棟
第千二百六十四研究棟
第千二百六十五研究棟
第千二百六十六研究棟
第千二百六十七研究棟
第千二百六十八研究棟
第千二百六十九研究棟
第千二百七十研究棟
第千二百七十一研究棟
第千二百七十二研究棟
第千二百七十三研究棟
第千二百七十四研究棟
第千二百七十五研究棟
第千二百七十六研究棟
第千二百七十七研究棟
第千二百七十八研究棟
第千二百七十九研究棟
第千二百八十研究棟
第千二百八十一研究棟
第千二百八十二研究棟
第千二百八十三研究棟
第千二百八十四研究棟
第千二百八十五研究棟
第千二百八十六研究棟
第千二百八十七研究棟
第千二百八十八研究棟
第千二百八十九研究棟
第千二百九十研究棟
第千二百九十一研究棟
第千二百九十二研究棟
第千二百九十三研究棟
第千二百九十四研究棟
第千二百九十五研究棟
第千二百九十六研究棟
第千二百九十七研究棟
第千二百九十八研究棟
第千二百九十九研究棟
第千三百研究棟
第千三百一研究棟
第千三百二研究棟
第千三百三研究棟
第千三百四研究棟
第千三百五研究棟
第千三百六研究棟
第千三百七研究棟
第千三百八研究棟
第千三百九研究棟
第千三百十研究棟
第千三百十一研究棟
第千三百十二研究棟
第千三百十三研究棟
第千三百十四研究棟
第千三百十五研究棟
第千三百十六研究棟
第千三百十七研究棟
第千三百十八研究棟
第千三百十九研究棟
第千三百二十研究棟
第千三百二十一研究棟
第千三百二十二研究棟
第千三百二十三研究棟
第千三百二十四研究棟
第千三百二十五研究棟
第千三百二十六研究棟
第千三百二十七研究棟
第千三百二十八研究棟
第千三百二十九研究棟
第千三百三十研究棟
第千三百三十一研究棟
第千三百三十二研究棟
第千三百三十三研究棟
第千三百三十四研究棟
第千三百三十五研究棟
第千三百三十六研究棟
第千三百三十七研究棟
第千三百三十八研究棟
第千三百三十九研究棟
第千三百四十研究棟
第千三百四十一研究棟
第千三百四十二研究棟
第千三百四十三研究棟
第千三百四十四研究棟
第千三百四十五研究棟
第千三百四十六研究棟
第千三百四十七研究棟
第千三百四十八研究棟
第千三百四十九研究棟
第千三百五十研究棟
第千三百五十一研究棟
第千三百五十二研究棟
第千三百五十三研究棟
第千三百五十四研究棟
第千三百五十五研究棟
第千三百五十六研究棟
第千三百五十七研究棟
第千三百五十八研究棟
第千三百五十九研究棟
第千三百六十研究棟
第千三百六十一研究棟
第千三百六十二研究棟
第千三百六十三研究棟
第千三百六十四研究棟
第千三百六十五研究棟
第千三百六十六研究棟
第千三百六十七研究棟
第千三百六十八研究棟
第千三百六十九研究棟
第千三百七十研究棟
第千三百七十一研究棟
第千三百七十二研究棟
第千三百七十三研究棟
第千三百七十四研究棟
第千三百七十五研究棟
第千三百七十六研究棟
第千三百七十七研究棟
第千三百七十八研究棟
第千三百七十九研究棟
第千三百八十研究棟
第千三百八十一研究棟
第千三百八十二研究棟
第千三百八十三研究棟
第千三百八十四研究棟
第千三百八十五研究棟
第千三百八十六研究棟
第千三百八十七研究棟
第千三百八十八研究棟
第千三百八十九研究棟
第千三百九十研究棟
第千三百九十一研究棟
第千三百九十二研究棟
第千三百九十三研究棟
第千三百九十四研究棟
第千三百九十五研究棟
第千三百九十六研究棟
第千三百九十七研究棟
第千三百九十八研究棟
第千三百九十九研究棟
第千四百研究棟
第千四百一研究棟
第千四百二研究棟
第千四百三研究棟
第千四百四研究棟
第千四百五研究棟
第千四百六研究棟
第千四百七研究棟
第千四百八研究棟
第千四百九研究棟
第千四百十研究棟
第千四百十一研究棟
第千四百十二研究棟
第千四百十三研究棟
第千四百十四研究棟
第千四百十五研究棟
第千四百十六研究棟
第千四百十七研究棟
第千四百十八研究棟
第千四百十九研究棟
第千四百二十研究棟
第千四百二十一研究棟
第千四百二十二研究棟
第千四百二十三研究棟
第千四百二十四研究棟
第千四百二十五研究棟
第千四百二十六研究棟
第千四百二十七研究棟
第千四百二十八研究棟
第千四百二十九研究棟
第千四百三十研究棟
第千四百三十一研究棟
第千四百三十二研究棟
第千四百三十三研究棟
第千四百三十四研究棟
第千四百三十五研究棟
第千四百三十六研究棟
第千四百三十七研究棟
第千四百三十八研究棟
第千四百三十九研究棟
第千四百四十研究棟
第千四百四十一研究棟
第千四百四十二研究棟
第千四百四十三研究棟
第千四百四十四研究棟
第千四百四十五研究棟
第千四百四十六研究棟
第千四百四十七研究棟
第千四百四十八研究棟
第千四百四十九研究棟
第千四百五十研究棟
第千四百五十一研究棟
第千四百五十二研究棟
第千四百五十三研究棟
第千四百五十四研究棟
第千四百五十五研究棟
第千四百五十六研究棟
第千四百五十七研究棟
第千四百五十八研究棟
第千四百五十九研究棟
第千四百六十研究棟
第千四百六十一研究棟
第千四百六十二研究棟
第千四百六十三研究棟
第千四百六十四研究棟
第千四百六十五研究棟
第千四百六十六研究棟
第千四百六十七研究棟
第千四百六十八研究棟
第千四百六十九研究棟
第千四百七十研究棟
第千四百七十一研究棟
第千四百七十二研究棟
第千四百七十三研究棟
第千四百七十四研究棟
第千四百七十五研究棟
第千四百七十六研究棟
第千四百七十七研究棟
第千四百七十八研究棟
第千四百七十九研究棟
第千四百八十研究棟
第千四百八十一研究棟
第千四百八十二研究棟
第千四百八十三研究棟
第千四百八十四研究棟
第千四百八十五研究棟
第千四百八十六研究棟
第千四百八十七研究棟
第千四百八十八研究棟
第千四百八十九研究棟
第千四百九十研究棟
第千四百九十一研究棟
第千四百九十二研究棟
第千四百九十三研究棟
第千四百九十四研究棟
第千四百九十五研究棟
第千四百九十六研究棟
第千四百九十七研究棟
第千四百九十八研究棟
第千四百九十九研究棟
第千五百研究棟
第千五百一研究棟
第千五百二研究棟
第千五百三研究棟
第千五百四研究棟
第千五百五研究棟
第千五百六研究棟
第千五百七研究棟
第千五百八研究棟
第


図書館
外来診療棟
第一講義棟
第二講義棟
第一病棟
第二病棟
第三病棟
第四病棟
第五病棟
第六病棟
第一研究棟
第二研究棟
第三研究棟
第四研究棟
第五研究棟
第六研究棟
第七研究棟
第八研究棟
第九研究棟
第十研究棟
第十一研究棟
第十二研究棟
第十三研究棟
第十四研究棟
第十五研究棟
第十六研究棟
第十七研究棟
第十八研究棟
第十九研究棟
第二十研究棟
第二十一研究棟
第二十二研究棟
第二十三研究棟
第二十四研究棟
第二十五研究棟
第二十六研究棟
第二十七研究棟
第二十八研究棟
第二十九研究棟
第三十研究棟
第三十一研究棟
第三十二研究棟
第三十三研究棟
第三十四研究棟
第三十五研究棟
第三十六研究棟
第三十七研究棟
第三十八研究棟
第三十九研究棟
第四十研究棟
第四十一研究棟
第四十二研究棟
第四十三研究棟
第四十四研究棟
第四十五研究棟
第四十六研究棟
第四十七研究棟
第四十八研究棟
第四十九研究棟
第五十研究棟
第五十一研究棟
第五十二研究棟
第五十三研究棟
第五十四研究棟
第五十五研究棟
第五十六研究棟
第五十七研究棟
第五十八研究棟
第五十九研究棟
第六十研究棟
第六十一研究棟
第六十二研究棟
第六十三研究棟
第六十四研究棟
第六十五研究棟
第六十六研究棟
第六十七研究棟
第六十八研究棟
第六十九研究棟
第七十研究棟
第七十一研究棟
第七十二研究棟
第七十三研究棟
第七十四研究棟
第七十五研究棟
第七十六研究棟
第七十七研究棟
第七十八研究棟
第七十九研究棟
第八十研究棟
第八十一研究棟
第八十二研究棟
第八十三研究棟
第八十四研究棟
第八十五研究棟
第八十六研究棟
第八十七研究棟
第八十八研究棟
第八十九研究棟
第九十研究棟
第九十一研究棟
第九十二研究棟
第九十三研究棟
第九十四研究棟
第九十五研究棟
第九十六研究棟
第九十七研究棟
第九十八研究棟
第九十九研究棟
第百研究棟
第百一研究棟
第百二研究棟
第百三研究棟
第百四研究棟
第百五研究棟
第百六研究棟
第百七研究棟
第百八研究棟
第百九研究棟
第百十研究棟
第百十一研究棟
第百十二研究棟
第百十三研究棟
第百十四研究棟
第百十五研究棟
第百十六研究棟
第百十七研究棟
第百十八研究棟
第百十九研究棟
第百二十研究棟
第百二十一研究棟
第百二十二研究棟
第百二十三研究棟
第百二十四研究棟
第百二十五研究棟
第百二十六研究棟
第百二十七研究棟
第百二十八研究棟
第百二十九研究棟
第百三十研究棟
第百三十一研究棟
第百三十二研究棟
第百三十三研究棟
第百三十四研究棟
第百三十五研究棟
第百三十六研究棟
第百三十七研究棟
第百三十八研究棟
第百三十九研究棟
第百四十研究棟
第百四十一研究棟
第百四十二研究棟
第百四十三研究棟
第百四十四研究棟
第百四十五研究棟
第百四十六研究棟
第百四十七研究棟
第百四十八研究棟
第百四十九研究棟
第百五十研究棟
第百五十一研究棟
第百五十二研究棟
第百五十三研究棟
第百五十四研究棟
第百五十五研究棟
第百五十六研究棟
第百五十七研究棟
第百五十八研究棟
第百五十九研究棟
第百六十研究棟
第百六十一研究棟
第百六十二研究棟
第百六十三研究棟
第百六十四研究棟
第百六十五研究棟
第百六十六研究棟
第百六十七研究棟
第百六十八研究棟
第百六十九研究棟
第百七十研究棟
第百七十一研究棟
第百七十二研究棟
第百七十三研究棟
第百七十四研究棟
第百七十五研究棟
第百七十六研究棟
第百七十七研究棟
第百七十八研究棟
第百七十九研究棟
第百八十研究棟
第百八十一研究棟
第百八十二研究棟
第百八十三研究棟
第百八十四研究棟
第百八十五研究棟
第百八十六研究棟
第百八十七研究棟
第百八十八研究棟
第百八十九研究棟
第百九十研究棟
第百九十一研究棟
第百九十二研究棟
第百九十三研究棟
第百九十四研究棟
第百九十五研究棟
第百九十六研究棟
第百九十七研究棟
第百九十八研究棟
第百九十九研究棟
第二百研究棟
第二百一研究棟
第二百二研究棟
第二百三研究棟
第二百四研究棟
第二百五研究棟
第二百六研究棟
第二百七研究棟
第二百八研究棟
第二百九研究棟
第二百十研究棟
第二百十一研究棟
第二百十二研究棟
第二百十三研究棟
第二百十四研究棟
第二百十五研究棟
第二百十六研究棟
第二百十七研究棟
第二百十八研究棟
第二百十九研究棟
第二百二十研究棟
第二百二十一研究棟
第二百二十二研究棟
第二百二十三研究棟
第二百二十四研究棟
第二百二十五研究棟
第二百二十六研究棟
第二百二十七研究棟
第二百二十八研究棟
第二百二十九研究棟
第二百三十研究棟
第二百三十一研究棟
第二百三十二研究棟
第二百三十三研究棟
第二百三十四研究棟
第二百三十五研究棟
第二百三十六研究棟
第二百三十七研究棟
第二百三十八研究棟
第二百三十九研究棟
第二百四十研究棟
第二百四十一研究棟
第二百四十二研究棟
第二百四十三研究棟
第二百四十四研究棟
第二百四十五研究棟
第二百四十六研究棟
第二百四十七研究棟
第二百四十八研究棟
第二百四十九研究棟
第二百五十研究棟
第二百五十一研究棟
第二百五十二研究棟
第二百五十三研究棟
第二百五十四研究棟
第二百五十五研究棟
第二百五十六研究棟
第二百五十七研究棟
第二百五十八研究棟
第二百五十九研究棟
第二百六十研究棟
第二百六十一研究棟
第二百六十二研究棟
第二百六十三研究棟
第二百六十四研究棟
第二百六十五研究棟
第二百六十六研究棟
第二百六十七研究棟
第二百六十八研究棟
第二百六十九研究棟
第二百七十研究棟
第二百七十一研究棟
第二百七十二研究棟
第二百七十三研究棟
第二百七十四研究棟
第二百七十五研究棟
第二百七十六研究棟
第二百七十七研究棟
第二百七十八研究棟
第二百七十九研究棟
第二百八十研究棟
第二百八十一研究棟
第二百八十二研究棟
第二百八十三研究棟
第二百八十四研究棟
第二百八十五研究棟
第二百八十六研究棟
第二百八十七研究棟
第二百八十八研究棟
第二百八十九研究棟
第二百九十研究棟
第二百九十一研究棟
第二百九十二研究棟
第二百九十三研究棟
第二百九十四研究棟
第二百九十五研究棟
第二百九十六研究棟
第二百九十七研究棟
第二百九十八研究棟
第二百九十九研究棟
第三百研究棟
第三百一研究棟
第三百二研究棟
第三百三研究棟
第三百四研究棟
第三百五研究棟
第三百六研究棟
第三百七研究棟
第三百八研究棟
第三百九研究棟
第三百十研究棟
第三百十一研究棟
第三百十二研究棟
第三百十三研究棟
第三百十四研究棟
第三百十五研究棟
第三百十六研究棟
第三百十七研究棟
第三百十八研究棟
第三百十九研究棟
第三百二十研究棟
第三百二十一研究棟
第三百二十二研究棟
第三百二十三研究棟
第三百二十四研究棟
第三百二十五研究棟
第三百二十六研究棟
第三百二十七研究棟
第三百二十八研究棟
第三百二十九研究棟
第三百三十研究棟
第三百三十一研究棟
第三百三十二研究棟
第三百三十三研究棟
第三百三十四研究棟
第三百三十五研究棟
第三百三十六研究棟
第三百三十七研究棟
第三百三十八研究棟
第三百三十九研究棟
第三百四十研究棟
第三百四十一研究棟
第三百四十二研究棟
第三百四十三研究棟
第三百四十四研究棟
第三百四十五研究棟
第三百四十六研究棟
第三百四十七研究棟
第三百四十八研究棟
第三百四十九研究棟
第三百五十研究棟
第三百五十一研究棟
第三百五十二研究棟
第三百五十三研究棟
第三百五十四研究棟
第三百五十五研究棟
第三百五十六研究棟
第三百五十七研究棟
第三百五十八研究棟
第三百五十九研究棟
第三百六十研究棟
第三百六十一研究棟
第三百六十二研究棟
第三百六十三研究棟
第三百六十四研究棟
第三百六十五研究棟
第三百六十六研究棟
第三百六十七研究棟
第三百六十八研究棟
第三百六十九研究棟
第三百七十研究棟
第三百七十一研究棟
第三百七十二研究棟
第三百七十三研究棟
第三百七十四研究棟
第三百七十五研究棟
第三百七十六研究棟
第三百七十七研究棟
第三百七十八研究棟
第三百七十九研究棟
第三百八十研究棟
第三百八十一研究棟
第三百八十二研究棟
第三百八十三研究棟
第三百八十四研究棟
第三百八十五研究棟
第三百八十六研究棟
第三百八十七研究棟
第三百八十八研究棟
第三百八十九研究棟
第三百九十研究棟
第三百九十一研究棟
第三百九十二研究棟
第三百九十三研究棟
第三百九十四研究棟
第三百九十五研究棟
第三百九十六研究棟
第三百九十七研究棟
第三百九十八研究棟
第三百九十九研究棟
第四百研究棟
第四百一研究棟
第四百二研究棟
第四百三研究棟
第四百四研究棟
第四百五研究棟
第四百六研究棟
第四百七研究棟
第四百八研究棟
第四百九研究棟
第四百十研究棟
第四百十一研究棟
第四百十二研究棟
第四百十三研究棟
第四百十四研究棟
第四百十五研究棟
第四百十六研究棟
第四百十七研究棟
第四百十八研究棟
第四百十九研究棟
第四百二十研究棟
第四百二十一研究棟
第四百二十二研究棟
第四百二十三研究棟
第四百二十四研究棟
第四百二十五研究棟
第四百二十六研究棟
第四百二十七研究棟
第四百二十八研究棟
第四百二十九研究棟
第四百三十研究棟
第四百三十一研究棟
第四百三十二研究棟
第四百三十三研究棟
第四百三十四研究棟
第四百三十五研究棟
第四百三十六研究棟
第四百三十七研究棟
第四百三十八研究棟
第四百三十九研究棟
第四百四十研究棟
第四百四十一研究棟
第四百四十二研究棟
第四百四十三研究棟
第四百四十四研究棟
第四百四十五研究棟
第四百四十六研究棟
第四百四十七研究棟
第四百四十八研究棟
第四百四十九研究棟
第四百五十研究棟
第四百五十一研究棟
第四百五十二研究棟
第四百五十三研究棟
第四百五十四研究棟
第四百五十五研究棟
第四百五十六研究棟
第四百五十七研究棟
第四百五十八研究棟
第四百五十九研究棟
第四百六十研究棟
第四百六十一研究棟
第四百六十二研究棟
第四百六十三研究棟
第四百六十四研究棟
第四百六十五研究棟
第四百六十六研究棟
第四百六十七研究棟
第四百六十八研究棟
第四百六十九研究棟
第四百七十研究棟
第四百七十一研究棟
第四百七十二研究棟
第四百七十三研究棟
第四百七十四研究棟
第四百七十五研究棟
第四百七十六研究棟
第四百七十七研究棟
第四百七十八研究棟
第四百七十九研究棟
第四百八十研究棟
第四百八十一研究棟
第四百八十二研究棟
第四百八十三研究棟
第四百八十四研究棟
第四百八十五研究棟
第四百八十六研究棟
第四百八十七研究棟
第四百八十八研究棟
第四百八十九研究棟
第四百九十研究棟
第四百九十一研究棟
第四百九十二研究棟
第四百九十三研究棟
第四百九十四研究棟
第四百九十五研究棟
第四百九十六研究棟
第四百九十七研究棟
第四百九十八研究棟
第四百九十九研究棟
第五百研究棟
第五百一研究棟
第五百二研究棟
第五百三研究棟
第五百四研究棟
第五百五研究棟
第五百六研究棟
第五百七研究棟
第五百八研究棟
第五百九研究棟
第五百十研究棟
第五百十一研究棟
第五百十二研究棟
第五百十三研究棟
第五百十四研究棟
第五百十五研究棟
第五百十六研究棟
第五百十七研究棟
第五百十八研究棟
第五百十九研究棟
第五百二十研究棟
第五百二十一研究棟
第五百二十二研究棟
第五百二十三研究棟
第五百二十四研究棟
第五百二十五研究棟
第五百二十六研究棟
第五百二十七研究棟
第五百二十八研究棟
第五百二十九研究棟
第五百三十研究棟
第五百三十一研究棟
第五百三十二研究棟
第五百三十三研究棟
第五百三十四研究棟
第五百三十五研究棟
第五百三十六研究棟
第五百三十七研究棟
第五百三十八研究棟
第五百三十九研究棟
第五百四十研究棟
第五百四十一研究棟
第五百四十二研究棟
第五百四十三研究棟
第五百四十四研究棟
第五百四十五研究棟
第五百四十六研究棟
第五百四十七研究棟
第五百四十八研究棟
第五百四十九研究棟
第五百五十研究棟
第五百五十一研究棟
第五百五十二研究棟
第五百五十三研究棟
第五百五十四研究棟
第五百五十五研究棟
第五百五十六研究棟
第五百五十七研究棟
第五百五十八研究棟
第五百五十九研究棟
第五百六十研究棟
第五百六十一研究棟
第五百六十二研究棟
第五百六十三研究棟
第五百六十四研究棟
第五百六十五研究棟
第五百六十六研究棟
第五百六十七研究棟
第五百六十八研究棟
第五百六十九研究棟
第五百七十研究棟
第五百七十一研究棟
第五百七十二研究棟
第五百七十三研究棟
第五百七十四研究棟
第五百七十五研究棟
第五百七十六研究棟
第五百七十七研究棟
第五百七十八研究棟
第五百七十九研究棟
第五百八十研究棟
第五百八十一研究棟
第五百八十二研究棟
第五百八十三研究棟
第五百八十四研究棟
第五百八十五研究棟
第五百八十六研究棟
第五百八十七研究棟
第五百八十八研究棟
第五百八十九研究棟
第五百九十研究棟
第五百九十一研究棟
第五百九十二研究棟
第五百九十三研究棟
第五百九十四研究棟
第五百九十五研究棟
第五百九十六研究棟
第五百九十七研究棟
第五百九十八研究棟
第五百九十九研究棟
第六百研究棟
第六百一研究棟
第六百二研究棟
第六百三研究棟
第六百四研究棟
第六百五研究棟
第六百六研究棟
第六百七研究棟
第六百八研究棟
第六百九研究棟
第六百十研究棟
第六百十一研究棟
第六百十二研究棟
第六百十三研究棟
第六百十四研究棟
第六百十五研究棟
第六百十六研究棟
第六百十七研究棟
第六百十八研究棟
第六百十九研究棟
第六百二十研究棟
第六百二十一研究棟
第六百二十二研究棟
第六百二十三研究棟
第六百二十四研究棟
第六百二十五研究棟
第六百二十六研究棟
第六百二十七研究棟
第六百二十八研究棟
第六百二十九研究棟
第六百三十研究棟
第六百三十一研究棟
第六百三十二研究棟
第六百三十三研究棟
第六百三十四研究棟
第六百三十五研究棟
第六百三十六研究棟
第六百三十七研究棟
第六百三十八研究棟
第六百三十九研究棟
第六百四十研究棟
第六百四十一研究棟
第六百四十二研究棟
第六百四十三研究棟
第六百四十四研究棟
第六百四十五研究棟
第六百四十六研究棟
第六百四十七研究棟
第六百四十八研究棟
第六百四十九研究棟
第六百五十研究棟
第六百五十一研究棟
第六百五十二研究棟
第六百五十三研究棟
第六百五十四研究棟
第六百五十五研究棟
第六百五十六研究棟
第六百五十七研究棟
第六百五十八研究棟
第六百五十九研究棟
第六百六十研究棟
第六百六十一研究棟
第六百六十二研究棟
第六百六十三研究棟
第六百六十四研究棟
第六百六十五研究棟
第六百六十六研究棟
第六百六十七研究棟
第六百六十八研究棟
第六百六十九研究棟
第六百七十研究棟
第六百七十一研究棟
第六百七十二研究棟
第六百七十三研究棟
第六百七十四研究棟
第六百七十五研究棟
第六百七十六研究棟
第六百七十七研究棟
第六百七十八研究棟
第六百七十九研究棟
第六百八十研究棟
第六百八十一研究棟
第六百八十二研究棟
第六百八十三研究棟
第六百八十四研究棟
第六百八十五研究棟
第六百八十六研究棟
第六百八十七研究棟
第六百八十八研究棟
第六百八十九研究棟
第六百九十研究棟
第六百九十一研究棟
第六百九十二研究棟
第六百九十三研究棟
第六百九十四研究棟
第六百九十五研究棟
第六百九十六研究棟
第六百九十七研究棟
第六百九十八研究棟
第六百九十九研究棟
第七百研究棟
第七百一研究棟
第七百二研究棟
第七百三研究棟
第七百四研究棟
第七百五研究棟
第七百六研究棟
第七百七研究棟
第七百八研究棟
第七百九研究棟
第七百十研究棟
第七百十一研究棟
第七百十二研究棟
第七百十三研究棟
第七百十四研究棟
第七百十五研究棟
第七百十六研究棟
第七百十七研究棟
第七百十八研究棟
第七百十九研究棟
第七百二十研究棟
第七百二十一研究棟
第七百二十二研究棟
第七百二十三研究棟
第七百二十四研究棟
第七百二十五研究棟
第七百二十六研究棟
第七百二十七研究棟
第七百二十八研究棟
第七百二十九研究棟
第七百三十研究棟
第七百三十一研究棟
第七百三十二研究棟
第七百三十三研究棟
第七百三十四研究棟
第七百三十五研究棟
第七百三十六研究棟
第七百三十七研究棟
第七百三十八研究棟
第七百三十九研究棟
第七百四十研究棟
第七百四十一研究棟
第七百四十二研究棟
第七百四十三研究棟
第七百四十四研究棟
第七百四十五研究棟
第七百四十六研究棟
第七百四十七研究棟
第七百四十八研究棟
第七百四十九研究棟
第七百五十研究棟
第七百五十一研究棟
第七百五十二研究棟
第七百五十三研究棟
第七百五十四研究棟
第七百五十五研究棟
第七百五十六研究棟
第七百五十七研究棟
第七百五十八研究棟
第七百五十九研究棟
第七百六十研究棟
第七百六十一研究棟
第七百六十二研究棟
第七百六十三研究棟
第七百六十四研究棟
第七百六十五研究棟
第七百六十六研究棟
第七百六十七研究棟
第七百六十八研究棟
第七百六十九研究棟
第七百七十研究棟
第七百七十一研究棟
第七百七十二研究棟
第七百七十三研究棟
第七百七十四研究棟
第七百七十五研究棟
第七百七十六研究棟
第七百七十七研究棟
第七百七十八研究棟
第七百七十九研究棟
第七百八十研究棟
第七百八十一研究棟
第七百八十二研究棟
第七百八十三研究棟
第七百八十四研究棟
第七百八十五研究棟
第七百八十六研究棟
第七百八十七研究棟
第七百八十八研究棟
第七百八十九研究棟
第七百九十研究棟
第七百九十一研究棟
第七百九十二研究棟
第七百九十三研究棟
第七百九十四研究棟
第七百九十五研究棟
第七百九十六研究棟
第七百九十七研究棟
第七百九十八研究棟
第七百九十九研究棟
第八百研究棟
第八百一研究棟
第八百二研究棟
第八百三研究棟
第八百四研究棟
第八百五研究棟
第八百六研究棟
第八百七研究棟
第八百八研究棟
第八百九研究棟
第八百十研究棟
第八百十一研究棟
第八百十二研究棟
第八百十三研究棟
第八百十四研究棟
第八百十五研究棟
第八百十六研究棟
第八百十七研究棟
第八百十八研究棟
第八百十九研究棟
第八百二十研究棟
第八百二十一研究棟
第八百二十二研究棟
第八百二十三研究棟
第八百二十四研究棟
第八百二十五研究棟
第八百二十六研究棟
第八百二十七研究棟
第八百二十八研究棟
第八百二十九研究棟
第八百三十研究棟
第八百三十一研究棟
第八百三十二研究棟
第八百三十三研究棟
第八百三十四研究棟
第八百三十五研究棟
第八百三十六研究棟
第八百三十七研究棟
第八百三十八研究棟
第八百三十九研究棟
第八百四十研究棟
第八百四十一研究棟
第八百四十二研究棟
第八百四十三研究棟
第八百四十四研究棟
第八百四十五研究棟
第八百四十六研究棟
第八百四十七研究棟
第八百四十八研究棟
第八百四十九研究棟
第八百五十研究棟
第八百五十一研究棟
第八百五十二研究棟
第八百五十三研究棟
第八百五十四研究棟
第八百五十五研究棟
第八百五十六研究棟
第八百五十七研究棟
第八百五十八研究棟
第八百五十九研究棟
第八百六十研究棟
第八百六十一研究棟
第八百六十二研究棟
第八百六十三研究棟
第八百六十四研究棟
第八百六十五研究棟
第八百六十六研究棟
第八百六十七研究棟
第八百六十八研究棟
第八百六十九研究棟
第八百七十研究棟
第八百七十一研究棟
第八百七十二研究棟
第八百七十三研究棟
第八百七十四研究棟
第八百七十五研究棟
第八百七十六研究棟
第八百七十七研究棟
第八百七十八研究棟
第八百七十九研究棟
第八百八十研究棟
第八百八十一研究棟
第八百八十二研究棟
第八百八十三研究棟
第八百八十四研究棟
第八百八十五研究棟
第八百八十六研究棟
第八百八十七研究棟
第八百八十八研究棟
第八百八十九研究棟
第八百九十研究棟
第八百九十一研究棟
第八百九十二研究棟
第八百九十三研究棟
第八百九十四研究棟
第八百九十五研究棟
第八百九十六研究棟
第八百九十七研究棟
第八百九十八研究棟
第八百九十九研究棟
第九百研究棟
第九百一研究棟
第九百二研究棟
第九百三研究棟
第九百四研究棟
第九百五研究棟
第九百六研究棟
第九百七研究棟
第九百八研究棟
第九百九研究棟
第九百十研究棟
第九百十一研究棟
第九百十二研究棟
第九百十三研究棟
第九百十四研究棟
第九百十五研究棟
第九百十六研究棟
第九百十七研究棟
第九百十八研究棟
第九百十九研究棟
第九百二十研究棟
第九百二十一研究棟
第九百二十二研究棟
第九百二十三研究棟
第九百二十四研究棟
第九百二十五研究棟
第九百二十六研究棟
第九百二十七研究棟
第九百二十八研究棟
第九百二十九研究棟
第九百三十研究棟
第九百三十一研究棟
第九百三十二研究棟
第九百三十三研究棟
第九百三十四研究棟
第九百三十五研究棟
第九百三十六研究棟
第九百三十七研究棟
第九百三十八研究棟
第九百三十九研究棟
第九百四十研究棟
第九百四十一研究棟
第九百四十二研究棟
第九百四十三研究棟
第九百四十四研究棟
第九百四十五研究棟
第九百四十六研究棟
第九百四十七研究棟
第九百四十八研究棟
第九百四十九研究棟
第九百五十研究棟
第九百五十一研究棟
第九百五十二研究棟
第九百五十三研究棟
第九百五十四研究棟
第九百五十五研究棟
第九百五十六研究棟
第九百五十七研究棟
第九百五十八研究棟
第九百五十九研究棟
第九百六十研究棟
第九百六十一研究棟
第九百六十二研究棟
第九百六十三研究棟
第九百六十四研究棟
第九百六十五研究棟
第九百六十六研究棟
第九百六十七研究棟
第九百六十八研究棟
第九百六十九研究棟
第九百七十研究棟
第九百七十一研究棟
第九百七十二研究棟
第九百七十三研究棟
第九百七十四研究棟
第九百七十五研究棟
第九百七十六研究棟
第九百七十七研究棟
第九百七十八研究棟
第九百七十九研究棟
第九百八十研究棟
第九百八十一研究棟
第九百八十二研究棟
第九百八十三研究棟
第九百八十四研究棟
第九百八十五研究棟
第九百八十六研究棟
第九百八十七研究棟
第九百八十八研究棟
第九百八十九研究棟
第九百九十研究棟
第九百九十一研究棟
第九百九十二研究棟
第九百九十三研究棟
第九百九十四研究棟
第九百九十五研究棟
第九百九十六研究棟
第九百九十七研究棟
第九百九十八研究棟
第九百九十九研究棟
第千研究棟
第千一研究棟
第千二研究棟
第千三研究棟
第千四研究棟
第千五研究棟
第千六研究棟
第千七研究棟
第千八研究棟
第千九研究棟
第千十研究棟
第千十一研究棟
第千十二研究棟
第千十三研究棟
第千十四研究棟
第千十五研究棟
第千十六研究棟
第千十七研究棟
第千十八研究棟
第千十九研究棟
第千二十研究棟
第千二十一研究棟
第千二十二研究棟
第千二十三研究棟
第千二十四研究棟
第千二十五研究棟
第千二十六研究棟
第千二十七研究棟
第千二十八研究棟
第千二十九研究棟
第千三十研究棟
第千三十一研究棟
第千三十二研究棟
第千三十三研究棟
第千三十四研究棟
第千三十五研究棟
第千三十六研究棟
第千三十七研究棟
第千三十八研究棟
第千三十九研究棟
第千四十研究棟
第千四十一研究棟
第千四十二研究棟
第千四十三研究棟
第千四十四研究棟
第千四十五研究棟
第千四十六研究棟
第千四十七研究棟
第千四十八研究棟
第千四十九研究棟
第千五十研究棟
第千五十一研究棟
第千五十二研究棟
第千五十三研究棟
第千五十四研究棟
第千五十五研究棟
第千五十六研究棟
第千五十七研究棟
第千五十八研究棟
第千五十九研究棟
第千六十研究棟
第千六十一研究棟
第千六十二研究棟
第千六十三研究棟
第千六十四研究棟
第千六十五研究棟
第千六十六研究棟
第千六十七研究棟
第千六十八研究棟
第千六十九研究棟
第千七十研究棟
第千七十一研究棟
第千七十二研究棟
第千七十三研究棟
第千七十四研究棟
第千七十五研究棟
第千七十六研究棟
第千七十七研究棟
第千七十八研究棟
第千七十九研究棟
第千八十研究棟
第千八十一研究棟
第千八十二研究棟
第千八十三研究棟
第千八十四研究棟
第千八十五研究棟
第千八十六研究棟
第千八十七研究棟
第千八十八研究棟
第千八十九研究棟
第千九十研究棟
第千九十一研究棟
第千九十二研究棟
第千九十三研究棟
第千九十四研究棟
第千九十五研究棟
第千九十六研究棟
第千九十七研究棟
第千九十八研究棟
第千九十九研究棟
第千百研究棟
第千百一研究棟
第千百二研究棟
第千百三研究棟
第千百四研究棟
第千百五研究棟
第千百六研究棟
第千百七研究棟
第千百八研究棟
第千百九研究棟
第千百十研究棟
第千百十一研究棟
第千百十二研究棟
第千百十三研究棟
第千百十四研究棟
第千百十五研究棟
第千百十六研究棟
第千百十七研究棟
第千百十八研究棟
第千百十九研究棟
第千百二十研究棟
第千百二十一研究棟
第千百二十二研究棟
第千百二十三研究棟
第千百二十四研究棟
第千百二十五研究棟
第千百二十六研究棟
第千百二十七研究棟
第千百二十八研究棟
第千百二十九研究棟
第千百三十研究棟
第千百三十一研究棟
第千百三十二研究棟
第千百三十三研究棟
第千百三十四研究棟
第千百三十五研究棟
第千百三十六研究棟
第千百三十七研究棟
第千百三十八研究棟
第千百三十九研究棟
第千百四十研究棟
第千百四十一研究棟
第千百四十二研究棟
第千百四十三研究棟
第千百四十四研究棟
第千百四十五研究棟
第千百四十六研究棟
第千百四十七研究棟
第千百四十八研究棟
第千百四十九研究棟
第千百五十研究棟
第千百五十一研究棟
第千百五十二研究棟
第千百五十三研究棟
第千百五十四研究棟
第千百五十五研究棟
第千百五十六研究棟
第千百五十七研究棟
第千百五十八研究棟
第千百五十九研究棟
第千百六十研究棟
第千百六十一研究棟
第千百六十二研究棟
第千百六十三研究棟
第千百六十四研究棟
第千百六十五研究棟
第千百六十六研究棟
第千百六十七研究棟
第千百六十八研究棟
第千百六十九研究棟
第千百七十研究棟
第千百七十一研究棟
第千百七十二研究棟
第千百七十三研究棟
第千百七十四研究棟
第千百七十五研究棟
第千百七十六研究棟
第千百七十七研究棟
第千百七十八研究棟
第千百七十九研究棟
第千百八十研究棟
第千百八十一研究棟
第千百八十二研究棟
第千百八十三研究棟
第千百八十四研究棟
第千百八十五研究棟
第千百八十六研究棟
第千百八十七研究棟
第千百八十八研究棟
第千百八十九研究棟
第千百九十研究棟
第千百九十一研究棟
第千百九十二研究棟
第千百九十三研究棟
第千百九十四研究棟
第千百九十五研究棟
第千百九十六研究棟
第千百九十七研究棟
第千百九十八研究棟
第千百九十九研究棟
第千二百研究棟
第千二百一研究棟
第千二百二研究棟
第千二百三研究棟
第千二百四研究棟
第千二百五研究棟
第千二百六研究棟
第千二百七研究棟
第千二百八研究棟
第千二百九研究棟
第千二百十研究棟
第千二百十一研究棟
第千二百十二研究棟
第千二百十三研究棟
第千二百十四研究棟
第千二百十五研究棟
第千二百十六研究棟
第千二百十七研究棟
第千二百十八研究棟
第千二百十九研究棟
第千二百二十研究棟
第千二百二十一研究棟
第千二百二十二研究棟
第千二百二十三研究棟
第千二百二十四研究棟
第千二百二十五研究棟
第千二百二十六研究棟
第千二百二十七研究棟
第千二百二十八研究棟
第千二百二十九研究棟
第千二百三十研究棟
第千二百三十一研究棟
第千二百三十二研究棟
第千二百三十三研究棟
第千二百三十四研究棟
第千二百三十五研究棟
第千二百三十六研究棟
第千二百三十七研究棟
第千二百三十八研究棟
第千二百三十九研究棟
第千二百四十研究棟
第千二百四十一研究棟
第千二百四十二研究棟
第千二百四十三研究棟
第千二百四十四研究棟
第千二百四十五研究棟
第千二百四十六研究棟
第千二百四十七研究棟
第千二百四十八研究棟
第千二百四十九研究棟
第千二百五十研究棟
第千二百五十一研究棟
第千二百五十二研究棟
第千二百五十三研究棟
第千二百五十四研究棟
第千二百五十五研究棟
第千二百五十六研究棟
第千二百五十七研究棟
第千二百五十八研究棟
第千二百五十九研究棟
第千二百六十研究棟
第千二百六十一研究棟
第千二百六十二研究棟
第千二百六十三研究棟
第千二百六十四研究棟
第千二百六十五研究棟
第千二百六十六研究棟
第千二百六十七研究棟
第千二百六十八研究棟
第千二百六十九研究棟
第千二百七十研究棟
第千二百七十一研究棟
第千二百七十二研究棟
第千二百七十三研究棟
第千二百七十四研究棟
第千二百七十五研究棟
第千二百七十六研究棟
第千二百七十七研究棟
第千二百七十八研究棟
第千二百七十九研究棟
第千二百八十研究棟
第千二百八十一研究棟
第千二百八十二研究棟
第千二百八十三研究棟
第千二百八十四研究棟
第千二百八十五研究棟
第千二百八十六研究棟
第千二百八十七研究棟
第千二百八十八研究棟
第千二百八十九研究棟
第千二百九十研究棟
第千二百九十一研究棟
第千二百九十二研究棟
第千二百九十三研究棟
第千二百九十四研究棟
第千二百九十五研究棟
第千二百九十六研究棟
第千二百九十七研究棟
第千二百九十八研究棟
第千二百九十九研究棟
第千三百研究棟
第千三百一研究棟
第千三百二研究棟
第千三百三研究棟
第千三百四研究棟
第千三百五研究棟
第千三百六研究棟
第千三百七研究棟
第千三百八研究棟
第千三百九研究棟
第千三百十研究棟
第千三百十一研究棟
第千三百十二研究棟
第千三百十三研究棟
第千三百十四研究棟
第千三百十五研究棟
第千三百十六研究棟
第千三百十七研究棟
第千三百十八研究棟
第千三百十九研究棟
第千三百二十研究棟
第千三百二十一研究棟
第千三百二十二研究棟
第千三百二十三研究棟
第千三百二十四研究棟
第千三百二十五研究棟
第千三百二十六研究棟
第千三百二十七研究棟
第千三百二十八研究棟
第千三百二十九研究棟
第千三百三十研究棟
第千三百三十一研究棟
第千三百三十二研究棟
第千三百三十三研究棟
第千三百三十四研究棟
第千三百三十五研究棟
第千三百三十六研究棟
第千三百三十七研究棟
第千三百三十八研究棟
第千三百三十九研究棟
第千三百四十研究棟
第千三百四十一研究棟
第千三百四十二研究棟
第千三百四十三研究棟
第千三百四十四研究棟
第千三百四十五研究棟
第千三百四十六研究棟
第千三百四十七研究棟
第千三百四十八研究棟
第千三百四十九研究棟
第千三百五十研究棟
第千三百五十一研究棟
第千三百五十二研究棟
第千三百五十三研究棟
第千三百五十四研究棟
第千三百五十五研究棟
第千三百五十六研究棟
第千三百五十七研究棟
第千三百五十八研究棟
第千三百五十九研究棟
第千三百六十研究棟
第千三百六十一研究棟
第千三百六十二研究棟
第千三百六十三研究棟
第千三百六十四研究棟
第千三百六十五研究棟
第千三百六十六研究棟
第千三百六十七研究棟
第千三百六十八研究棟
第千三百六十九研究棟
第千三百七十研究棟
第千三百七十一研究棟
第千三百七十二研究棟
第千三百七十三研究棟
第千三百七十四研究棟
第千三百七十五研究棟
第千三百七十六研究棟
第千三百七十七研究棟
第千三百七十八研究棟
第千三百七十九研究棟
第千三百八十研究棟
第千三百八十一研究棟
第千三百八十二研究棟
第千三百八十三研究棟
第千三百八十四研究棟
第千三百八十五研究棟
第千三百八十六研究棟
第千三百八十七研究棟
第千三百八十八研究棟
第千三百八十九研究棟
第千三百九十研究棟
第千三百九十一研究棟
第千三百九十二研究棟
第千三百九十三研究棟
第千三百九十四研究棟
第千三百九十五研究棟
第千三百九十六研究棟
第千三百九十七研究棟
第千三百九十八研究棟
第千三百九十九研究棟
第千四百研究棟
第千四百一研究棟
第千四百二研究棟
第千四百三研究棟
第千四百四研究棟
第千四百五研究棟
第千四百六研究棟
第千四百七研究棟
第千四百八研究棟
第千四百九研究棟
第千四百十研究棟
第千四百十一研究棟
第千四百十二研究棟
第千四百十三研究棟
第千四百十四研究棟
第千四百十五研究棟
第千四百十六研究棟
第千四百十七研究棟
第千四百十八研究棟
第千四百十九研究棟
第千四百二十研究棟
第千四百二十一研究棟
第千四百二十二研究棟
第千四百二十三研究棟
第千四百二十四研究棟
第千四百二十五研究棟
第千四百二十六研究棟
第千四百二十七研究棟
第千四百二十八研究棟
第千四百二十九研究棟
第千四百三十研究棟
第千四百三十一研究棟
第千四百三十二研究棟
第千四百三十三研究棟
第千四百三十四研究棟
第千四百三十五研究棟
第千四百三十六研究棟
第千四百三十七研究棟
第千四百三十八研究棟
第千四百三十九研究棟
第千四百四十研究棟
第千四百四十一研究棟
第千四百四十二研究棟
第千四百四十三研究棟
第千四百四十四研究棟
第千四百四十五研究棟
第千四百四十六研究棟
第千四百四十七研究棟
第千四百四十八研究棟
第千四百四十九研究棟
第千四百五十研究棟
第千四百五十一研究棟
第千四百五十二研究棟
第千四百五十三研究棟
第千四百五十四研究棟
第千四百五十五研究棟
第千四百五十六研究棟
第千四百五十七研究棟
第千四百五十八研究棟
第千四百五十九研究棟
第千四百六十研究棟
第千四百六十一研究棟
第千四百六十二研究棟
第千四百六十三研究棟
第千四百六十四研究棟
第千四百六十五研究棟
第千四百六十六研究棟
第千四百六十七研究棟
第千四百六十八研究棟
第千四百六十九研究棟
第千四百七十研究棟
第千四百七十一研究棟
第千四百七十二研究棟
第千四百七十三研究棟
第千四百七十四研究棟
第千四百七十五研究棟
第千四百七十六研究棟
第千四百七十七研究棟
第千四百七十八研究棟
第千四百七十九研究棟
第千四百八十研究棟
第千四百八十一研究棟
第千四百八十二研究棟
第千四百八十三研究棟
第千四百八十四研究棟
第千四百八十五研究棟
第千四百八十六研究棟
第千四百八十七研究棟
第千四百八十八研究棟
第千四百八十九研究棟
第千四百九十研究棟
第千四百九十一研究棟
第千四百九十二研究棟
第千四百九十三研究棟
第千四百九十四研究棟
第千四百九十五研究棟
第千四百九十六研究棟
第千四百九十七研究棟
第千四百九十八研究棟
第千四百九十九研究棟
第千五百研究棟
第千五百一研究棟
第千五百二研究棟
第千五百三研究棟
第千五百四研究棟
第千五百五研究棟
第千五百六研究棟
第千五百七研究棟
第千五百八研究棟
第

PLATES

(1)　A区全景（南西から）

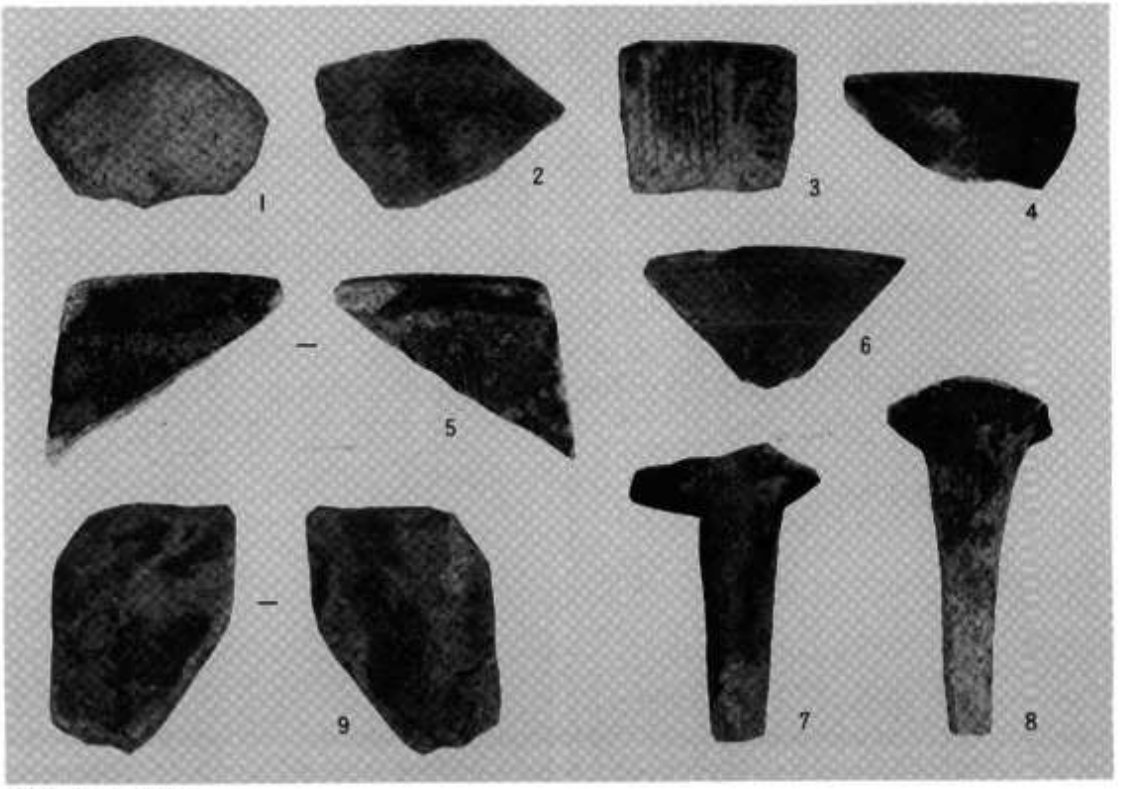


(2)　A区南東隅杭列（北から）

(1)　A区南壁土層断面（北から）

(2)　B区全景（南東から）

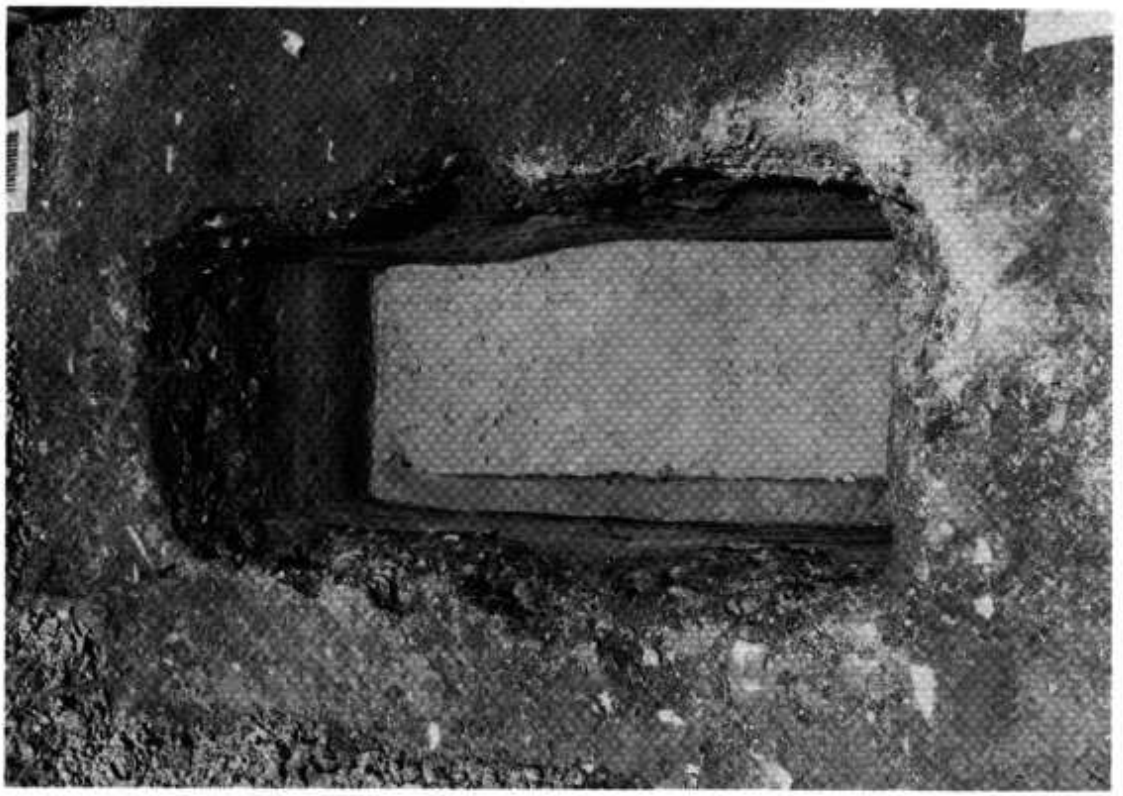
(1) 調査区全景（北東から）



(2) 出土遺物

PL. 4

宇部（小串構内）医学部基幹整備に伴う試掘調査(1)



(1) Aトレンチ全景（南西から）

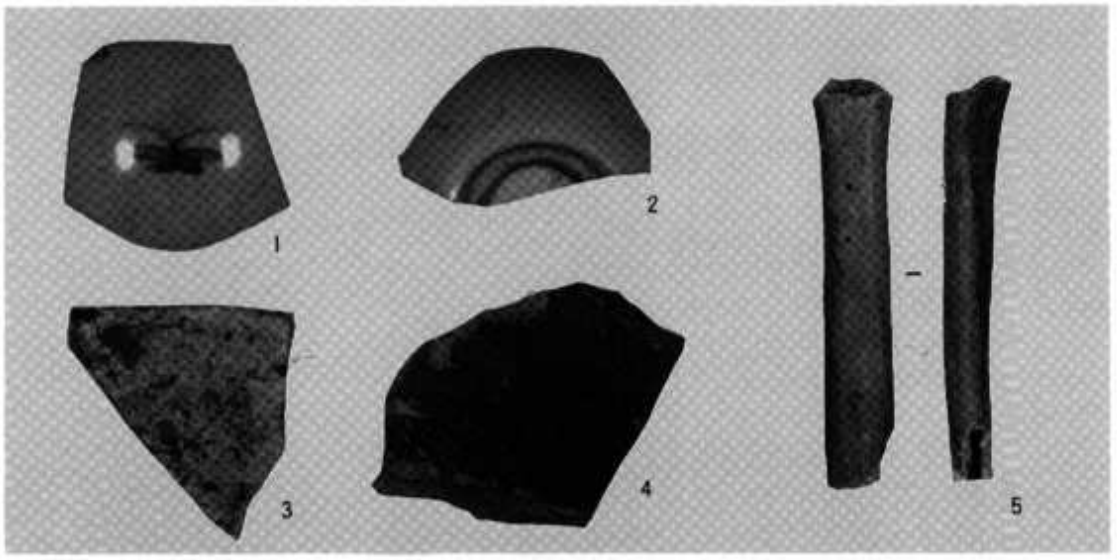
(2) Bトレンチ全景（南東から）

(3) Bトレンチ北壁土層断面（南西から）

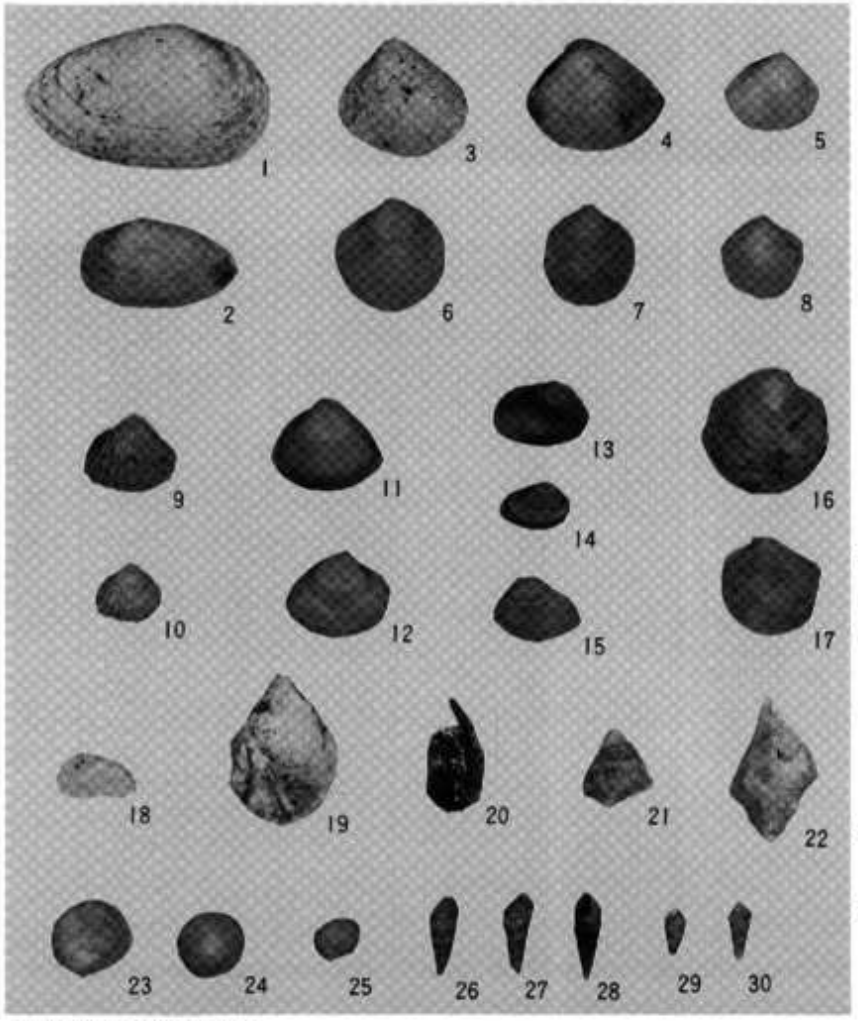
(1) ロームコンチ全景（東側から）

(2) ロームコンチ堆積状況土層断面（北側から）

(3) ロームコンチ全景（西側から）



(1) 出土遺物

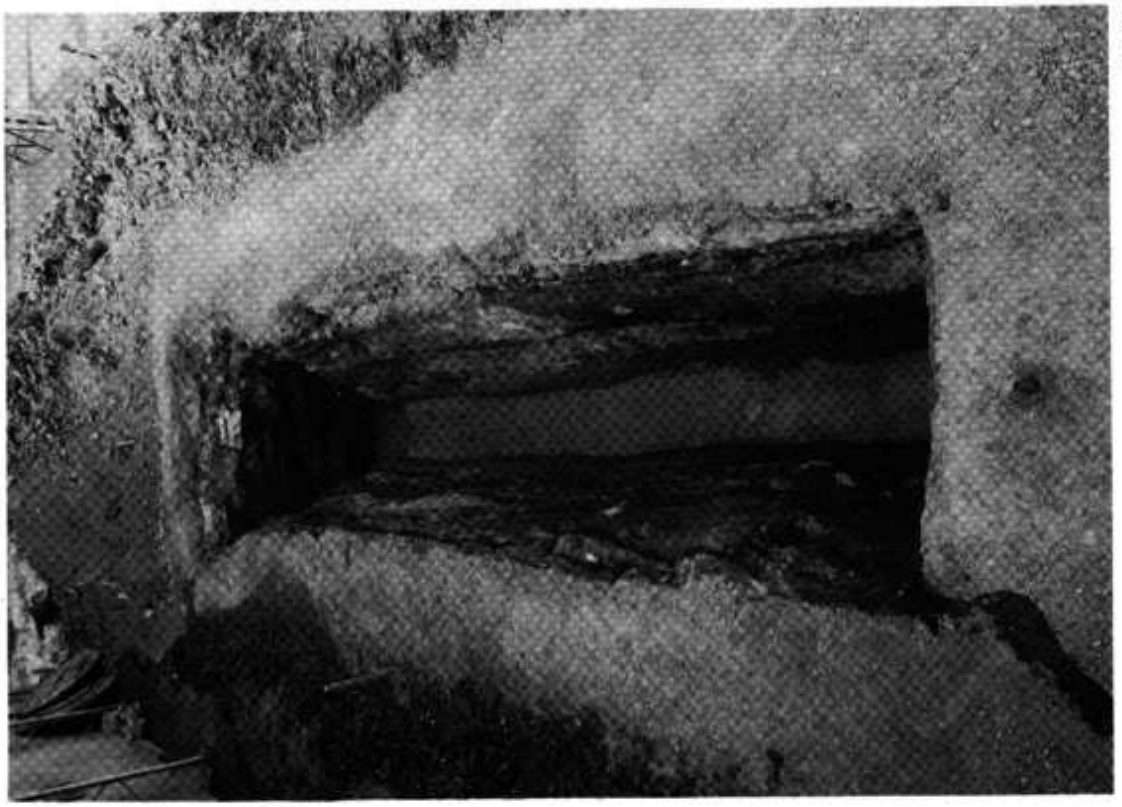


1・2	オオノガイ
3～5	ハマグリ
6～8	オキシジミ
9・10	ハイガイ
11・12	シオフキ
13～15	アサリ
16・17	カガミガイ
18	カリガネエガイ
19・20	マガキ
21	アカニシ
22	テングニシ
23・24	ツメタガイ
25	ゴマフダマ
26～28	イボウミニナ
29	ウミニナ
30	ヘタナリ

(2) 動物遺体（貝類）

宇部（小串構内）医学部臨床議義棟・病理解剖棟新営に伴う試掘調査(1)

(1) 調査前全景（南東から）



(2) Aトレンチ全景（南東から）

(1)　Aトレンチ西壁土層断面（東から）

(2)　Bトレンチ全景（東から）

宇部（小串構内）医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営に伴う試掘調査(3)

(1) ロケーション写真（北から）

(2) ロケーション写真（北から）

(3) 調査風景

(4) 調査風景

PL. 10

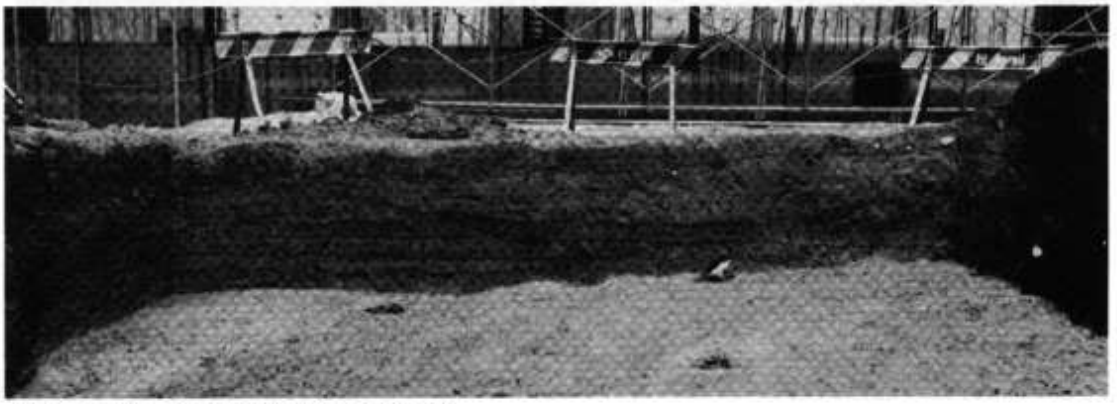
吉田構内大学会館ケーブル布設に伴う発掘調査(1)

(1) 調査前全景（西から）

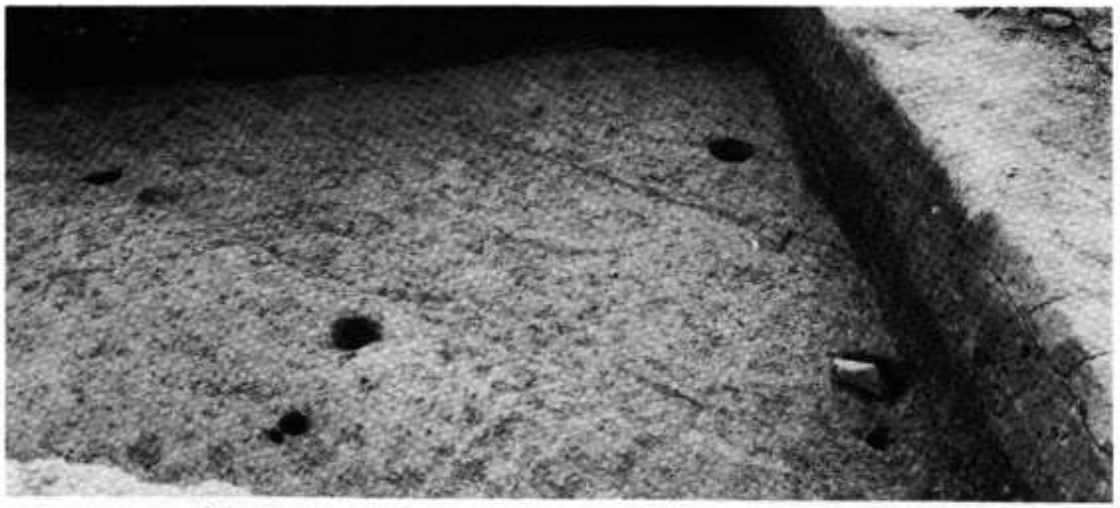
(2) Aトレンチ全景（北から）

(1) Aトレンチ北半部遺構分布状況（南から）

(2) SD 4土層断面（西から）



(3) Aトレンチ北壁土層断面（南から）



(1) SD 1・2（東から）

(2) SD 3（西から）

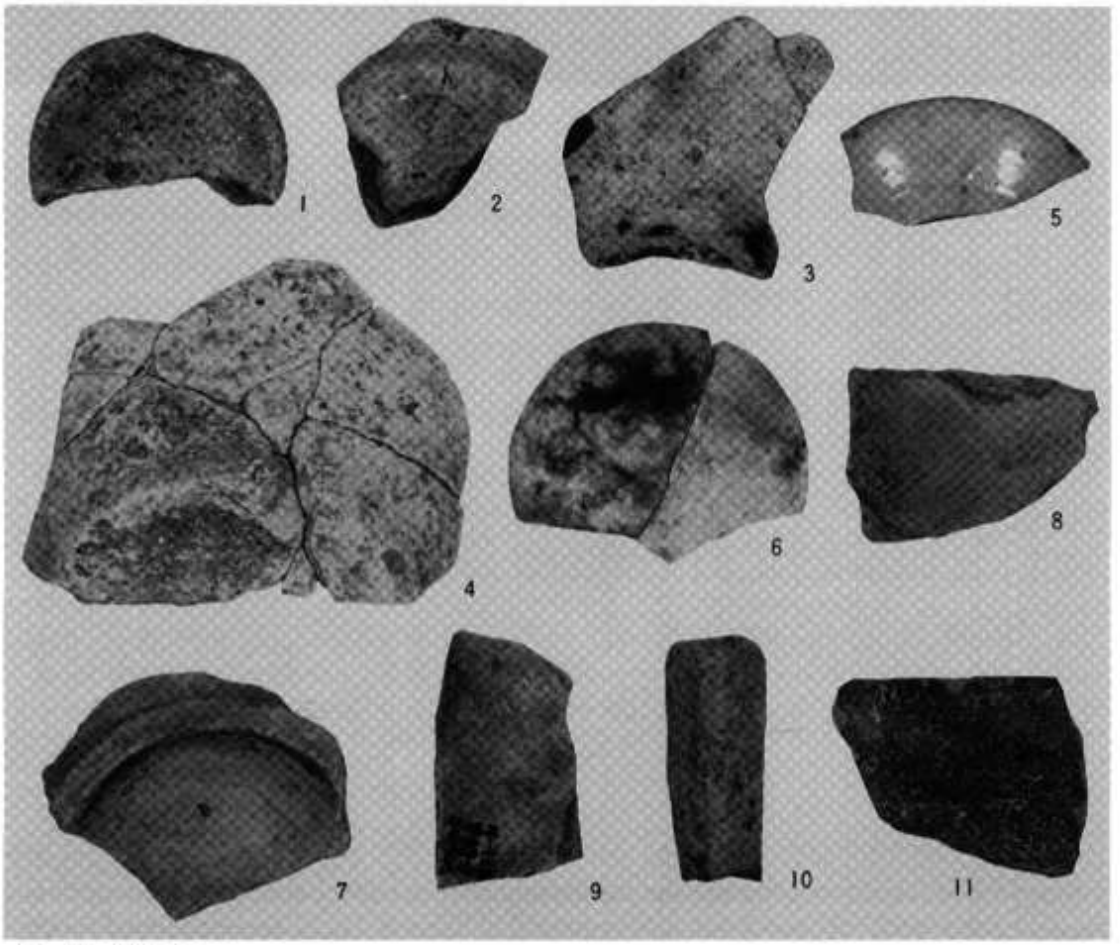
(3) SD 6（西から）

吉田構内大学会館ケーブル布設に伴う発掘調査(4)

(1) Bトレンチ全景（北から）

(2) SK3（北から）

(1) Bトレンチ南半部柱穴群(西から)



(2) 出土遺物

(1) A区南壁土層状況（西から）

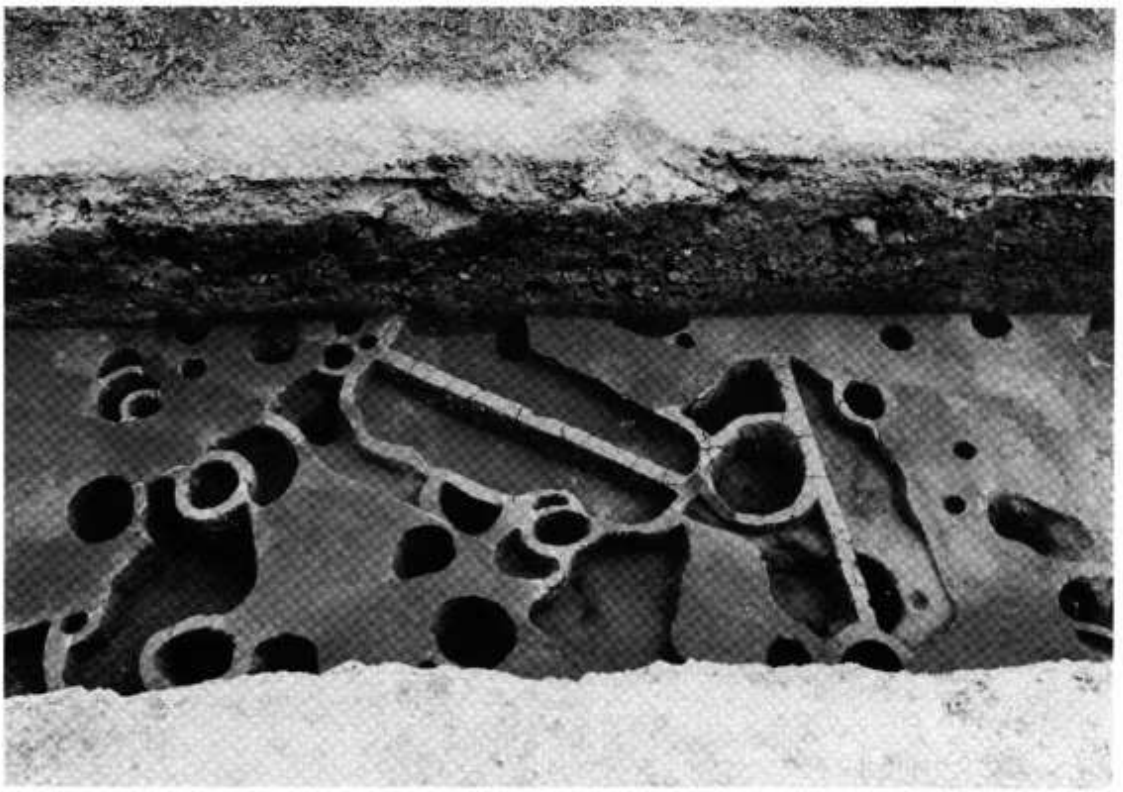
(2) A区南壁土層状況（東から）

(1)　A区SD1（西から）

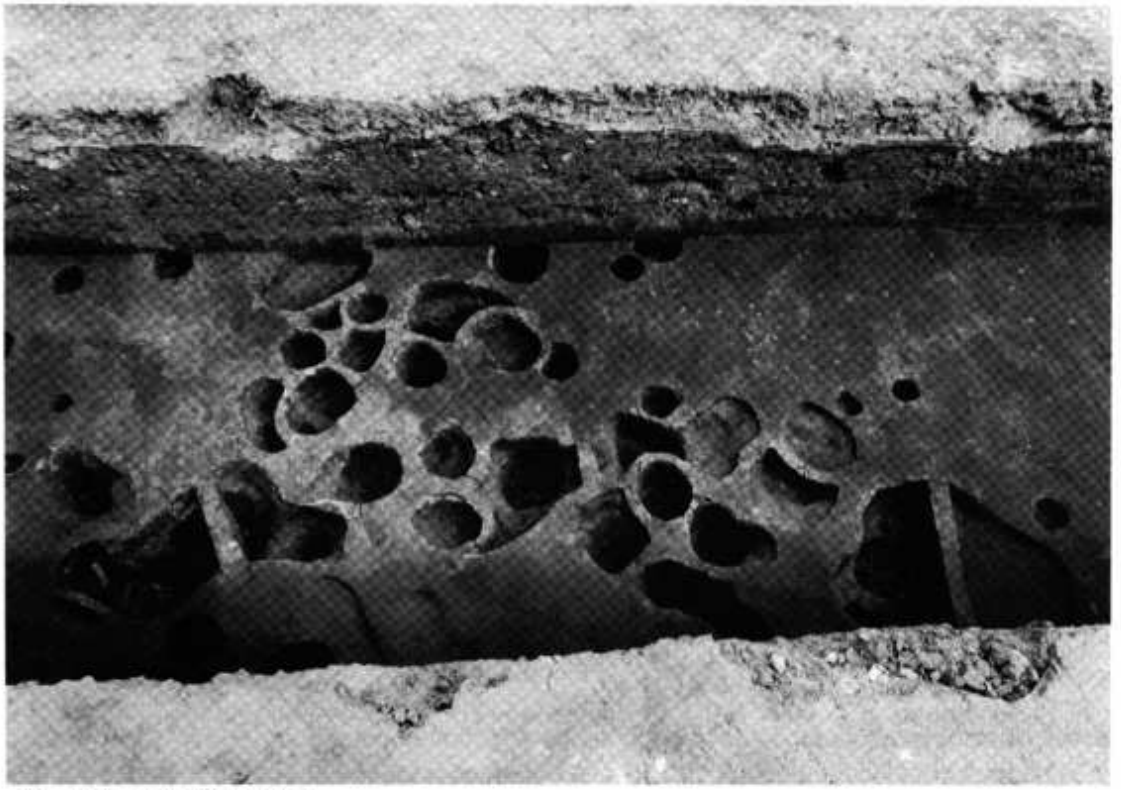
(2)　A区SK1、SD2ほか（南から）

(1) A区SK2ほか（南から）

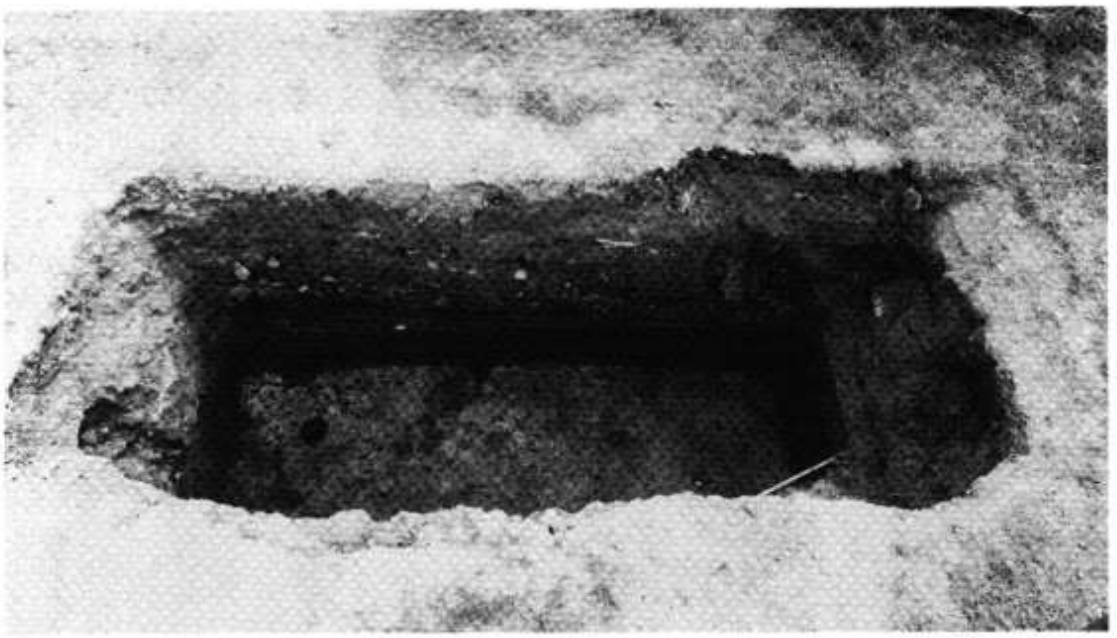
(2) A区SK3、SD2・3（南から）



(1) A区SK5～8ほか（南から）



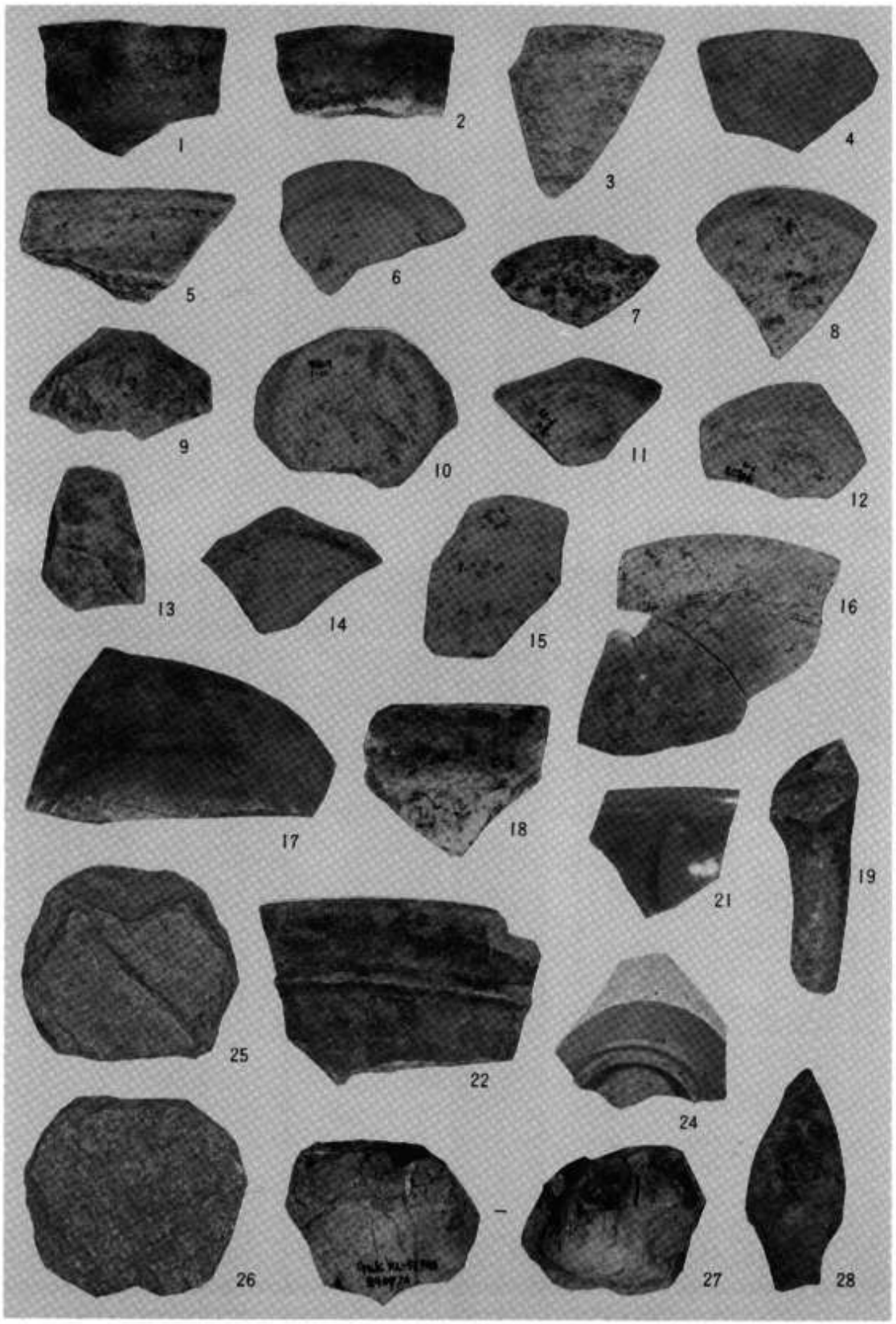
(2) A区 柱穴群（南から）



(1) B区全景（北東から）

(2) B区北壁土層断面（南から）

(3) C区全景（東から）



出土遺物

(1) A－1（南から）

(2) A－2（東から）

(3) A－4（北から）

(4) A－5（北から）

(5) B－1（南から）

(6) B－2（南から）

PL. 22

吉田構内学生部テニスコートフェンス改修に伴う試掘調査(2)

(1) B－3（北から）

(2) B－4（西から）

(3) B－5（南から）

(4) C－2（南から）

(5) C－3（北から）

(6) C－4（西から）

(1) C－5（北から）

(2) D－1（南から）

(3) D－2（南から）

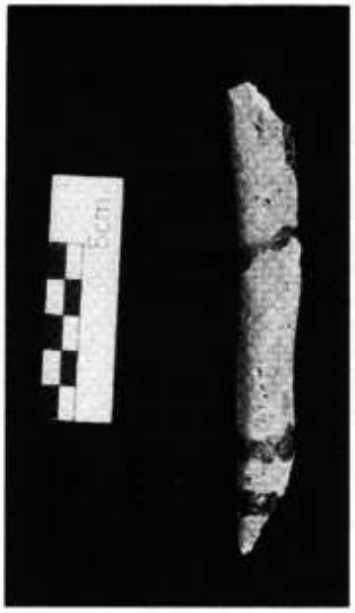
(4) D－3（北から）

(5) D－4（西から）

(6) D－5（北から）

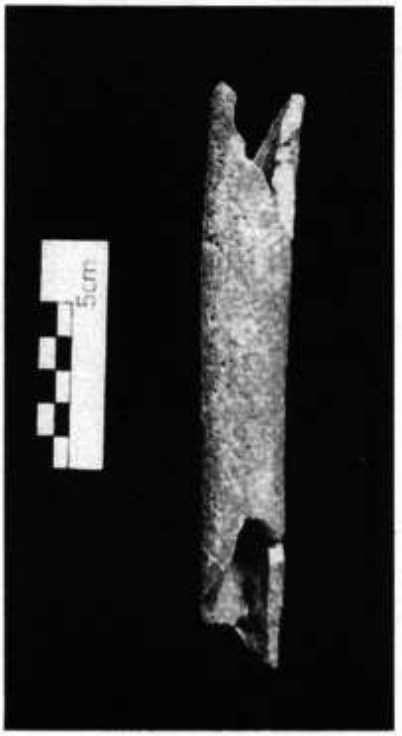
PL. 24

山口県見島ジーコンボ古墳群出土の人骨



上腕骨A（左側）

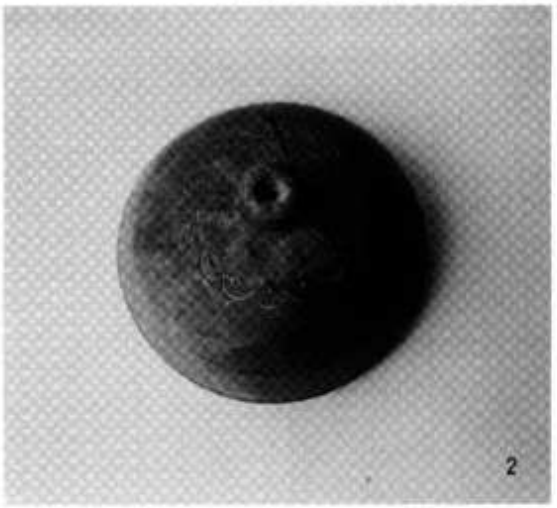
大腿骨B



大腿骨A（右側）

脛骨A

第155号墳出土人骨



新羅系陶質土器（1　埋蔵文化財資料館蔵　　2・3　光市長徳寺蔵）

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ

昭和61年3月

編集　山口大学埋蔵文化財資料館

発行　山口大学

〒753 山口市大字吉田1677－1

印刷　桜プリント（企）

〒753 山口市旭通り1－1－6

ARCHAEOLOGICAL RESEARCHES AND STUDIES

AT YAMAGUCHI UNIVERSITY Vol. IV

CONTENTS

Chapter

I General outline of the project on Yamaguchi University campus in 1984 ····· 1

II Excavation in relation to the construction of a new tank for sewage disposal at the School of Medicine on the Kogushi campus ····· 3

III Excavation in relation to the construction of a new gymnasium at the School of Medicine on the Kogushi campus ····· 11

IV Soundings in relation to the fundamental adjustment at the School of Medicine on the Kogushi campus ····· 15

V Soundings in relation to the construction of new buildings for the crinical lecture and the pathologic anatomy on the Kogushi campus ····· 21

VI Excavation in relation to the laying down a cable around the University Hall on the Yoshida campus ····· 25

VII Excavation in relation to the laying drain pipes under ground at the University Hall on the Yoshida campus ····· 37

VIII Soundings in relation to the repair of the fence around the tennis court on the Yoshida campus ····· 49

IX Examination under construction performed on Yamaguchi University campus ···53

Appendix

- The phase in Ancient and Medieval times at Yoshida, Yoshiki county, Suo ·····59
- Cylindrical Haniwas from Yoshida №2 Site ····· 77
- Human remains from Jikonbo mounded tombs, Mishima, Yamaguchi Pref. ·····83
- An earthenware of Shiragi style owed by Yamaguchi University Archaeological Research ····· 91

The gist of researches and studies at Yamaguchi University ····· 93

Regulations of Yamaguchi University Archaeological Research ····· 93

Regulations of Yamaguchi University Archaeological Research Management Committee ····· 94

Lists of Researches in Yamaguchi University ····· 96

Summary ····· 99

Published by

Yamaguchi University Archaeological Research

Yamaguchi, 1985